

来住・久米地区の遺跡 V

久 米 高 畑 遺 跡

— 10次・27次・35次 —

鷹 子 町 遺 跡 2 次

2 0 0 4

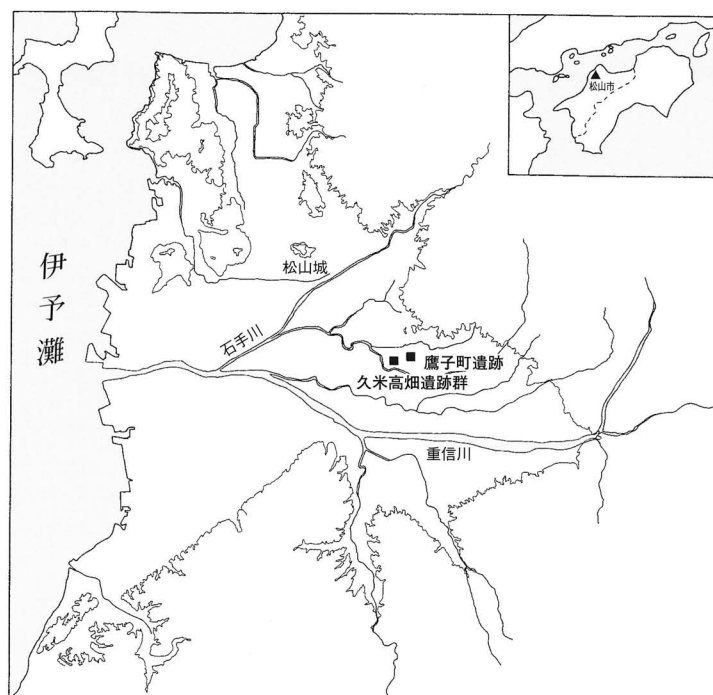
松山市教育委員会
財団法人 松山市生涯学習振興財団
埋蔵文化財センター

来住・久米地区の遺跡 V

久米高畑遺跡

— 10次・27次・35次 —

鷹子町遺跡 2次

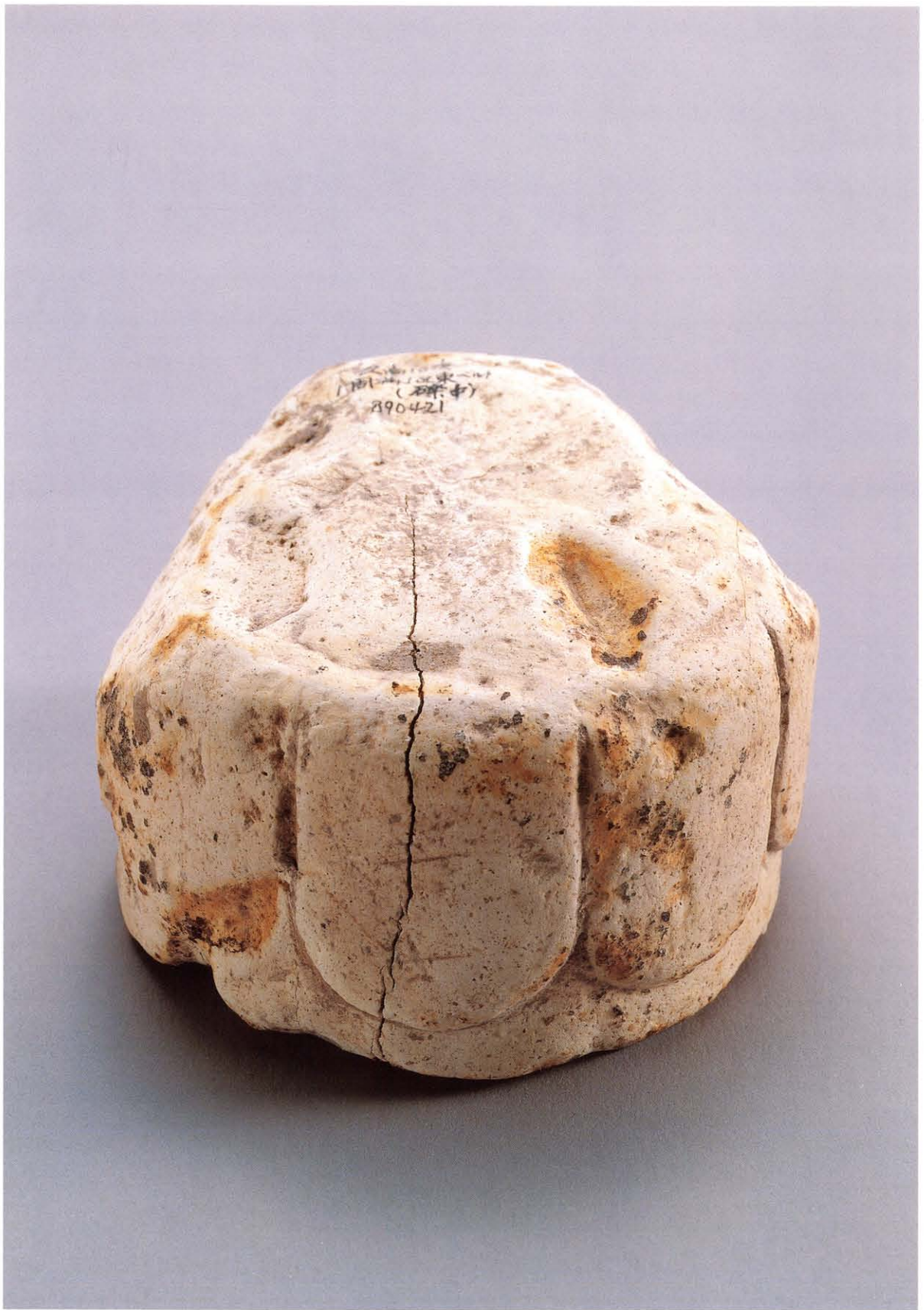


2 0 0 4

松山市教育委員会

財団法人 松山市生涯学習振興財団

埋蔵文化財センター



卷頭図版 久米高畑遺跡10次調査地1号周溝出土遺物

序

本書は、平成元年度～平成9年度に松山市東部の来住・久米地区で実施した宅地造成に伴う緊急発掘調査の報告書です。

来住・久米地区には、国指定史跡「来住廃寺跡」、平成15年度に追加指定された「久米高畑官衙遺跡群」があり、全国的に重要な古代遺跡の地域として知られるところです。

今回報告します久米高畑遺跡10次・27次・35次調査地からは、8世紀の正倉院に伴う方形の区画溝の一部を検出し、区画の規模を推定する資料が得られています。

また、全国的にも稀な久米高畑遺跡10次調査地出土の古代仏教関係の土製品、松山平野でも数少ない鷹子町遺跡の滑石製石鍋が貴重資料として上げられます。

このような重要な成果を得ることができましたのも、埋蔵文化財に対する深いご理解とご協力を賜った関係者のお陰であり、感謝申し上げますとともに、今後とも変わらぬご援助を賜りますよう、お願い致します。

本書が文化財保護、生涯教育、埋蔵文化財調査研究の一助となり、各方面にてご活用いただければ幸いに存じます。

平成16年3月31日

財団法人 松山市生涯学習振興財団
理事長 中村時広

例 言

1. この報告書は、松山市教育委員会が平成元年4月に、松山市南久米町782-1、財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センターが平成8年4月に来住町1145、同年5月に南久米町765-6、平成9年11月に鷹子町724-1・7で、宅地開発に伴う事前の緊急調査として実施した埋蔵文化財発掘調査の報告書である。
2. 遺構は呼称を略号で記述した。竪穴住居址：S B、掘立柱建物址：掘立、溝：S D、土坑：S K、柱穴：S Pとし、遺跡ごとに通し番号を付記した。
3. 遺構の測量は、担当調査員指示のもと補助員・作業員が実施した。
4. 遺物の実測及び掲載図の製作は、調査担当者指示のもと整理作業員が行った。
5. 遺構図・遺物図の縮尺は、縮分値をスケール下に記した。
6. 写真図版は、遺構の撮影は担当者と大西朋子が、遺物の撮影は大西朋子が担当し、図版作成は担当者と協議のうえ大西朋子が行った。
7. 本書に使用した方位は、磁北と真北である。
8. 本書に掲載した遺物及び写真・図版等の記録類は、すべて松山市立埋蔵文化財センターにて収蔵保管している。
9. 久米高畑遺跡10次調査では奈良国立博物館井口喜晴氏・松浦正昭氏・岩戸晶子氏、奈良文化財研究所山中敏史氏・小林謙一氏・巽淳一郎氏に多くの指導と助言を賜りました。記して、感謝申し上げます。
10. 本書の執筆は梅木謙一、宮内慎一、河野史知、相原秀仁、水本完児が行い、梅木が編集した。
11. 製版 カラー図版 — 175線、白黒図版 — 150線
印刷 オフセット印刷
用紙 カラー図版 — ニューVマットA版 86.5kg 使用
白黒図版 — ニューVマットA版 86.5kg 使用

本文目次

第1章 はじめに	[梅 木]	1	
1. 調査・刊行に至る経緯	2. 組織	3. 環境	
第2章 久米高畑遺跡10次調査地	[河 野]	7	
1. 調査の経過	2. 層位	3. 遺構と遺物	4. 小結
第3章 久米高畑遺跡27次調査地	[宮内・相原]	33	
1. 調査の経過			
2. 層位			
3. 弥生時代の遺構と遺物			
4. 古墳時代の遺構と遺物			
5. 古代の遺構と遺物			
6. 時期不明の遺構と遺物			
7. その他の遺構と遺物			
8. 小結			
第4章 久米高畑遺跡35次調査地	[河 野]	119	
1. 調査の経過	2. 層位	3. 遺構と遺物	4. 小結
第5章 鷹子町遺跡2次調査地	[水 本]	147	
1. 調査の経過	2. 層位	3. 遺構と遺物	4. 小結
第6章 おわりに	[梅 木]	163	

挿 図 目 次

第1章 はじめに

第 1 図	調査地位置図 (縮尺 1 : 50,000)	3
-------	------------------------	---

第2章 久米高畑遺跡10次調査地

第 2 図	調査地周辺の遺跡分布図 (縮尺 1 : 3,000)	7
第 3 図	調査地区割図 (縮尺 1 : 500)	8
第 4 図	土層図 (縮尺 1 : 50)	9
第 5 図	遺構配置図 (縮尺 1 : 200)	11
第 6 図	1号土器棺墓測量図 (縮尺 1 : 20)	13
第 7 図	1号土器棺墓出土遺物実測図 (縮尺 1 : 6 · 1 : 4)	14
第 8 図	2号土器棺墓測量図・出土遺物実測図 (縮尺 1 : 20 · 1 : 6)	15
第 9 図	1号周溝測量図 (縮尺 1 : 100)	16
第 10 図	1号周溝出土遺物実測図 (縮尺 1 : 2)	17
第 11 図	掘立 1 · 2 出土遺物実測図 (縮尺 1 : 4)	18
第 12 図	掘立 1 測量図 (縮尺 1 : 60)	19
第 13 図	掘立 2 · 3 測量図 (縮尺 1 : 60)	20
第 14 図	S D 1 測量図 (縮尺 1 : 100)	22
第 15 図	S D 1 出土遺物実測図 (1) (縮尺 1 : 3)	23
第 16 図	S D 1 出土遺物実測図 (2) (縮尺 1 : 4 · 1 : 3 · 1 : 2)	24
第 17 図	ピット・地点不明出土遺物実測図 (縮尺 1 : 4 · 1 : 3)	25

第3章 久米高畑遺跡27次調査地

第 18 図	調査地位置図 (縮尺 1 : 25,000)	33
第 19 図	調査地測量図 (縮尺 1 : 1,000)	34
第 20 図	調査地区割図 (縮尺 1 : 300)	36
第 21 図	遺構配置図 (縮尺 1 : 200)	37
第 22 図	北壁土層図 (縮尺 1 : 30)	39
第 23 図	東壁土層図 (縮尺 1 : 30)	41
第 24 図	南壁土層図 (縮尺 1 : 30)	43
第 25 図	西壁土層図 (縮尺 1 : 30)	45
第 26 図	S B 1 測量図・出土遺物実測図 (縮尺 1 : 50 · 1 : 4)	47
第 27 図	S B 3 測量図・出土遺物実測図 (縮尺 1 : 50 · 1 : 4)	48
第 28 図	S D 4 断面図・出土遺物実測図 (縮尺 1 : 20 · 1 : 4 · 1 : 3)	49
第 29 図	S K 3 測量図・出土遺物実測図 (縮尺 1 : 40 · 1 : 4)	50
第 30 図	S K 5 測量図・出土遺物実測図 (縮尺 1 : 40 · 1 : 4)	51

第 31 図	S K 9 測量図・出土遺物実測図 (縮尺 1 : 40 · 1 : 4)	51
第 32 図	S K 11 測量図・出土遺物実測図 (縮尺 1 : 40 · 1 : 4 · 1 : 3)	52
第 33 図	S K 13 測量図・出土遺物実測図 (縮尺 1 : 40 · 1 : 4)	53
第 34 図	S K 14 測量図・出土遺物実測図 (縮尺 1 : 40 · 1 : 4 · 1 : 3)	54
第 35 図	S K 16 測量図・出土遺物実測図 (縮尺 1 : 40 · 1 : 4)	55
第 36 図	S K 18 測量図・出土遺物実測図 (縮尺 1 : 40 · 1 : 4)	56
第 37 図	S K 19 測量図・出土遺物実測図 (縮尺 1 : 40 · 1 : 4)	57
第 38 図	S K 21 測量図・出土遺物実測図 (縮尺 1 : 40 · 1 : 4)	
第 39 図	S K 25 測量図・出土遺物実測図 (縮尺 1 : 40 · 1 : 4)	58
第 40 図	S K 27 測量図・出土遺物実測図 (縮尺 1 : 40 · 1 : 4)	
第 41 図	S K 32 測量図・出土遺物実測図 (縮尺 1 : 40 · 1 : 4)	59
第 42 図	S K 36 測量図・出土遺物実測図 (縮尺 1 : 40 · 1 : 4)	60
第 43 図	S K 41 測量図・出土遺物実測図 (縮尺 1 : 40 · 1 : 4 · 1 : 3)	61
第 44 図	S K 45 測量図・出土遺物実測図 (縮尺 1 : 40 · 1 : 4)	
第 45 図	S K 46 測量図・出土遺物実測図 (縮尺 1 : 40 · 1 : 4)	62
第 46 図	S K 56 測量図・出土遺物実測図 (縮尺 1 : 40 · 1 : 4)	63
第 47 図	S K 58 測量図・出土遺物実測図 (縮尺 1 : 40 · 1 : 4)	64
第 48 図	S K 59 測量図・出土遺物実測図 (縮尺 1 : 40 · 1 : 4)	65
第 49 図	S K 61 測量図・出土遺物実測図 (縮尺 1 : 40 · 1 : 4 · 1 : 3)	66
第 50 図	S K 15 測量図・出土遺物実測図 (縮尺 1 : 40 · 1 : 4)	68
第 51 図	S K 17 測量図・出土遺物実測図 (縮尺 1 : 40 · 1 : 4)	
第 52 図	S K 2 測量図・出土遺物実測図 (縮尺 1 : 40 · 1 : 4)	69
第 53 図	S K 4 測量図・出土遺物実測図 (縮尺 1 : 40 · 1 : 4)	70
第 54 図	S K 24 測量図・出土遺物実測図 (縮尺 1 : 40 · 1 : 4 · 1 : 3)	71
第 55 図	S K 28 測量図・出土遺物実測図 (縮尺 1 : 40 · 1 : 4 · 1 : 3)	
第 56 図	S K 47 · 35 測量図・出土遺物実測図 (縮尺 1 : 40 · 1 : 4)	72
第 57 図	S K 20 測量図・出土遺物実測図 (縮尺 1 : 40 · 1 : 4 · 1 : 3)	73
第 58 図	S K 22 測量図・出土遺物実測図 (縮尺 1 : 40 · 1 : 4)	
第 59 図	S B 5 測量図・出土遺物実測図 (縮尺 1 : 50 · 1 : 4 · 1 : 3)	74
第 60 図	S B 4 測量図・出土遺物実測図 (縮尺 1 : 50 · 1 : 4 · 1 : 3)	75
第 61 図	掘立 3 測量図・出土遺物実測図 (縮尺 1 : 80 · 1 : 4 · 1 : 3)	76
第 62 図	掘立 2 測量図・出土遺物実測図 (縮尺 1 : 80 · 1 : 4)	77
第 63 図	掘立 1 測量図 (縮尺 1 : 80)	78
第 64 図	掘立 1 出土遺物実測図 (縮尺 1 : 4 · 1 : 3)	79
第 65 図	掘立 4 測量図・出土遺物実測図 (縮尺 1 : 80 · 1 : 4 · 1 : 3)	80
第 66 図	S D 2 断面図・出土遺物実測図 (縮尺 1 : 20 · 1 : 4 · 1 : 3)	81
第 67 図	S D 5 断面図・出土遺物実測図 (縮尺 1 : 20 · 1 : 4 · 1 : 3)	82
第 68 図	S K 33 測量図・出土遺物実測図 (縮尺 1 : 40 · 1 : 3)	83

第 69 図	S K 39 測量図・出土遺物実測図（縮尺 1 : 40・1 : 3）	83
第 70 図	S K 29・62 測量図（縮尺 1 : 40）	84
第 71 図	S K 51 測量図（縮尺 1 : 40）	85
第 72 図	S D 6 測量図・出土遺物実測図（縮尺 1 : 60・1 : 20・1 : 3）	86
第 73 図	S B 2 測量図（縮尺 1 : 50）	87
第 74 図	S P 4 出土遺物実測図（縮尺 1 : 4）	89
第 75 図	S P 666 出土遺物実測図（縮尺 1 : 4）	90
第 76 図	ピット出土遺物実測図（1）（縮尺 1 : 4）	91
第 77 図	ピット出土遺物実測図（2）（縮尺 1 : 4・1 : 3）	92
第 78 図	包含層・地点不明出土遺物実測図（縮尺 1 : 4・1 : 3）	93

第 4 章 久米高畑遺跡 35 次調査地

第 79 図	調査地区割図（縮尺 1 : 200）	120
第 80 図	調査区北壁土層図（縮尺 1 : 40）	121
第 81 図	遺構配置図（縮尺 1 : 120）	122
第 82 図	S K 12 測量図（縮尺 1 : 10）	123
第 83 図	S B 1 測量図（縮尺 1 : 50）	124
第 84 図	S B 1 出土遺物実測図（縮尺 1 : 4・1 : 2）	125
第 85 図	S B 2 測量図・出土遺物実測図（縮尺 1 : 50・1 : 4）	127
第 86 図	弥生時代の溝・土坑出土遺物実測図（縮尺 1 : 4・2 : 3）	128
第 87 図	S D 1 測量図（縮尺 1 : 100）	131
第 88 図	S D 1 出土遺物実測図（縮尺 1 : 4・1 : 3）	132
第 89 図	S B 3 測量図（縮尺 1 : 50）	133
第 90 図	掘立 1 測量図（縮尺 1 : 60）	134
第 91 図	S D 10 測量図（縮尺 1 : 50）	136
第 92 図	第 IV 層出土遺物実測図（縮尺 1 : 4・1 : 3・1 : 2）	137

第 5 章 鷹子町遺跡 2 次調査地

第 93 図	調査地位置図（縮尺 1 : 2,500）	147
第 94 図	調査地測量図（縮尺 1 : 300）	148
第 95 図	北壁土層図（縮尺 1 : 40）	149
第 96 図	遺構配置図（縮尺 1 : 150）	151
第 97 図	S D 2 測量図（縮尺 1 : 80・1 : 40）	153
第 98 図	S D 2 出土遺物実測図（縮尺 1 : 3）	154
第 99 図	S D 3 測量図（縮尺 1 : 80・1 : 40）	155
第 100 図	S D 3 出土遺物実測図（縮尺 1 : 3）	156
第 101 図	S K 1 測量図（縮尺 1 : 40）	157
第 102 図	ピット・包含層・地点不明出土遺物実測図（縮尺 1 : 3）	158

第6章 おわりに

第108図 正倉院関係調査地位置図（縮尺1：1,500）	165
------------------------------	-----

表 目 次

第1章 はじめに

表 1 調査地一覧	1
-----------	---

第2章 久米高畑遺跡10次調査地

表 2 掘立柱建物址一覧	27
表 3 土坑一覧	
表 4 溝一覧	
表 5 1号土器棺墓出土遺物観察表 土製品	
表 6 2号土器棺墓出土遺物観察表 土製品	
表 7 1号周溝出土遺物観察表 土製品	
表 8 掘立出土遺物観察表 土製品	28
表 9 S D 1 出土遺物観察表① 土製品	
表 10 S D 1 出土遺物観察表 瓦製品	
表 11 S D 1 出土遺物観察表② 土製品	29
表 12 S D 1 出土遺物観察表 石製品	
表 13 S D 1 出土遺物観察表 金属製品	30
表 14 ピット出土遺物観察表 土製品	
表 15 地点不明出土遺物観察表 土製品	
表 16 1号周溝出土遺物観察表 石製品	

第3章 久米高畑遺跡27次調査地

表 17 竪穴式住居址一覧	96
表 18 掘立柱建物址一覧	
表 19 溝一覧	
表 20 土坑一覧	
表 21 S B 1 出土遺物観察表 土製品	99
表 22 S B 3 出土遺物観察表 土製品	
表 23 S D 4 出土遺物観察表 土製品	100

表 24	S D 4 出土遺物觀察表	石製品	100
表 25	S K 3 出土遺物觀察表	土製品	
表 26	S K 5 出土遺物觀察表	土製品	
表 27	S K 9 出土遺物觀察表	土製品	
表 28	S K 11 出土遺物觀察表	土製品	101
表 29	S K 11 出土遺物觀察表	石製品	
表 30	S K 13 出土遺物觀察表	土製品	
表 31	S K 14 出土遺物觀察表	土製品	102
表 32	S K 14 出土遺物觀察表	石製品	
表 33	S K 16 出土遺物觀察表	土製品	
表 34	S K 18 出土遺物觀察表	土製品	
表 35	S K 19 出土遺物觀察表	土製品	103
表 36	S K 21 出土遺物觀察表	土製品	
表 37	S K 25 出土遺物觀察表	土製品	
表 38	S K 27 出土遺物觀察表	土製品	
表 39	S K 32 出土遺物觀察表	土製品	104
表 40	S K 36 出土遺物觀察表	土製品	
表 41	S K 41 出土遺物觀察表	土製品	
表 42	S K 41 出土遺物觀察表	石製品	
表 43	S K 45 出土遺物觀察表	土製品	
表 44	S K 46 出土遺物觀察表	土製品	
表 45	S K 56 出土遺物觀察表	土製品	105
表 46	S K 58 出土遺物觀察表	土製品	
表 47	S K 59 出土遺物觀察表	土製品	106
表 48	S K 61 出土遺物觀察表	土製品	
表 49	S K 61 出土遺物觀察表	石製品	
表 50	S K 15 出土遺物觀察表	土製品	
表 51	S K 17 出土遺物觀察表	土製品	107
表 52	S K 2 出土遺物觀察表	土製品	
表 53	S K 4 出土遺物觀察表	土製品	
表 54	S K 24 出土遺物觀察表	土製品	108
表 55	S K 24 出土遺物觀察表	石製品	
表 56	S K 28 出土遺物觀察表	土製品	
表 57	S K 28 出土遺物觀察表	石製品	
表 58	S K 47 出土遺物觀察表	土製品	
表 59	S K 20 出土遺物觀察表	土製品	109
表 60	S K 20 出土遺物觀察表	石製品	
表 61	S K 22 出土遺物觀察表	土製品	

表 62	S B 5 出土遺物観察表	土製品	109
表 63	S B 4 出土遺物観察表	土製品	
表 64	S B 4 出土遺物観察表	石製品	
表 65	掘立 3 出土遺物観察表	土製品	110
表 66	掘立 2 出土遺物観察表	土製品	
表 67	掘立 1 出土遺物観察表	土製品	
表 68	掘立 4 出土遺物観察表	土製品	
表 69	掘立 4 出土遺物観察表	石製品	
表 70	S D 2 出土遺物観察表	土製品	111
表 71	S D 5 出土遺物観察表	土製品	
表 72	S D 5 出土遺物観察表	石製品	
表 73	S K 33 出土遺物観察表	土製品	
表 74	S K 39 出土遺物観察表	土製品	
表 75	S D 6 出土遺物観察表	土製品	112
表 76	S P 4 出土遺物観察表	土製品	
表 77	S P 666 出土遺物観察表	土製品	
表 78	ピット 出土遺物観察表	土製品	113
表 79	ピット 出土遺物観察表	石製品	114
表 80	包含層・地点不明出土遺物観察表	土製品	
表 81	包含層・地点不明出土遺物観察表	石製品	115

第 4 章 久米高畑遺跡 35 次調査地

表 82	竪穴式住居址一覧		140
表 83	竪穴式住居址の炉・カマド一覧		
表 84	掘立柱建物址一覧		
表 85	土坑一覧		
表 86	溝一覧		141
表 87	S B 1 出土遺物観察表	土製品	
表 88	S B 1 出土遺物観察表	石製品	142
表 89	S B 2 出土遺物観察表	土製品	
表 90	S D 3 出土遺物観察表	土製品	
表 91	S K 出土遺物観察表	土製品	
表 92	S K 11 出土遺物観察表	石製品	143
表 93	S K 8 出土遺物観察表	土製品	
表 94	S D 1 出土遺物観察表	土製品	
表 95	第 VI 層出土遺物観察表	土製品	144
表 96	第 VI 層出土遺物観察表	石製品	

第5章 鷹子町遺跡2次調査地

表 97	溝一覽	160
表 98	土坑一覽		
表 99	S D 2 出土遺物観察表	土製品	
表100	S D 2 出土遺物観察表	瓦製品 161
表101	S D 3 出土遺物観察表	土製品	
表102	S D 3 出土遺物観察表	瓦製品 162
表103	S D 3 出土遺物観察表	石製品	
表104	S P 出土遺物観察表	土製品	
表105	包含層および地点不明出土遺物観察表	土製品	

写真目次

巻頭図版 久米高畑遺跡10次調査地1号周溝出土遺物

第2章 久米高畑遺跡10次調査地

図版 1	1	遺構検出状況(南より)
	2	S D 1 検出状況(北西より)
図版 2	1	2号土器棺墓検出状況(南西より)
	2	2号土器棺墓遺物出土状況(西より)
図版 3	1	1号土器棺墓検出状況(北より)
	2	1号土器棺墓遺物出土状況(西より)
図版 4	1	S D 1 ベルト残存状況(北東より)
	2	S D 1 ベルト土層(西より)
図版 5	1	S D 1 完掘状況(1)(北西より)
	2	S D 1 完掘状況(2)(北東より)
図版 6	1	掘立1完掘状況(東より)
	2	作業風景(北西より)
図版 7	1	調査区完掘状況(1)(北東より)
	2	調査区完掘状況(2)(西より)
図版 8	1	出土遺物(1号土器棺墓・1号周溝・S D 1)
図版 9	1	S D 1 出土遺物
図版 10	1	1号周溝出土遺物

第3章 久米高畑遺跡27次調査地

- 図版 11 1 調査前の全景（南東より）
2 遺構検出状況（東より）
- 図版 12 1 遺構完掘状況（東より）
2 西壁土層（東より）
- 図版 13 1 S B 1 完掘状況（南より）
2 S B 1 遺物出土状況（東より）
- 図版 14 1 S K 11 検出状況（南西より）
2 S K 46 遺物出土状況（南より）
- 図版 15 1 S D 6 完掘状況（南西より）
2 S D 6 土層（東より）
- 図版 16 1 出土遺物（S K 5・9・18・41・46・59）
- 図版 17 1 出土遺物（S K 61・24・28・20・S D 2・5）
- 図版 18 1 出土遺物（S P 4・666・504・339・372・569・V層・地点不明）

第4章 久米高畑遺跡35次調査地

- 図版 19 1 調査前全景（西より）
2 遺構検出状況（西より）
- 図版 20 1 遺構完掘状況（西より）
2 掘立1完掘状況（東より）
- 図版 21 1 S B 1 完掘状況（南より）
2 S B 1 内遺物出土状況（南より）
- 図版 22 1 S D 10 上面検出状況（西より）
2 S K 12 遺物出土状況（北より）
- 図版 23 1 S D 10 上層完掘・落ち込み検出状況（南より）
- 図版 24 1 南壁土層（北より）
2 S D 10 ベルト土層（北東より）
- 図版 25 1 S D 10 落ち込み検出状況（北より）
2 S D 10 完掘状況（北より）
- 図版 26 1 出土遺物（S B 1・2・S D 3・S K 1・11）
- 図版 27 1 出土遺物（S D 1・第IV層）

第5章 鷹子町遺跡2次調査地

- 図版 28 1 掘削状況（東より）
2 作業風景（南西より）
- 図版 29 1 調査前の全景（北東より）
2 C地区S D 1 完掘状況（南より）
- 図版 30 1 遺構完掘状況（西より）

- 図版 31 1 SD 2・3完掘状況(西より)
2 北壁土層(南西より)
- 図版 32 1 B・D地区完掘状況(北西より)
- 図版 33 1 D地区完掘状況(南西より)
2 SK 1完掘状況(南より)
- 図版 34 1 出土遺物(SD 2・3・SP 29・第V層・地点不明)

第1章 はじめに

1. 調査・刊行に至る経緯

松山市教育委員会文化教育課（現、文化財課）は、平成元年4月に市内南久米町782-1で宅地開発に伴う事前の発掘調査を実施し、財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センターは、平成8年4月に市内来住町1145、平成9年5月に市内南久米町765-6、同年11月に鷹子町724-1他で宅地開発に伴う事前の発掘調査を実施した。発掘調査に至るまでの詳細は、第2章以降の各調査報告で行い、ここでは遺跡名称と周辺遺跡について、若干の解説をする。

平成元年4月に調査した南久米町782-1と、平成8年4月に調査した来住町1145は、埋蔵文化財包蔵地「126 高畑遺物包含地」内にあり、周辺地の既存の遺跡調査から、前者は久米高畑遺跡10次調査地、後者を久米高畑遺跡27次調査地とした。平成9年5月に調査した南久米町765-6は、埋蔵文化財包蔵地「127 来住廃寺跡」内にあり、周辺地の既存の遺跡調査から久米高畑遺跡35次調査地とし、平成9年11月に鷹子町724-1他は、埋蔵文化財包蔵地「129 鷹ノ子遺物包含地②」内にあり、周辺地の既存の遺跡調査から鷹子町遺跡2次調査地とした。

野外調査以降は、各調査担当者が整理作業を行い、平成15年度には本格的な報告書作成作業を実施した。この間では、松山市教育委員会文化教育課、後の同文化財課、松山市立埋蔵文化財センターならびに財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センターは互いに協力・支援をし、作業の円滑化に努めた。

表1 調査地一覧

遺跡名	所在地	面積(m ²)	調査期間
久米高畑10次	南久米町782-1	1,118	1989年4月1日～1989年4月28日
久米高畑27次	来住町1145	1,335	1996年4月3日～1996年7月4日
久米高畑35次	南久米町765-6	442	1997年5月7日～1997年7月31日
鷹子町2次	鷹子町724-1・7	766.62	1997年11月4日～1998年2月27日

2. 組織

平成15年度刊行組織 [平成16年3月31日現在]

松山市教育委員会	教 育 長	中矢 陽三
事務局	局 長	武井 正浩
	企 画 官	遠藤 宗敏
	企 画 官	石丸 修
松山市教育委員会文化財課	課 長	八木 方人
財団法人松山市生涯学習振興財団	理 事 長	中村 時広
	事 務 局 長	三宅 泰生
	事 務 局 次 長	菅 嘉見
埋蔵文化財センター	所 長	杉田 久憲
	専門監兼学芸係長	高本 昌陽
	次長兼調査係長	西尾 幸則
	調 査 員	梅木 謙一
	〃	宮内 慎一
	〃	河野 史知
	〃	相原 秀人
	〃	水本 完児
	〃	大西 朋子

3. 環 境

本書で報告する4遺跡は、松山平野を代表する古代遺跡の来住廃寺や久米高畑官衙遺跡群が含まれる「来住・久米地区」に属している。この地区には多くの遺跡があり、報告書も刊行したものが幾つかある。したがって、各遺跡の歴史的・自然地理的環境や久米高畑遺跡の内容は、以下の報告書を参照していただきたい。

報告書一覧

- 『来住廃寺』松山市文化財調査報告書 第12集、1979年。
- 『来住廃寺 - 平成2年度調査概報 -』松山市文化財調査報告書 第23集、1991年。
- 『来住・久米地区の遺跡』松山市文化財調査報告書 第27集、1992年。
- 『来住廃寺遺跡 - 第15次調査 -』松山市文化財調査報告書 第34集、1993年。
- 『来住・久米地区の遺跡 II』松山市文化財調査報告書 第44集、1994年。
- 『来住廃寺 - 第19次調査 -』松山市文化財調査報告書 第56集、1996年。
- 『小野川流域の遺跡』松山市文化財調査報告書 第57集、1996年。
- 『小野川流域の遺跡 II』松山市文化財調査報告書 第66集、1998年。
- 『来住・久米地区の遺跡 III』松山市文化財調査報告書 第76集、2000年。
- 『小野地区の遺跡』松山市文化財調査報告書 第81集、2001年。

『久米高畑遺跡 - 25次調査 -』松山市文化財調査報告書 第93集、2003年。

『来住・久米地区の遺跡 IV』松山市文化財調査報告書 第100集、2004年。

概要報告一覧

『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅰ』1987年。

『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅱ』1989年。

『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅲ』1991年。

『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅳ』1992年。

『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅴ』1993年。

『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅵ』1994年。

『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅶ』1995年。

『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅷ』1996年。

『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅸ』1997年。

『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅹ』1998年。

『松山市埋蔵文化財調査年報11』1999年。

『松山市埋蔵文化財調査年報12』2000年。

『松山市埋蔵文化財調査年報13』2001年。

『松山市埋蔵文化財調査年報14』2003年。

『松山市埋蔵文化財調査年報15』2004年。

第2章

く め たか ばたけ
久米高畑遺跡

10次調査地

第2章 久米高畑遺跡10次調査地

1. 調査の経過

(1) 調査に至る経過 (第2図)

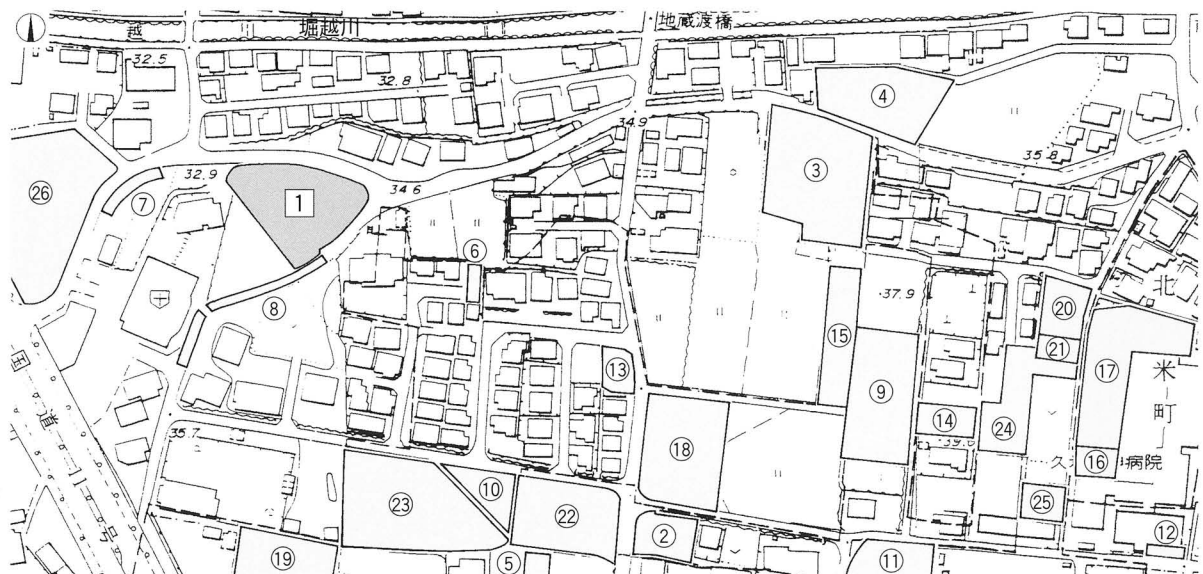
昭和63年11月10日、(有)三瓶不動産より松山市南久米町782-1内における宅地開発にあたり、当該地の埋蔵文化財の確認願いが松山市教育委員会文化教育課(以下、文化教育課)に提出された。

申請地は松山市の指定する埋蔵文化財包蔵地「No.126高畑遺物包含地」内に所在する。当該地は松山平野北東部に広がる来住舌状台地上にあり、標高55~56mを測る。周辺には、南東約330mに久米官衙遺跡群を構成する一施設の「回廊状遺構」、東約200mに「久米評衙」の一部と想定される箇所があり、松山平野における古代の重要遺跡地域にある。

昭和63年12月5日~同月7日まで文化教育課は試掘調査を実施し、地表面下約0.30mで遺物包含層や遺構を検出した。そのため当該地における遺跡の取扱いについて文化教育課と地権者は協議を行い、開発工事によって失われる遺構について、記録保存の為、発掘調査を実施することとした。

(2) 調査組織

調査地	松山市南久米町782-1
遺跡名	久米高畑遺跡10次調査地
調査期間	平成元年4月1日~同年4月28日
調査面積	1,118㎡
調査協力	三瓶不動産有限公司
調査担当	西尾幸則・池田 学・河野史知



- | | | | | |
|------------|------------|------------|------------|------------|
| ①久米高畑遺跡10次 | ②久米高畑遺跡35次 | ③久米高畑遺跡1次 | ④久米高畑遺跡2次 | ⑤久米高畑遺跡4次 |
| ⑥久米高畑遺跡6次 | ⑦久米高畑遺跡7次 | ⑧久米高畑遺跡8次 | ⑨久米高畑遺跡11次 | ⑩久米高畑遺跡12次 |
| ⑪久米高畑遺跡13次 | ⑫久米高畑遺跡17次 | ⑬久米高畑遺跡20次 | ⑭久米高畑遺跡21次 | ⑮久米高畑遺跡22次 |
| ⑯久米高畑遺跡23次 | ⑰久米高畑遺跡25次 | ⑱久米高畑遺跡26次 | ⑲久米高畑遺跡27次 | ⑳久米高畑遺跡28次 |
| ㉑久米高畑遺跡29次 | ㉒久米高畑遺跡31次 | ㉓久米高畑遺跡32次 | ㉔久米高畑遺跡33次 | ㉕久米高畑遺跡34次 |
| ㉖南久米片廻り遺跡 | | | | |

第2図 調査地周辺の遺跡分布図 (S=1:3,000)

2. 層位 (第4図)

基本層位は第Ⅰ層暗黄色土、第Ⅱ層暗青灰色土、第Ⅲ層褐色土、第Ⅳ層茶褐色土、第Ⅴ層黄褐色土であり、詳細は以下である。

第Ⅰ層—近現代の造成土

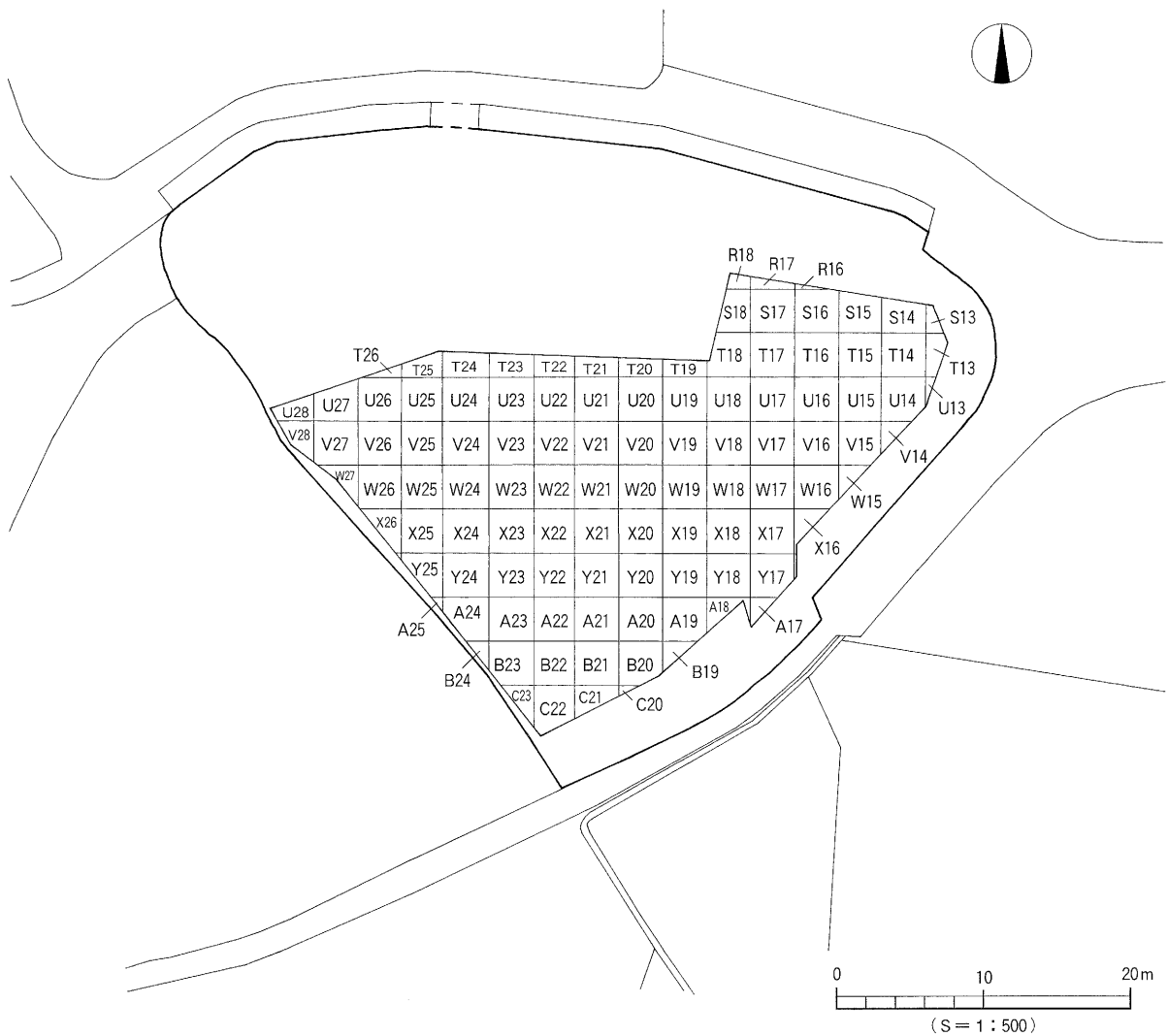
第Ⅱ層—農耕による耕作土で、厚さ15～18cmを測る。

第Ⅲ層—耕作に伴う客土で、厚さ8～10cmを測る。

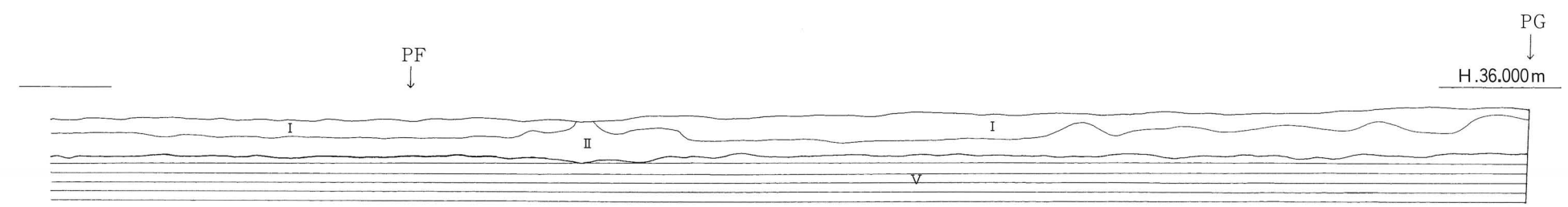
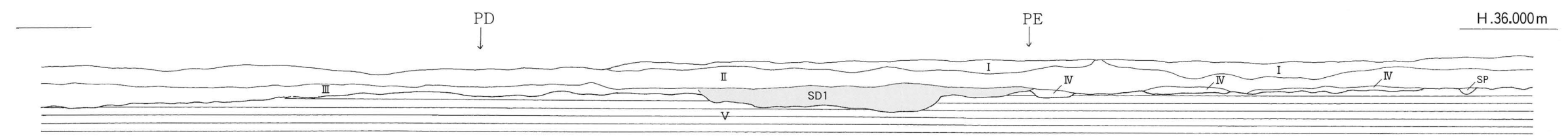
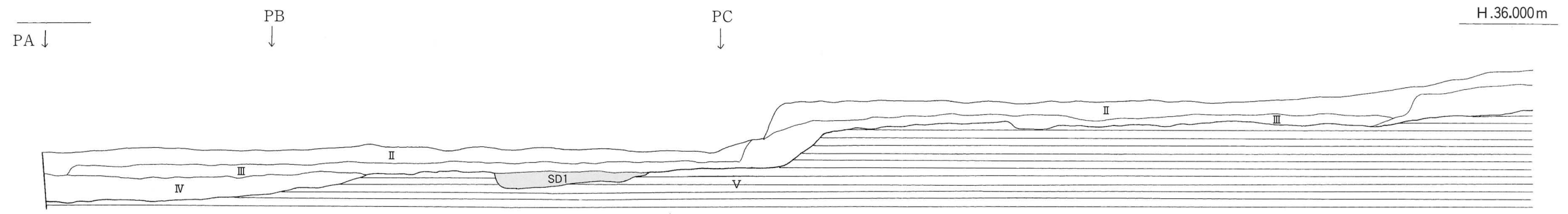
第Ⅳ層—北側の低地に部分的に残存し、厚さ18～28cmを測る。

第Ⅴ層—地山と呼ばれるものであり、この面において遺構を検出した。

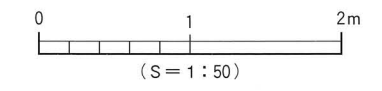
遺構は、第Ⅴ層上面にて掘立柱建物址3棟、土坑6基、土器棺墓2基、周溝1基、溝1条、柱穴76基を検出した。



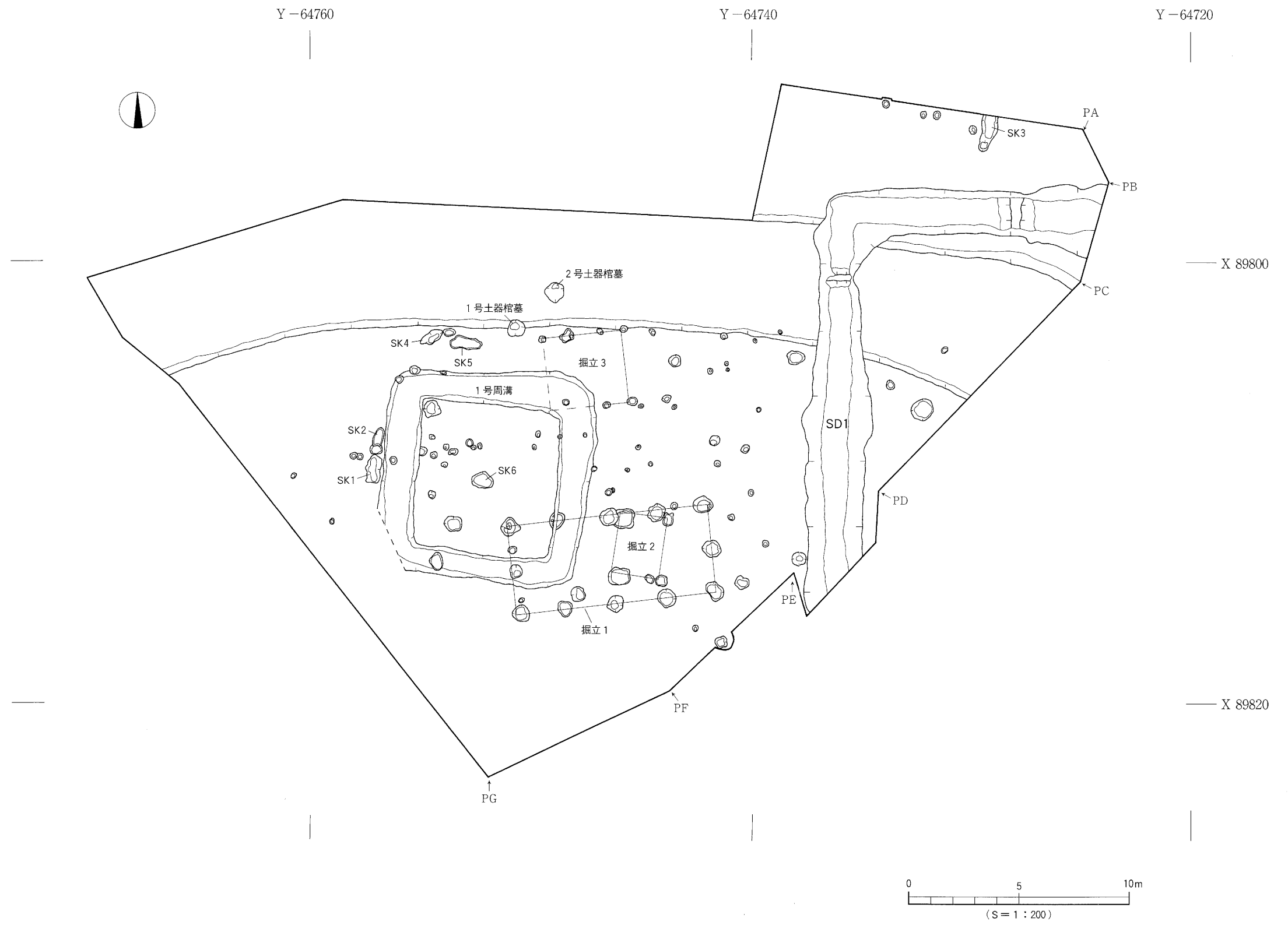
第3図 調査地区割図



- 第I層：暗黄色土（造成土）
- 第II層：暗青灰色土（耕作土）
- 第III層：褐色土
- 第IV層：茶褐色土
- 第V層：黄褐色土



第4図 土層図



第5図 遺構配置図

3. 遺構と遺物

〔1〕 弥生時代の遺構と遺物

(1) 墓

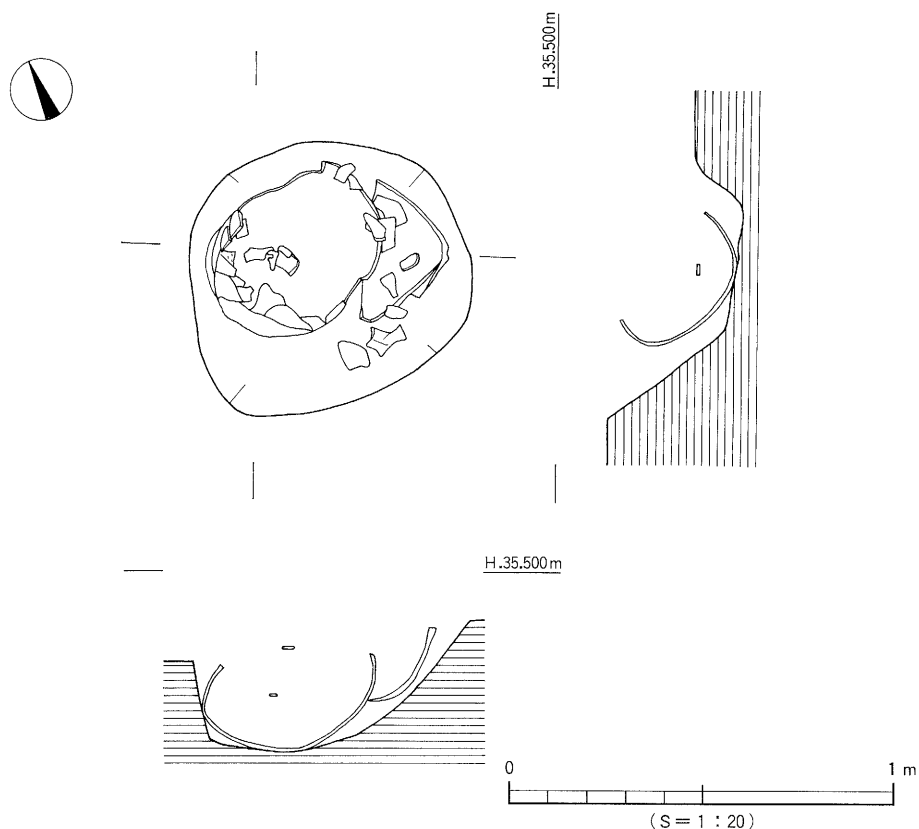
土器棺墓1 (第6・7図、図版3)

調査区北側V・22区に位置する。平面形態は楕円形、断面形態は逆台形状を呈する。規模は長軸0.69m、短軸0.68m、検出面よりの深さ0.35mを測る。後世の削平により遺構や遺物の上部は消滅している。埋土は暗茶褐色土で、土壌内より甕と壺とが各1個体分出土している。棺身の大型甕は床面に斜めに傾いた状態で出土し、棺蓋の壺は、棺身の甕の口縁部付近に被せた状態で出土している。棺内からは骨や副葬品などの出土はない。

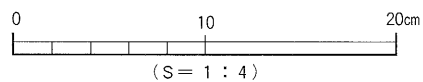
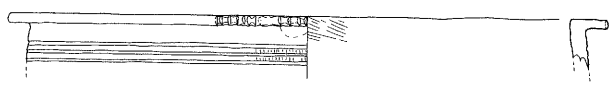
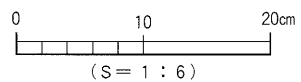
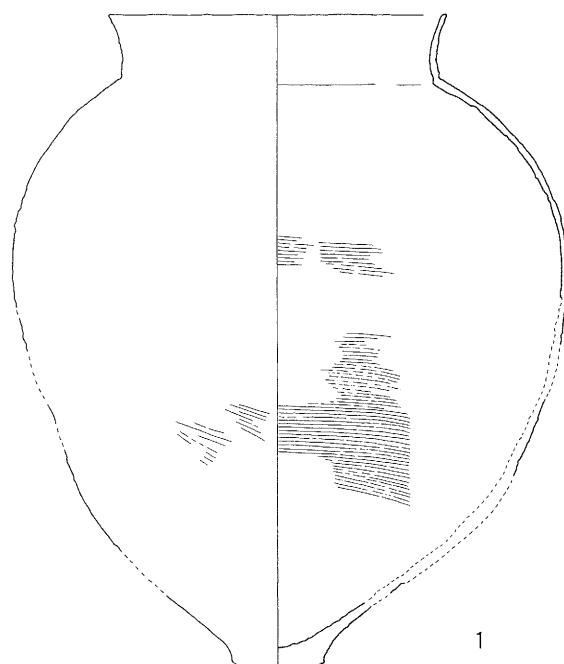
出土遺物 (第7図、図版8)

1は棺身の大型甕で、口縁部が長く直立して伸び、内外面には刷毛目調整が施される。2は棺蓋の壺で、立ち上がる平底の底部をもつ。3は弥生時代前期の甕で、上胴部に沈線文、逆「L」字状の口縁端部には刻目を施す。

時期：出土遺物より弥生時代後期後葉である。



第6図 1号土器棺墓測量図



第7図 1号土器棺墓出土遺物実測図

遺構と遺物

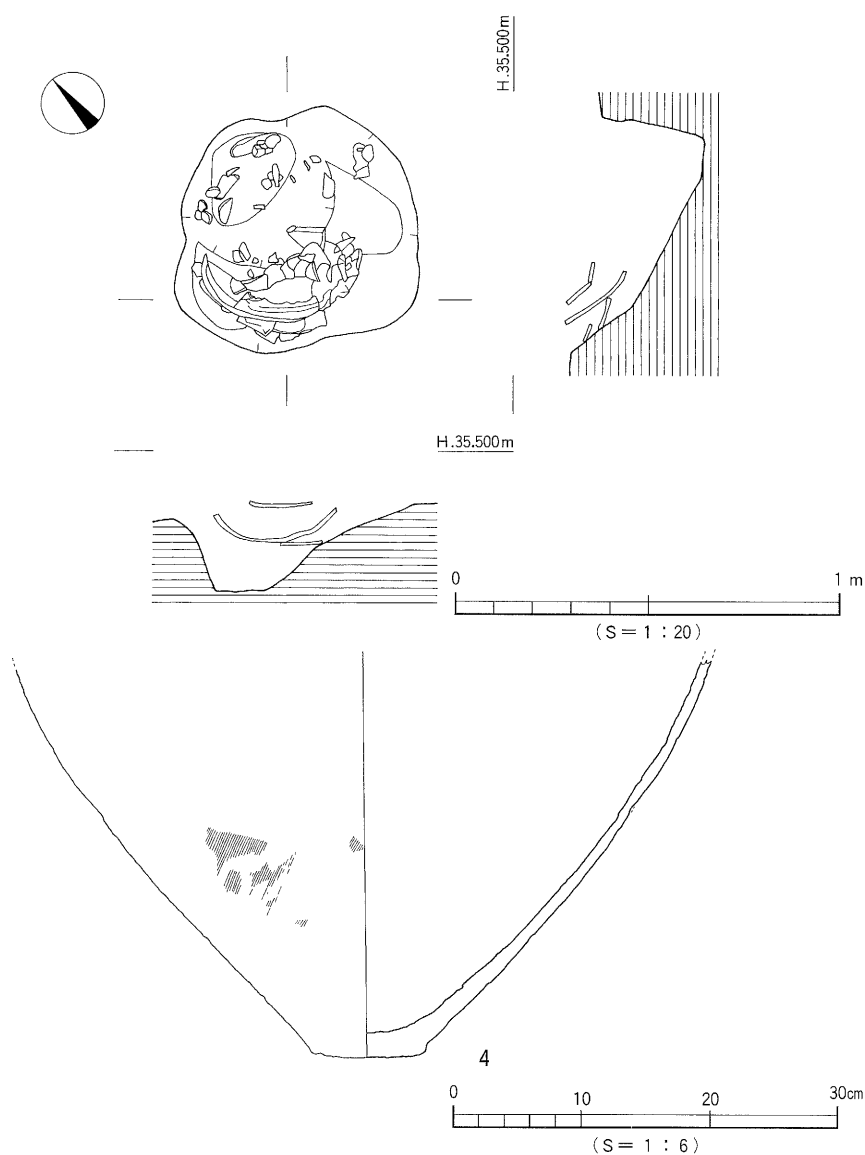
土器棺墓 2 (第5・8図、図版2)

調査区北側U22・23区に位置する。平面形態は楕円形、断面形態は舟底状を呈する。規模は長軸0.81m、短軸0.73m、検出面よりの深さ0.31mを測る。土壌は北側が深く掘られて、南側は緩やかな傾斜を示す。土器は西側中位面から出土し、下位からは出土していない。埋土は暗茶褐色土である。

出土遺物 (第8図)

4は大型壺で、平底の底部をもつ。

時期：出土遺物より弥生時代後期後葉である。



第8図 2号土器棺墓測量図・出土遺物実測図

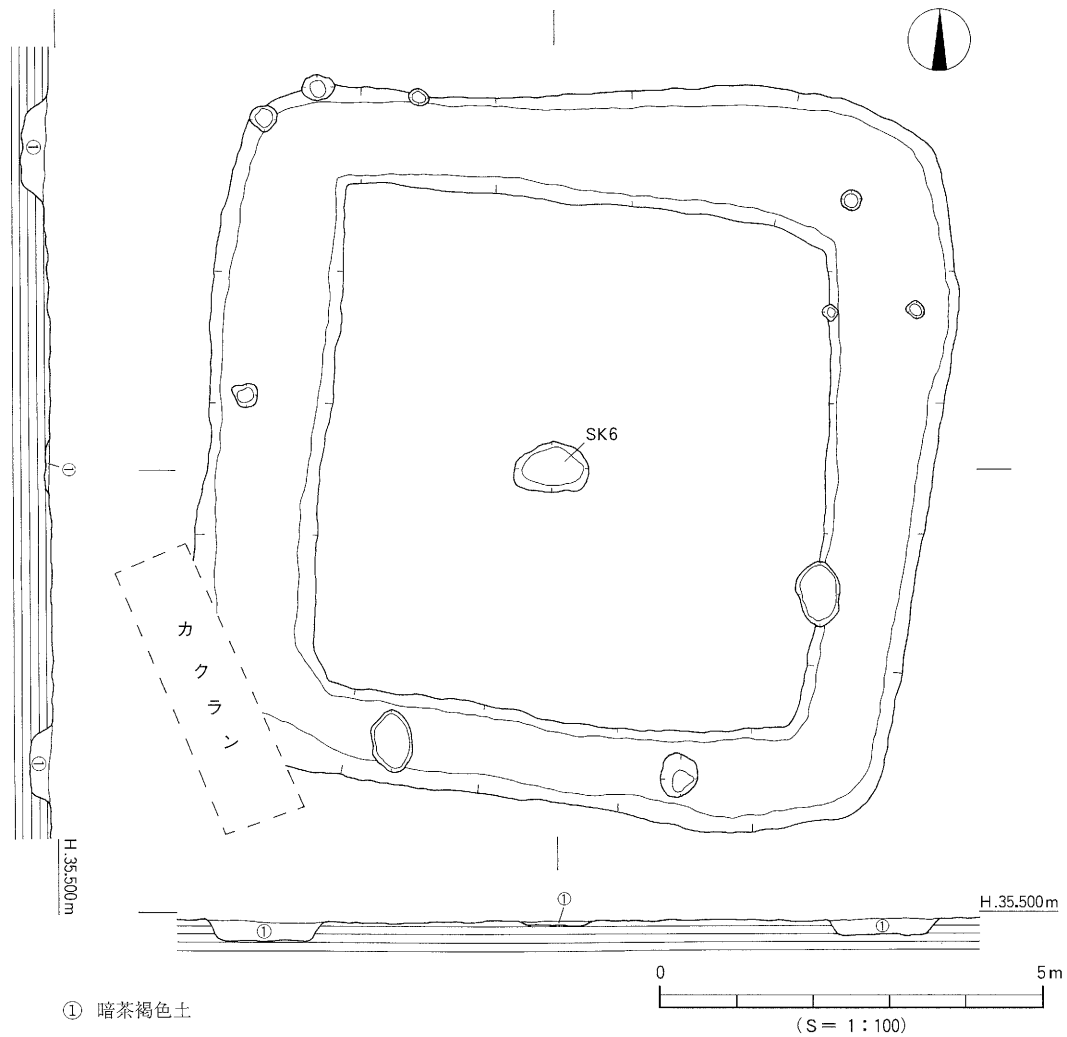
〔2〕古墳時代の遺構と遺物

(1) 周溝

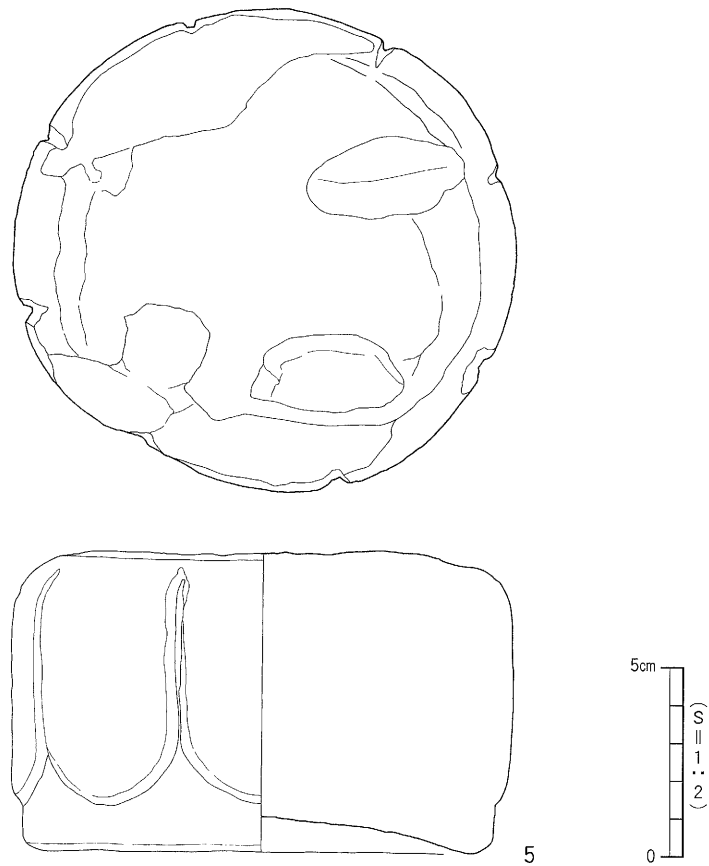
1号周溝（第5・9図、図版1・7）

調査区西側W～A・21～28区に位置し、掘立1を切る。周溝は平面形態が方形、断面形態は逆台形を呈している。規模は東西9.42m、南北9.36m、検出面よりの深さ0.24～0.35mを測る。埋土は暗茶褐色土で、周溝内からは土師器・須恵器の細片が少量出土し、なかには第10図5の土製品や石器1点（図版8-49）がある。5は東溝の中位付近で出土したものである。また、調査不十分による中世遺構に伴うと考えられる中世土器片数点も出土がある。

周溝内側の中央部では土坑SK6を検出した（第9図）。周溝の中央（X22～23区）に位置し、平面形態が楕円形、断面形態が皿状の浅い土坑である。規模は長軸0.98m、短軸0.68m、検出面よりの深さ0.03mを測る。埋土は暗茶褐色土で、出土遺物はない。



第9図 1号周溝測量図



第10図 1号周溝出土遺物実測図

出土遺物（第10図、巻頭図版・図版10）

5は土製品で、円柱状を呈し、図上部は約2.0cmの縁（幅）をもって、径10.8cm、高さ0.2～0.4cmの高まり部分を持ち、図下部は凹面をなす。側面には蓮華文状の文様が見られ、その数は8弁となる。図上部径13.0cm、図下部径11.5～12.1cm、周囲40.5cm、高さ8.0cm、重さ1,255gとなる。胎土・色調は来住廃寺関連の瓦片に類似が見られる。

時期：出土遺物と切り合い関係より、遅くとも古墳時代後期～終末には築造され、周溝の埋没は7世紀代中頃以降と見られる。

（2）掘立柱建物址

掘立1（第5・12図、図版6）

調査区南側Y～A・19～22区に位置する。掘立2を切り、1号周溝に切られている。建物は2×4間の東西棟で、主軸はN-7°-Wを指向する。規模は桁行9.18mの柱間2.05～2.56m、梁行4.06mの柱間1.90～2.15m、床面積37.30㎡を測る。柱穴の平面形態は円形～楕円形を呈しており、径0.60～0.90m、検出面よりの深さ0.05～0.50m、柱痕径0.12～0.17mを測る。P⑩は床面の柱痕を囲む様に拳大の石が積みられている。柱穴埋土は灰茶褐色土～暗茶褐色土で、弥生土器片が出土している。

出土遺物 (第11図)

6は弥生時代前期の甕の底部で、平底を呈する。

時期：埋土や規模等から、古墳時代後期6世紀後半～7世紀前葉に比定される。

掘立2 (第5・13図)

調査区南側Y～A・20～21区に位置し、掘立1に切られている。建物は1×1間の南北棟で、主軸はN-2°-Eを指向する。規模は東西1.84m、南北2.70m、床面積5.20m²を測る。柱穴の平面形態は楕円形～方形を呈しており、径0.50～1.16m、検出面よりの深さ0.09～0.24m、柱痕径0.15～0.32mを測り、西側の柱穴は東側の柱穴に比べ大型である。埋土は暗灰褐色土～黒灰色粘質土で、弥生土器片が出土している。

出土遺物 (第11図)

7・8は弥生時代前期末～中期初頭の甕で、7は平底、8は逆「L」字状の口縁部をもつ。

時期：遺構の切り合い関係からは掘立1以前となり、古墳時代後期以前とする。

掘立3 (第5・13図)

調査区中央部V～W・20～22区に位置し、1号周溝に切られている。建物は3×1間の東西棟で、主軸はW-6°-Sを指向しており、規模は東西3.60mの柱間1.04～1.34m、南北の柱間3.28m、床面積12.20m²を測る。柱穴の平面形態は円形を呈しており、径0.28～0.42m、検出面よりの深さ0.18～0.34mを測る。埋土は暗茶褐色土で、弥生土器片が出土している。

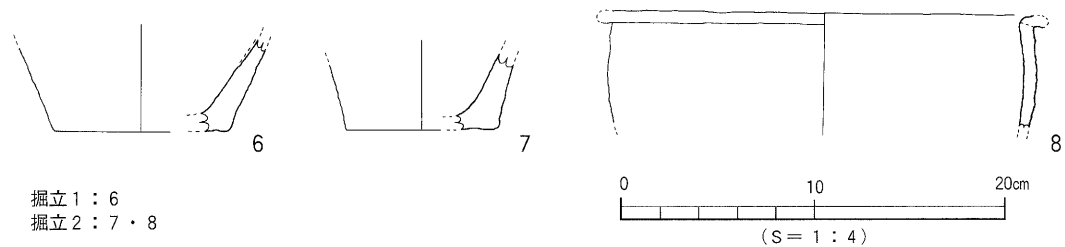
時期：建物址の位置関係や埋土より、古墳時代後期が考えられる。

(3) 土 坑

SK3 (第5図)

調査区北東部のS15区に位置する。平面形態は楕円形、断面形態は舟底状を呈する。規模は長軸1.62m以上、短軸0.61m、検出面よりの深さ0.32mを測る。埋土は暗茶褐色土で、土師器・須恵器片が出土している。

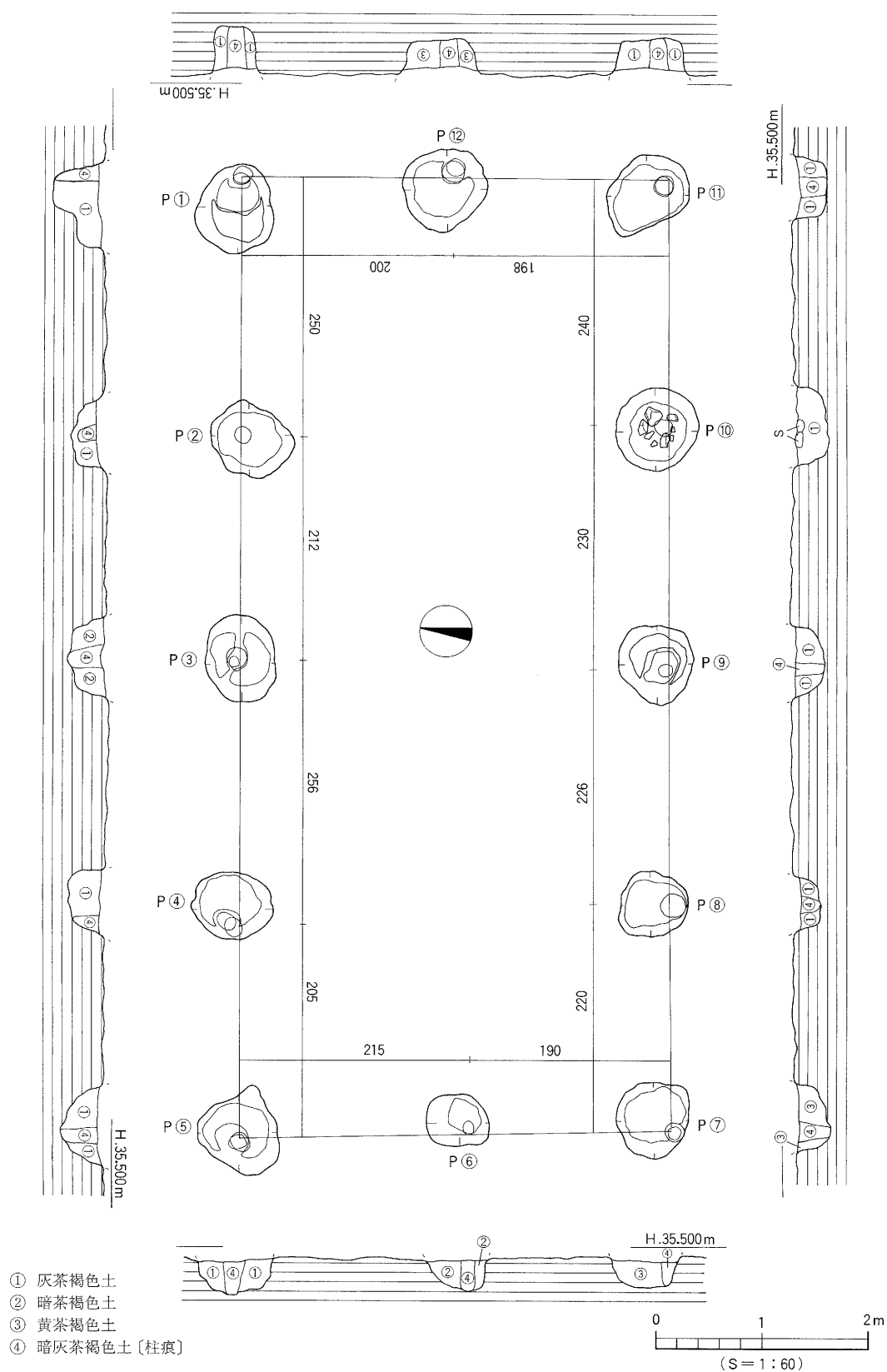
時期：出土遺物より古墳時代後期が考えられる。



掘立1：6
掘立2：7・8

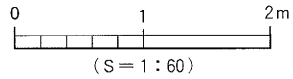
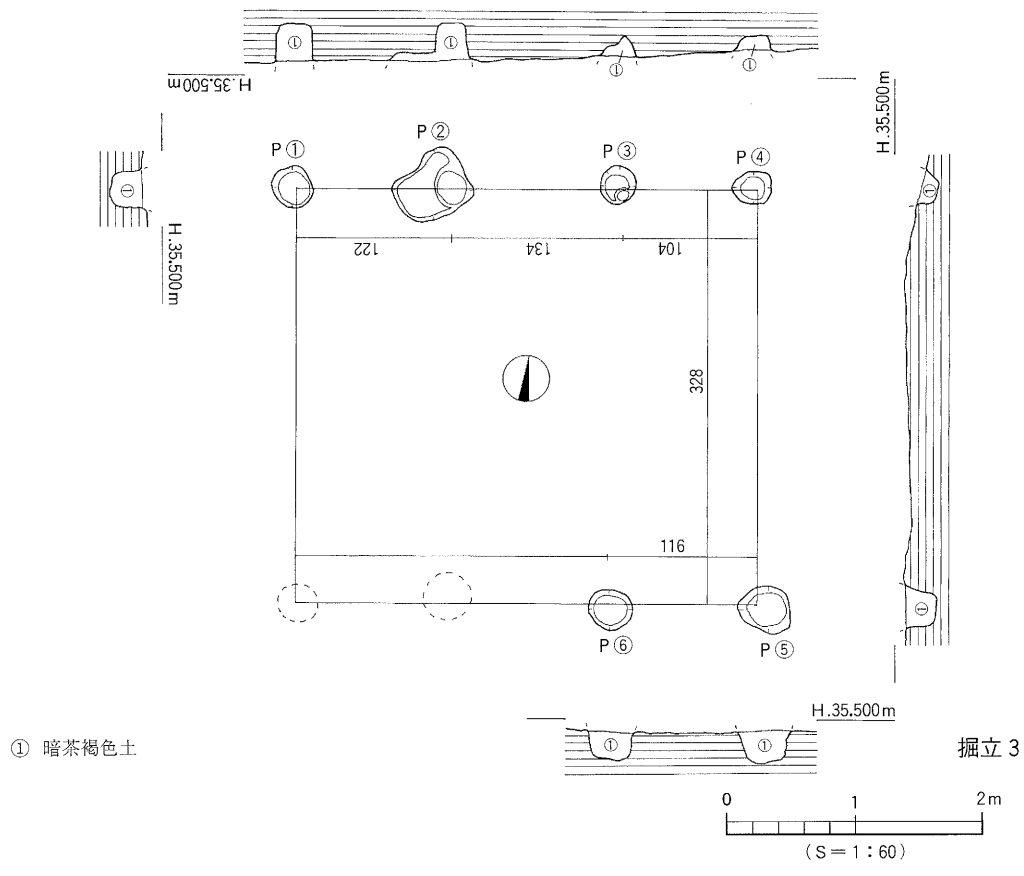
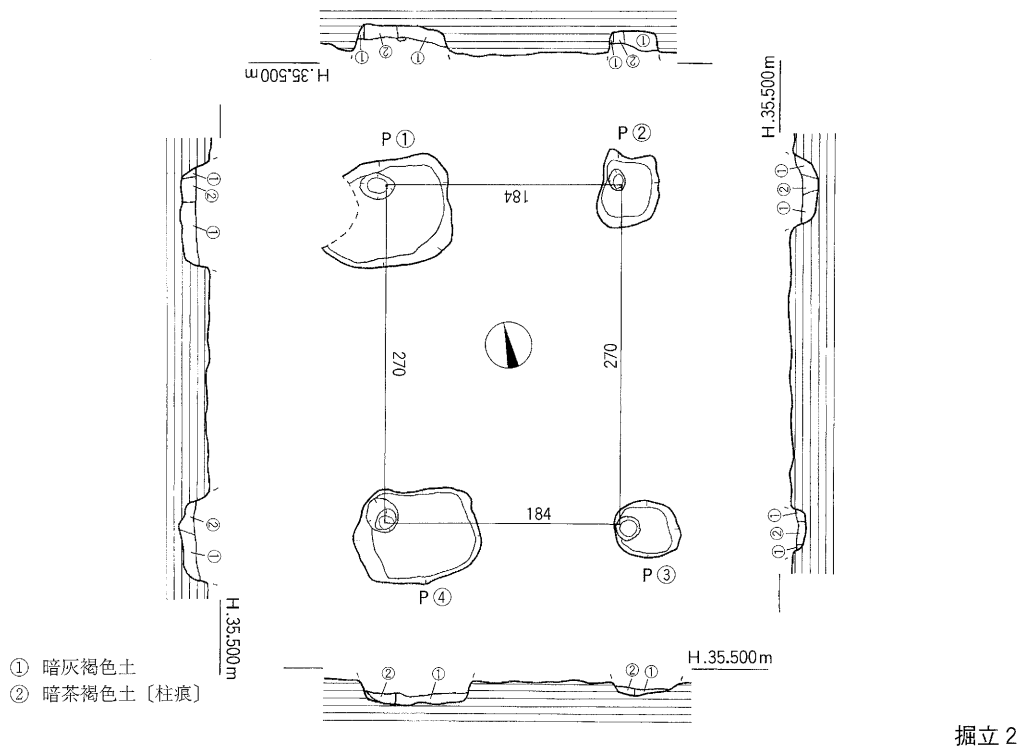
第11図 掘立1・2出土遺物実測図

遺構と遺物



第12図 掘立1測量図

久米高畑遺跡10次調査地



第13図 掘立 2・3 測量図

〔3〕古代の遺構と遺物

SD1 (第5・14図、図版1・4・5)

調査区東側T～A・13～18区に位置しており、東・南端は調査区外に延びる。主軸は正方位を指向しており、南北から東西へ直角に屈曲する。規模は検出長が東西12.40m、南北17.50m、検出面よりの深さ0.32～1.06mを測る。溝床のレベルは南北溝は同レベルだが、コーナー部から東に向けて緩やかな下がり傾斜を示し、東端の溝床は南北の溝床に比べ約1m下がっている。また、東西溝と南北溝とは断面形態が台形状の突出部が各1ヶ所みられる。この突出部は溝の基底面より0.20～0.50mの高さを持ち、上部幅0.20～0.50m、底面幅0.90～1.50mを測る。溝の断面形態は逆台形状を呈し、埋土は1層が茶褐色土、2層が暗茶褐色土、3層が暗灰茶褐色土、4層が明灰黄色粘質土で、各層ともにほぼ水平堆積を示している。遺物には1層から4層までに土師器・須恵器・弥生土器片が出土し、4層は時期を特定できる遺物がない。3層での遺物の出土は少量で、7世紀後半から8世紀前半までの土器が含まれる。2層には土器の大型破片と礫が含まれ、8世紀中頃の土器がある。1層には古代9世紀初めから10世紀後半までの土器が含まれる。ただし、中世土器の出土は、中世遺構の掘り下げが充分でなかったことによるものであろう。

出土遺物 (第15・16図、図版8・9)

須恵器：9・10は坏蓋で、9は丸みをもつ天井部に、口縁端部がやや下方にのびる。10は平らな天井部で、口縁端部は下方向に屈曲する。11～13は坏身で、11は高台を伴わない底部である。12は断面「ハ」字状に開く高台をもつ。13は断面逆台形状の貼付高台をもつ。14は盤で、直立する高台に外反する口縁部をもつ。15は短頸壺の蓋で、平らな天井部よりほぼ直角をなす口縁部をもつ。16は壺の底部で、底部に「ハ」字状の高台を貼付し、内端面が接地する。17～21は甕で、「く」字状の頸部をもつ。17・18は口縁端部が尖り気味で、19は端部が面、20は端部が丸みのある面をなし、21は端部が斜めに面をなし外方向へやや肥厚する。

土師器：24～27は甕で、24～26は内湾気味の口縁部に、端部が平らな面をなす。27は口縁端部がやや上方向に伸び丸くおさまり、28は高台付碗である。29は高坏の脚部である。30は緩やかに「く」字状に外反する口縁部をもつ。

弥生土器：31・32は甕で、平底の底部をもつ。33～37は壺で、33は頸部に指頭による貼付凸帯が施されている。34～37は平底の底部となる。

中世土師器：38は東播系こね鉢、39は瓦器碗で、高台部が欠落している。

瓦：22・23は平瓦で、凹面には布目痕、22は凸面に斜格子叩き、23は凸面に細縄叩きがみられる。

石器：40は平基式の無茎石鏃であり、石材は赤色チャート製。41は凹基式の無茎石鏃で、基部にえぐりがあり、石材はサヌカイト製である。42は赤色チャート製の剥片である。

鉄器：43は鉄製鋤・鍬先で、両側縁は折り返してつくられる。

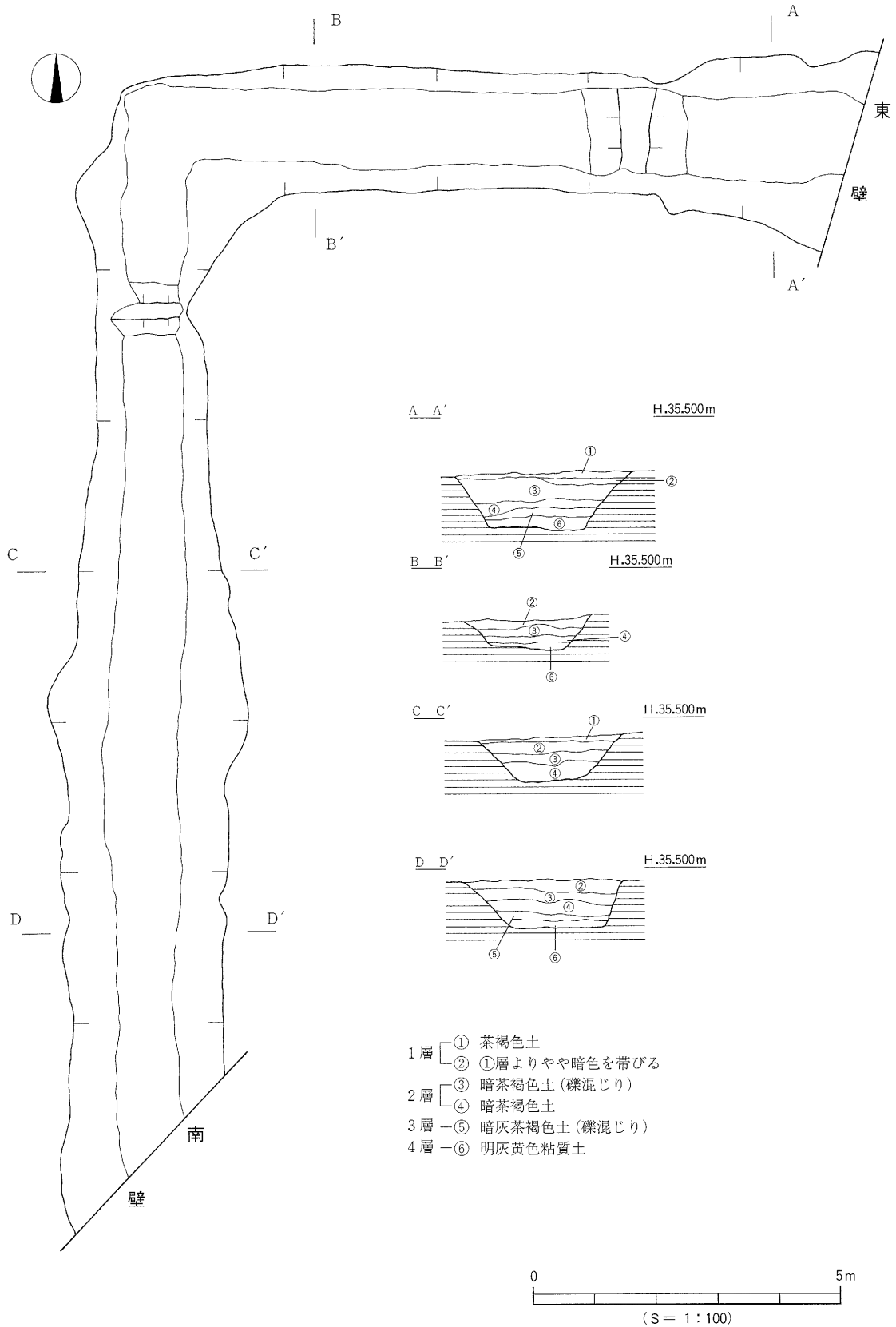
時期：出土遺物より、溝底は8C代中葉に埋まっていたと考えられる。

〔4〕中世の遺構と遺物

(1) 柱 穴 (第5・17図)

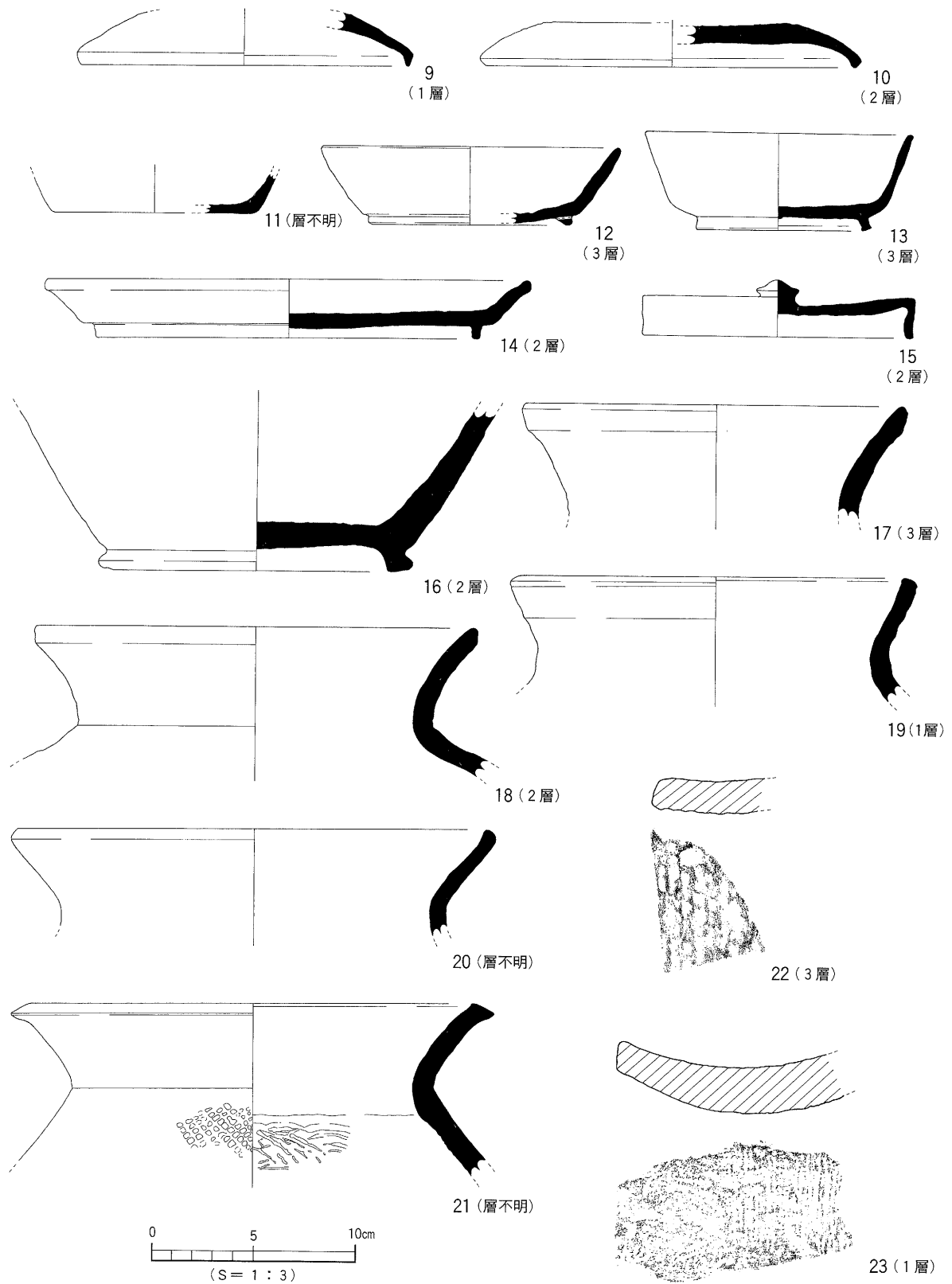
中世に時期が特定できる柱穴はSP59・67である。平面形態は円～楕円形を呈し、規模は直径0.28m、検出面よりの深さ0.31～0.33mを測る。埋土は暗灰茶褐色土で、土師質鍋が出土している。第17図44・45は土鍋の口縁部で、44は逆「L」字状の口縁部で、端部はやや上を向く。45は「く」字状の口縁部で、端部はやや上を向く。**時期：**中世

久米高畑遺跡10次調査地

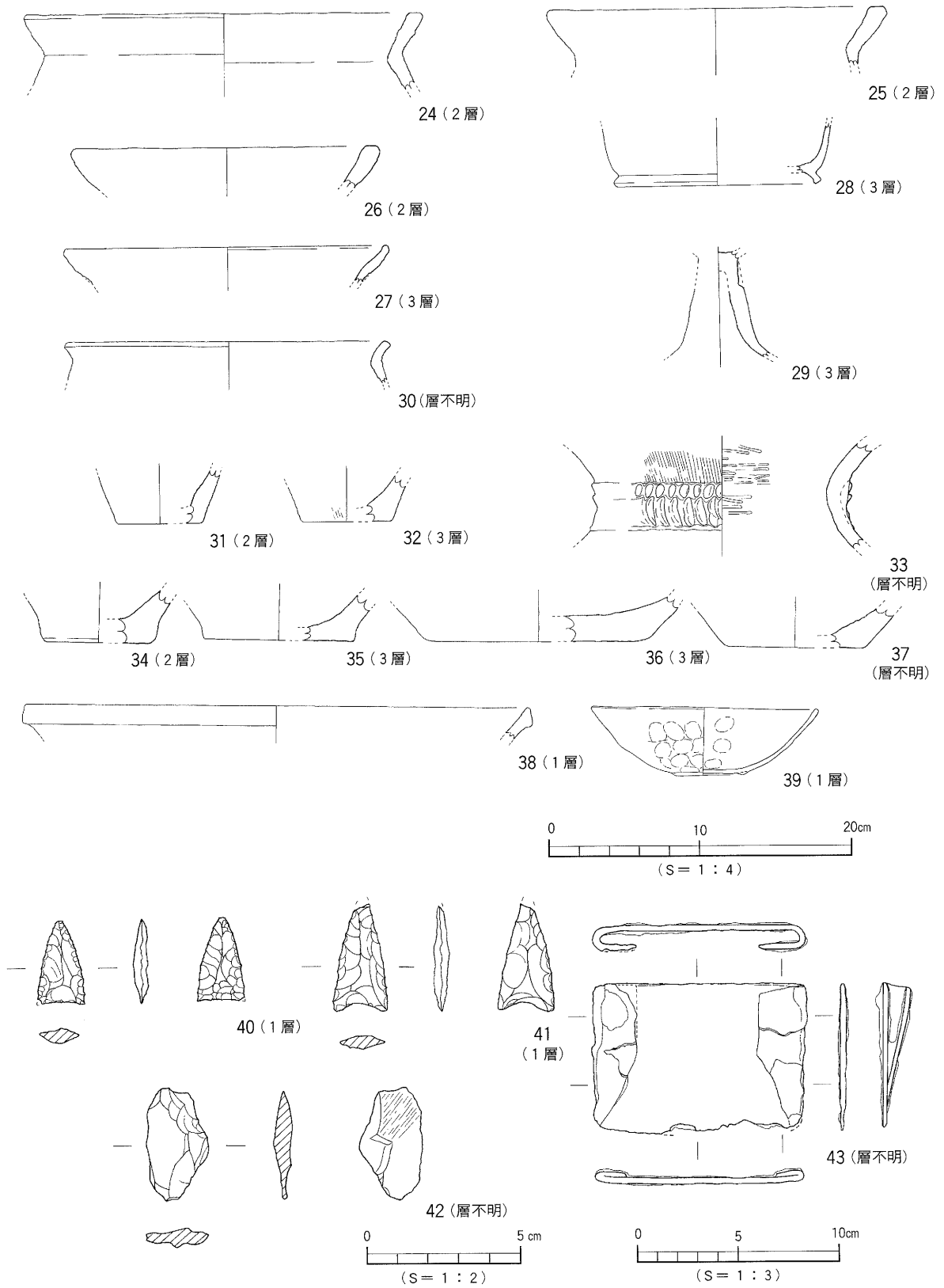


第14図 SD1測量図

遺構と遺物



第15図 SD 1 出土遺物実測図 (1)



第16図 SD 1 出土遺物実測図 (2)

〔5〕 その他の遺構と遺物

(1) 土 坑

SK 1 (第5図)

調査区西部X24区に位置する。平面形態は楕円形、断面形態は逆台形状を呈する。規模は長軸1.20m、短軸0.59m、検出面よりの深さ0.30mを測る。下層からは少量の焼土を検出している。埋土は黒灰色粘質微砂で、出土遺物はない。

SK 2 (第5図)

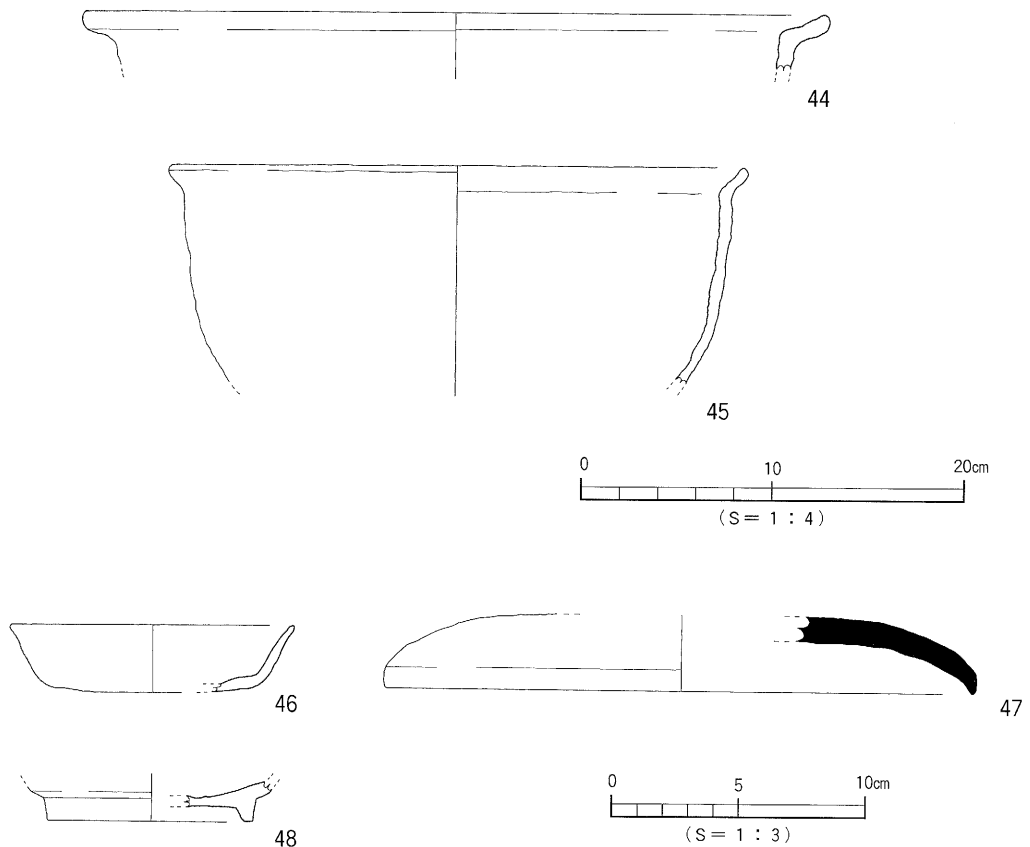
調査区西部W～X24区に位置する。平面形態は楕円形、断面形態は逆台形状を呈する。規模は長軸1.16m、短軸0.52m、検出面よりの深さ0.17mを測る。SK 1と同様に下層から焼土を検出している。埋土は黒灰色粘質微砂で、出土遺物はない。

SK 4 (第5図)

調査区北側W23区に位置する。平面形態は楕円形、断面形態は逆台形状を呈する。規模は長軸0.93m、短軸0.38m、検出面よりの深さ0.15mを測る。埋土は黒灰色粘質微砂で、出土遺物はない。

SK 5 (第5図)

調査区北側W22～23区に位置する。平面形態は楕円形、断面形態は皿状の二段掘りを呈する。規模は長軸1.13m、短軸0.45m、検出面よりの深さ0.03mを測る。埋土は暗灰褐色粘質微砂で、遺物はない。



SP59 : 44
 SP67 : 45
 地点不明 : 46～48

第17図 ピット・地点不明出土遺物実測図

(2) 柱 穴

68基が検出されている。平面形態は円～楕円形が主で規模は直径0.15～1.00m、検出面よりの深さ0.20～0.58mを測っている。埋土は暗褐色土が大半を占めており、南西部では赤褐色土が一部にみられる。

(3) その他の出土遺物 (第17図)

46は坏身で、平底の底部をもつ。47は坏蓋で、平らな天井部より、下方に尖り気味の口縁端部をもつ。48は碗の底部で、断面逆台形状の高台をもつ。

4. 小 結

本調査では、古墳時代の掘立柱建物址や周溝、古代の区画溝などを検出した。

弥生時代

土器棺墓1・土器棺墓2は上部が後世に削平され遺存状況はよくないが、土器棺墓1は斜めに傾けた甕の口縁部に、別の壺の下胴部～底部付近を被せて土壌内に埋納したことが窺えた。

古墳時代

1号周溝の内側中央部では楕円形の浅い凹みをもつSK6が検出されているが、本遺構は検出位置や周溝埋土に類似することから、主体部等の施設の基底面付近と考えられる。さて、周溝の性格であるが、周溝埋土が周辺の古墳時代遺構の埋土に似ていること、埋没が7世紀代とみられることを条件にすれば当地の古墳時代遺構で方形周溝になるものは方墳が第一の候補に上げられる。ただし、群集していない、規模が小さい、東10mにある古代の区画溝との関係も一部に考えられることから、再度の検討を要する遺構であろう。当調査地一帯にはこの様な周溝は確認されておらず、当地における重要な遺構であることは間違いない。また、SK1・2は位置関係より1号周溝に伴う施設とも考えられ、焼土が含まれていることなどより、調査地一帯は祭祀の場と考えられる。

掘立1・3は平行する位置関係や埋土が同一であることより、古墳時代後期に同時期存在していたことが窺える。掘立2は掘立1に切られていることから、掘立1に先行する時期であるが、出土遺物からみるとあまり時期差が認められない。

古 代

区画溝は正方位を指向し直角に屈曲する溝で、屈曲部付近には2ヶ所に土手状の盛り上がりが見られている。この土手状の施設が溝の中でどのような役目をもっているのか、現段階では判断できないが、何がしかの施設基底部も考えの一つにある。また、溝内の埋土が比較的平坦に堆積していることと出土品より、短時間に埋没したとは考え難く、出土品からは7世紀後半～8世紀中頃と、9世紀初～10世紀後半の埋没が認められている。

さて、当地南東150mにある久米高畑遺跡4次調査地では、調査区北端で東西に延びる段落ち遺構が検出されているが、この遺構は断面形態や埋土が本調査地のSD1と類似していることより、同一遺構の可能性が高く、区画された範囲が南北約140m(周溝外側)を測ることになる。

参考文献

西尾幸則 1977「久米高畑遺跡」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅰ』松山市教育委員会

西尾幸則 1979「久米高畑遺跡2～7次」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅱ』松山市教育委員会

遺物観察表

表2 掘立柱建物址一覧

掘立	規模(間)	方向	桁行		梁行		方位	床面積(m ²)	時期	備考
			実長(m)	柱間寸法(m)	実長(m)	柱間寸法(m)				
1	2×4	東西	9.18	2.05~2.56	4.06	1.90~2.15	N-7°-W	37.30	古墳後期以前	掘立2を切り、1号周溝に切られる。
2	1×1	南北	2.70	2.70	1.84	1.84	N-2°-E	5.20	古墳後期以前	掘立1に切られる。
3	3×1	東西	3.60	1.04・1.34・1.22	3.28	3.28	W-6°-S	12.20	古墳後期以前	1号周溝に切られる。

表3 土坑一覧

土坑(SK)	地区	平面形	断面形	規模(m) 長さ(長径)×幅(短径)×深さ	床面積(m ²)	埋土	出土遺物	時期	備考
1	X24	楕円形	逆台形	1.20 × 0.59 × 0.30	0.72	黒灰色粘質微砂		不明	焼土
2	W・X24	楕円形	逆台形	1.16 × 0.52 × 0.17	0.52	黒灰色粘質微砂		不明	焼土
3	S15	楕円形	舟底状	(1.62) × 0.61 × 0.32	(0.89)	暗茶褐色土	土師・須恵	古墳後期	
4	W23	楕円形	逆台形状	0.93 × 0.38 × 0.15	0.28	黒灰色粘質微砂		不明	
5	W22・23	楕円形	皿状	1.13 × 0.45 × 0.03	0.40	暗灰褐色粘質微砂		不明	
6	X22・23	楕円形	皿状	0.98 × 0.68 × 0.03	0.67	暗茶褐色土		古墳後期以前	

表4 溝一覧

溝(SD)	地区	断面形	規模(m) 長さ×幅×深さ	方向	埋土	出土遺物	時期	備考
1	T13~A18	逆台形状	東西 12.4 + α × 1.50 ~ 0.32 ~ 南北 17.5 + α × 3.30 × 1.06	主軸が正方位	暗茶褐色土	土師・須恵	8世紀	

表5 1号土器棺墓出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調 (外面/内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
1	甕	口径(26.0) 器高 51.6 底径 7.0	直立気味に立ち上がる頸部、口縁部はやや外反する底部は平底。	㊦ マメツ ㊧ ハケ (3本/cm・4本/cm)	ハケ(3~4本/cm)	浅黄色 浅灰黄色	石・長(6) ○	下棺	
2	壺	底径(4.6) 残高 22.7	突出する平底の底部	ハケ(5~6本/cm) ハケ→ナデ上げ	マメツ	淡橙色・黒色 浅黄色	石・長(5) ○	上棺	
3	甕	口径(30.9) 残高 2.7	口縁部は逆「L」字状で、端部に刻目、上胴部に沈線を施す。	ナデ	ハケ(5本/cm)	にぶい橙色 にぶい橙色	石・長(1~3) ◎		8

表6 2号土器棺墓出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調 (外面/内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
4	壺	底径(8.9) 残高 30.9	平底の底部より内湾気味に立ち上がる。	ハケ(6本/cm)	マメツ	橙色・浅黄色 浅黄色・浅茶色	石・長(8) ○		

表7 1号周溝出土遺物観察表 土製品

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				高さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
5	台座	ほぼ完存	土製品	8.0	13.0	中心部 7.0	1,255	乳黄灰色を呈す	巻頭 10

久米高畑遺跡10次調査地

表8 掘立出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
6	甕	底径 (9.0) 残高 5.0	平底の底部である。	マメツ	マメツ	にぶい黄褐色 にぶい橙色	石・長(1~2) 砂 △	掘立1	
7	甕	底径 (7.8) 残高 4.1	平底の底部である。	マメツ	マメツ	明赤褐色 黒褐色	石・長(1~4) 砂 ○	掘立2	
8	甕	口径 (22.9) 残高 5.9	逆「L」字状の口縁部をもつ。	マメツ	マメツ	灰黄褐色 明赤褐色	石・長(1~4) 砂 金 ○	掘立2	

表9 S D 1 出土遺物観察表 土製品 ①

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
9	坏蓋	口径 (16.0) 残高 2.6	丸みをもつ天井部。口縁部には下方に屈曲する。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	長(1~2) ◎	1層	
10	坏蓋	口径 (18.0) 残高 2.2	平らな天井部。口縁部は下内方に屈曲する。	回転ナデ	回転ナデ	灰オレンジ色 灰色	細粒 ○	2層 自然釉	8
11	坏	残高 2.0 底径 (9.6)	平底の底部。体部は内湾気味に立ち上がる。	マメツ	マメツ	乳白色 乳白色	長(1) 砂 △	層不明	
12	坏	口径 (9.5) 器高 3.9	体部は直立気味に立ち上がる。台形状の高台を貼付する。	マメツ	回転ナデ	乳白色 乳白色	長(1~2) 砂 △	3層	
13	坏	口径 (13.0) 器高 4.9 高台径 8.2	体部は直立し、口縁部はわずかに外反する。高台は「ハ」字状に開く。	回転ナデ	回転ナデ	黄灰色 黄灰色	密 ○	3層	
14	盤	口径 (13.6) 器高 3.0 底径 (18.6)	直立する高台に外反する口縁部をもつ。口縁部の内面に沈線状の凹みあり。	ナデ	㊦ ナデ 不定方向ナデ	黄灰色 黄灰色	石・長(3) ○	2層	8
15	蓋	口径 13.2 器高 2.9	扁平な天井部。口縁部は垂下し、口縁端内は平坦面をなす。	㊦ 回転ヘラケズリ ㊧ 回転ナデ	不明	青灰色 青灰色	密 ◎	2層 自然釉	8
16	壺	残高 8.0 高台径 (14.6)	長頸壺の底部。「ハ」字状の高台を貼付し内端面が接地する。	㊦ 回転ヘラケズリ ㊧ 回転ナデ	回転ナデ	黄灰色 黄灰色	長(4) ○	2層	
17	甕	口径 (18.4) 残高 5.6	外反する口縁部。端部は尖り気味である。	ナデ	ナデ	暗灰黄色 暗灰黄色	長(1~2) 砂 ◎	3層 自然釉	
18	甕	口径 (21.4) 残高 7.4	外反する口縁部。端部は尖り気味である。	ナデ	㊦ ナデ ㊧ 不定方向ナデ	オレンジ灰色 灰色	長(1~2) ◎	2層 自然釉	8
19	甕	口径 (18.6) 残高 6.2	緩やかな「く」字状の頸部をもつ。	ナデ	㊦ ナデ ㊧ 不定方向ナデ	灰オレンジ色 灰オレンジ色	長(1) ◎	1層	
20	甕	口径 (23.1) 残高 5.5	外反する口縁部。口縁端部は上内方にのびる。	ナデ	ナデ	灰白色 灰白色	長(1) △	層不明	
21	甕	口径 (21.7) 残高 8.6	「く」字状の頸部。口縁端部は外反に肥厚する。	㊦ ナデ ㊧ 格子タタキ	㊦ ナデ ㊧ 同心円文 →ナデケシ	灰オレンジ色 灰オレンジ色	密 ◎	層不明 自然釉	8

表10 S D 1 出土遺物観察表 瓦製品

番号	種類	法量				調整		色調 (凸面) (凹面)	胎土 焼成	備考	図版
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(kg)	凸面	凹面				
22	平瓦	7.50	7.60	2.20	0.22	斜格子タタキ	布目痕 (9×10/cm ²)	浅茶黄色 浅茶黄色	密 ○	3層	9
23	平瓦	14.30	10.70	3.15	0.58	細縄タタキ	布目痕 (6×7/cm ²)	浅茶白色 浅茶白色	密 ○	1層	9

遺物観察表

表11 S D 1 出土遺物観察表 土製品 ②

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
24	甕	口径 (26.0) 残高 5.2	「く」字状の頸部。口縁端部は平らな面をなす。	マメツ	マメツ	にぶい 橙色 にぶい 橙色	石・長(1~5) 砂 ○	2層	
25	甕	口径 (22.0) 残高 4.9	内湾する口縁部。口縁端部は平らな面をなす。	マメツ	マメツ	橙色 にぶい 橙色	石・長(1~5) 砂 ○	2層	
26	甕	口径 (20.0) 残高 2.8	内湾する口縁部。口縁端部は平らな面をなす。小片。	マメツ	マメツ	橙色 橙色	石・長(1~5) 砂 ○	2層	
27	甕	口径 (21.2) 残高 2.5	外反する口縁部。端部はやや上方にのびる。小片。	マメツ	ヨコナデ	灰白色 黄灰色	長(1) ○	3層	
28	埴	残高 3.9 高台径 (13.2)	高台は底端部付近に付く。高台内端面はやや屈曲する。	回転ナデ	回転ナデ	橙色 にぶい 橙色	長(1) ○	3層	9
29	高杯	残高 7.0	脚裾部は緩やかに屈曲する。	ヨコナデ	マメツ	橙色 橙色	石・長(1~3) △	3層	
30	甕	口径 (20.8) 残高 2.8	外反する口縁部。小片。	マメツ	マメツ	にぶい 黄橙色 にぶい 黄色	石・長(1~2) ○	層不明	
31	甕	底径 (5.4) 残高 3.4	平底の底部である。	マメツ	マメツ	橙色 にぶい 橙色	石・長(1~5) 砂 ○	2層	
32	甕	底径 (5.8) 残高 3.1	平底の底部である。	ハケ	マメツ	橙色 橙色	石・長(1~5) ○	3層	
33	壺	頸部径 (17.2) 残高 7.1	頸部に指頭による貼付凸帯が施される。	ハケ (8本/cm)	ハラミガキ	橙色 橙色	石・長(1~4) 砂 ◎	層不明	9
34	壺	底径 (6.5) 残高 4.6	わずかに突出する平底の底部である。	マメツ	マメツ	橙色 褐灰色	石・長(1~4) ○	2層	
35	壺	底径 (10.0) 残高 3.1	平底の底部である。	マメツ	マメツ	にぶい 橙色 にぶい 橙色	石・長(1~4) 砂 ◎	3層	
36	壺	底径 (13.6) 残高 3.0	平底の底部である。	マメツ	マメツ	橙色 橙色	石(1~4) ○	3層	
37	壺	底径 (9.0) 残高 2.7	平底の底部より内湾気味に立ち上がる。小片。	マメツ	マメツ	にぶい 黄橙色 黒褐色	石(1~4) 砂 ◎	層不明	
38	鉢	口径 (32.4) 残高 2.1	東播系のこね鉢である。	回転ナデ	回転ナデ	灰黄色 灰黄色	蜜 ◎	1層	
39	埴	口径 14.9 器高 4.5 底径 4.5	瓦器埴である。	ナデ	ナデ	灰白色 灰白色	石・長(1~2) ○	1層	

表12 S D 1 出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)		
40	石 鎌	ほぼ完形	赤色チャート	2.82	1.58	0.53	1.87	1層	9
41	石 鎌	刃部欠損	サヌカイト	3.60	1.85	0.50	2.59	1層	9
42	剥片		赤色チャート	3.82	2.10	0.65	4.88	層不明	

表13 S D 1 出土遺物観察表 金属製品

番号	器種	残存	材質	色	法 量				備考	図版
					長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
43	鋤・鍬先	完形	鉄	茶褐色	7.7	10.8	0.8	176.7	鍛造層不明	9

表14 ピット出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		(外面) 色調 (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外 面	内 面				
44	土鍋	口径 (38.6) 残高 2.9	口縁部はやや外傾し、口縁端部がわずかに内側に肥厚する。	マメツ	マメツ	暗褐色 橙色	石・長(1~4) 金 ○	SP59	
45	土鍋	口径 (29.9) 残高 11.6	口縁部はやや内湾気味で、口縁端部が内側に肥厚し平坦にしている。	マメツ	マメツ	橙色 橙色	石・長(1~5) ○	SP67	

表15 地点不明出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		(外面) 色調 (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外 面	内 面				
46	坏	口径 (15.0) 器高 3.6 底径 (10.6)	平底の底部より口縁部はやや外反気味に立ち上がる。土師器。	マメツ	マメツ	浅黄色 浅黄色	細粒 △		
47	坏蓋	口径 (22.9) 残高 3.0	平らな天井部より下方に尖り気味な口縁端部をもつ。	ナデ	ナデ	灰色 灰色	密 ○		
48	碗	残高 1.6 底径 (8.0)	断面逆台形状の高台をもつ。	ナデ	施釉	灰色 灰色	密 ◎		

表16 1号周溝出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残存	材質	法 量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
49	石斧	刃部のみ	蛇文岩	(1.5)	(3.9)	(0.8)	(5.04)		8

遺構・遺物一覧 (河野史知)

法量欄 () : 復元推定値

形態・施文欄: 土器の各部位名称を略記

例) 天→天井部、口→口縁部、胴→胴部、頸→頸部。

胎土・焼成欄: 胎土欄では混和剤を略記した。

例) 砂→砂粒、長→長石、石→石英、金→金雲母、密→精製土。() 内の数値は混和剤粒子の大きさを示す。

例) 砂・長(1~4)多→「1~4mm大の砂粒・長石を多く含む」である。

焼成欄の略記について。 例) ◎→良好、○→良、△→不良。

第3章

く め たか ばたけ
久米高畑遺跡

27次調査地

第3章 久米高畑遺跡27次調査地

1. 調査の経過

(1) 調査に至る経過

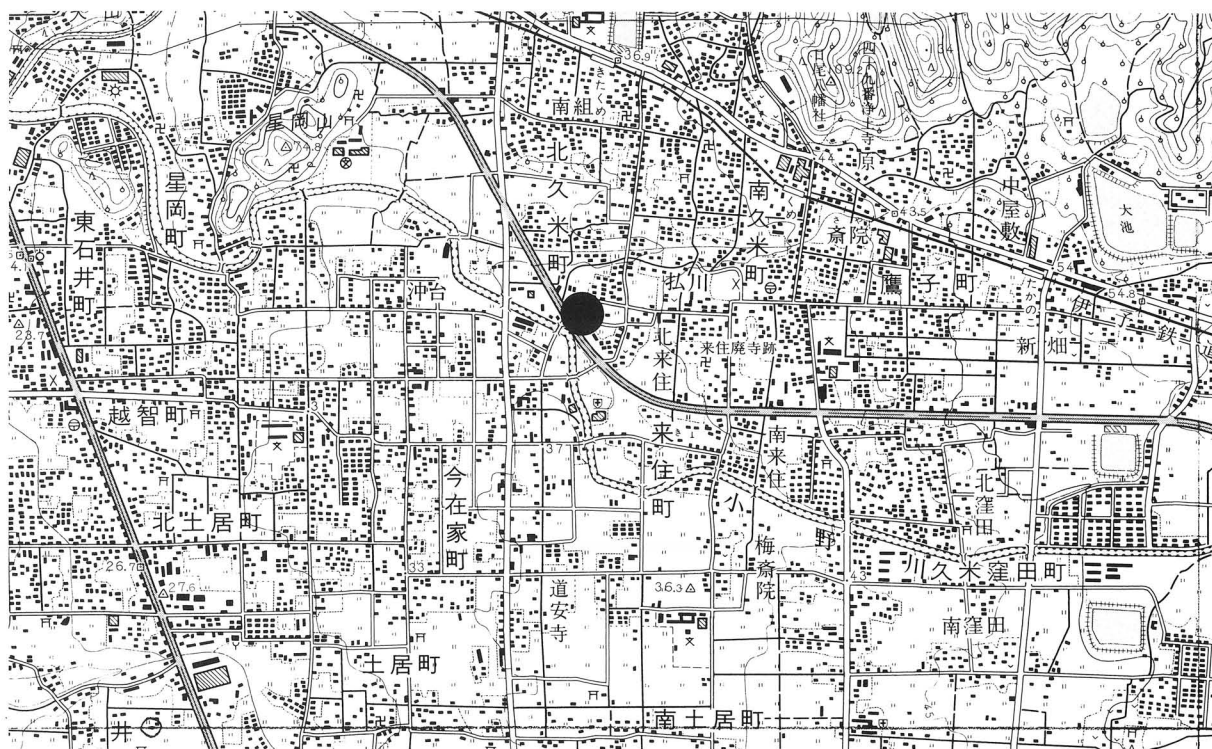
1996（平成8）年1月12日、片岡禎治氏より松山市来住町1145番地内における宅地開発にあたり、当該地の埋蔵文化財の確認願いが、松山市教育委員会文化教育課（以下、文化教育課）に提出された。申請地は、松山市の指定する埋蔵文化財包蔵地の「No.126高畑遺物包含地」内に隣接し、周知の遺跡として知られている。当地は松山城の南東約4km、洪積台地からなる来住舌状台地西南端に立地する。来住台地一帯は、来住廃寺を含め回廊状遺構や官衙関連遺構が確認されている。

調査地に南接する久米高畑遺跡5次調査地では、弥生時代の竪穴式住居址や土坑、古墳時代から古代の竪穴式住居址や掘立柱建物址、溝が検出され、当地一帯が弥生時代から古代まで継続的に集落地として利用されていたことがうかがえる。さらに、久米高畑遺跡10次調査地では、正倉院を囲む区画溝の一部が検出されている。

1996（平成8）年2月1日に、文化教育課は遺跡の範囲や性格を確認するため試掘調査を実施した。試掘調査では、竪穴式住居址や溝、土坑を検出したほか、須恵器、土師器が出土した。

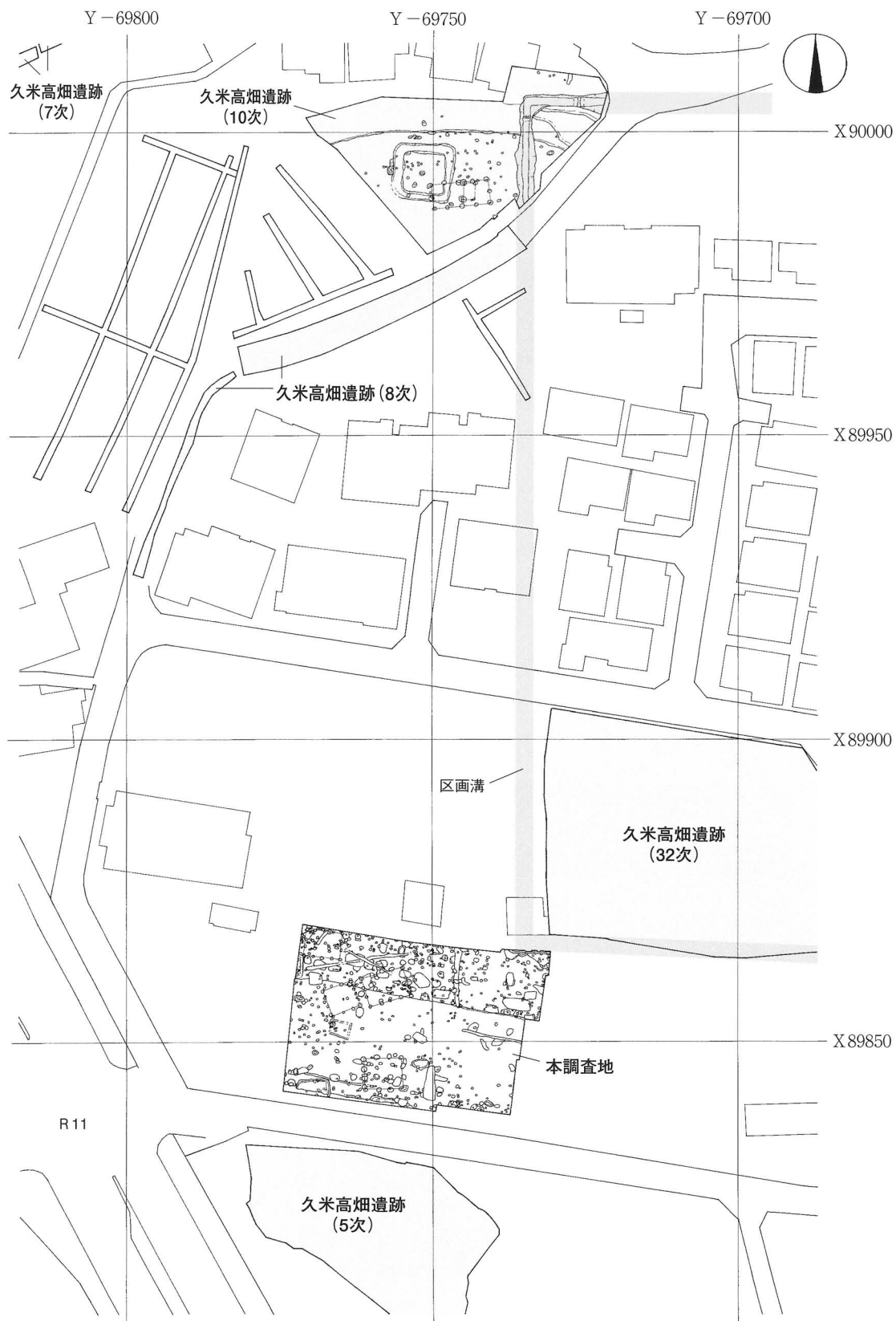
この結果を受け、申請者と文化教育課の二者は遺跡の取り扱いについて協議を行い、宅地開発により失われる遺構・遺物に対し、記録保存のため発掘調査を実施することとなった。

発掘調査は、来住台地の南西地域に展開する集落の広がり、正倉院を囲む区画溝の南西コーナー部分の確認を主目的とし、財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センターが主体となり、申請者の協力のもと、1996（平成8）年4月3日に本格調査を開始した。



第18図 調査地位置図（S = 1 : 25,000）

久米高畑遺跡27次調査地



第19図 調査地測量図 (S=1:1,000)

(2) 調査の経緯

1996(平成8)年4月3日より、重機にて表土剥ぎ取り作業を開始した。試掘調査の結果をもとに、土層を確認しながら掘り下げをし、地表下25～35cmの地点で遺構検出を行った。調査区は排土置場の都合により西半部・南東部・北東部に分けて順次調査を行った。以下、調査工程を略記する。

- 4月3日 西半部の調査を開始する。
- 4月10日 第Ⅵ層上面で竪穴式住居址、掘立柱建物址、溝、土坑、柱穴等の遺構を検出する。
- 4月15日 各遺構の掘り下げと測量を行う。
- 5月23日 高所作業車により完掘写真を撮影する。
- 5月27日 南東部の調査を開始する。
- 5月30日 区画溝、土坑等の遺構を検出する。
- 6月3日 各遺構の掘り下げを行う。
- 6月8日 一般市民を対象にした現地説明会を行う。
- 6月12日 北東部の調査を開始する。
- 6月14日 土坑、柱穴等の掘り下げを行う。
- 6月18日 愛媛大学より下條信行、松原弘宣両先生を招き、調査指導を乞う。
- 6月19日 土坑、柱穴等の掘り下げを行う。
- 7月4日 発掘機材、出土遺物を松山市立埋蔵文化財センターに運搬し、野外調査を終了する。

(3) 調査組織

調査地	松山市来住町1145番地
遺跡名	久米高畑遺跡27次調査地
調査期間	1996(平成8)年4月3日～同年7月4日
調査面積	1,335m ²
調査協力	片岡禎治氏・(株)拓昌
調査担当	宮内慎一・相原秀仁

2. 層位 (第22～25図・図版12)

調査地は、小野川右岸に開かれた来住舌状台地西南端の標高35.2～35.4mに立地する。調査以前は耕地整備された水田であった。調査区の中央やや北寄りには20～30cmの段差があり、調査地の北側と南側とで水田が二区画に分かれていた。調査対象面積は1,335m²である。

基本層位は第Ⅰ層表土、第Ⅱ層旧表土、第Ⅲ層灰褐色土、第Ⅳ層黒褐色土、第Ⅴ層暗褐色土、第Ⅵ層黄色土である。第Ⅰ層及びⅡ層は微弱な土質の差異により、第Ⅰ層は①～③の3層に、第Ⅱ層は①・②の2層に分層される。

第Ⅰ－①層：近現代の水田耕作土である。灰色土で調査区全域にみられ、地表下15～22cmまで開発が行われている。

－②層：水田耕作に伴う床土である。橙色土で調査区全域にみられ、厚さ2～12cmを測る。

－③層：調査区北東隅の用水路の敷石である。厚さ6～8cmを測る。

第Ⅱ－①層：旧水田耕作土である。オリーブ灰色土で調査区西部にみられ、厚さ4～14cmを測る。

—②層：旧水田床土である。橙色土で調査区西部にみられ、厚さ2～6cmを測る。

第Ⅲ層：調査区の南西部に堆積し、土師器片が数点出土している。層厚4～8cmを測る。

第Ⅳ層：調査区の南西部に堆積し、須恵器、土師器が数点出土している。層厚4～14cmを測る。

第Ⅴ層：調査区の北西部に堆積する。層厚4～8cmを測る。本層中からは弥生時代前期から後期の遺物が出土している。

第Ⅵ層：シルト質の土壌である。調査区の全域に堆積する。ただし、調査区の中央部と南西部で黄橙色土が斑点状に検出された箇所がある。本層上面は、調査における最終遺構検出面である。本層上面の標高を測量すると、調査区北東部が最も高く、南西部に向けて傾斜をなす（比高差50cm）。

遺構はすべて第Ⅵ層上面での検出である（第21図）。竪穴式住居址5棟、掘立柱建物址4棟、溝8条、土坑61基、ピット540基（掘立柱建物柱穴54基含む）、倒木址12基である。ただし、検出された遺構はその深さなどから判断すると、本来は第Ⅴ層以上の層から掘り込まれた可能性が高いものばかりである。

遺物は遺構内及び包含層中からの出土であり、弥生土器（前期末～後期）・須恵器・土師器（古墳時代後期～中世）・石製品である。出土遺物や検出遺構から判断すると、第Ⅴ層は弥生時代、第Ⅳ層は古墳時代後期、第Ⅲ層は中世までに堆積したものと考えられる。

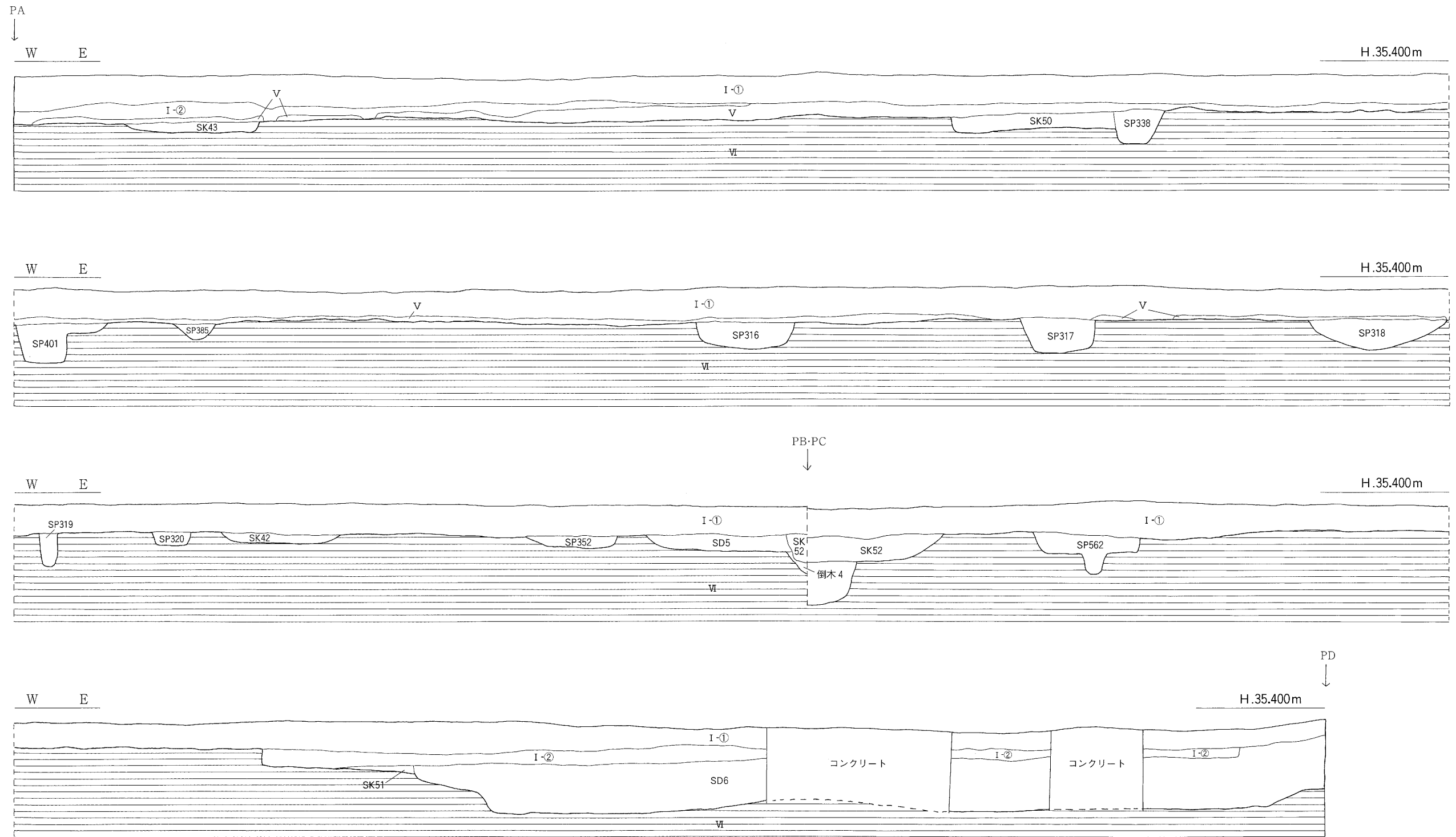
また、調査に先立ち、調査区内を4mグリッドに分けた。これは、国土座標第Ⅳ座標系に基づく地域割りに準ずるものである（第20図）。なお、第21図に土層図のポイント（PA～PH）を記載している。



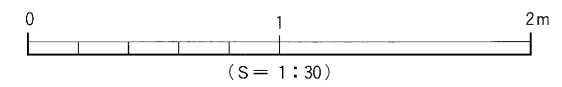
第20図 調査地区割図



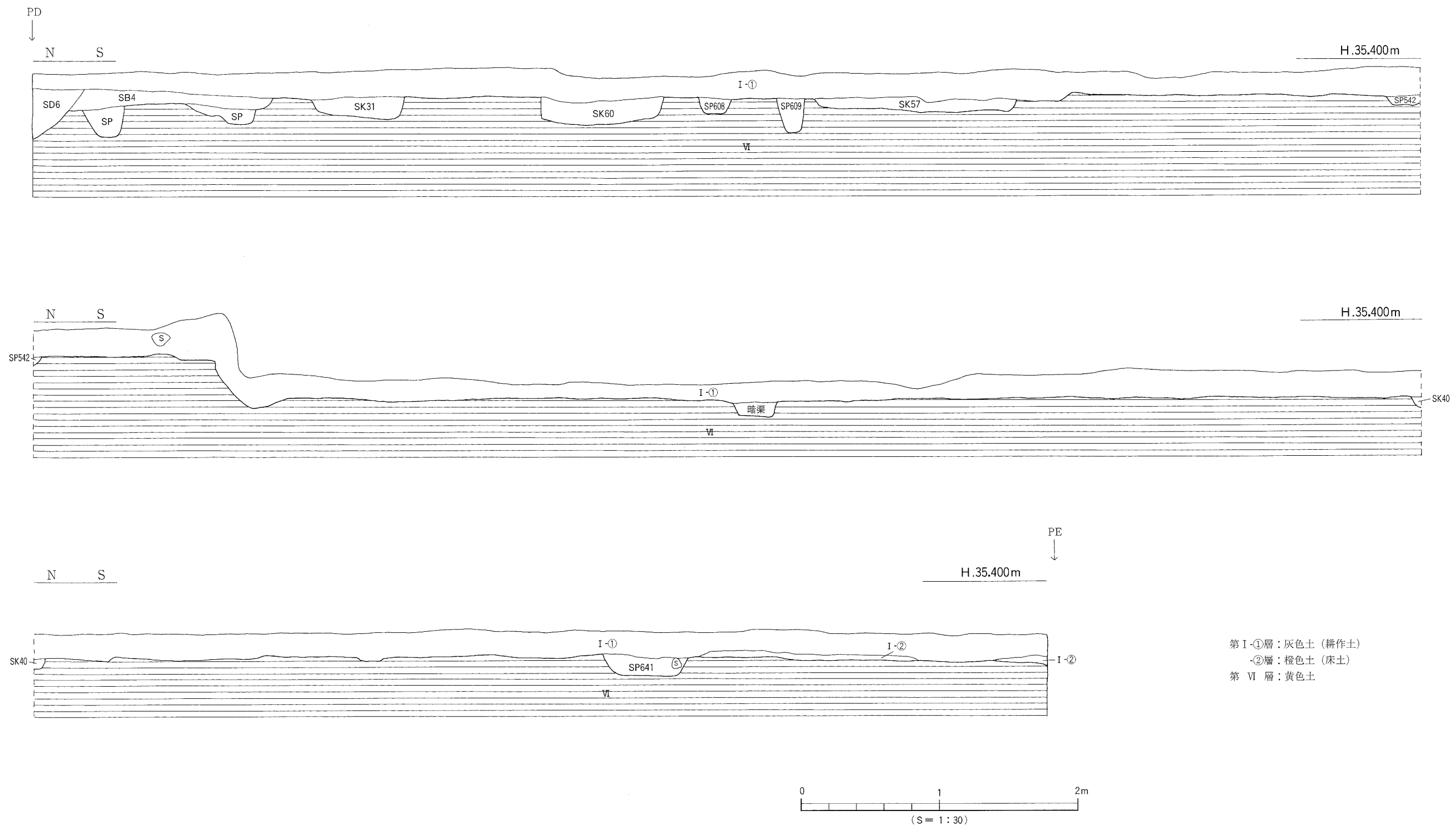
第21図 遺構配置図



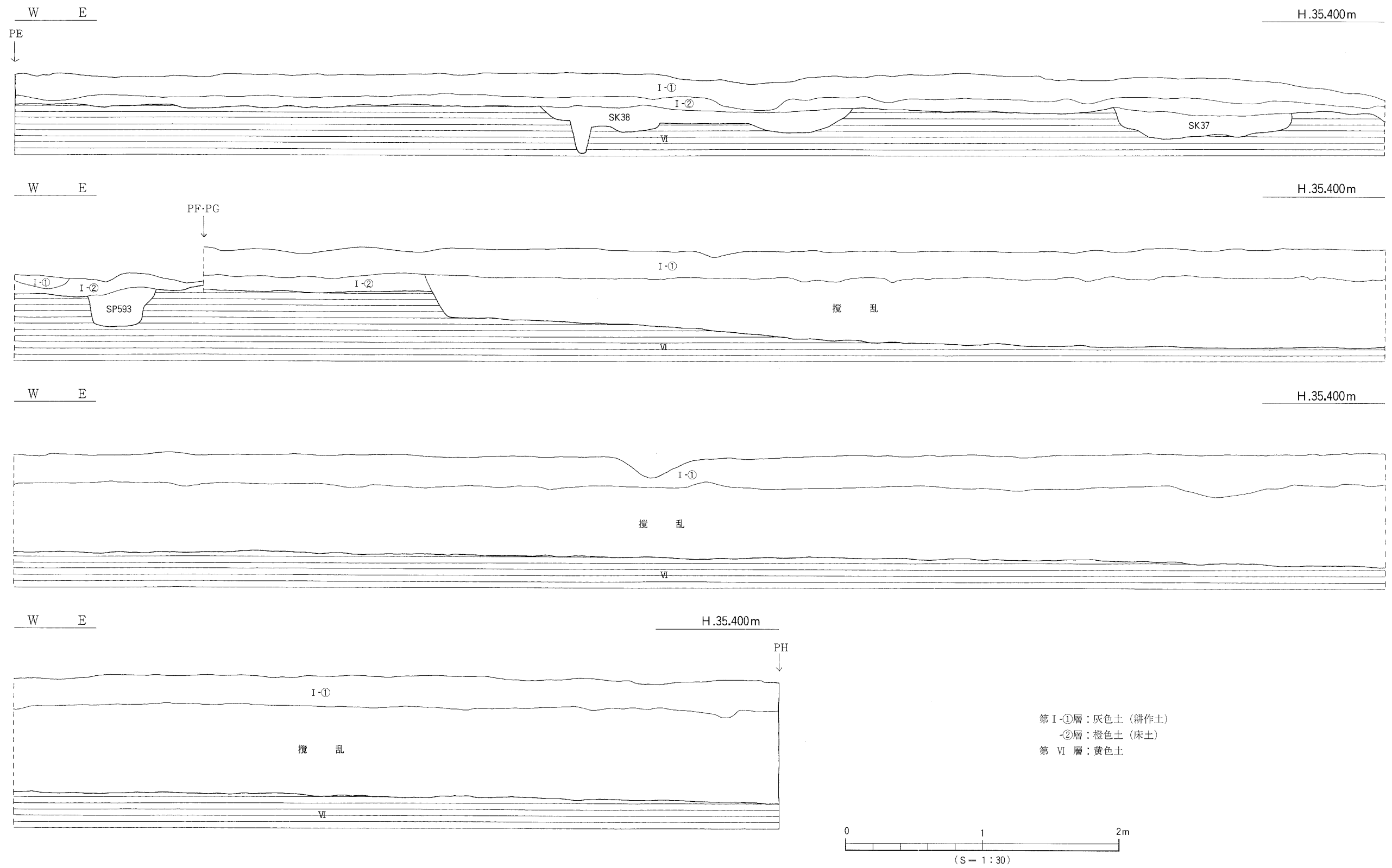
第 I-①層：灰色土（耕作土）
 ②層：橙色土（床土）
 第 V 層：暗褐色土
 第 VI 層：黄色土



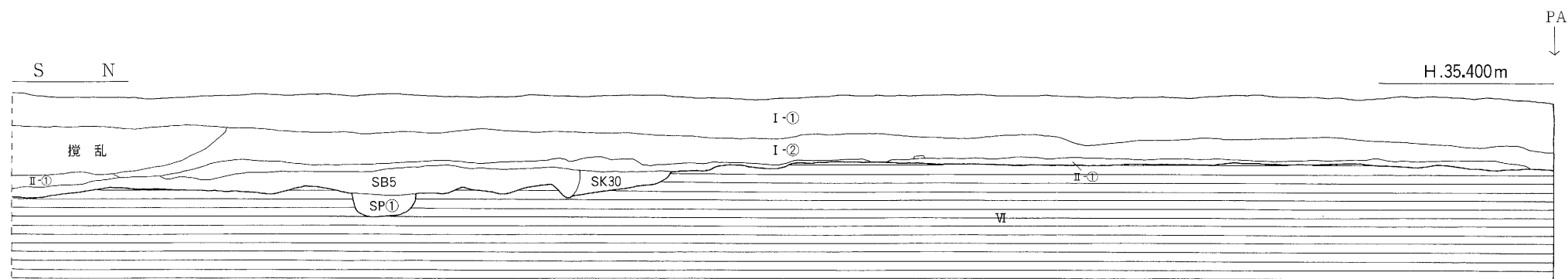
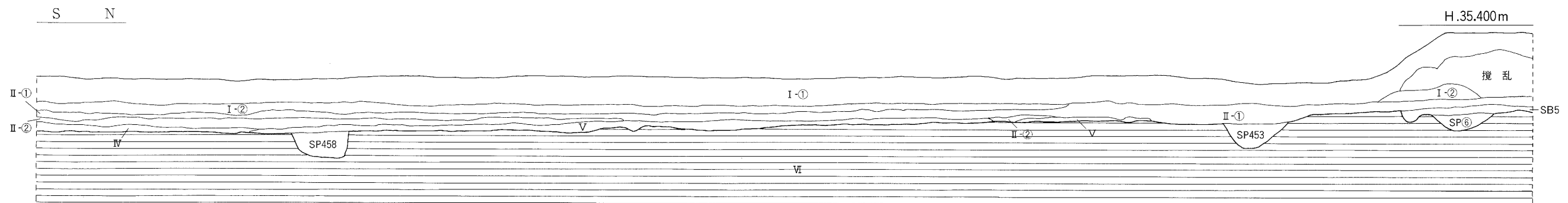
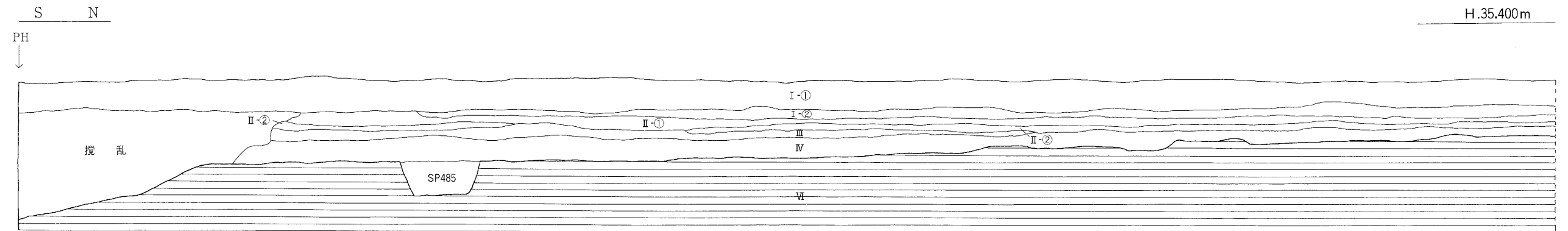
第22図 北壁土層図



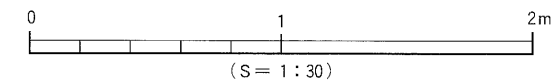
第23図 東壁土層図



第24図 南壁土層図



- 第 I-①層：灰色土（耕作土）
- ②層：橙色土（床土）
- 第 II-①層：オリーブ灰色土（旧耕作土）
- ②層：橙色土（旧床土）
- 第 III 層：灰褐色土
- 第 IV 層：黒褐色土
- 第 V 層：暗褐色土
- 第 VI 層：黄色土



第25図 西壁土層図

3. 弥生時代の遺構と遺物

弥生時代の遺構は竪穴式住居址2棟、溝1条、土坑32基である。

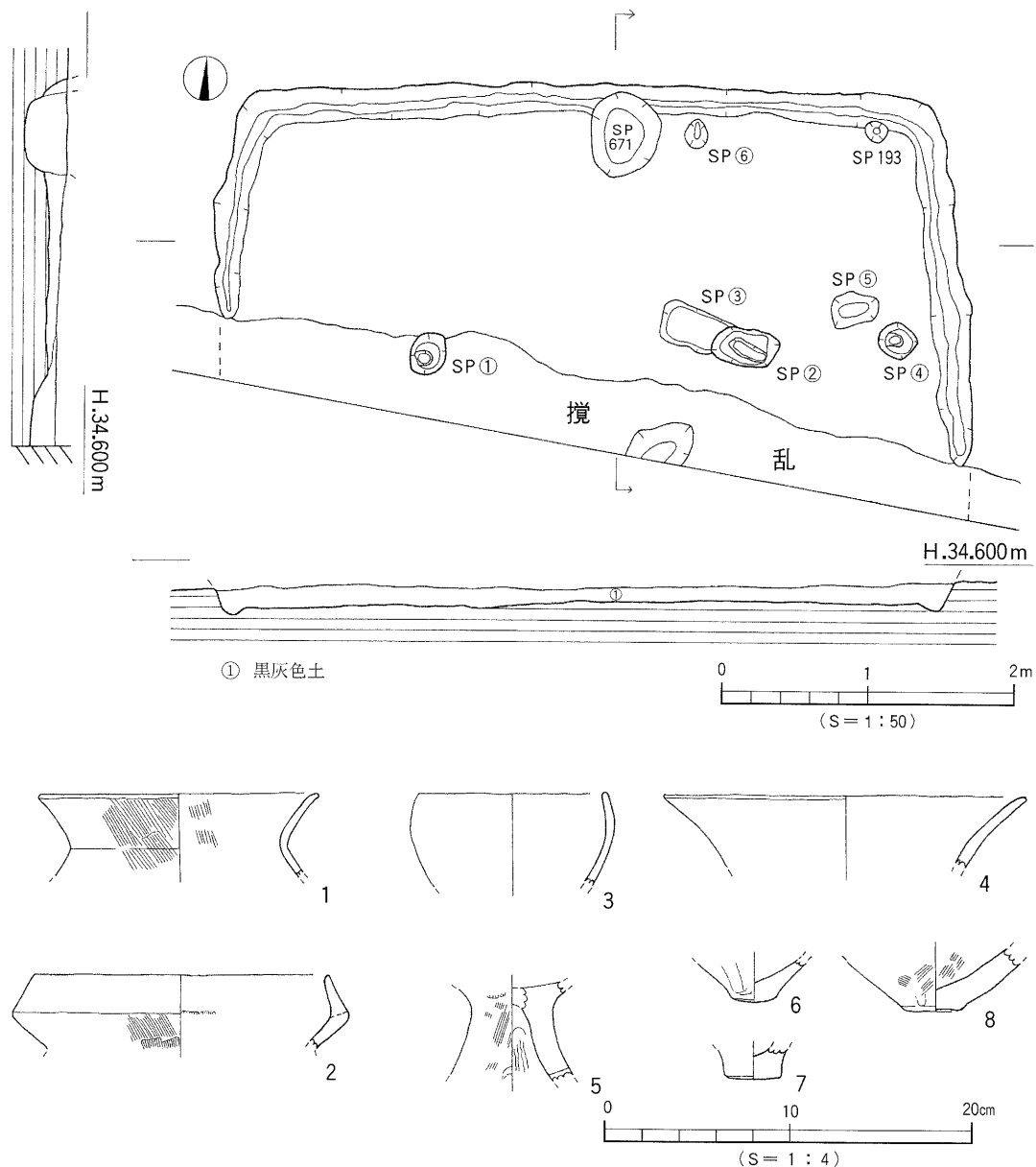
(1) 竪穴式住居址

本調査にて弥生時代の竪穴式住居址2棟（SB1・3）を検出した。

SB1（第26図、図版13）

調査区南西部、H1・2区に位置する。住居址の南半部は攪乱、北壁中央部はSP671に切られる。

平面形態は方形もしくは長方形を呈するものと考えられ、規模は東西長5.06m、南北検出長2.04m、壁高26cmを測る。埋土は黒灰色土の単層である。床面はほぼ平坦である。内部施設は支柱穴、周壁溝を検出した。支柱穴はSP①・②の2基を検出したが、その配置から本来は4本と考えられる。柱穴間隔は2.2mを測る。各柱穴の平面形態は円～楕円形を呈し、規模は径25～46cm、深さ37～42cmを測る。



第26図 SB1 測量図・出土遺物実測図

掘り方埋土は黒灰色土単層である。周壁溝は全周し、規模は幅18～28cm、深さ10cmを測る。埋土は黒褐色土の単層である。床面にて大小6基のピットを検出したが、本住居に伴うものかは不明である。遺物は埋土中にて、弥生土器片が散在して出土した。

出土遺物（第26図）

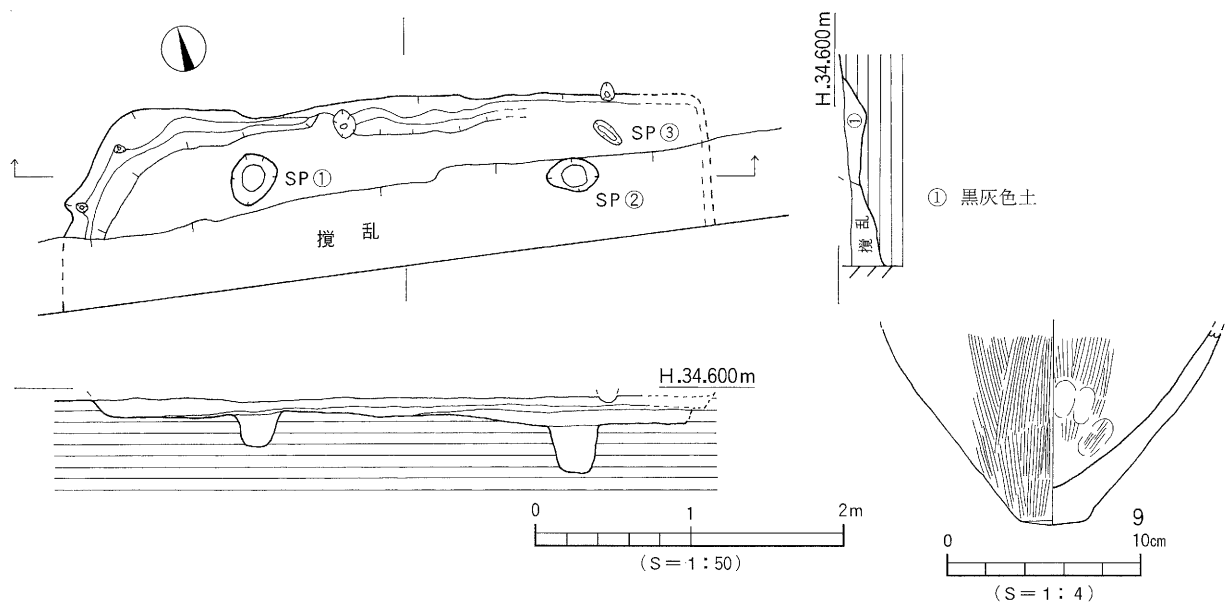
1は甕形土器の口縁部片である。「く」の字状口縁を呈し、内外面共に細かな刷毛目調整を施す。口縁端部は曖昧な面をもつ。2は複合口縁壺の口縁部片である。口縁拡張部は内傾して立ち上がる。口縁端部は丸い。3は鉢形土器の口縁部片である。直口口縁を呈するもので、口縁部は内湾しながら立ち上がる。口縁端部は丸い。4は高坏形土器の口縁部片である。緩やかに外反する口縁端部は丸い。5は高坏形土器の脚部片である。径9mm大の孔を穿つ（焼成前穿孔）。6は甕形土器の底部で、突出する平底である。7は壺形土器、8は鉢形土器の底部である。7は立ち上がりをもつ平底で、8は平底の中央部分が僅かに凹むものである。

時期：出土した遺物が、弥生時代後期後半の特徴を示している。よって、SB1の廃棄・埋没時期も弥生時代後期後半とする。

SB3（第27図）

調査地南部、H4～I5区に位置する。住居址の南半部は攪乱により削平され、東側はSK59・SP72と重複する。平面形態は隅丸方形もしくは長方形を呈するものと考えられ、規模は東西検出長4.0m、南北検出長0.59m、深さ18cmを測る。埋土は黒灰色土の単層である。内部施設は支柱穴と周壁溝を検出した。支柱穴はSP①・②の2本を検出したが、その配置から本来は4本と考えられる。柱穴間隔は2.1mを測る。各柱穴の平面形態は円～楕円形を呈し、規模は30～34cm、深さ24～32cmを測る。埋土は黒灰色土の単層である。周壁溝は一部途切れる箇所がある。規模は幅15～30cm、深さ4cmを測る。床面にて2基の小ピットを検出したが、本住居に伴うものかは不明である。

遺物は埋土中から弥生土器片が少量出土した。図化しうるものを1点掲載した。



第27図 SB3測量図・出土遺物実測図

出土遺物 (第27図)

9は壺形土器の底部片である。丸みをおびる平底で、胴部から底部にかけて内外面共に刷毛目調整を施す。

時期：出土した遺物が僅少で、時期特定はしかねるが、埋土がSB1と酷似することや出土遺物の特徴から、SB1とはほぼ同時期の住居址と考えられる。よって、SB3の廃棄・埋没時期は弥生時代後期後半とする。

(2) 溝

本調査にて、弥生時代の溝1条を検出した。

SD4 (第28図)

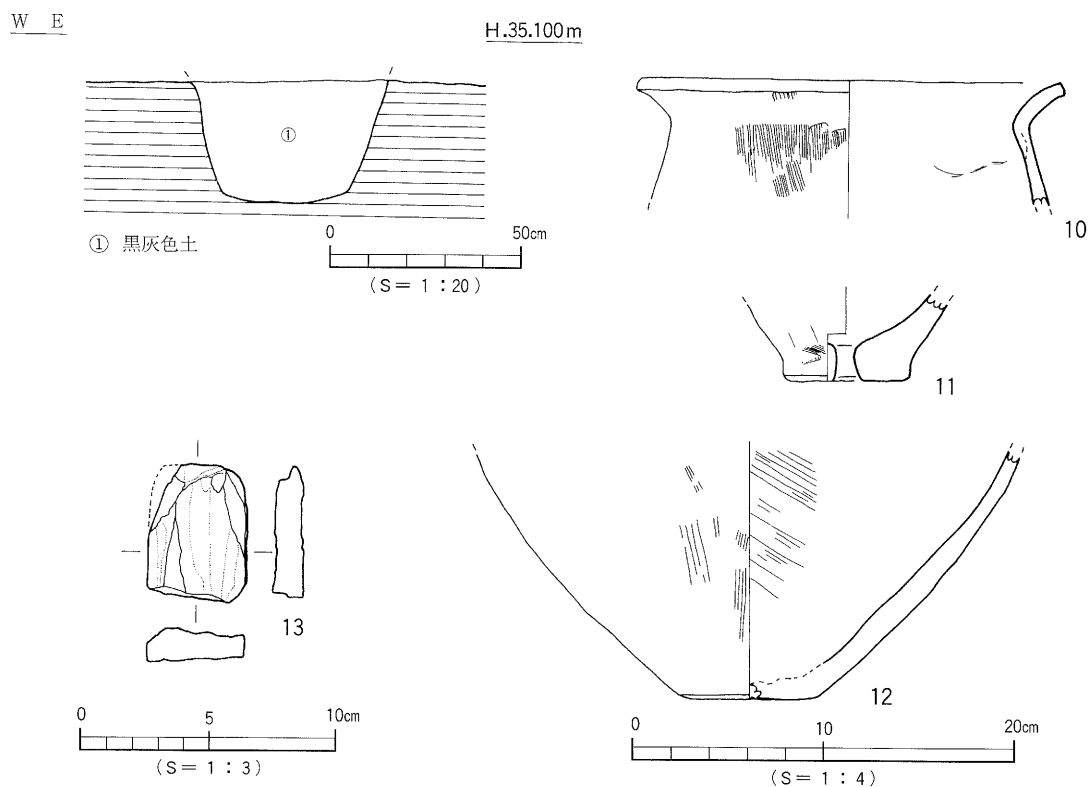
調査区北西部、A3～B2区に位置し、北壁の手前で消失する。掘立4柱穴(SP③)に切られる。規模は長さ3.20m、幅0.51m、深さ35cmを測る。断面形態は「U」字状を呈する。埋土は黒灰色土の単層である。溝底は、北から南に向けて傾斜をなす(比高差33cm)。

遺物は、埋土中から弥生土器片と石器が少量出土した。

出土遺物 (第28図)

10は甕形土器の口縁部片である。「く」の字状口縁を呈し、口縁端部は「コ」字状に仕上げる。胴部外面に刷毛目調整を施す。11は所謂コシキ形土器である。壺形土器の転用品で、径9mm大の孔を穿つ(焼成後穿孔)。12は壺形土器の底部である。13は用途不明品の石器である。材質は緑色片岩(淡緑色)である。重量46.297g。

時期：出土した遺物が弥生時代後期前半の特徴を示している。よって、SD4の埋没時期は弥生時代後期前半とする。



第28図 SD4断面図・出土遺物実測図

(3) 土 坑

本調査において、検出された弥生時代の土坑は32基である。前期末～中期初頭の土坑が22基、中期が8基、後期が2基である。

1) 前 期 弥生時代前期末～中期初頭に時期比定される土坑は22基である。

S K 3 (第29図)

調査区南西部、H 1 区に位置する。遺構南西隅はS P 475・476に切られる。平面形態は不整長方形を呈し、規模は長さ1.20m、幅1.00m、深さ15cmを測る。断面形態は皿状を呈し、埋土は黒灰色土の単層である。基底面はほぼ平坦である。

遺物は埋土中より弥生土器片が少量出土した。

出土遺物 (第29図)

14・15は壺形土器である。14は口縁部内面に貼り付け凸帯文3条をもつ。15は頸部片で、ヘラ描き沈線文1条を施す。16は甕形土器の底部片で、やや上げ底となる。

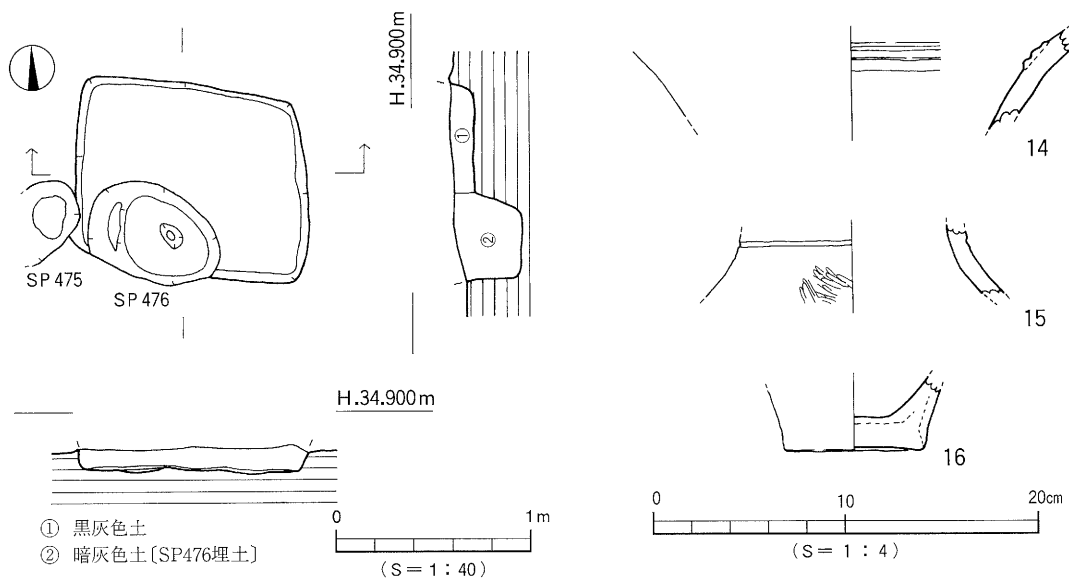
S K 5 (第30図)

調査区南西部、G・H 3 区に位置し、S D 1 に切られる。平面形態は不整楕円形を呈し、規模は長径1.40m、短径1.10m、深さ16cmを測る。断面形態は逆台形状を呈し、埋土は黒灰色土の単層である。基底面はほぼ平坦であるが、西側が僅かに高くなっている。基底面にて径25cmの小ピット1基(S P ①)を検出したが、本土坑に伴うものかは判断できなかった。

遺物は、弥生土器片が埋土上位にて少量出土した。

出土遺物 (第30図、図版16)

17は甕形土器で、口縁部は折り曲げにより成形する。口縁端面に刻目を施す。18は高坏形土器の脚部片である。上げ底で、脚基部に貼り付け凸帯文1条をもつ。19は甕形土器、20は壺形土器の底部片で、平底となる。



第29図 S K 3 測量図・出土遺物実測図

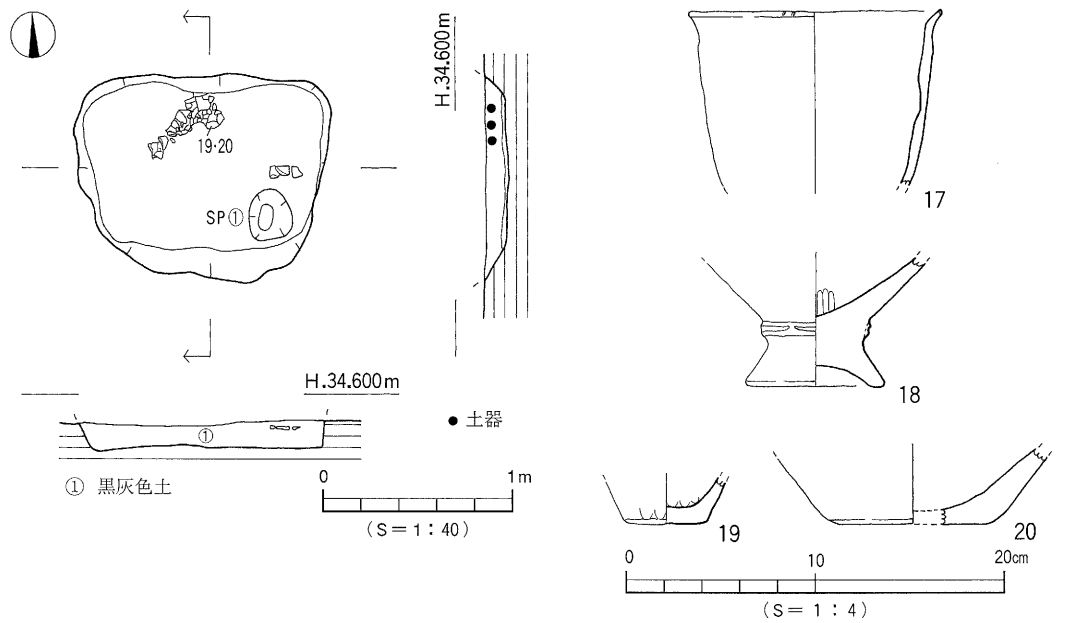
SK 9 (第31図)

調査区北部、C 7 区に位置する。平面形態は不整円形を呈し、規模は径0.95～1.00 m、深さ12 cmを測る。断面形態は皿状を呈し、埋土は黒灰色土の単層である。基底面はほぼ平坦であるが、中央部が僅かに高くなっている。基底面にて径15～33 cmの小ピット2基 (SP①・②) を検出した。そのうち、SP①は埋土が土坑埋土と同様であることから本土坑に伴うものと考えられる。

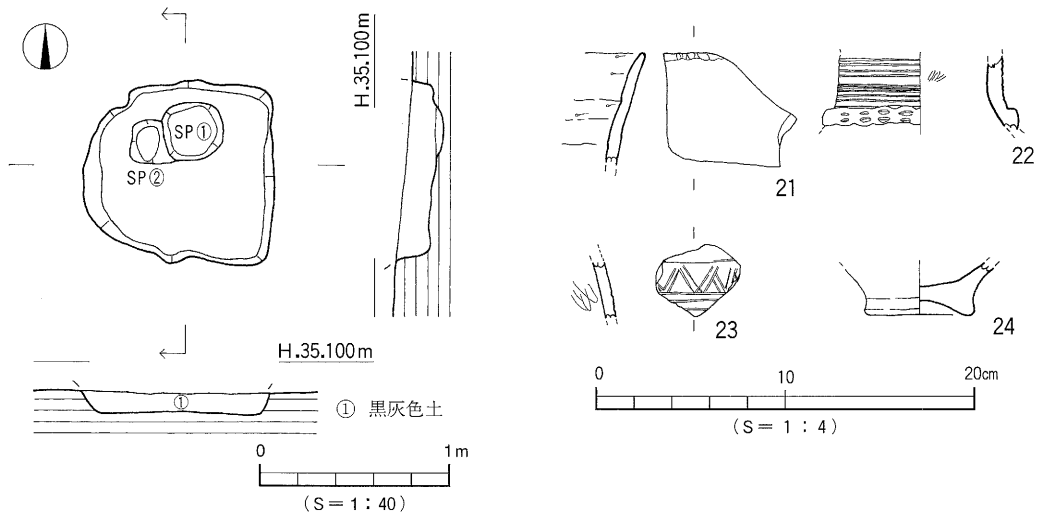
遺物は埋土中より、縄文土器片と弥生土器片が少量出土した。

出土遺物 (第31図、図版16)

21は縄文時代晩期の深鉢の口縁部片で、口縁端部に刻目を施す。22～24は壺形土器である。22は頸部片で、2条1組の工具による沈線文10条と連鎖状凸帯(刺突文2列)を貼り付ける。23は山形文2条(2条1組)を施す。24は上げ底を呈する底部である。



第30図 SK 5 測量図・出土遺物実測図



第31図 SK 9 測量図・出土遺物実測図

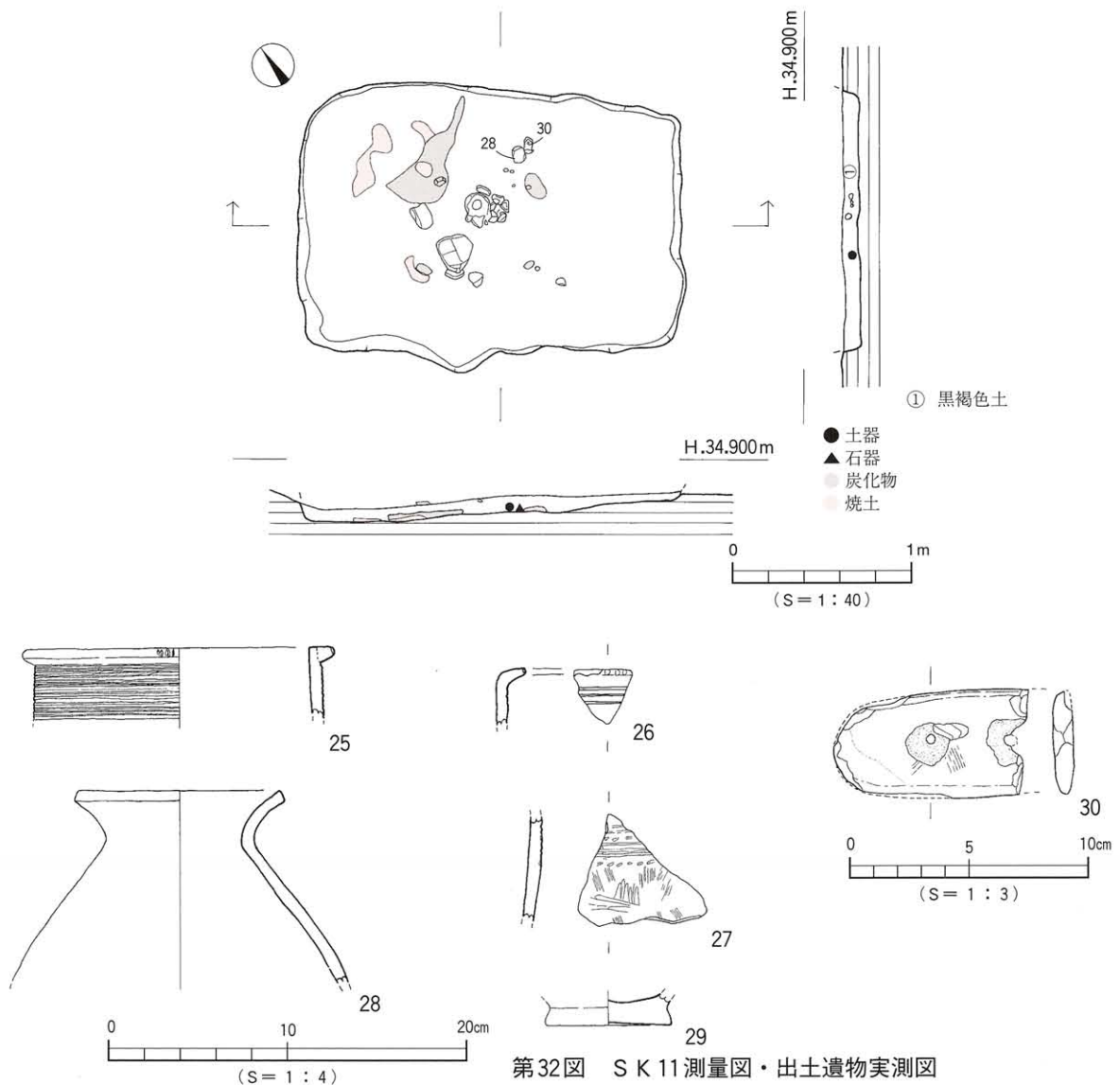
S K 11 (第32図、図版14)

調査区中央部、E・F6区に位置し、倒木址5を切る。平面形態は長方形を呈し、規模は長さ2.15m、幅1.60m、深さ18cmを測る。断面形態は皿状を呈し、埋土は黒褐色土の単層である。基底面は東側が高くなる。基底面付近にて、焼土と炭化材(炭化物)を検出したが、基底面に焼けた痕跡は確認されなかった。樹種同定の結果、炭化材はコナラ属アカガシ亜属と同定された。また、放射線炭素年代測定の結果、紀元前190年という結果が得られた。

遺物は弥生土器片と石庖丁片が、土坑中央部に集中して出土した。

出土遺物(第32図)

25~27は甕形土器である。25は貼り付けにより口縁部を成形する。口縁端面に刻目を施す。胴部外面には、クシ描き沈線文13条以上を施す。26は折り曲げにより口縁部を成形する。口縁端面に刻目を施す。胴部にヘラ描き沈線文3条を施す。27は胴部片で、沈線文と刺突文を施す。29は壺形土器の底部で、中央部が僅かに凹む。30は緑色片岩製の磨製石庖丁である。鏝は弱く丸みをもつ。両面から敲打した後、回転穿孔にて孔を穿つ。重量53.646g。



第32図 S K 11測量図・出土遺物実測図

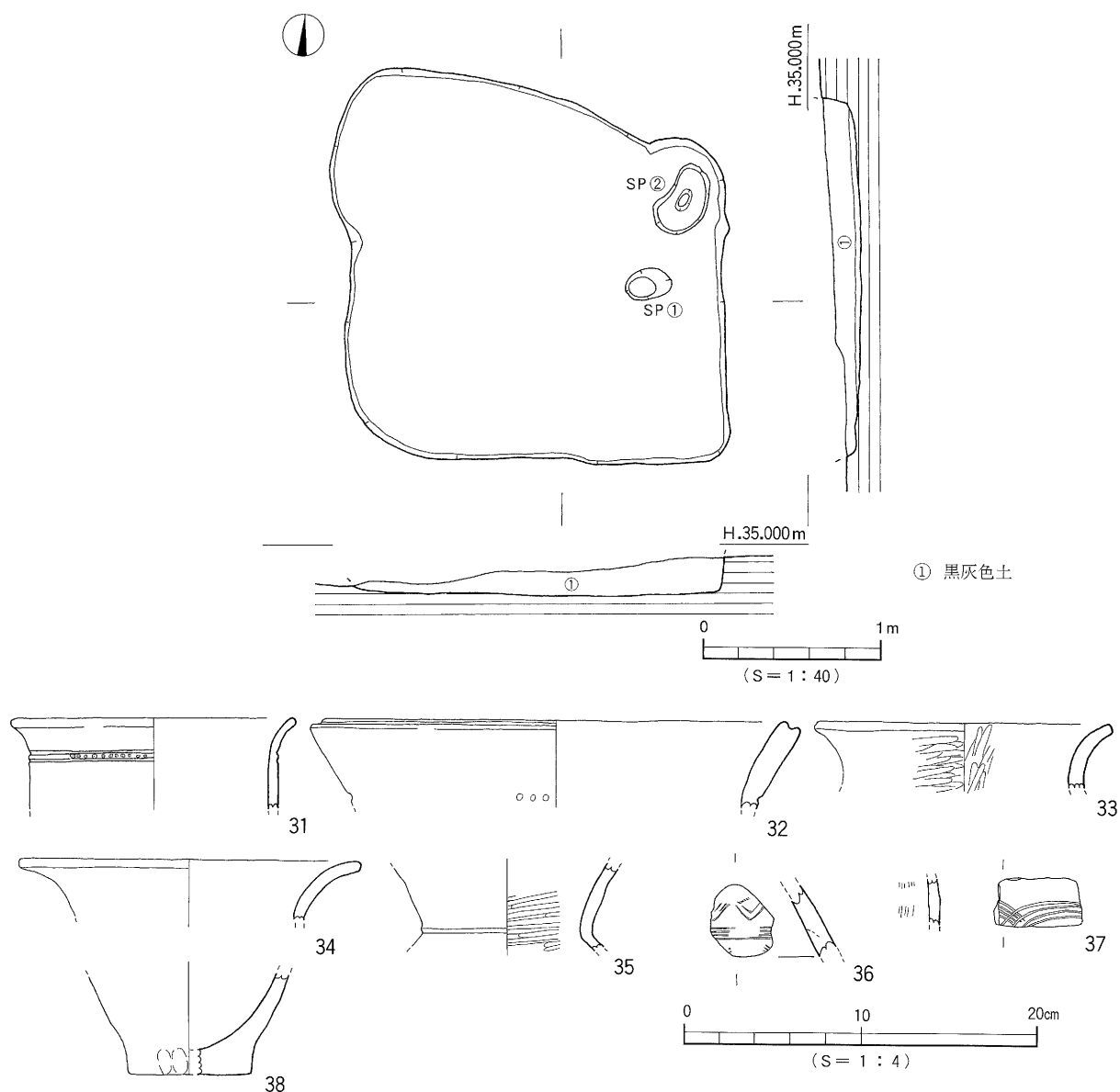
S K 13 (第33図)

調査区西部、C・D 2区に位置する。平面形態は不整形を呈し、規模は、一辺2.10m、深さ33cmを測る。断面形態は皿状を呈し、埋土は黒灰色土単層である。基底面はほぼ平坦である。検出時は切り合いが判明せず、土坑1基として掘り下げを行ったが、土坑2基が重複している可能性がある。基底面にて2基のピット (SP①・②) を検出したが、本土坑に伴うものかは不明である。

遺物は、埋土中から弥生土器片が少量出土した。

出土遺物 (第33図)

31は甕形土器である。折り曲げにより口縁部を成形する。ヘラ描き沈線文2条と刺突文1条を施す。32～37は壺形土器である。32は口縁部が直線的に上方に延びる。口縁端部は「コ」字状を呈し、口縁端面にヘラ描き沈線文1条、頸部に刺突文1列を施す。33・34は口縁部が外反する。35は口縁部が外傾し上方に延びる。頸部にヘラ描き沈線文1条を施す。36・37は壺形土器の胴部片で、36は2条1組の工具による沈線文4条と弧文3条、37は弧文4条 (2条1組) を施す。38は甕形土器の底部で平底となる。



第33図 S K 13測量図・出土遺物実測図

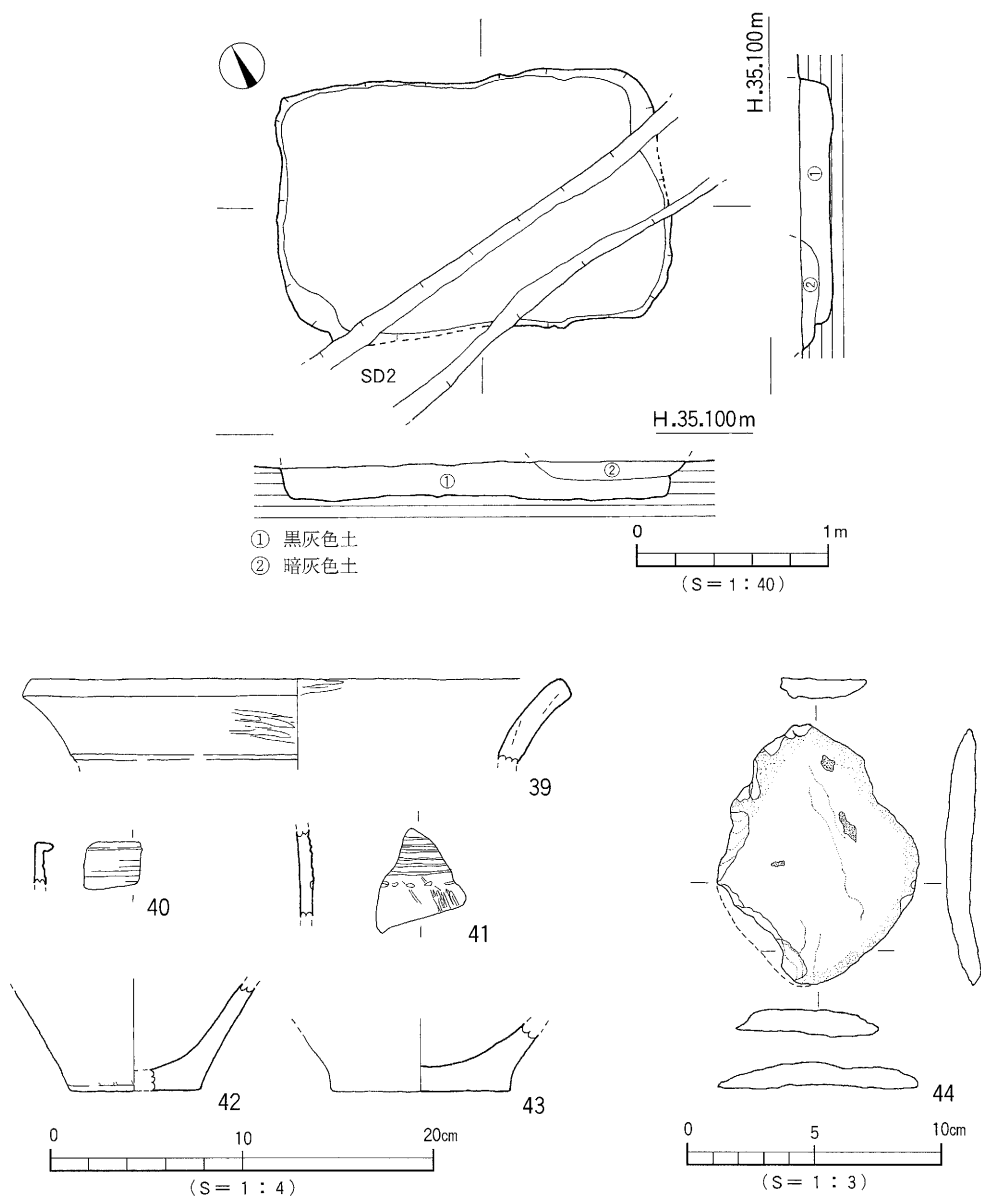
S K 14 (第34図)

調査区北西部、B・C 2区に位置し、古墳時代の溝SD2に切られる。平面形態は長方形を呈し、規模は長さ2.00m、幅1.30m、深さ19cmを測る。長軸方向は北西-南東にとる。断面形態は皿状を呈し、埋土は黒灰色土の単層である。基底面はほぼ平坦であるが、中央部が僅かに高くなっている。

遺物は、埋土中にて弥生土器片と石器片が少量出土した。

出土遺物 (第34図)

39は壺形土器の口縁部片である。口縁部は外反し、頸部外面に段をもつ。40・41は甕形土器である。40は折り曲げにより口縁部を成形する。ヘラ描き沈線文3条を施す。41は胴部片で、沈線文と刺突文を施す。42は甕形土器、43は壺形土器の底部で、平底となる。44は大型粗製刃器である。刃部、背部は外湾し、三角形状を呈し、刃部にのみ部分的に研磨が施される。材質は淡灰緑色系の安山岩である。重量102.379g。



第34図 S K 14測量図・出土遺物実測図

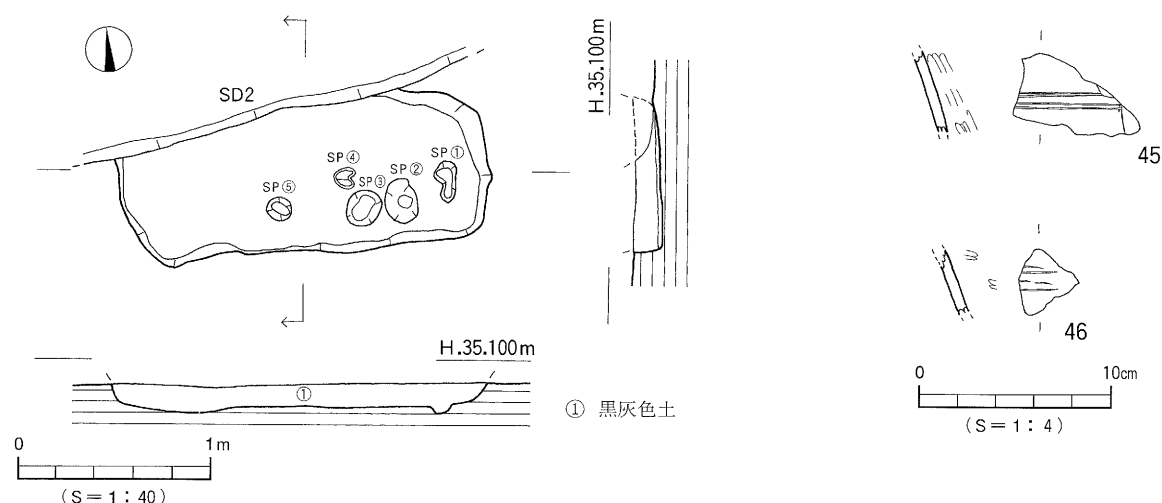
S K 16 (第35図)

調査区北西部、C 3 区に位置し、古墳時代の溝 S D 2 に切られる。平面形態は長方形を呈し、規模は長さ 1.95 m、幅 0.90 m、深さ 15 cm を測る。長軸方向はほぼ真北に直交する。断面形態は皿状を呈し、埋土は黒灰色土の単層である。基底面はほぼ平坦であるが、中央部が僅かに高くなっている。基底面にて径 12 ~ 20 cm の小ピット 5 基 (S P ① ~ ⑤) を検出した。そのうち、S P ① は埋土が土坑埋土と同様であることから、本土坑に伴うものと考えられる。他の 4 基のピットは伴うかは不明である。

遺物は埋土上位にて、弥生土器片が少量出土した。

出土遺物 (第35図)

45・46 は壺形土器の肩部片である。45 は 2 条 1 組の工具による沈線文 4 条を施す。46 は沈線文 4 条を施す。



第35図 S K 16 測量図・出土遺物実測図

S K 18 (第36図)

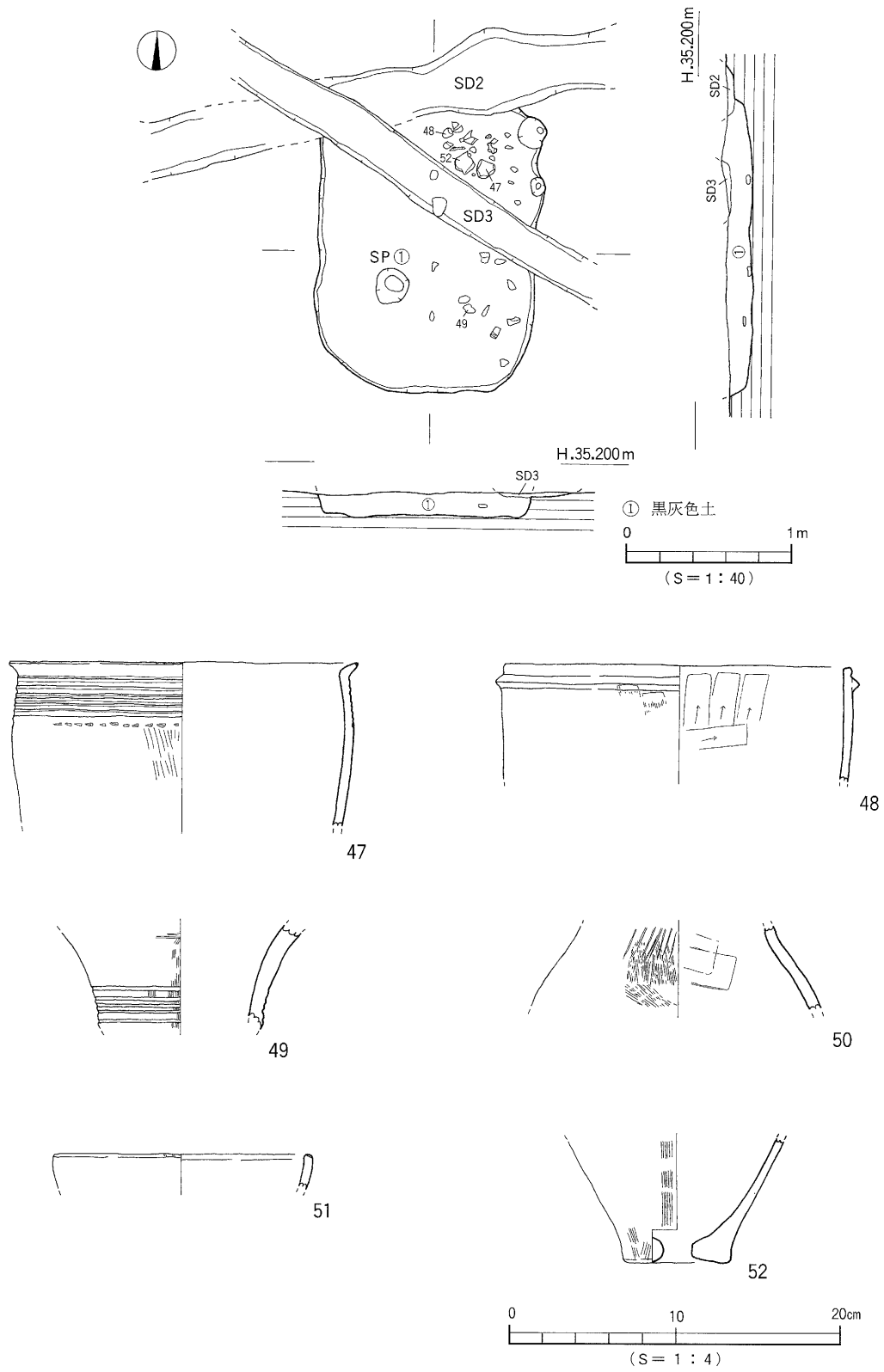
調査区北西部、C 4 区に位置する。溝 S D 2・3 及び大小 2 基のピットに切られる。平面形態は長方形を呈し、規模は長軸検出長 1.73 m、短軸 1.30 m、深さ 18 cm を測る。長軸方向は真北にとる。断面形態は逆台形状を呈し、埋土は黒灰色土の単層である。基底面はほぼ平坦であるが、中央部が僅かに高くなっている。基底面にて径 10 ~ 20 cm の小ピット 1 基 (S P ①) を検出したが、本土坑に伴うものかは判断できなかった。

遺物は埋土中及び基底面付近にて、弥生土器片が出土した。

出土遺物 (第36図、図版16)

47・48 は甕形土器の口縁部片である。47 は折り曲げにより口縁部を成形し、口縁端面に刻目を施す。胴部に沈線文 7 条 (2 条 1 組) と刺突文 1 列を施す。48 は口縁部下に断面三角形の凸帯 1 条を貼り付ける。胴部内面に板状工具によるナデが看取される。49・50 は壺形土器である。49 は頸部片で、ヘラ描き沈線文 5 条を施す。50 は胴部片で、胴部上位にヘラ描き沈線文 7 条を施す。51 は鉢形土器の口縁部片である。直口口縁を呈し、口縁端面に刻目を施す。52 は所謂コシキ形土器である。甕形土器の転用品で、径 8 × 14 mm の孔を穿つ (焼成後穿孔)。

久米高畑遺跡27次調査地



第36図 SK 18測量図・出土遺物実測図

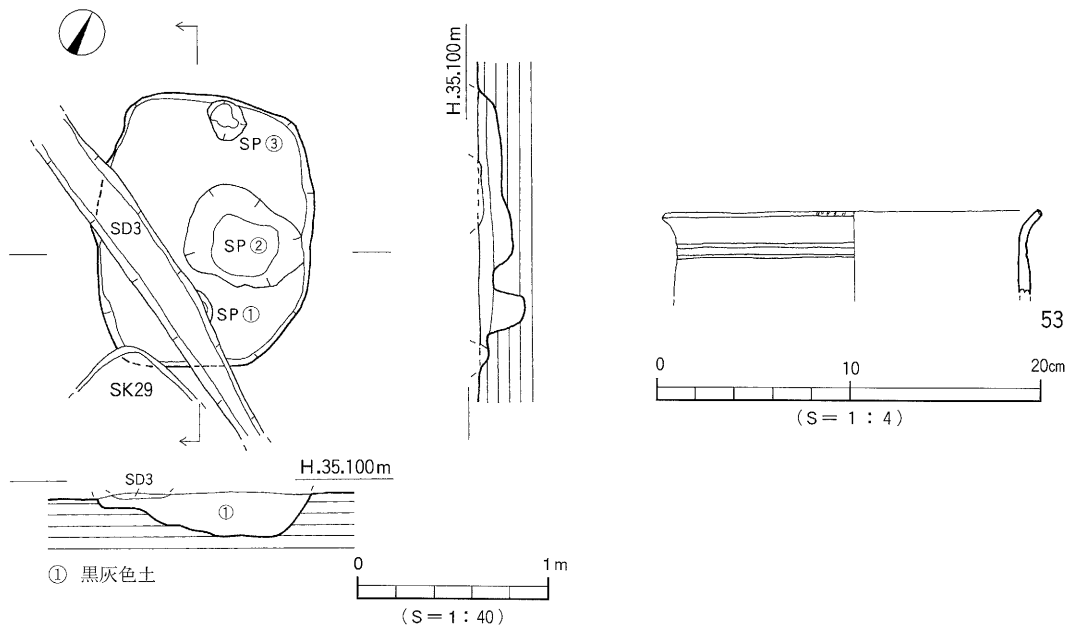
S K 19 (第37図)

調査区北部、C4・5区に位置する。S K 29及び、S D 3に切られ、S K 21を切る。平面形態は長方形を呈し、規模は長さ1.45m、幅1.10m、深さ24cmを測る。長軸方向は北東-南西にとる。断面形態はレンズ状を呈し、埋土は黒灰色土の単層である。基底面にて径18~60cmの小ピット3基(S P ①~③)を検出した。そのうち、S P ①・②は埋土が土坑埋土に類似することから、本土坑に伴うものと考えられる。S P ③は伴うかどうかは不明である。

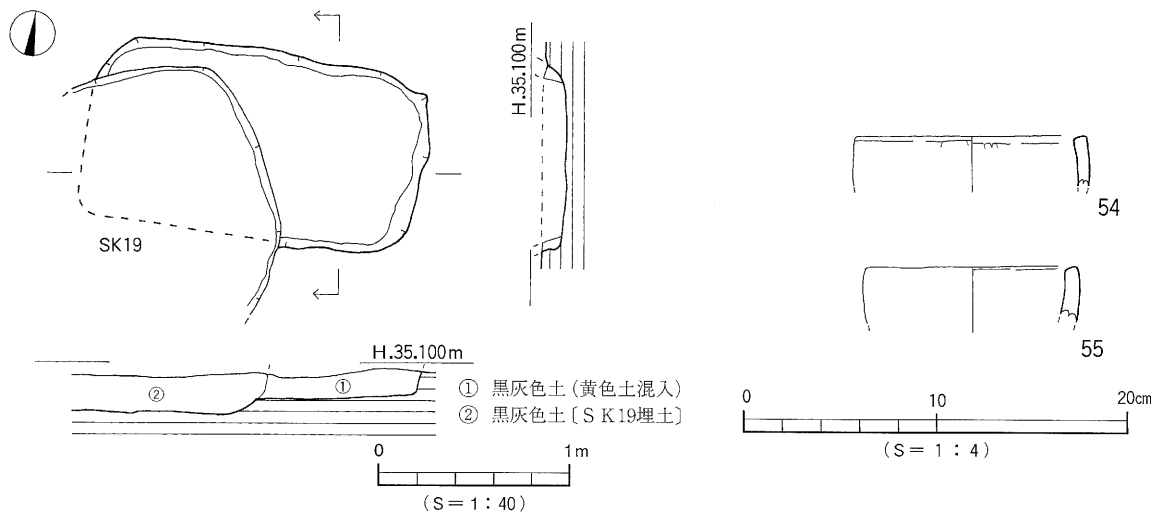
遺物は弥生土器片が、埋土中にて少量出土した。

出土遺物 (第37図)

53は甕形土器の口縁部である。折り曲げにより口縁部を成形し、口縁端面に刻目を施す。胴部外面にヘラ描き沈線文2条を施す。



第37図 S K 19測量図・出土遺物実測図



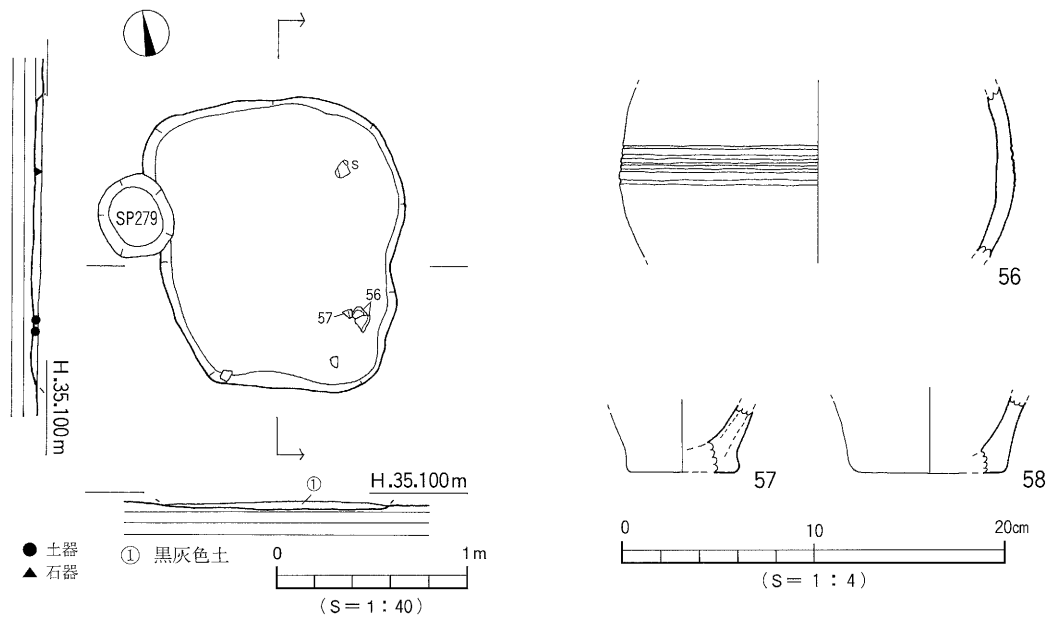
第38図 S K 21測量図・出土遺物実測図

S K 21 (第38図)

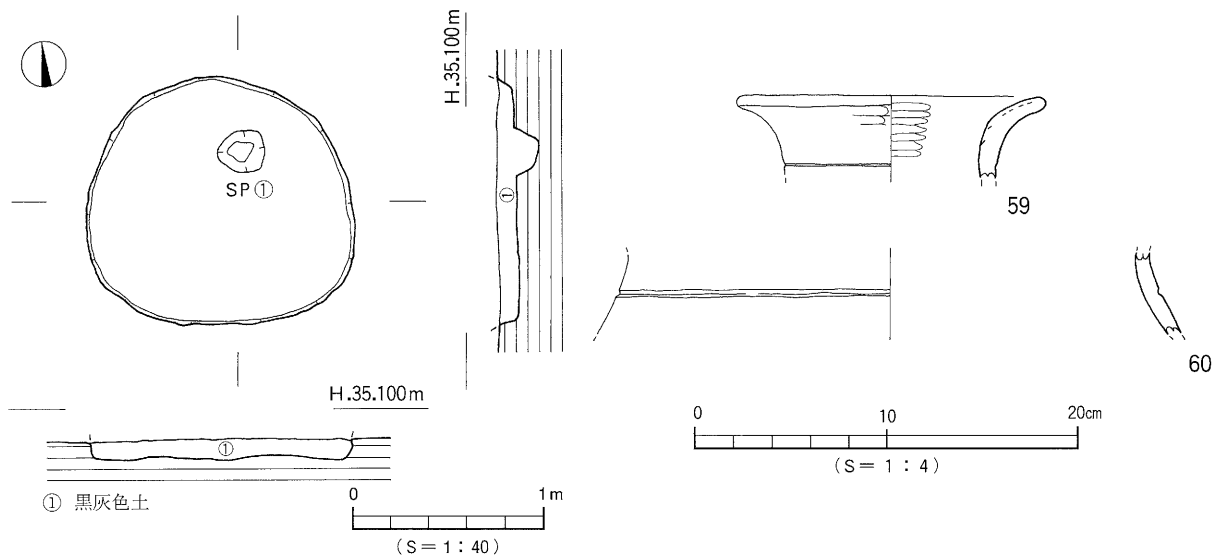
調査区北部、C4・5区に位置し、S K 19に切られる。平面形態は長方形を呈し、規模は長さ1.75 m、幅0.96 m、深さ18 cmを測る。長軸方向は真北に直交する。断面形態は皿状を呈し、埋土は黒灰色土(黄色土混入)である。基底面はほぼ平坦である。遺物は埋土中にて弥生土器片が少量出土した。

出土遺物 (第38図)

54・55は鉢形土器の口縁部片である。直口口縁を呈し、口縁部はやや内湾しながら立ち上がる。口縁端部は内傾する。



第39図 S K 25測量図・出土遺物実測図



第40図 S K 27測量図・出土遺物実測図

S K 25 (第39図)

調査区北西部、B 5 区に位置し、S P 279 に切られる。平面形態は不整形を呈し、規模は長軸 1.50 m、短軸 1.20 m、深さ 6 cm を測る。断面形態は皿状を呈し、埋土は黒灰色土の単層である。基底面はほぼ平坦である。遺物は埋土中にて弥生土器片が少量出土した。

出土遺物 (第39図)

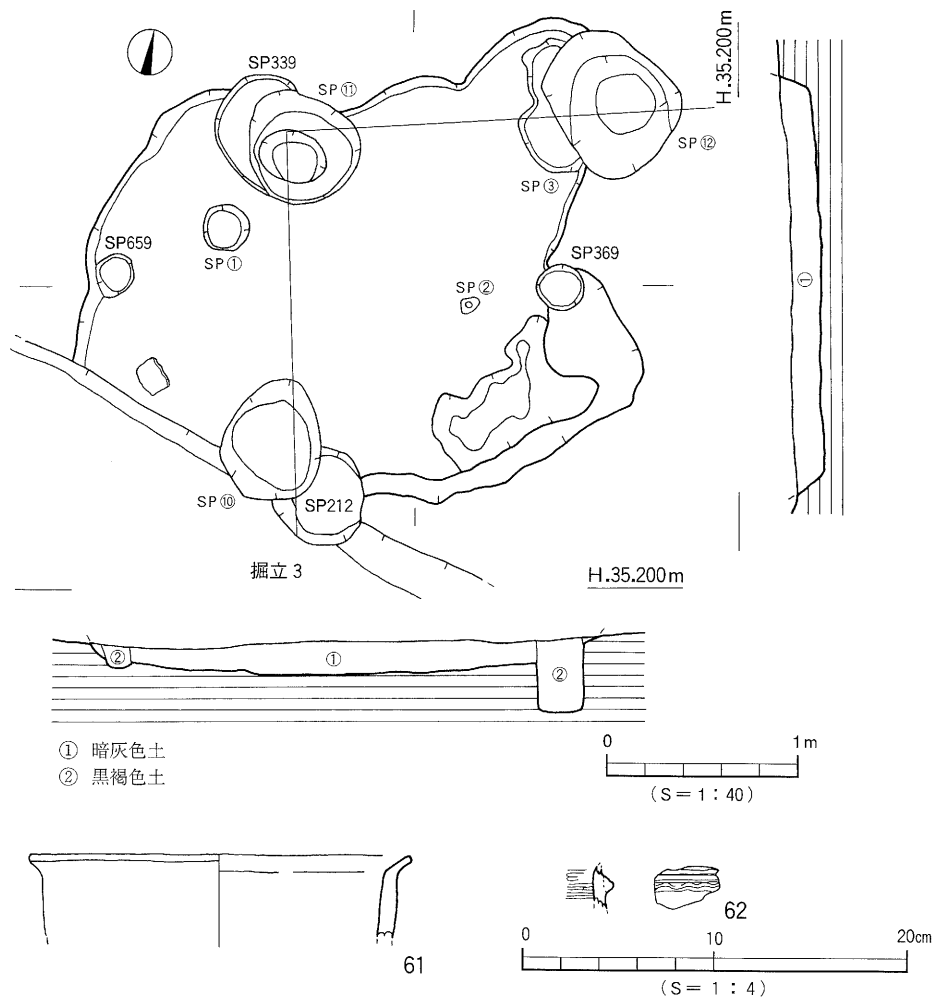
56 は壺形土器の胴部片である。扁球形の胴部で、胴部中位に沈線文 5 条を施す。57 は壺形土器、58 は甕形土器の底部片で平底となる。

S K 27 (第40図)

調査区北西部、B・C 2 区に位置する。平面形態は円形を呈し、規模は径 1.40 m、深さ 12 cm を測る。断面形態は皿状を呈し、埋土は黒灰色土の単層である。基底面はほぼ平坦である。基底面にてピット 1 基 (S P ①) を検出した。S P ① は埋土が土坑埋土と酷似することから、本土坑に伴うものと考えられる。遺物は埋土中から、弥生土器片が少量出土した。

出土遺物 (第40図)

59・60 は壺形土器である。59 の口縁部は外反し、頸部にヘラ描き沈線文 1 条を施す。内外面共に、丁寧な横方向のヘラミガキ調整を施す。60 は頸部片で、ヘラ描き沈線文 1 条を施す。



第41図 S K 32 測量図・出土遺物実測図

S K 32 (第41図)

調査区中央部、C・D 4区に位置する。掘立3 (SP⑩・⑪・⑫)及び大小4基のピットに切られる。平面形態は不定形を呈し、規模は長軸検出長2.90m、短軸2.20m、深さ23cmを測る。断面形態は皿状を呈し、埋土は暗灰色土の単層である。基底面はほぼ平坦である。基底面にて径10~25cmのピット3基 (SP①~③)を検出したが、本土坑に伴うものかは判断できなかった。

遺物は埋土中より弥生土器片が少量出土した。

出土遺物 (第41図)

61・62は甕形土器の口縁部片である。61は折り曲げにより口縁部を成形する。62は口縁部下に断面三角形の凸帯を貼り付けし、凸帯上にヘラ描き沈線文2条を施す。

S K 36 (第42図)

調査区中央部、C・D 5区に位置する。平面形態は不整長方形を呈し、規模は長さ1.25m、幅0.40m、深さ12cmを測る。断面形態は皿状を呈し、埋土は黒灰色土の単層である。基底面はほぼ平坦である。

遺物は、埋土上位から弥生土器片が少量出土した。

出土遺物 (第42図)

63は甕形土器の胴部片で、ヘラ描き沈線文4条以上を施す。64は壺形土器の底部で、平底となる。

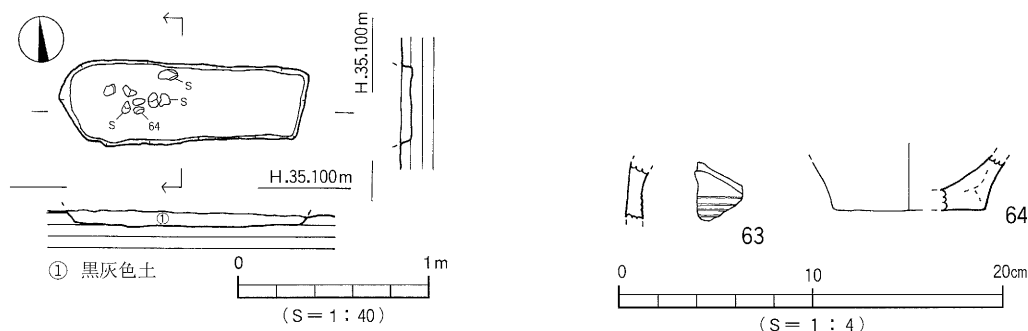
S K 41 (第43図)

調査区北東部、C 11区に位置し、古墳時代の竪穴式住居址S B 4に切られる。平面形態は不整円形を呈するものと考えられ、規模は径1.50m、深さ49cmを測る。断面形態は逆台形状を呈し、埋土は黒灰色土の単層である。基底面は中央部がややくぼむ。

遺物は埋土中から、弥生土器片と石器片が少量出土した。

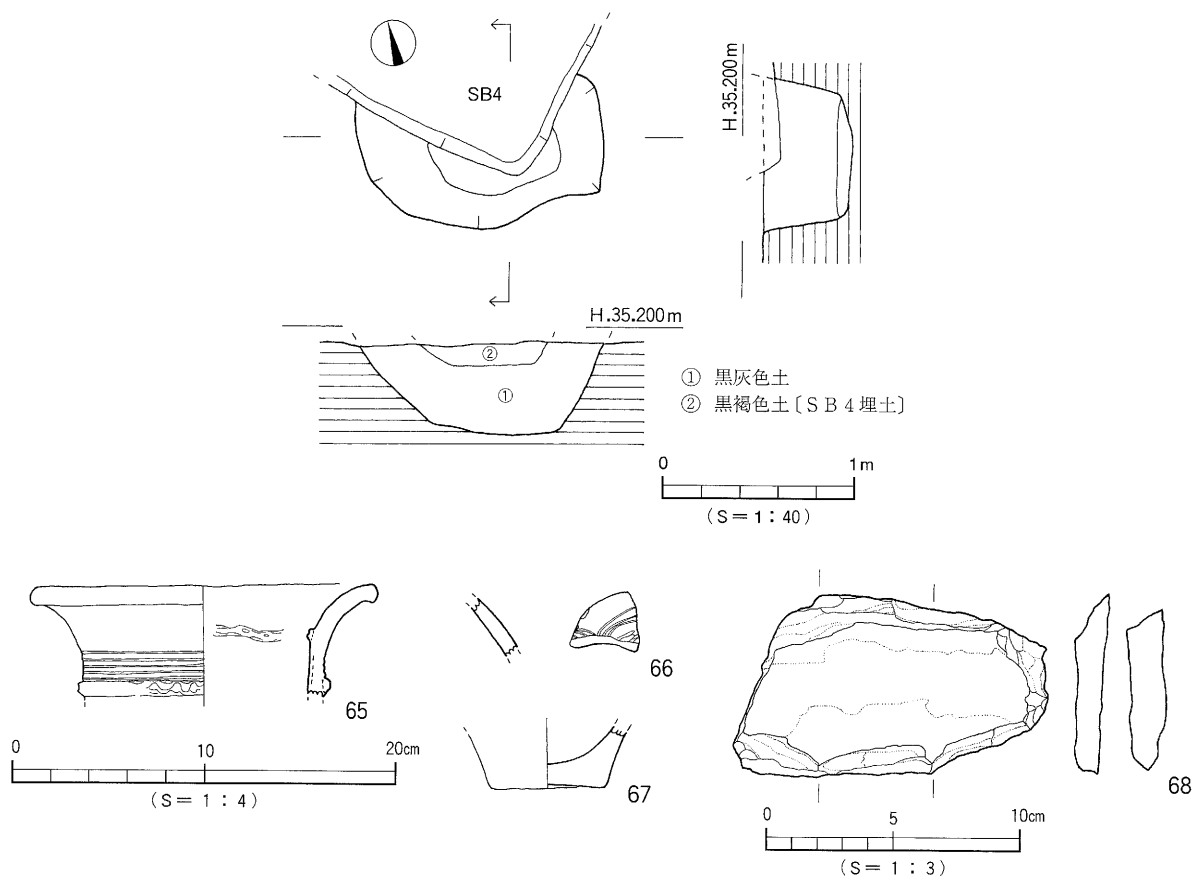
出土遺物 (第43図、図版16)

65は壺形土器の口縁部片である。口縁部は外反し、頸部内外面に断面三角形の貼り付け凸帯を施し、凸帯上に押圧文を施す。66は壺形土器の肩部片で、ヘラ描き弧文3条を施す。67は甕形土器の底部で、僅かに上げ底となる。68は板状の石器素材である。緑色片岩製。重量176.547g。

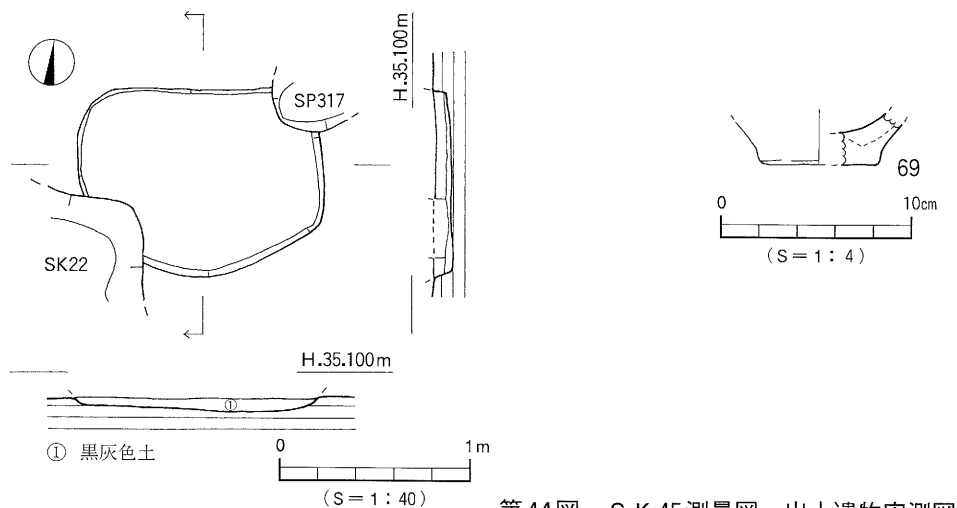


第42図 S K 36測量図・出土遺物実測図

弥生時代の遺構と遺物



第43図 SK 41 測量図・出土遺物実測図



第44図 SK 45 測量図・出土遺物実測図

SK 45 (第44図)

調査区北部、B5・6区に位置し、SK 22及びSP 317に切られている。平面形態は不整楕円形を呈し、規模は長径1.30m、短径1.00m、深さ13cmを測る。断面形態は皿状を呈し、埋土は黒灰色土単層である。基底面はほぼ平坦であるが、西側が僅かに高くなっている。

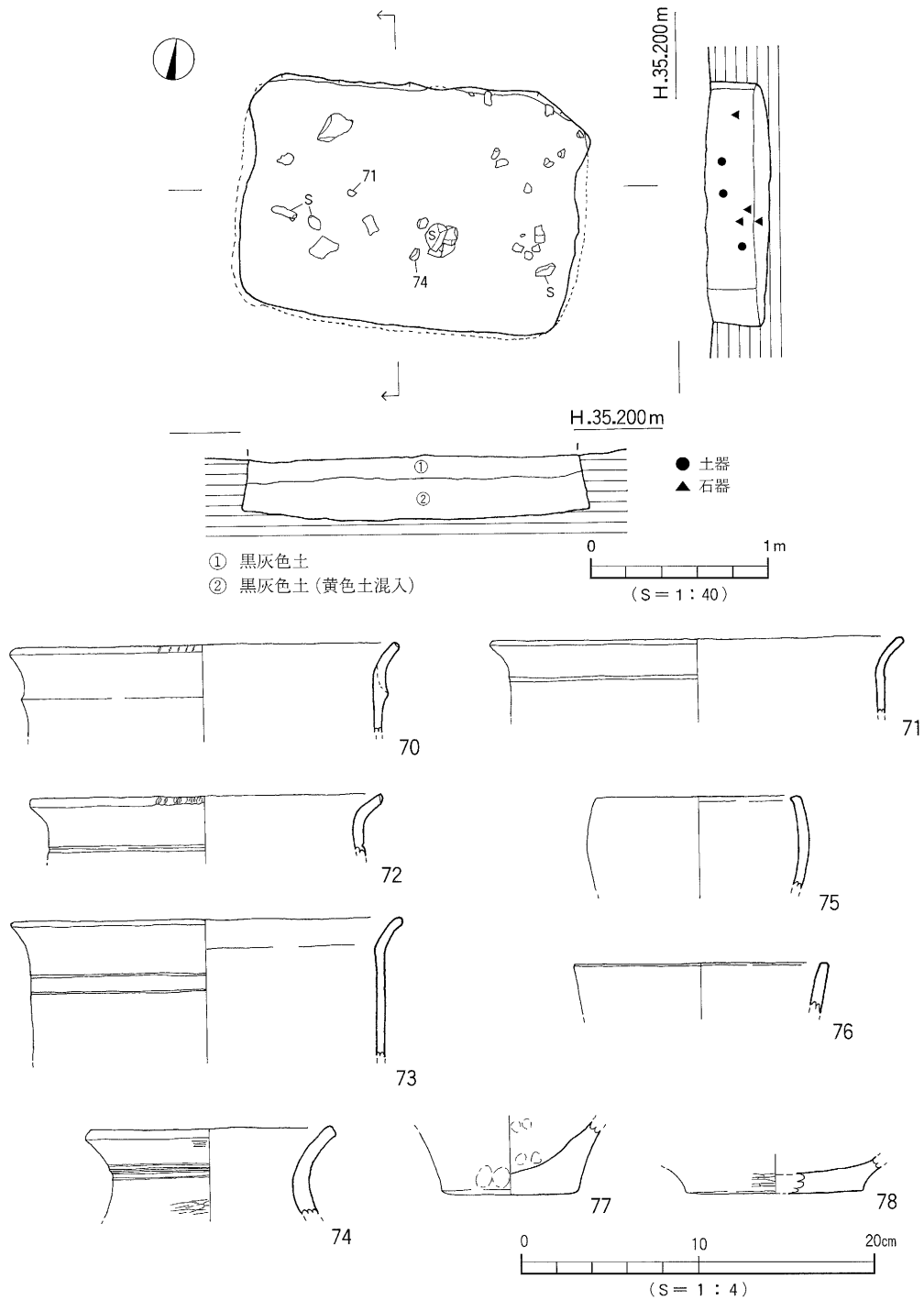
遺物は埋土中より、弥生土器片が少量出土した。

出土遺物

69は壺形土器の底部片で、平底となる。

S K 46 (第45図、図版14)

調査区東部、D 10・11区に位置する。平面形態は長方形を呈し、規模は長さ2.00m、幅1.40m、深さ38cmを測る。土坑の長軸方向は真北方向に直交する。壁体は、北側壁はほぼ垂直に立ち上がるが、東・西壁及び南壁は袋状になる。埋土は上下2層(①・②層)に分層され、①層は黒灰色土、②層は



第45図 S K 46測量図・出土遺物実測図

黒灰色土（黄色土混入）である。基底面はほぼ平坦であるが、中央部が僅かにくぼむ。本土坑は断面形態の特徴より、貯蔵穴の可能性はある。

遺物は埋土中位及び下位にて、弥生土器と石器片が散在して出土した。

出土遺物（第45図、図版16）

70～73は甕形土器の口縁部片である。いずれも口縁部は折り曲げにより成形される。70は口縁部下に段をもち、口縁端面に刻目を施す。71・72はヘラ描き沈線文1条、73はヘラ描き沈線文2条を施す。74は壺形土器の口縁部片である。口縁部は外反し、頸部外面に2条1組の工具による沈線文4条を施す。75・76は鉢形土器の口縁部片である。直口口縁を呈し、75はやや内湾しながら立ち上がる。77は甕形土器、78は壺形土器の底部で、平底となる。

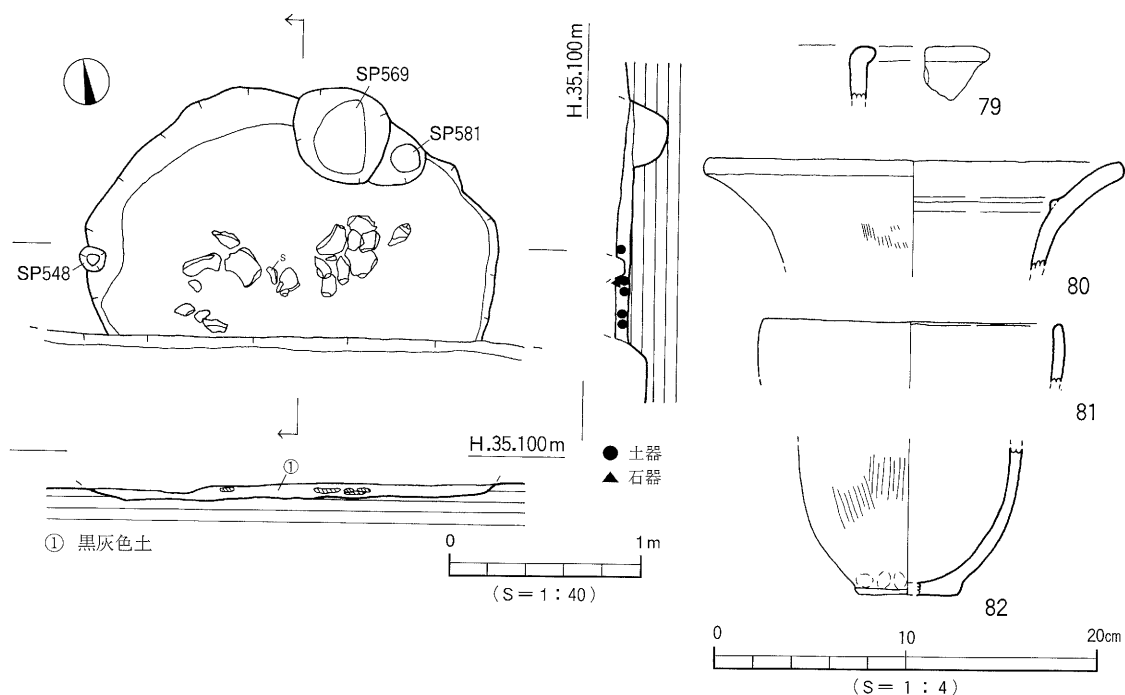
S K 56（第46図）

調査区北東部、D・E9区に位置し、S P 548・569・581に切られる。遺構南側は近現代の造成により段カットされ、削平されている。平面形態は円形を呈し、規模は径2.15m、深さ12cmを測る。断面形態は皿状を呈し、埋土は黒灰色土の単層である。基底面はほぼ平坦である。

遺物は埋土中から、弥生土器片が少量出土した。

出土遺物（第46図）

79は甕形土器の口縁部片である。断面かまぼこ状の短い口縁部を貼り付ける。80は壺形土器の口縁部片で、口縁部内面に断面三角形の貼り付け凸帯1条をもつ。81・82は鉢形土器である。81は直口口縁を呈し、口縁部はやや内湾しながら立ち上がる。82はやや突出する平底の底部となる。



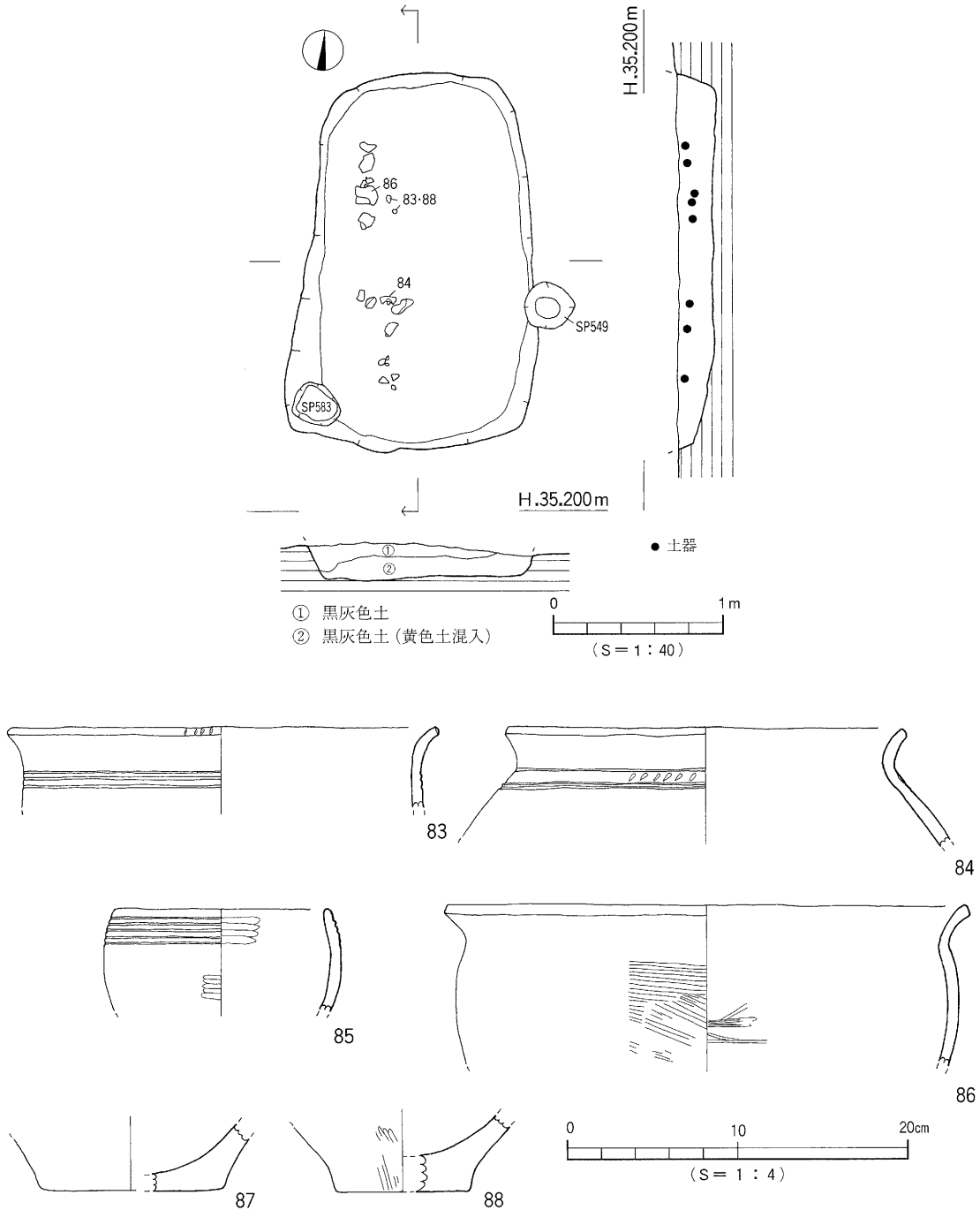
第46図 S K 56測量図・出土遺物実測図

S K 58 (第47図)

調査区東部、C 9 ~ D 10区に位置する。倒木址10を切り、S P 549・583に切られる。平面形態は長方形を呈し、規模は長さ2.25m、幅1.30m、深さ25cmを測る。断面形態は逆台形状を呈し、埋土は上下2層(①・②層)に分かれ、①層は黒灰色土、②層は黒灰色土(黄色土混入)である。基底面はほぼ平坦である。遺物は②層中から、弥生土器片が出土した。

出土遺物(第47図)

83は甕形土器の口縁部片で、折り曲げにより口縁部を形成する。胴部にヘラ描き沈線文3条、口縁



第47図 S K 58測量図・出土遺物実測図

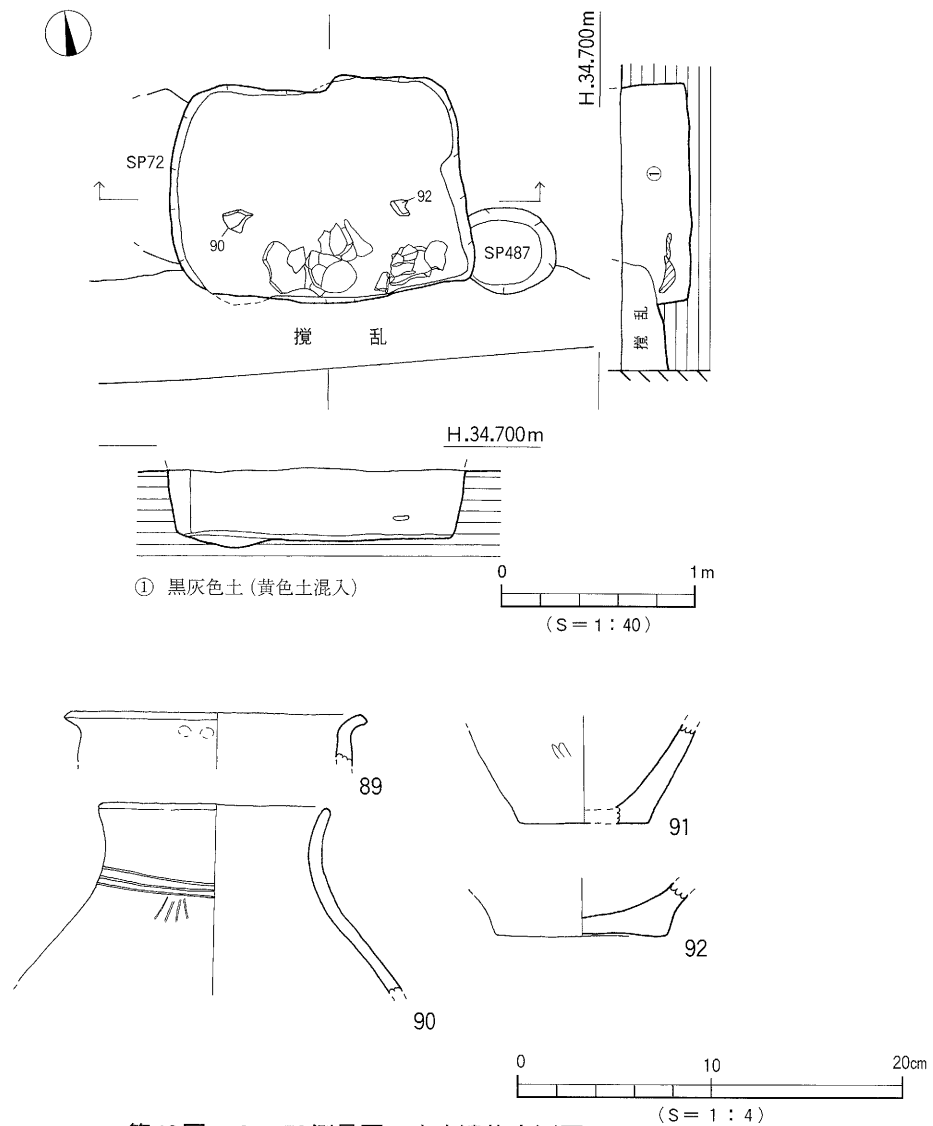
端面に刻目を施す。84は壺形土器の口縁部片で、沈線文と刺突文を施す。85・86は鉢形土器である。85は直口口縁を呈し、やや内湾しながら立ち上がる。口縁部外面に沈線文5条を施す。内外面共に横方向のヘラミガキ調整を施す。86は外反口縁を呈し、口縁部は短く延びる。87・88は壺形土器の底部で、平底となる。

S K 59 (第48図)

調査区南部、H5～I6区に位置し、SP72・487を切る。平面形態は長方形を呈し、規模は長さ1.50m、幅1.10m、深さ37cmを測る。長軸方向はほぼ真北方向に直交する。壁体は東壁及び西壁はほぼ垂直に立ち上がるが、北壁及び南壁ではやや袋状となる。埋土は黒灰色土(黄色土混入)である。基底面はほぼ平坦であるが、西側がやや凹む。本土坑は、断面形態の特徴より貯蔵穴の可能性ある。遺物は埋土下位から、弥生土器片が出土した。

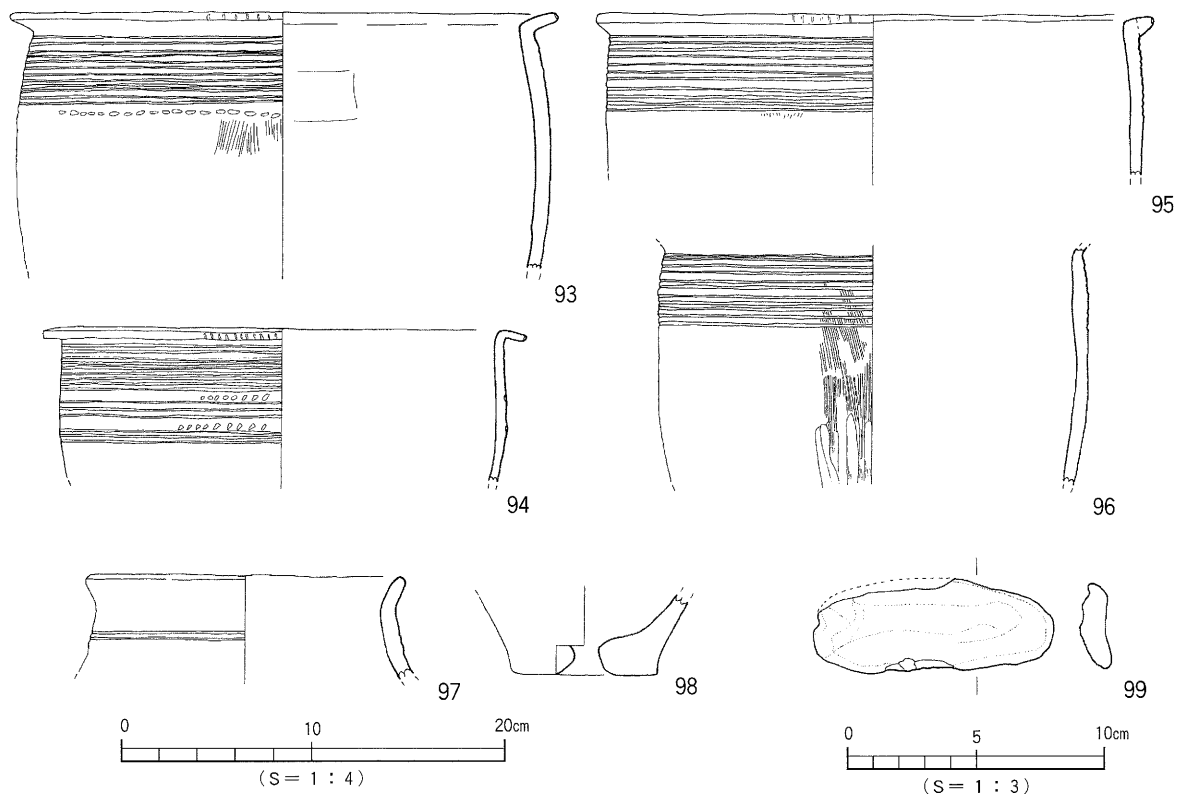
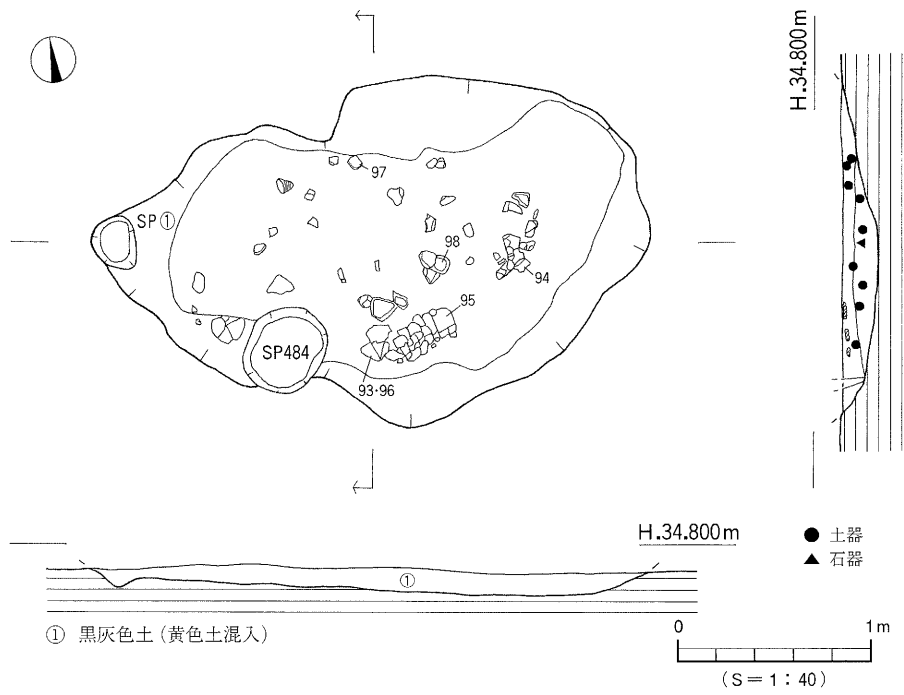
出土遺物 (第48図、図版16)

89は甕形土器の口縁部片で、折り曲げにより口縁部を成形する。無文。90は壺形土器で、頸部にへ



第48図 S K 59測量図・出土遺物実測図

久米高畑遺跡27次調査地



第49図 S K 61 測量図・出土遺物実測図

ラ描き沈線文3条を施す。91は甕形土器、92は壺形土器の底部で、91は平底、92は僅かに上げ底となる。

S K 61 (第49図)

調査区南部、G 6 区に位置し、S P 484に切られる。平面形態は不定形を呈し、規模は長軸2.90m、短軸1.70m、深さ22cmを測る。断面形態は皿状を呈し、埋土は黒灰色土(黄色土混入)である。基底面はほぼ平坦である。基底面よりピット1基(S P ①)を検出した。S P ①は埋土が土坑埋土と類似することから、本土坑に伴うものと考えられる。

遺物は埋土中から、弥生土器片と石器が少量出土した。

出土遺物 (第49図、図版17)

93～96は甕形土器の口縁部片である。93・94は折り曲げにより口縁部を成形する。93の口縁部はやや外上方に延び、口縁端面に刻目を施す。2条1組の工具による沈線文12条と刺突文1条を施す。94の口縁部は強く屈曲し、口縁端面に刻目を施す。2条1組の工具による沈線文と刺突文を施す。95は貼り付けにより口縁部を成形する。断面かまぼこ状の短い口縁部である。口縁端面に刻目を施す。胴部に沈線文11条(2条1組)を施す。96は口縁部を欠損する。胴部に沈線文11条を施す。外面は刷毛目調整後に縦方向のヘラミガキ調整を施す。97は壺形土器の口縁部片である。98は所謂コシキ形土器である。壺形土器の転用品で、底部に径12mmの孔を穿つ(焼成後穿孔)。99は石器素材である。緑色片岩製。重量50.215g。

2) 中期 弥生時代中期に時期比定される土坑は8基ある。中期中葉のものが2基、中期後葉のものが5基、中期中葉以前のものが1基である。

①中期中葉

S K 15 (第50図)

調査区中央部、D 6・7区に位置し、S P 196・365・366に切られる。平面形態は円形を呈するものと考えられ、規模は径1.50～1.55m、深さ16cmを測る。断面形態はレンズ状を呈し、埋土は黒灰色土の単層である。基底面はほぼ平坦である。基底面からピット2基(S P ①・②)を検出した。S P ①・②は埋土が土坑埋土と酷似することから、本土坑に伴うものと考えられる。

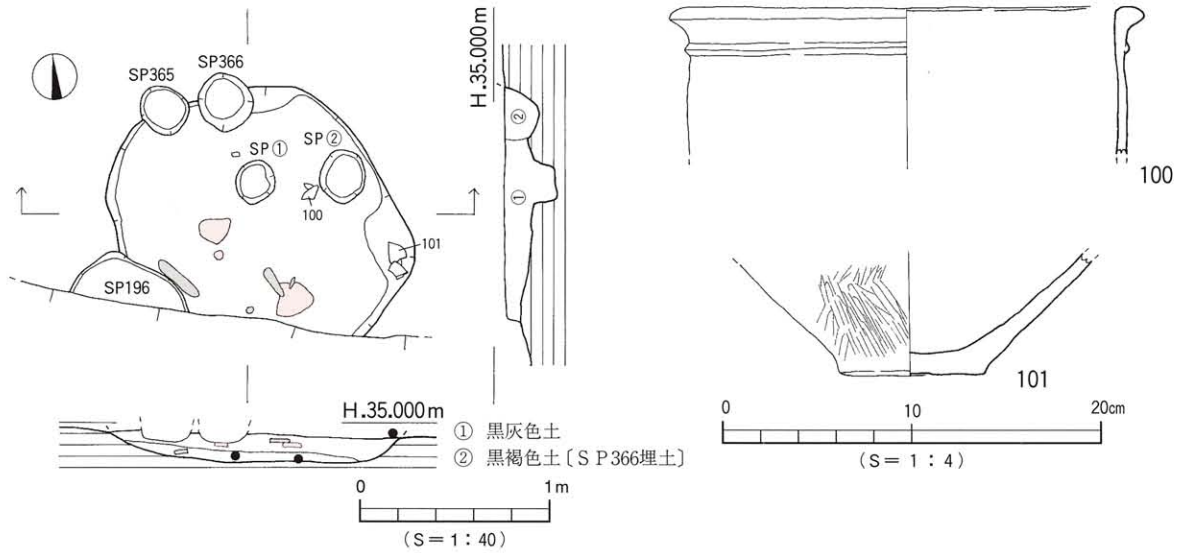
遺物は埋土中から弥生土器片が少量出土し、埋土上位にて焼土と炭化物が出土した。

出土遺物 (第50図)

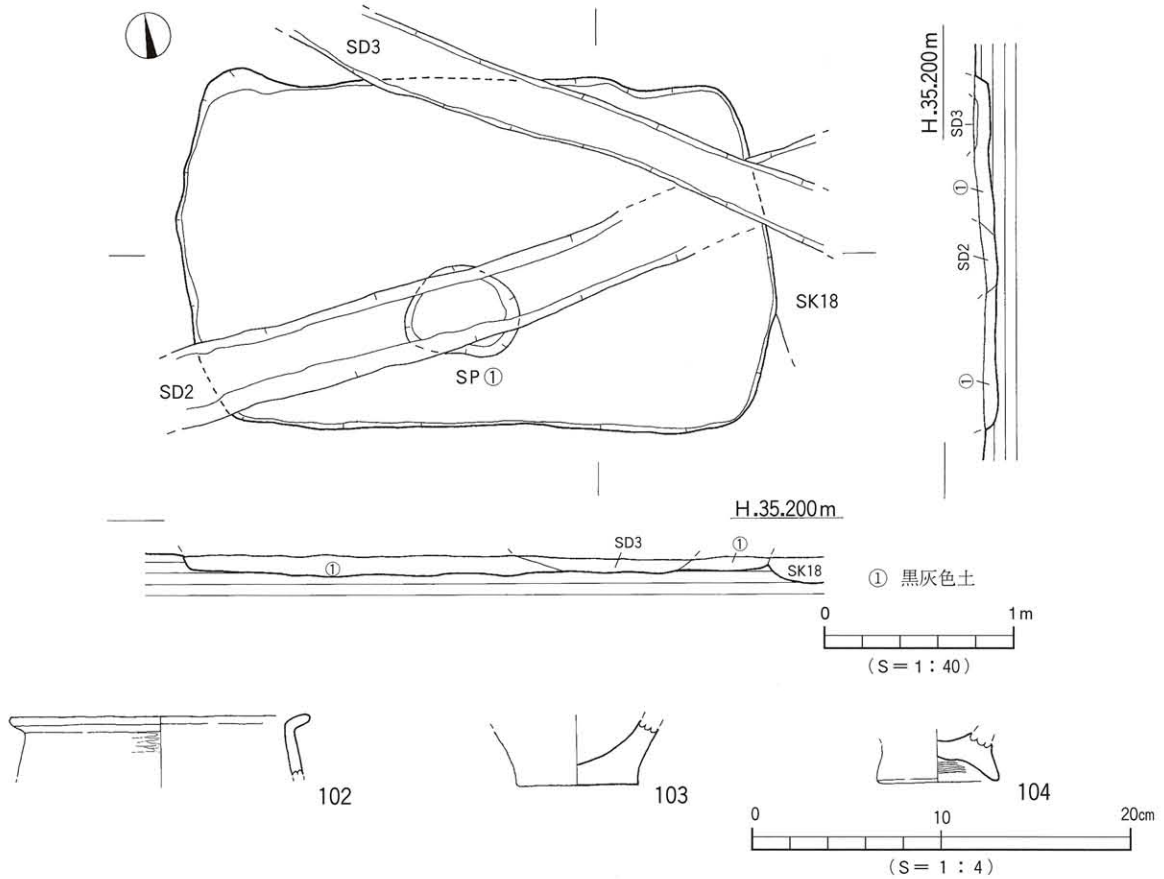
100は甕形土器の口縁部片である。折り曲げにより口縁部を成形する。口縁部下に断面三角形の凸帯を貼り付ける。101は壺形土器の底部で、平底となる。

S K 17 (第51図)

調査区北西部、B 3～C 4区に位置する。S K 18・35を切り、S D 2・3に切られる。平面形態は長方形を呈し、規模は長さ3.10m、幅1.85m、深さ12cmを測る。断面形態は皿状を呈し、埋土は黒灰色土の単層である。基底面はほぼ平坦である。基底面よりピット1基(S P ①)を検出したが、本土坑に伴うものかは判断できなかった。遺物は埋土中から、弥生土器が少量出土した。



第50図 SK 15測量図・出土遺物実測図



第51図 SK 17測量図・出土遺物実測図

出土遺物 (第51図)

102は甕形土器の口縁部片である。逆「L」字状口縁で、折り曲げにより口縁部を成形する。103は壺形土器、104は甕形土器の底部である。103は平底、104は上げ底となる。

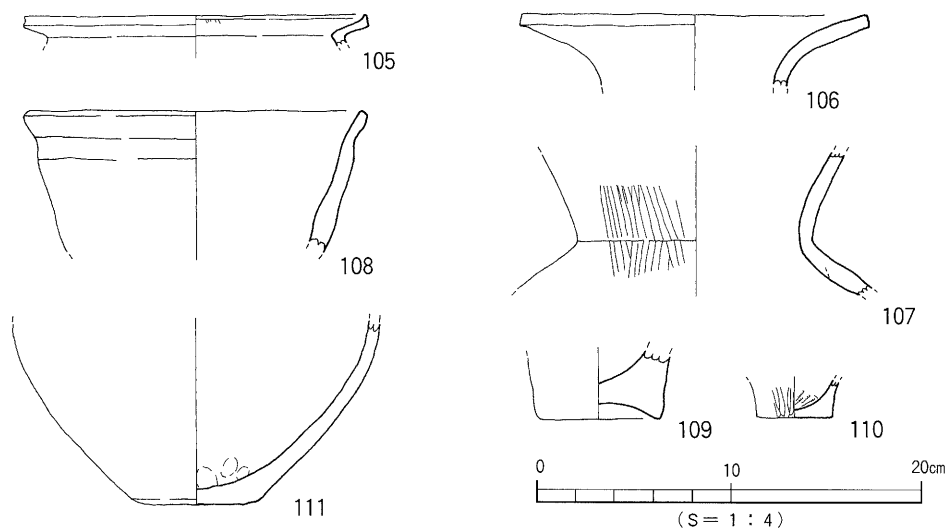
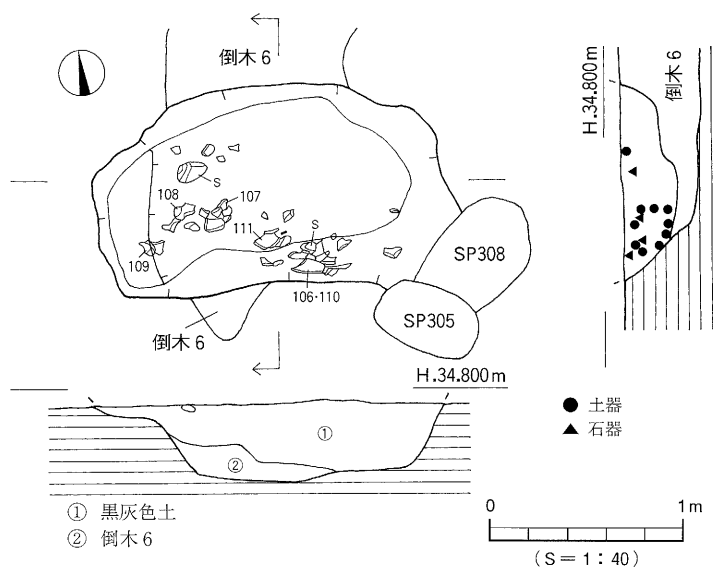
②中期後葉

SK 2 (第52図)

調査区西部、D1・2区に位置する。倒木址6を切り、SP305・308に切られる。平面形態は不整楕円形を呈し、規模は長径1.82m、短径1.04m、深さ36cmを測る。断面形態は皿状を呈し、埋土は黒灰色土の単層である。基底面は土坑中央部が凹む。遺物は埋土中から、弥生土器片や石器片が出土した。

出土遺物 (第52図)

105は甕形土器の口縁部片である。口縁部は「く」の字状を呈し、口縁端部は上方につまみ上げる。106・107は壺形土器である。106は口縁部が大きく外反し、口縁端部は「コ」字状を呈する。107は頸部片である。外面に刷毛目調整を施す。108は鉢形土器である。直口口縁を呈し、口縁部下がヨコナデにより凹む。109・110は甕形土器の底部である。109は上げ底、110は平底となる。110の外面にヘラミガキ調整を施す。111は壺形土器で、胴部中位に張りもち、平底の底部となる。



第52図 SK 2 測量図・出土遺物実測図

S K 4 (第53図)

調査区南西部、G 2 区に位置し、倒木址 7 を切る。平面形態は楕円形を呈し、規模は長径1.00 m、短径0.78 m、深さ29 cmを測る。断面形態は逆台形状を呈し、埋土は黒灰色土の単層である。基底面はほぼ平坦であるが、西側と南側がやや高くなっている。基底面よりピット 2 基 (SP ①・②) を検出した。SP ①・②は径6～8 cm、深さ6～10 cmを測る。埋土が土坑埋土と類似することから、本土坑に伴うものと考えられる。遺物は埋土中から、弥生土器片が少量出土した。

出土遺物 (第53図)

112は甕形土器の口縁部片である。口縁部は「く」の字状を呈し、口縁端部は上方につまみ上げられ、口縁端面に凹線文 2 条を施す。113～115は底部である。113・114は甕形土器、115は壺形土器の底部である。115は突出部をもつ平底となる。

S K 24 (第54図)

調査区北部、D 7 区に位置し、SP 354 を切る。平面形態は不整長方形を呈し、規模は長さ2.75 m、幅1.45 m、深さ23 cmを測る。断面形態は皿状を呈し、埋土は黒灰色土 (黄色土少量混入) である。基底面はほぼ平坦であるが、東側と西側がやや高くなっている。基底面よりピット 2 基 (SP ①・②) を検出した。SP ①・②は径20～28 cm、深さ4 cmを測る。埋土が土坑埋土と酷似することから、本土坑に伴うものと考えられる。遺物は埋土中から、弥生土器片と石器片が少量出土した。

出土遺物 (第54図、図版17)

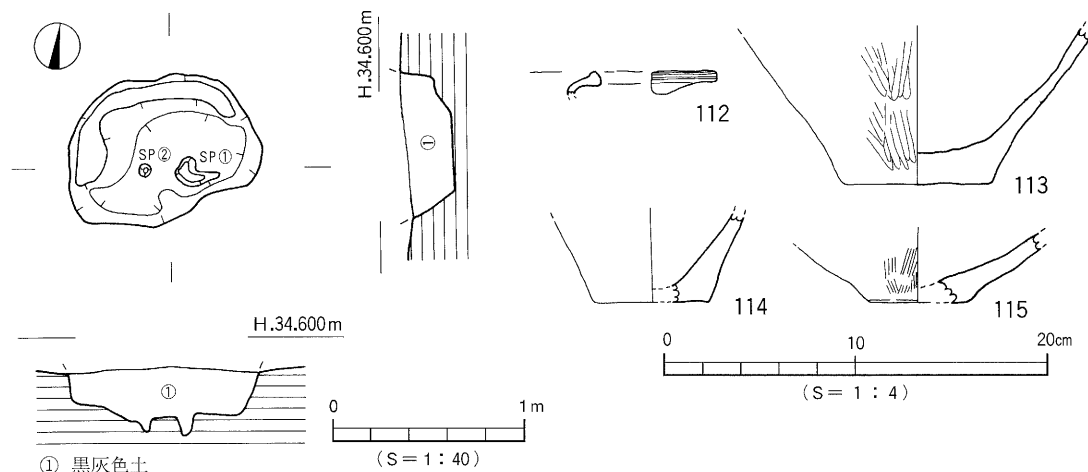
116・117は底部である。116は甕形土器、117は壺形土器の底部である。118は扁平片刃石斧である。全面が丁寧に研磨される。緑色片岩製。重量49.773 g。119は用途不明品である。重量18.692 g。

S K 28 (第55図)

調査区北部、C 5・6 区に位置し、掘立 3 (SP ①・②) に切られる。平面形態は長方形を呈し、規模は長さ2.00 m、幅1.15 m、深さ17 cmを測る。断面形態は逆台形状を呈し、埋土は暗灰色土の単層である。基底面はほぼ平坦である。遺物は埋土中から、弥生土器片と石器が少量出土した。

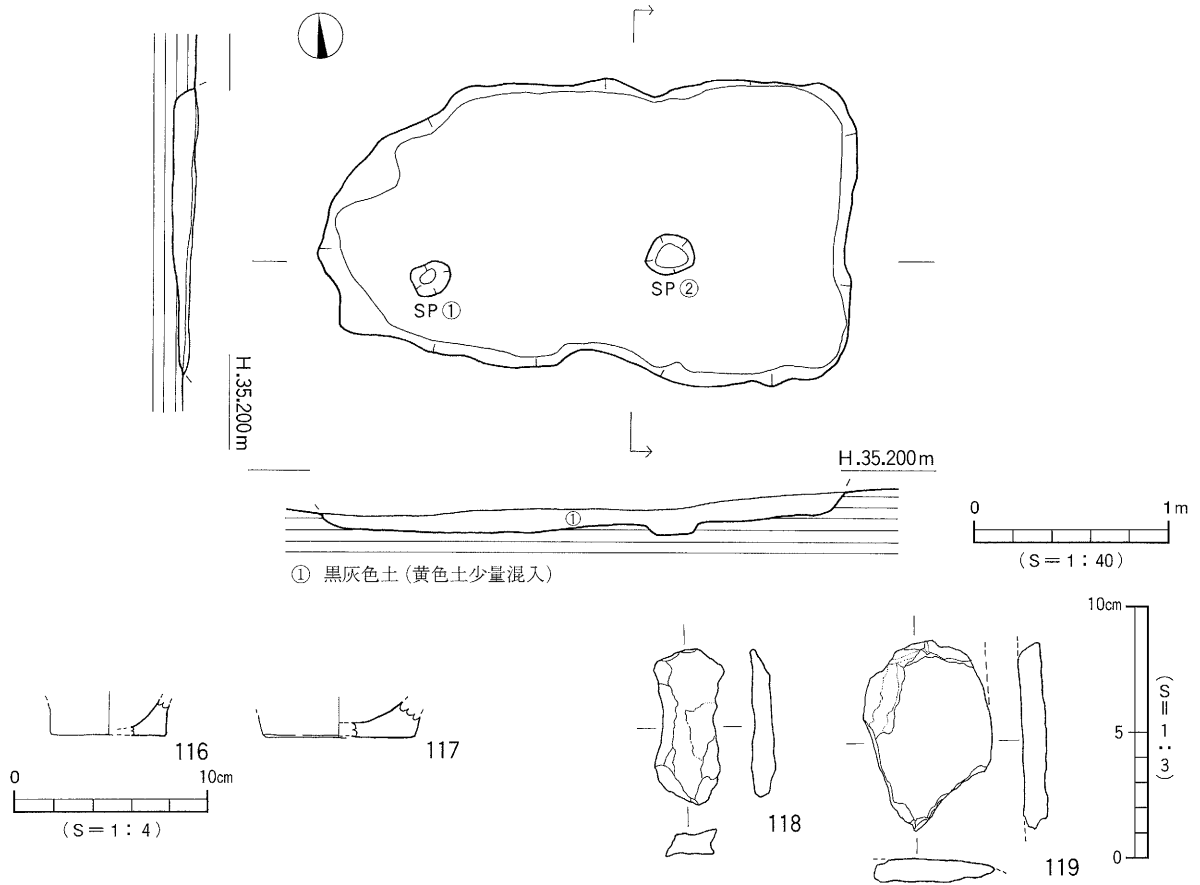
出土遺物 (第55図、図版17)

120は壺形土器の口縁部片である。口縁端部は上下に肥厚し、口縁端面に凹線文 3 条を施す。121は甕形土器の底部で、くびれの上げ底となる。122は扁平片刃石斧である。緑色片岩製。重量43.405 g。

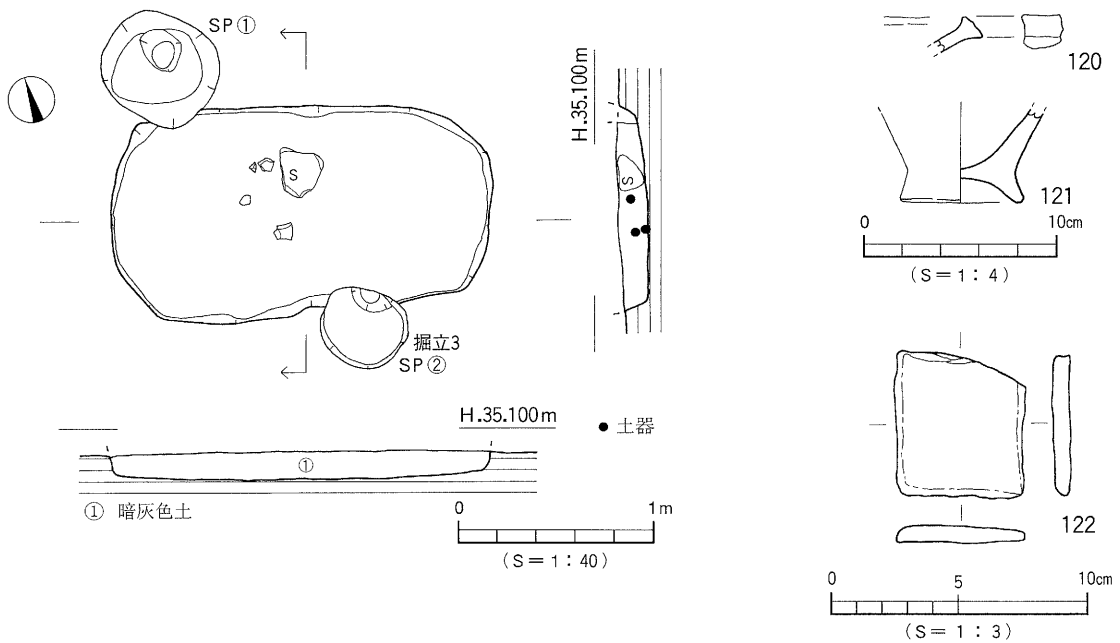


第53図 S K 4 測量図・出土遺物実測図

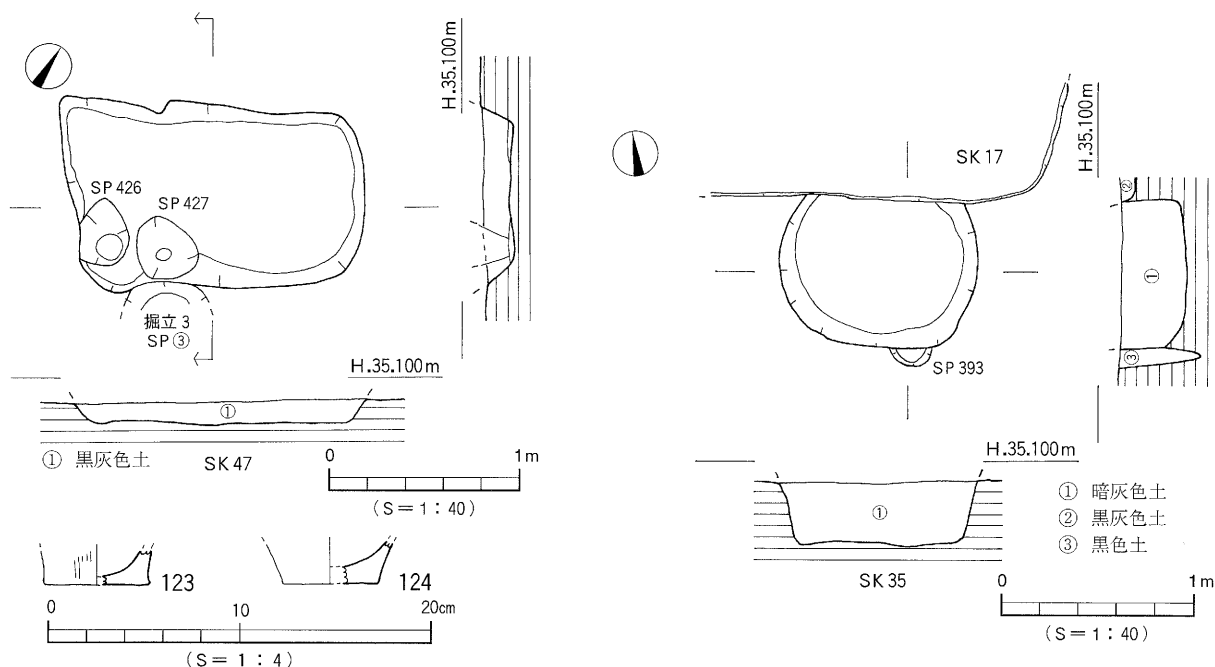
弥生時代の遺構と遺物



第54図 S K 24測量図・出土遺物実測図



第55図 S K 28測量図・出土遺物実測図



第56図 SK 47・35測量図・出土遺物実測図

SK 47 (第56図)

調査区北部、C 5～D 6 区に位置する。掘立 3 (SP ③) 及び SP 426・427 に切られる。平面形態は不整長方形を呈し、規模は長さ 1.50 m、幅 1.00 m、深さ 18 cm を測る。断面形態は皿状を呈し、埋土は黒灰色土の単層である。基底面はほぼ平坦であるが、やや西側が高くなっている。

遺物は埋土中から、弥生土器片が少量出土した。

出土遺物 (第56図)

123・124 は甕形土器の底部で、平底である。123 の外面にはヘラミガキ調整を施す。

③中期中葉以前

SK 35 (第56図)

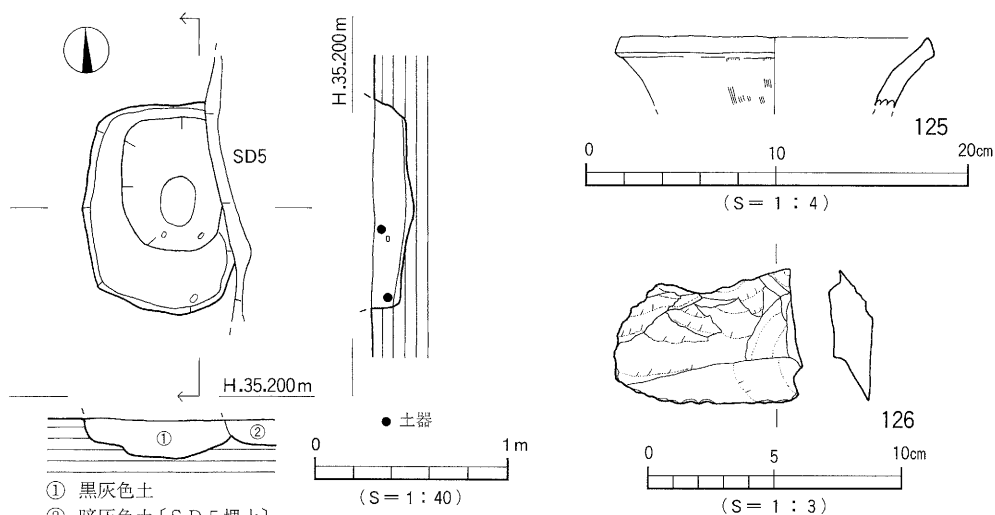
調査区北西部、C 4 区に位置する。SP 393 を切り、SK 17 (中期中葉) に切られる。平面形態は円形を呈し、規模は径 1.10 m、深さ 35 cm を測る。断面形態は逆台形状を呈し、埋土は暗灰色土単層である。基底面はほぼ平坦である。土坑内からの遺物の出土はない。

時期：本土坑からは時期決定に有効な遺物の出土はないが、SK 17 との切り合い関係から、SK 35 は弥生時代中期中葉以前の遺構とする。

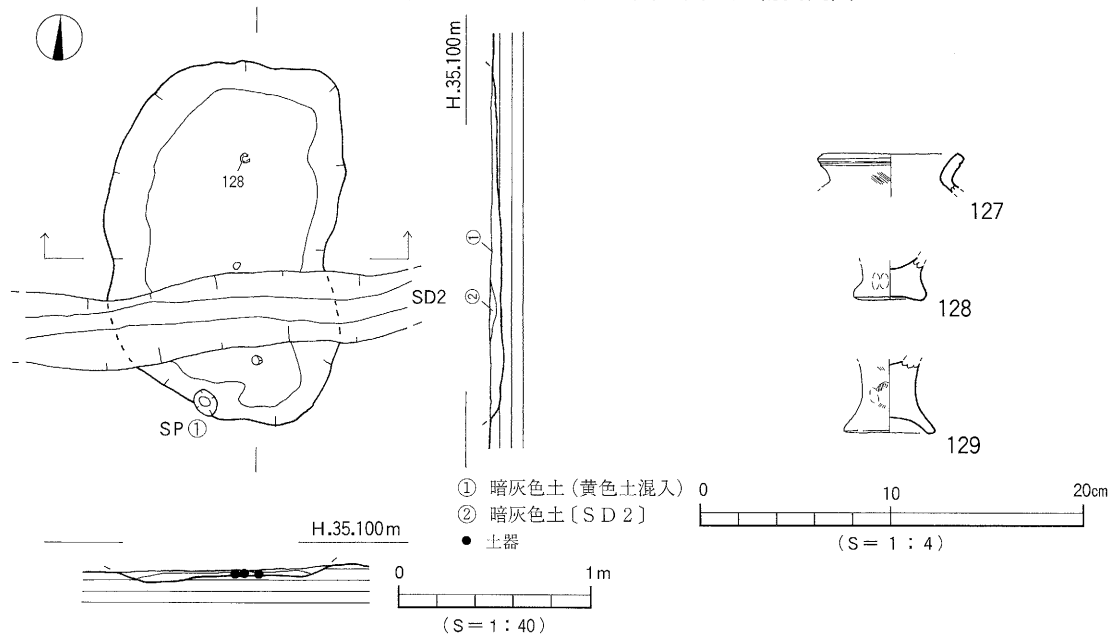
3) 後期 弥生時代後期に時期比定される土坑は 2 基である。土坑内から出土した遺物の特徴から、弥生時代後期前半の遺構とする。

SK 20 (第57図)

調査区北部、B・C 7 区に位置し、古墳時代の溝 SD 5 に切られている。平面形態は長方形を呈し、規模は長さ 1.10 m、幅 0.80 m、深さ 22 cm を測る。断面形態は逆台形状を呈し、埋土は黒灰色土単層である。基底面は中央部が僅かにくぼむ。遺物は埋土中より、弥生土器片と石器が少量出土した。



第57図 SK 20測量図・出土遺物実測図



第58図 SK 22測量図・出土遺物実測図

出土遺物 (第57図、図版17)

125は壺形土器の口縁部である。口縁部は緩やかに外反し、口縁端部は上方につまみ上げられ面をもつ。126は用途不明の石器である。安山岩(アズキ色)製。重量59.610g。

SK 22 (第58図)

調査区北部、B5・6区に位置する。SK 45を切り、溝SD 2に切られる。平面形態は楕円形を呈し、規模は長さ1.90m、幅1.10m、深さ4cmを測る。断面形態は皿状を呈し、埋土は暗灰色土(黄色土混入)である。基底面はほぼ平坦である。南側壁体で径12cmの小ピット1基(SP①)を検出したが、本土坑に伴うものかは判断できなかった。遺物は埋土中から、弥生土器片が少量出土した。

出土遺物 (第58図)

127は壺形土器の口縁部片で、口縁端面に沈線文1条を施す。128・129はミニチュア品。128はわずかに上げ底。129は上げ底となる。

4. 古墳時代の遺構と遺物

古墳時代の遺構は、竪穴式住居址2棟、掘立柱建物址4棟、溝2条、土坑9基である。

(1) 竪穴式住居址

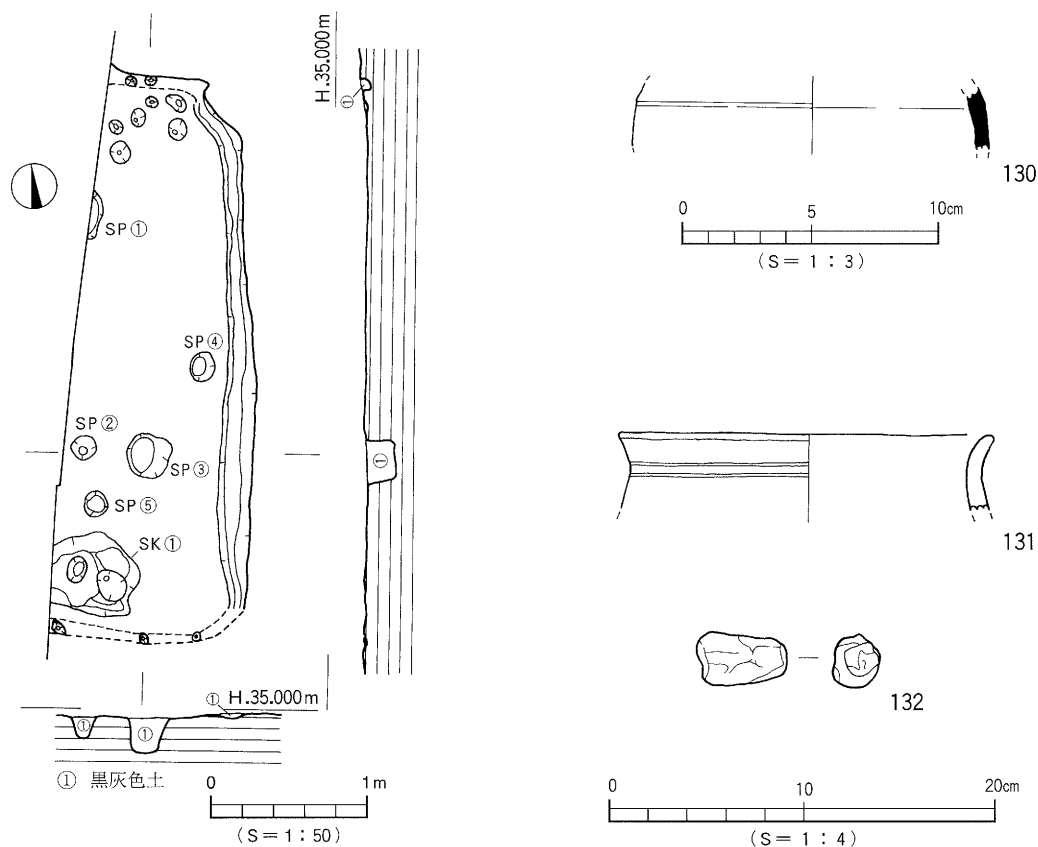
本調査にて、古墳時代の竪穴式住居址2棟（SB4・5）を検出した。

SB5（第59図）

調査区北西部、B・C1区に位置する。住居址北側はSK30を切り、西半分は調査区外に続く。壁体は消失し、支柱穴と周壁溝のみの検出である。平面形態は方形を呈するものと考えられ、規模は東西検出長1.25m、南北検出長3.75mを測る。内部施設は支柱穴2基（SP①・②）と土坑1基（SK①）を検出した。SP①・②の平面形態は円形を呈し、径16～30cm、深さ20cmを測る。埋土は黒褐色土の単層である。SK①は住居址南寄りに位置する。平面形態は不整楕円形を呈し、径0.50～0.55m、深さ13cmを測る。埋土は黒褐色土単層である。周壁溝は住居址東側で検出した。幅10～20cm、深さ4cmを測る。埋土は黒褐色土単層である。このほか、基底面にて大小9基のピットを検出した。そのうち、SP③は埋土が支柱穴埋土と類似することから、本住居に伴うものと考えられる。遺物はSK①から弥生土器片と須恵器片が少量出土した。

出土遺物（第59図）

130は須恵器の坏蓋片である。口縁部は直線的に下がる。131は壺形土器の口縁部片である。口縁部は外上方に短く延びる。口縁端面に刻目、頸部にヘラ描き沈線文2条を施す。弥生時代前期。132は



第59図 SB5測量図・出土遺物実測図

土師器の甑形土器の把手である。

時期：出土した須恵器、土師器の特徴が古墳時代後期の特徴を示している。よって本住居址の廃棄・埋没時期も古墳時代後期とする。

S B 4 (第60図)

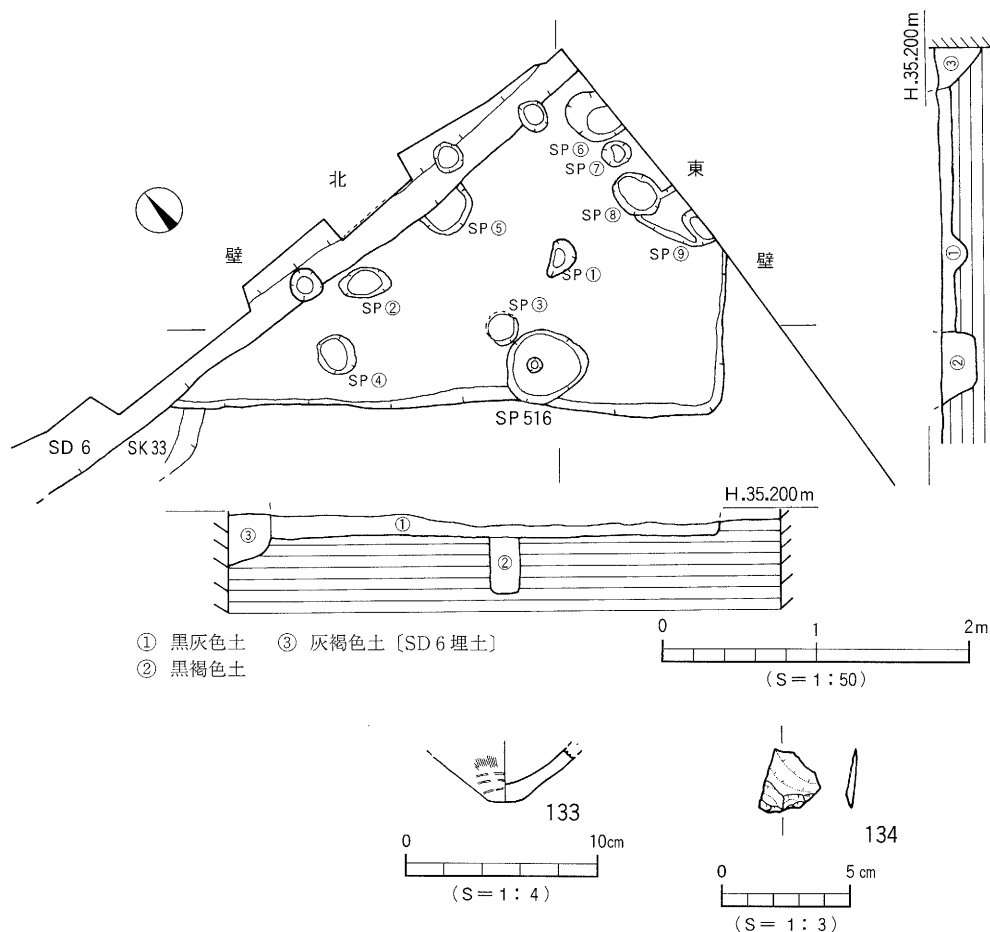
調査区北東隅、B 10～C 11区に位置する。S K 33 (古墳後期)・S K 41を切り、S P 516・S D 6に切られる。平面形態は方形を呈するものと考えられ、規模は東西検出長3.60m、南北検出長2.10m、壁高14cmを測る。埋土は黒灰色土の単層である。床面はほぼ平坦である。内部施設は主柱穴2基(①・②)を検出した。平面形態は円形を呈し、径20～25cm、深さ40cmを測る。掘り方埋土は黒灰色土単層である。そのほか、住居址床面にて大小7基のピットを検出したが、住居に伴うかは不明である。

遺物は埋土中から、弥生土器片と石器が出土した。

出土遺物 (第60図)

133は弥生時代後期末の甕形土器の底部である。外面にタタキ調整を施す。134はサヌカイト製のステレーパーである。重量2.070g。

時期：出土した遺物が僅少で、明確な時期判断はしかねる。古代の溝S D 6に切られ、古墳時代後期の土坑S K 33を切ることから、S B 4は古墳時代後期以降の住居址とする。



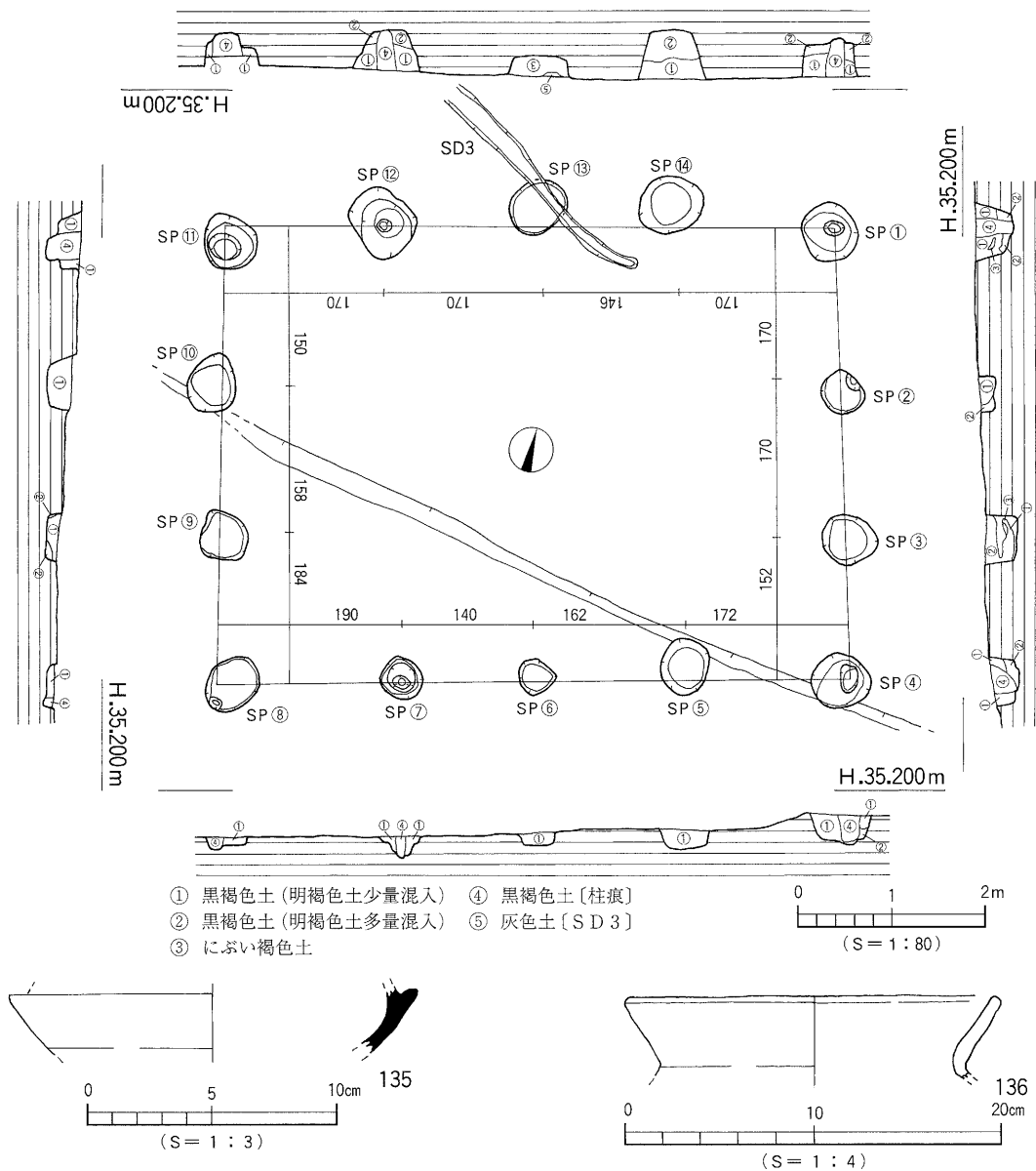
第60図 S B 4 測量図・出土遺物実測図

(2) 掘立柱建物址

本調査にて、古墳時代の掘立柱建物址4棟を検出した。出土遺物や切り合い関係より、古墳時代後期の建物址とする。

掘立3 (第61図)

調査区西部、C4～E6区に位置する。SK28・29・32・47・62を切り、SD3に切られる。建物址は14基の柱穴で構成される。東西棟で、建物方位は真北からやや西に振る(N-15°-W)。4間×3間の建物で、桁行長6.64m、梁行長4.92mを測る。各柱穴の平面形態は円～楕円形を呈し、径40～68cm、深さ12～56cmを測る。柱穴の掘り方埋土は黒褐色土を基調とし、明褐色土が混入する。6基の柱穴(SP①・④・⑦・⑧・⑪・⑫)で柱痕を確認した。柱痕は径20～30cm、深さ14～44cmを測る。柱痕埋土は粘性の強い黒褐色土である。また、他の柱穴では柱の抜き取り痕を確認した。遺物は埋土中から、須恵器片と土師器片が出土した。



SP③ : 135・136

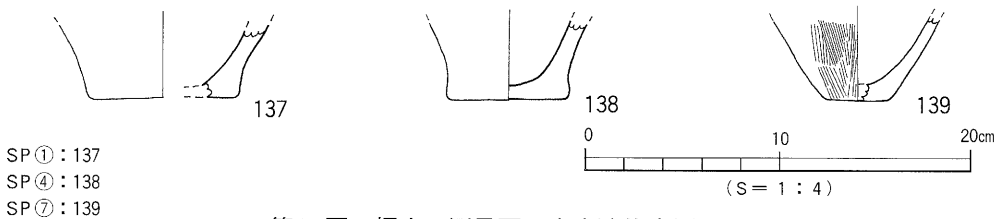
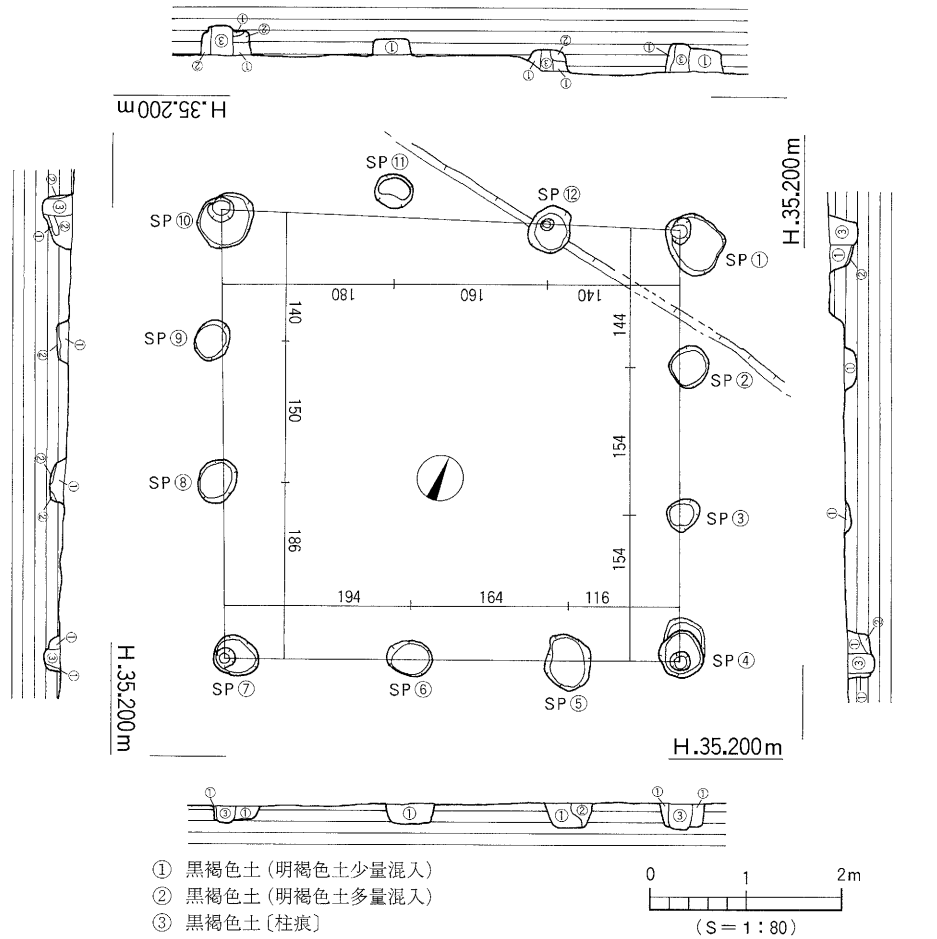
第61図 掘立3 測量図・出土遺物実測図

出土遺物 (第61図)

135は須恵器坏身、136は土師器の甕形土器である。136は口縁部はやや内湾し、頸部外面に明確な稜をもつ。口縁端部は丸い。

掘立2 (第62図)

調査区西部、C2～E4区に位置する。建物址は12基の柱穴で構成される。東西棟で建物方位は真北から西に振る(N-21°-W)。3間×3間の建物址で、桁行長4.80m、梁行長4.52mを測る。各柱穴の平面形態は円～楕円形を呈し、径36～56cm、深さ6～32cmを測る。柱穴掘り方埋土は黒褐色土を基調とし、明褐色土が混入する。5基の柱穴(SP①・④・⑦・⑩・⑫)で柱痕を確認した。柱痕は径16～28cm、深さ20～30cmを測る。柱痕埋土は粘性の強い黒褐色土単層である。遺物は埋土中から、弥生土器片数点が出土した。



SP ① : 137
 SP ④ : 138
 SP ⑦ : 139

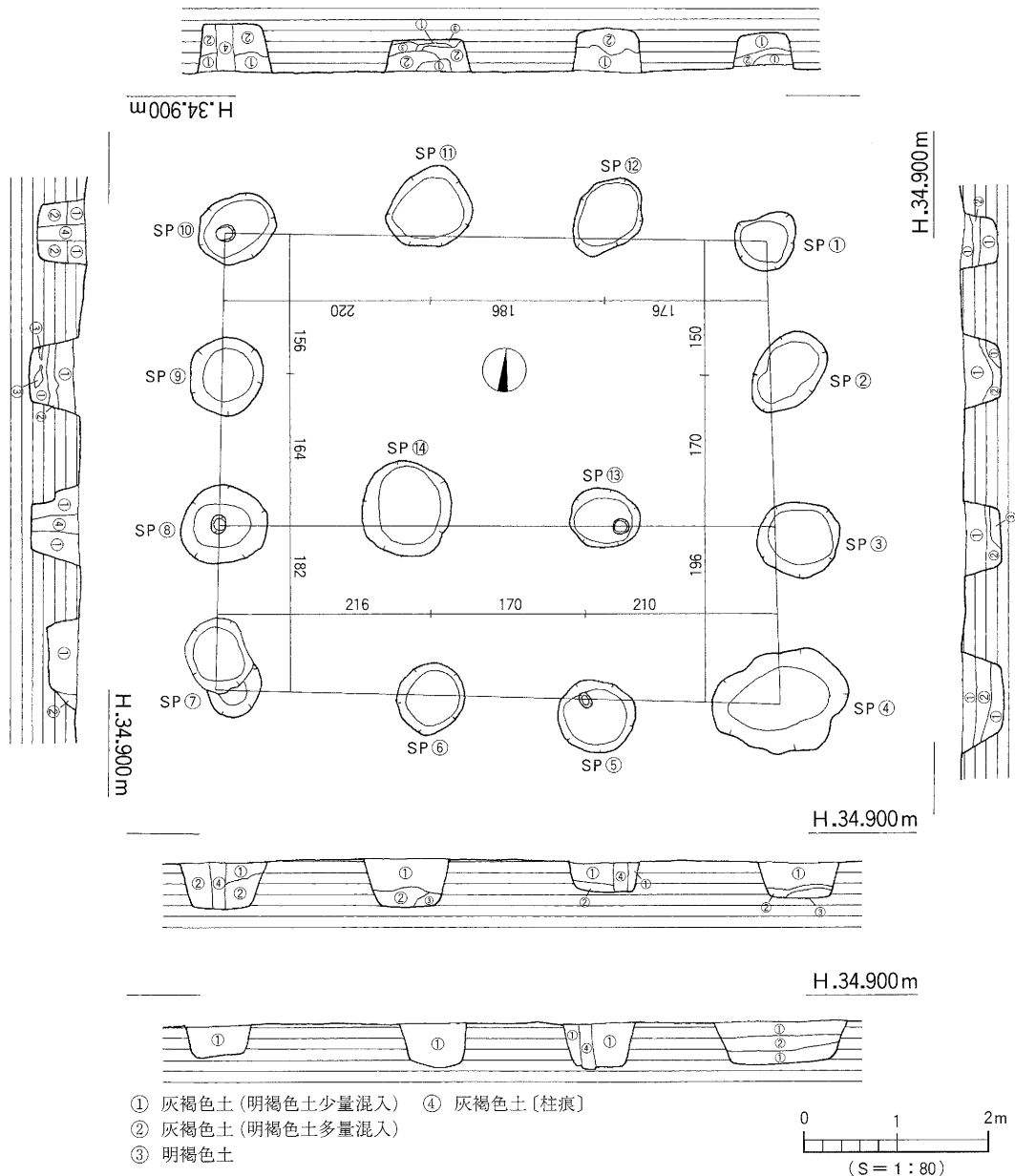
第62図 掘立2 測量図・出土遺物実測図

出土遺物 (第62図)

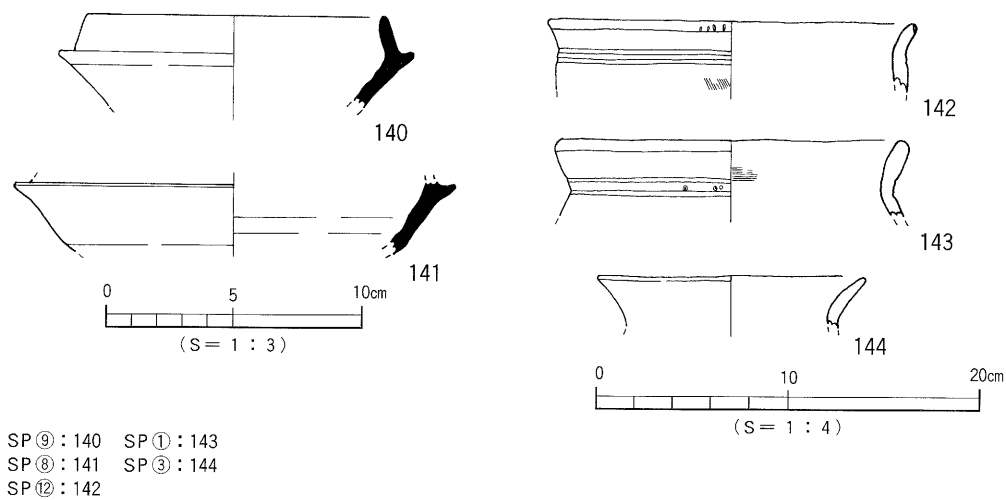
137～139は甕形土器の底部である。137・138は平底、139は小さい平底となる。外面に刷毛目調整を施す。

掘立1 (第63図)

調査区南部、H 4～I 5区に位置し、倒木址8を切る。建物址は14基の柱穴で構成される。東西棟で建物方位をほぼ真北にとる (N-1°-E)。3間×2間の建物址で、建物南側に廂が付く。桁行長5.96m、梁行長3.20mを測る。廂は桁行長5.96m、梁行長1.60mである。各柱穴の平面形態は円～楕



第63図 掘立1 測量図



第64図 掘立1 出土遺物実測図

円形を呈し、径0.6～1.4 m、深さ28～48cmを測る。柱穴の掘り方埋土は灰褐色土を基調とし、明褐色土が混入する。4基の柱穴（SP⑤・⑧・⑩・⑬）で柱痕を確認した。柱痕径12～20cm、深さ26～48cmを測る。柱痕埋土は灰褐色土である。また、他の柱穴では柱の抜き取り痕を確認した。

遺物は埋土中から、弥生土器片と須恵器片が出土した。

出土遺物（第64図）

140・141は須恵器坏身である。140はたちあがりは内傾し、受部は外上方に延びる。端部は丸い。141は受部が外上方に延びる。142は弥生土器の甕形土器である。折り曲げにより口縁部を成形する。口縁端面に刻目を施す。頸部にヘラ描き沈線文2条を施す。143・144は壺形土器の口縁部片である。143の口縁部は短く上方に延びる。頸部にヘラ描き沈線文2条と竹管文を施す。144の口縁部は外反し、口縁端部は丸い。

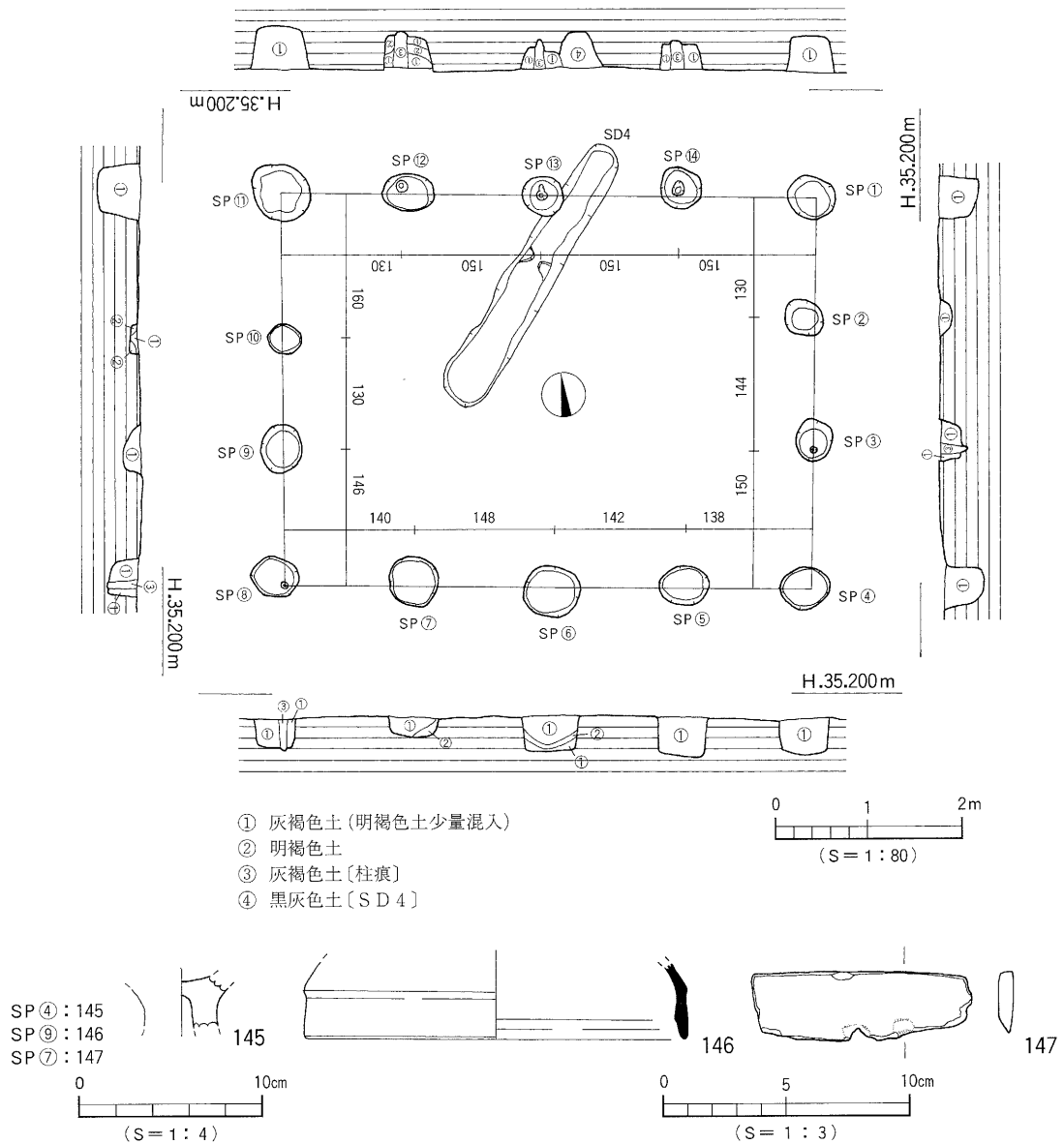
掘立4（第65図）

調査区北西部、B2～D3区に位置する。SK43・50及びSD4を切る。建物址は14基の柱穴で構成される。東西棟で建物方位を真北に近い方向にとる（N-6°-E）。4間×3間の建物址で、桁行長5.80 m、梁行長4.24 mを測る。各柱穴の平面形態は円～楕円形を呈し、径36～60 cm、深さ16～44 cmを測る。柱穴掘り方埋土は灰褐色土を基調とし、明褐色土が混入する。5基の柱穴（SP③・⑧・⑫・⑬・⑭）で柱痕を確認した。柱痕は径16～20 cm、深さ34～50 cmを測る。柱痕埋土は灰褐色土単層である。また、他の柱穴では柱の抜き取り痕を確認した。

遺物は埋土中から須恵器片、土師器片と石器が出土した。

出土遺物（第65図）

145はSP④、146はSP⑨、147はSP⑦出土品。145は土師器高坏の脚部片である。146は須恵器坏蓋で、口縁部は直線的に下がり口縁端部が内傾する。147は磨製の石庖丁である。平面形態は長方形を呈し、穿孔は敲打により孔を穿つ。緑色片岩製。重量32.799 g。



第65図 掘立4 測量図・出土遺物実測図

(3) 溝

本調査にて古墳時代の溝2条 (SD 2・5) を検出した。

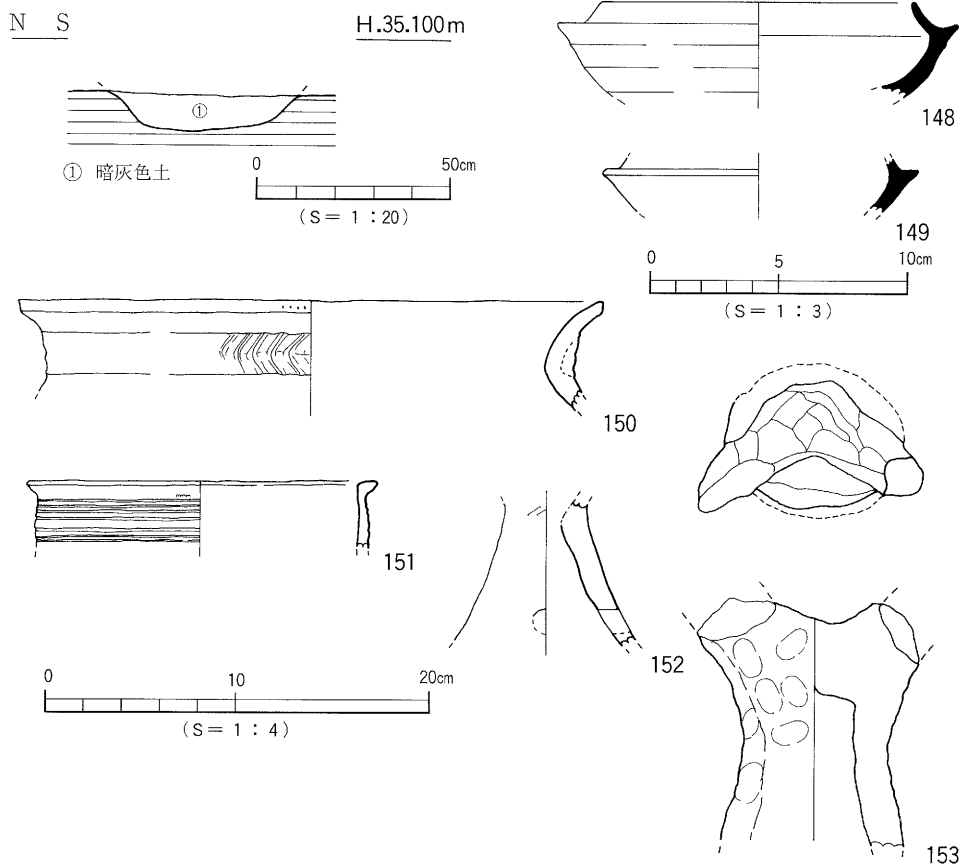
SD 2 (第66図)

調査区北西部、B 6～C 2 区に位置する。溝の西端は消失する。SK 14・16～18・22を切り、SD 3に切られる。規模は検出長16.60m、幅0.58m、深さ11cmを測る。断面形態は皿状を呈し、埋土は暗灰色土単層である。溝底は北東から南西に向けて傾斜をなす (比高差19cm)。

遺物は埋土中から、弥生土器片と須恵器片、土師器片が少量出土した。

出土遺物 (第66図、図版17)

148・149は須恵器坏身である。たちあがり短く内傾する。150～153は弥生土器。150は壺形土器、151は甕形土器である。150は口縁下に凸帯を貼り付け、凸帯上に羽状文を施す。151は折り曲げによ



第66図 SD 2 断面図・出土遺物実測図

り口縁部を成形し、胴部にヘラ描き沈線文7条以上を施す。152は高坏形土器の脚部片。脚下端に円孔を穿つ。153は支脚形土器である。2個の突起をもつ。中空。

時期：出土した須恵器の特徴より、溝の時期は古墳時代後期後半とする。

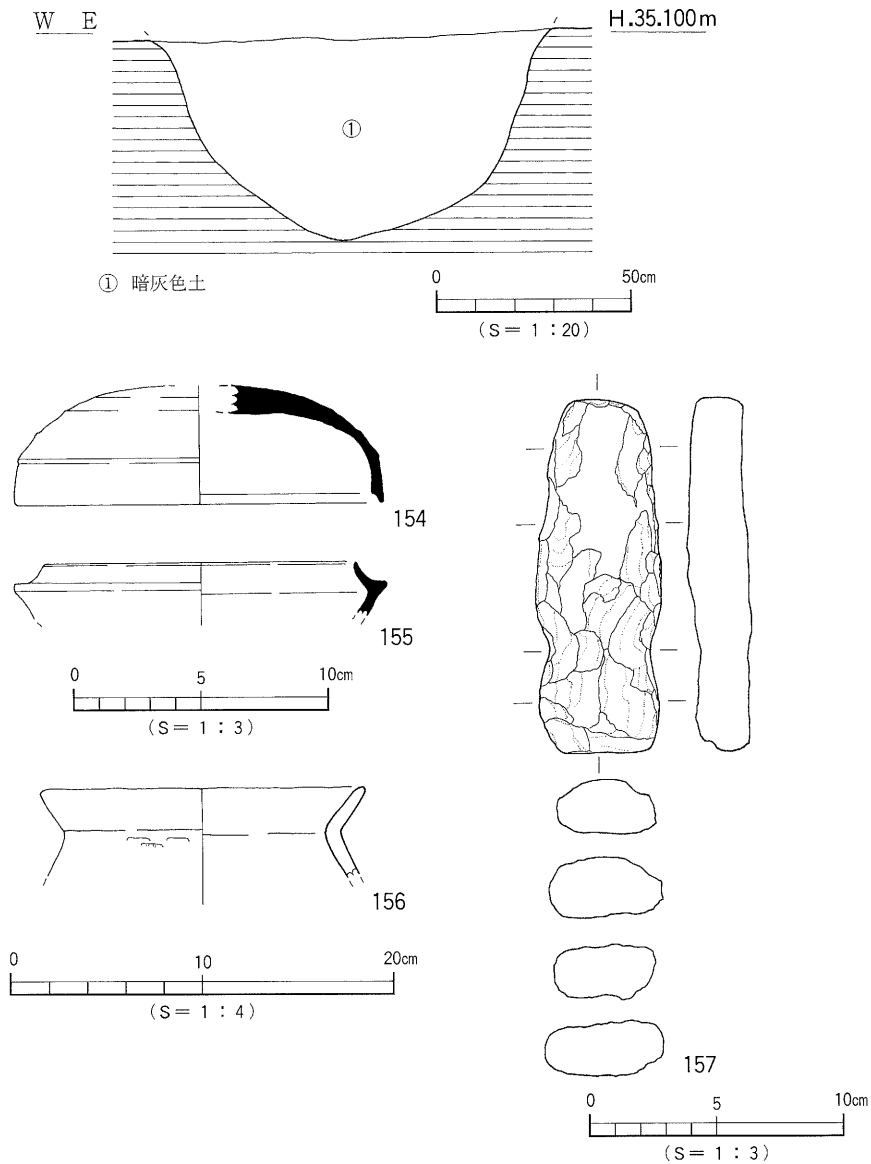
SD 5 (第67図)

調査区北部、B 7～D 8 に位置する。溝の北側は調査区外に続き、南側は近現代の削平により消失する。S K 20及び倒木址 4 を切り、S K 52に切られる。規模は検出長9.60m、幅0.98m、深さ16cmを測る。断面形態は「U」字状を呈する。埋土は暗灰色土単層である。溝底は北から南に向けて緩傾斜をなす(比高差3cm)。遺物は埋土中から、土師器片・須恵器片が少量と、石器が出土した。

出土遺物 (第67図、図版17)

154は須恵器坏蓋である。天井部は丸味をもち、口縁部は直線的に下がる。口縁端部はやや内湾する。155は坏身である。たちあがりは内傾し、受部は外上方に延びる。156は甕形土器の口縁部片である。口縁部は「く」の字を呈し、口縁端部はやや内傾する。頸部内外面に稜をもつ。157は剣形の石製品か?両面には軽い研磨が施される。緑色片岩製。重量295.325g。

時期：出土した遺物の特徴から、溝SD 5の時期は古墳時代後期後半～末とする。



第67図 SD 5断面図・出土遺物実測図

(4) 土 坑

本調査にて、古墳時代の土坑9基を検出した。出土した遺物や切り合い関係から、古墳時代後期後半のものが2基、古墳時代後期以前のものが5基、後期以降のものが2基である。

1) 古墳時代後期後半

S K 33 (第68図)

調査区北東部、B 10区に位置する。S B 4・S D 6・S K 51に切られる。平面形態は楕円形を呈するものと考えられ、規模は長径1.55m、短径0.75m、深さ30cmを測る。断面形態は皿状を呈し、埋土は上下2層(①・②層)に分かれ、①層は灰褐色土(黄色土混入)、②層は黒灰色土である。基底面はほぼ平坦である。

遺物は埋土中から、須恵器片が少量出土した。土壌分析の結果、S K 33埋没当時はソバ属などが栽培される畑作が周辺地域で営まれていたものと推測されている。

出土遺物 (第68図)

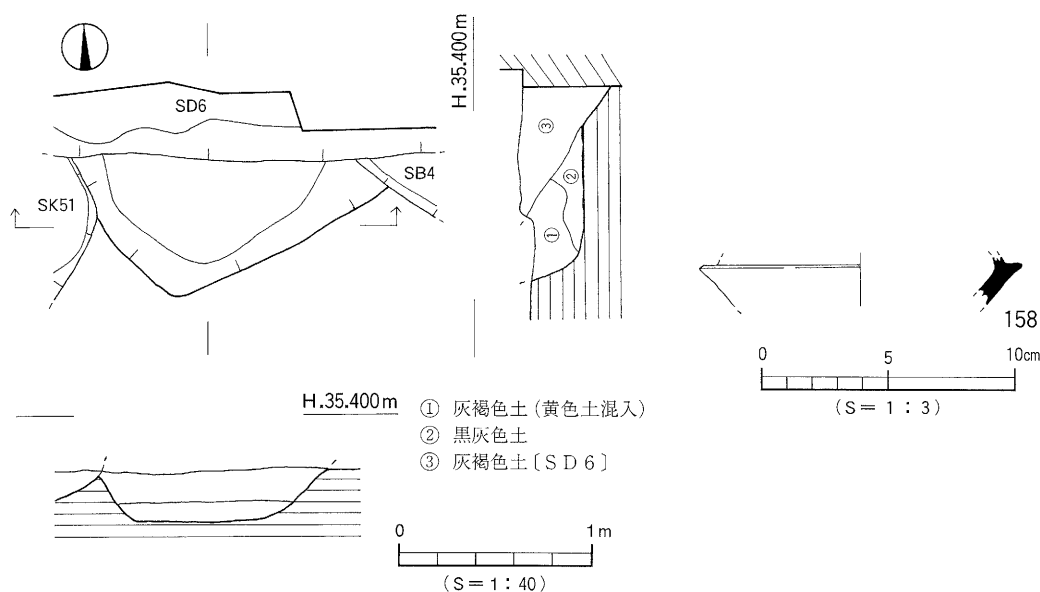
158は須恵器の坏身片である。受部は短く外上方に延びる。

S K 39 (第69図)

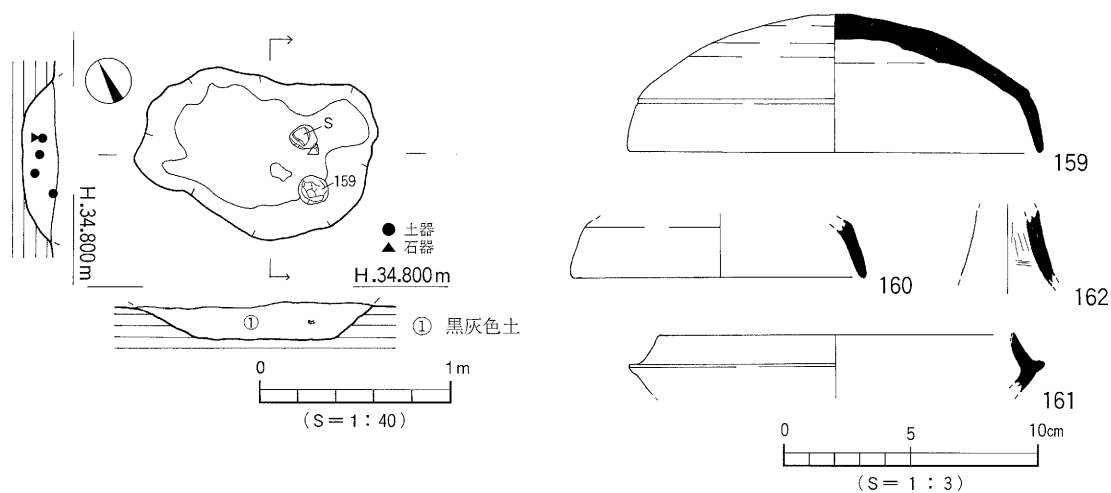
調査区南東部、H・I 9区に位置する。平面形態は不整楕円形を呈し、規模は長径1.30m、短径0.85m、深さ19cmを測る。断面形態はレンズ状を呈し、埋土は黒灰色土単層である。基底面はほぼ平坦である。遺物は埋土中から、須恵器片と弥生土器片が出土した。

出土遺物 (第69図)

159～162は須恵器片である。159・160は坏蓋片で、口縁部は直線的に下外方に延びる。159は口縁端部が尖り気味に丸い。160の口縁端部は丸い。161は坏身片である。たちあがりは内傾し、受部は外上方に短く延びる。162は高坏の脚部片である。



第68図 S K 33測量図・出土遺物実測図



第69図 S K 39測量図・出土遺物実測図

2) 古墳時代後期以前

S K 29 (第70図)

調査区西部、C4・5区に位置する。S K 19を切り、掘立3 (S P ⑬)と溝S D 3、S P 399に切られている。平面形態は長方形を呈し、規模は長さ1.95m、幅1.10m、深さ12cmを測る。断面形態は皿状を呈し、埋土は黒灰色土単層である。基底面はほぼ平坦である。土坑内からの遺物の出土はない。

時期：土坑内からの遺物の出土がなく時期決定は困難であるが、掘立3との切り合い関係から、S K 29は古墳時代後期以前の遺構とする。

S K 62 (第70図)

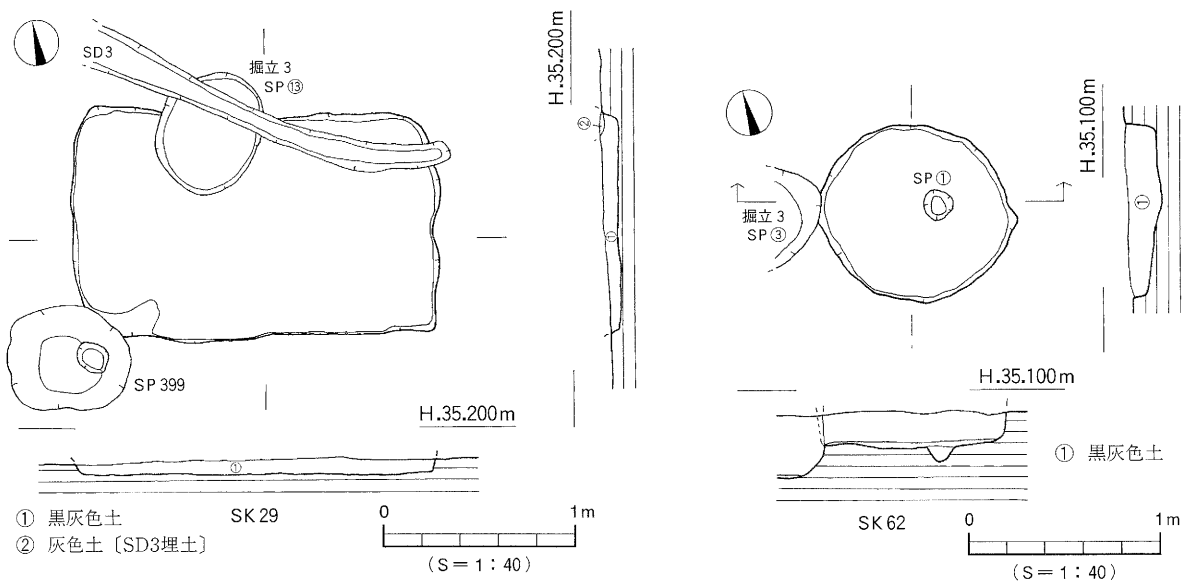
調査区北部、D6区に位置し、掘立3 (S P ③)に切られている。平面形態は円形を呈し、規模は径0.90m、深さ28cmを測る。断面形態は逆台形状を呈し、埋土は黒灰色土単層である。基底面にて径19cmのピット1基 (S P ①)を検出したが、土坑に伴うものかは不明である。土坑内からの遺物の出土はない。

時期：掘立3に切られることから、S K 62は古墳時代後期以前の遺構とする。

S K 43 (第21図)

調査区北西部、A2区に位置する。遺構南西隅は掘立4 (S P ⑪)に切れ、北側は調査区外に続く。平面形態は方形を呈するものと考えられ、規模は長軸0.80m、短軸0.65m、深さ12cmを測る。断面形態は皿状を呈し、埋土は暗灰色土単層である。基底面にて径25cmのピット1基 (S P ①)を検出したが、土坑に伴うものかは判断できなかった。土坑内からの遺物の出土はない。

時期：掘立4に切られることから、S K 43は古墳時代後期以前の遺構とする。



第70図 S K 29・62測量図

S K 50 (第21図)

調査区西部、A 3～B 3区に位置する。遺構北西部は掘立4 (SP①)に切れ、北側は調査区外に続く。平面形態は不定形を呈し、規模は長軸1.20m、短軸1.18m、深さ23cmを測る。断面形態は逆台形状を呈し、埋土は黒色土単層である。基底面はほぼ平坦である。土坑内からの遺物の出土はない。

時期：掘立4に切られることから、S K 50は古墳時代後期以前の遺構とする。

S K 30 (第21図)

調査区北西部、B 1区に位置し、S B 5に切られる。平面形態は方形を呈するものと考えられ、規模は一辺0.60m、深さ13cmを測る。断面形態は皿状を呈し、埋土は黒灰色土単層である。土坑内からの遺物の出土はない。

時期：S B 5に切られることから、S K 30は古墳時代後期以前の遺構とする。

3) 古墳時代後期以降

S K 51 (第71図)

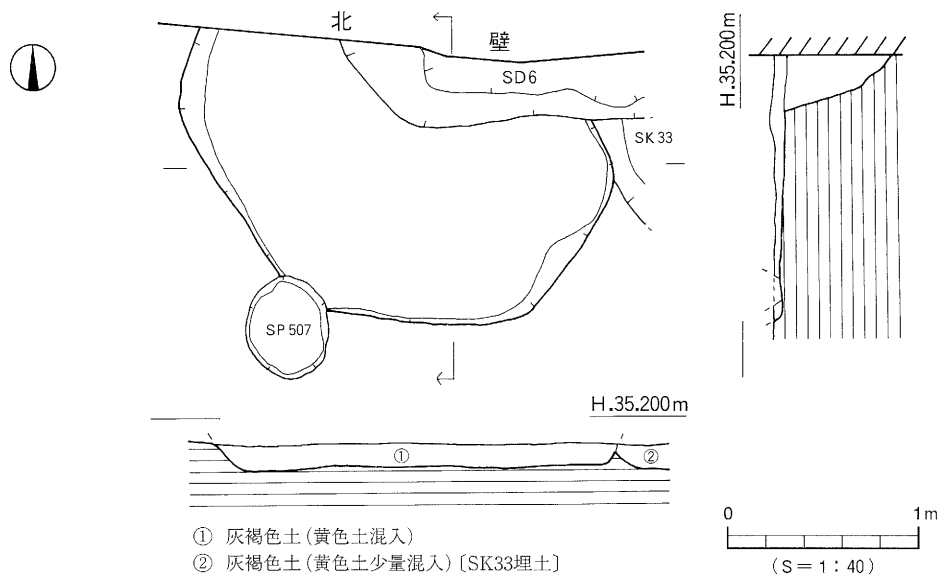
調査区北東部、B 9～C 10区に位置する。S K 33を切り、S D 6・S P 507に切られる。平面形態は楕円形を呈するものと考えられ、規模は長径2.10m、短径1.45m、深さ22cmを測る。断面形態は皿状を呈し、埋土は灰褐色土(黄色土混入)である。土坑内からの遺物の出土はない。

時期：S K 33との切り合い関係から、S K 51は古墳時代後期以降の遺構とする。

S K 52 (第21図)

調査区北部、B 8区に位置し、溝S D 5を切る。平面形態は長方形を呈するものと考えられ、規模は長さ1.20m、幅0.50m、深さ47cmを測る。断面形態は皿状を呈し、埋土は黒灰色土単層である。土坑内からの遺物の出土はない。

時期：S D 5との切り合い関係から、S K 52は古墳時代後期以降の遺構とする。



第71図 S K 51 測量図

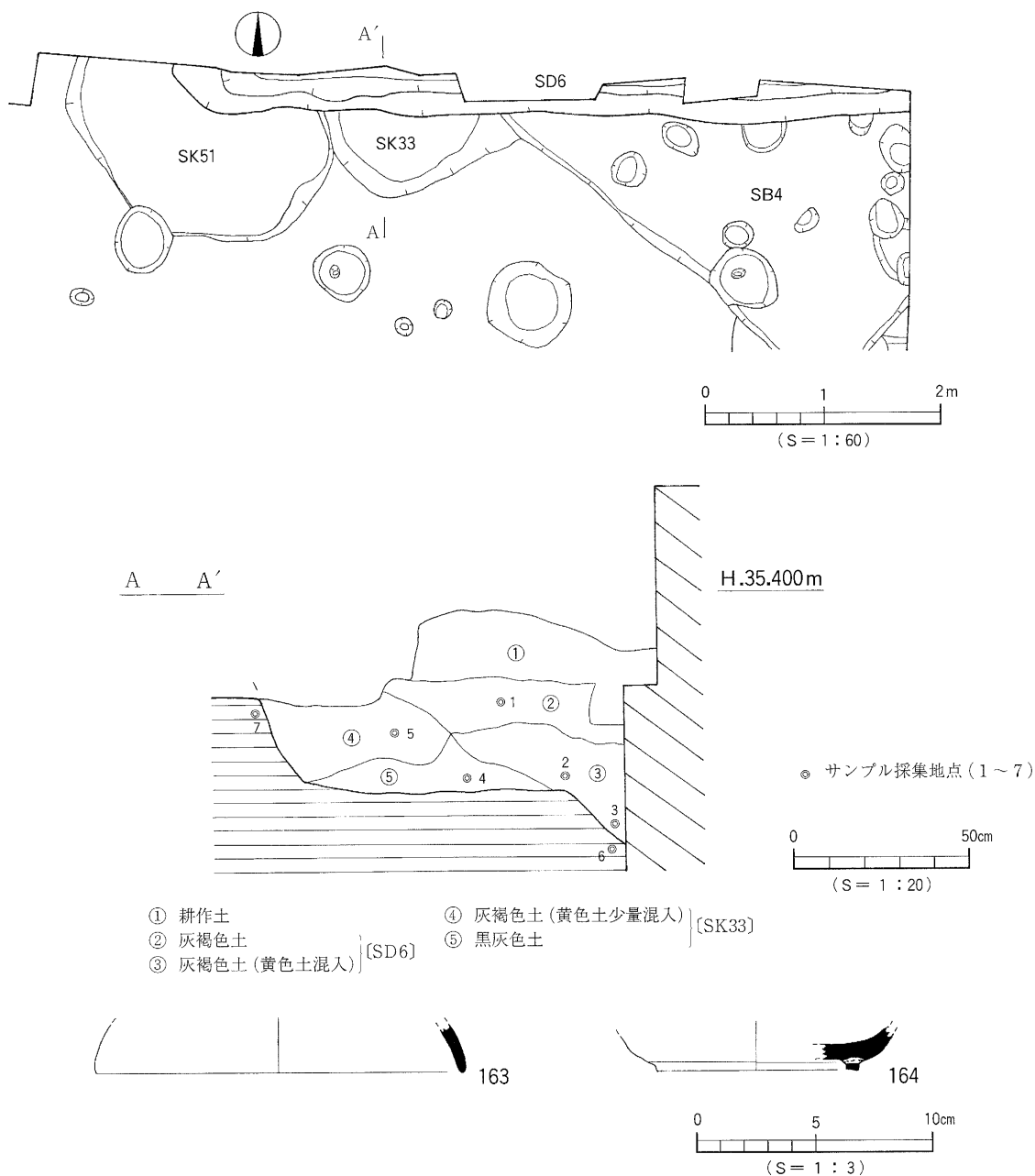
5. 古代の遺構と遺物

(1) 溝

本調査にて古代の溝1条(SD6)を検出した。

SD6 (第72図、図版15)

調査区北東部、B10・11区に位置し、SB4及びSK33・51を切る。溝の東部は調査区外に続き、西端は「L」字状に折れ曲がるものと考えられる。規模は検出長6.28m、検出幅0.40m、深さ37cmを測る。断面形態は「V」字状を呈し、溝下位は段掘り構造となる。埋土は上下2層に分かれ、上層は灰褐色土、下層は灰褐色土(黄色土混入)である。遺物は埋土中から、須恵器片が出土した。



第72図 SD6測量図・出土遺物実測図

出土遺物（第72図）

163は須恵器坏蓋片である。口縁部は内湾気味に下外方に下がり、口縁端部は丸い。164は高台付の坏である。高台は体底部の境より内側に付く。高台接地面はやや凹む。

時期：出土した遺物の特徴から、SD6は8世紀代の溝と考えられる。その後の調査にて、溝SD6は来住台地上にて展開される、8世紀代の正倉院を区画する溝の南西コーナー部分であることが判明している。

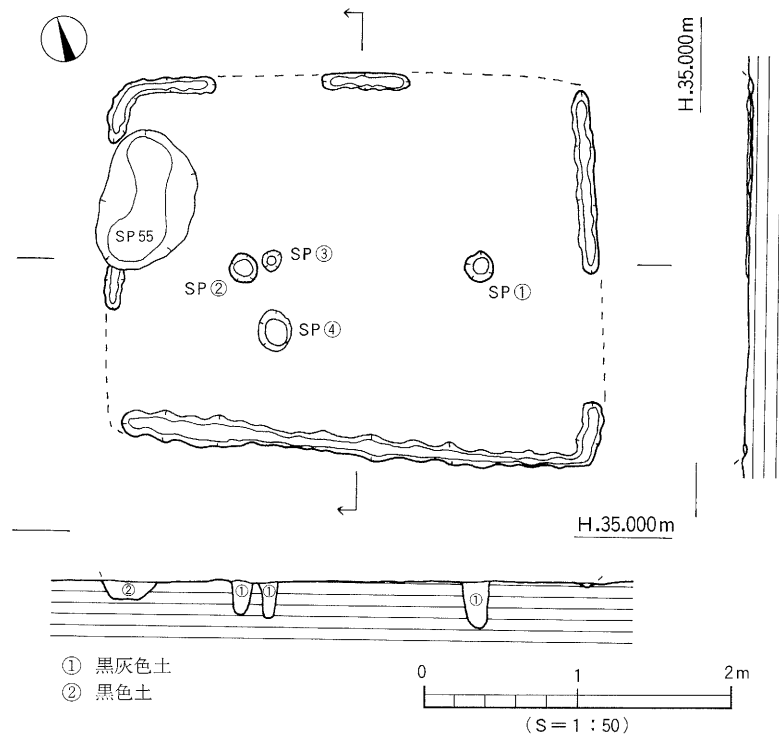
6. 時期不明の遺構と遺物

本調査にて時期特定の困難な遺構がある。竪穴式住居址1棟（SB2）、溝4条（SD1・3・7・8）、土坑19基である。

（1）竪穴式住居址

SB2（第73図）

調査区西部、E・F3区に位置し、SP55に切られる。壁体は消失し、主柱穴と周壁溝のみの検出である。柱穴の平面形態は円形を呈し、径18～20cm、深さ22～30cmを測る。柱穴埋土は黒灰色土単層である。周壁溝は住居址南西隅、南東部及び北壁の一部で途切れる。規模は幅18～20cm、深さ2cmを測る。周壁溝埋土は黒灰色土単層である。床面にて2基のピット（SP③・④）を検出した。SP③は埋土が主柱穴埋土と類似することから本住居に伴うものと考えられるが、SP④は不明である。主柱穴や周壁溝からの遺物の出土はない。



第73図 SB2測量図

(2) 溝 (第21図)

本調査にて時期不明の溝4条を検出した。

SD1

調査区南西部、G1～H4区に位置し、溝両端は消失する。SK5・倒木址7を切る。規模は検出長11.70m、幅0.26m、深さ8cmを測る。断面形態は「U」字状を呈し、埋土は暗灰色土単層である。溝底は東から西に向けて傾斜をなす(比高差14cm)。溝内からの遺物の出土はない。

SD3

調査区北部、B3～C5区に位置し、溝両端は消失する。掘立3(SP⑬)、SD2及びSK17・18を切る。規模は検出長7.85m、幅0.34m、深さ3cmを測る。断面形態は皿状を呈し、埋土は灰色土単層である。溝底は西から東に向けてわずかに傾斜をなす(比高差1cm)。溝内からの遺物の出土はない。

SD7

調査区東部、E10区に位置し、SP545に切られる。溝の北部は攪乱、南部は近現代の削平により消失する。規模は検出長1.00m、幅0.40m、深さ13cmを測る。断面形態は皿状を呈し、埋土は黒灰色土単層である。溝内からの遺物の出土はない。

SD8

調査区北東部、C11区に位置し、溝両端は消失する。規模は検出長1.58m、幅0.16m、深さ8cmを測る。断面形態は皿状を呈し、埋土は黒灰色土単層である。溝内からの遺物の出土はない。

(3) 土坑 (第21図)

本調査では土坑62基を検出し、時期不明の土坑は21基あり、これらの土坑は平面形態と埋土より分類することができる。平面形態は円形、楕円形、方形、長方形、不定形の5種類に分類できる。円形のもの4基(SK7・10・34・55・60)、楕円形は2基(SK8・49)、方形は5基(SK23・37・38・40・44)、長方形6基(SK6・12・26・42・48・54)、不定形1基(SK57)である。埋土は黒色土、黒灰色土、暗灰色土の3種類に分類できる。黒色土のものは2基(SK12・60)、黒灰色土は16基(SK6・7・10・23・34・37・38・40・42・44・48・49・53・54・55・57)、暗灰色土は2基(SK8・26)である。埋土から判断すると、暗灰色土より黒灰色土の土坑が、時期が下がる傾向がある。

7. その他の遺構と遺物

(1) 倒木址 (第21図)

本調査にて倒木址12基を検出した。調査工程の都合上、完掘は行わず、平面形態及び倒壊方向を調査するにとどめた。これらの倒木址は遺構の切り合い関係から、弥生時代以前のもの4基と古墳時代以前のもの3基がある。その他は時期不明である。

1) 弥生時代以前

弥生時代以前に時期比定できる倒木址は4基(倒木5・6・7・10)である。平面形態は楕円形を呈し、規模は長径0.5～3m、短径0.6～1mを測る。倒壊方向は倒木5・6が北北東、倒木7が南南西、倒木10が西である。

2) 古墳時代以前

古墳時代以前に時期比定できる倒木址は3基（倒木2・3・4）である。平面形態は楕円形を呈し、規模は長径2m、短径1.2mを測る。倒壊方向は倒木2が南西、倒木3が東である。倒木4は一部の検出であり不明である。

(2) ピット（第21図）

本調査にてピット540基（掘立柱建物柱穴54基を含む）を検出した。ピットは埋土の違いにより5グループに分類される。

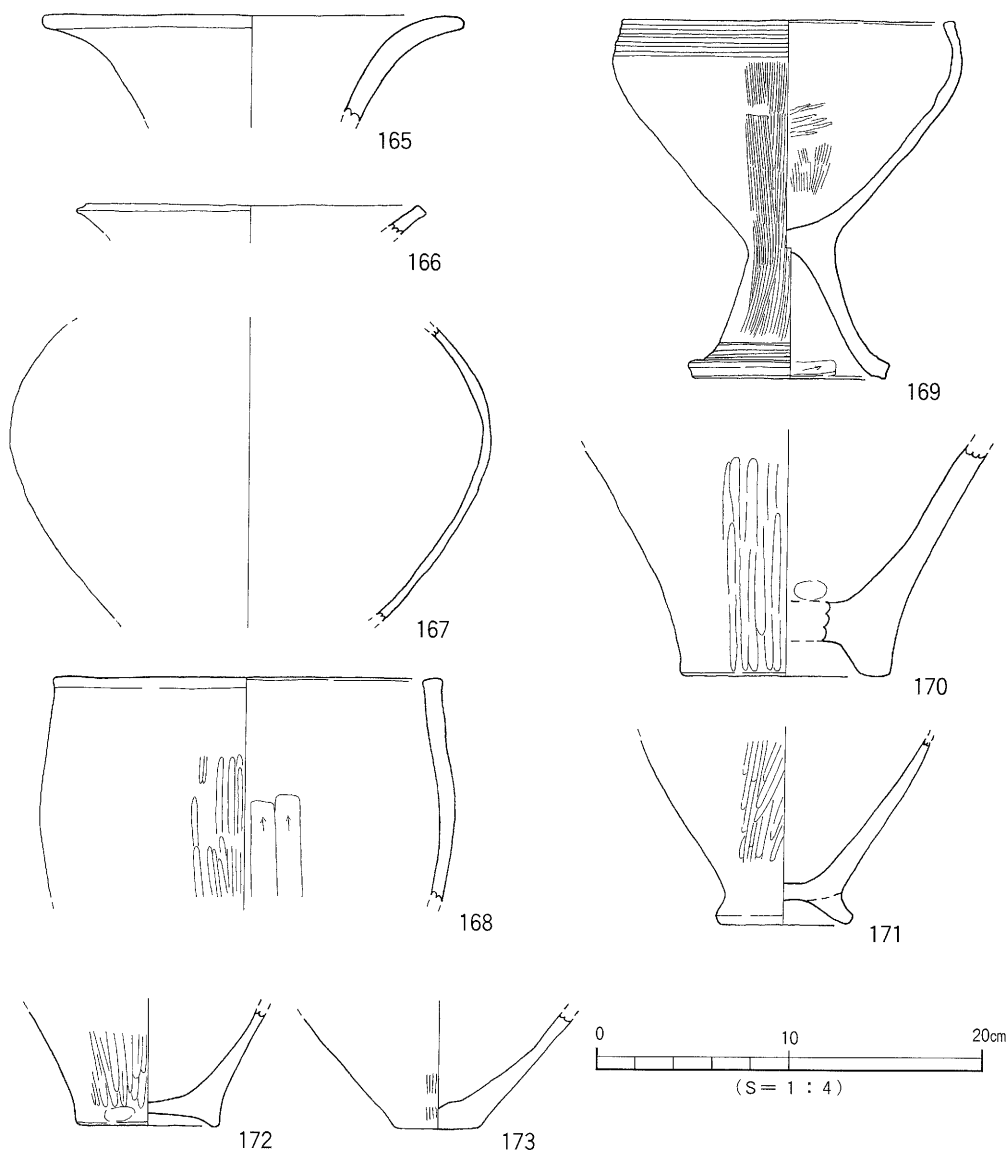
A類—黒灰色土の埋土をもつもので、最も多く検出した（353基）。

B類—黒褐色土の埋土をもつものである（84基）。

C類—黒褐色土（明褐色土混入）の埋土をもつもので、掘立2・3の柱穴埋土でもある（26基）。

D類—灰褐色土（明褐色土混入）の埋土をもつもので、掘立1・4の柱穴埋土でもある（28基）。

E類—暗灰色土の埋土をもつもので、検出は少数である。黒灰色土の埋土をもつものを切る（49基）。



第74図 SP4出土遺物実測図

これらのピットのうち、SP4・SP666からは比較的まとまった弥生土器が出土した。

SP4 (第21図)

調査区西部、E・F1区に位置する。平面形態は楕円形を呈し、規模は長径0.61m、短径0.42m、深さ40cmを測る。埋土は黒灰色土単層である。遺物は弥生時代中期後半の甕形土器、壺形土器、鉢形土器、高坏形土器が重なり合って出土した。

出土遺物 (第74図、図版18)

165・166は壺形土器の口縁部片である。165は口縁部が大きく外反し、口縁端部は丸い。166は口縁端面が凹む。167は壺形土器の胴部。扁球形の胴部で胴部中位に張りをもつ。168は鉢形土器で、直口口縁を呈する。口縁部はやや内湾気味に直線的に立ち上がる。口縁端部は面取りされる。169は高坏形土器である。口縁部はやや内湾し、口縁外面に凹線文4条、脚裾部外面に凹線文3条を施す。170～172は甕形土器の底部片である。170は立ち上がりをもつ上げ底、171はくびれの上げ底、172は立ち上がりをもつ平底となる。173は壺形土器の底部で、平底となる。

SP666 (第21図)

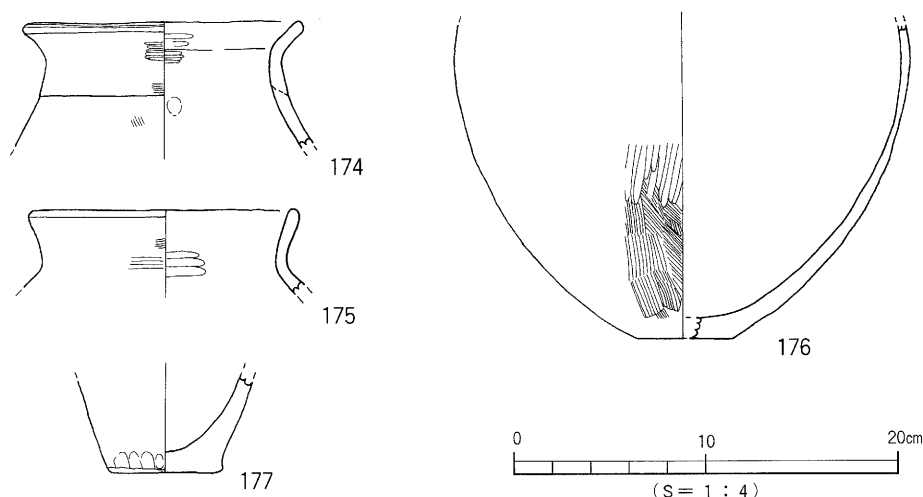
調査区東部、D10区に位置する。平面形態は楕円形を呈し、規模は長径0.60m、短径0.35m、深さ12cmを測る。埋土は黒灰色土単層である。遺物は弥生時代前期末～中期初頭の壺形土器が出土した。

出土遺物 (第75図、図版18)

174・175は壺形土器の口縁部片である。174は口縁部がやや外反し、口縁端部は丸い。175は口縁部が直線的に上方に延び、口縁端部は丸い。176・177は壺形土器の底部である。176は球形の胴部で、胴部上位に張りをもつ。177は立ち上がりをもつ平底となる。

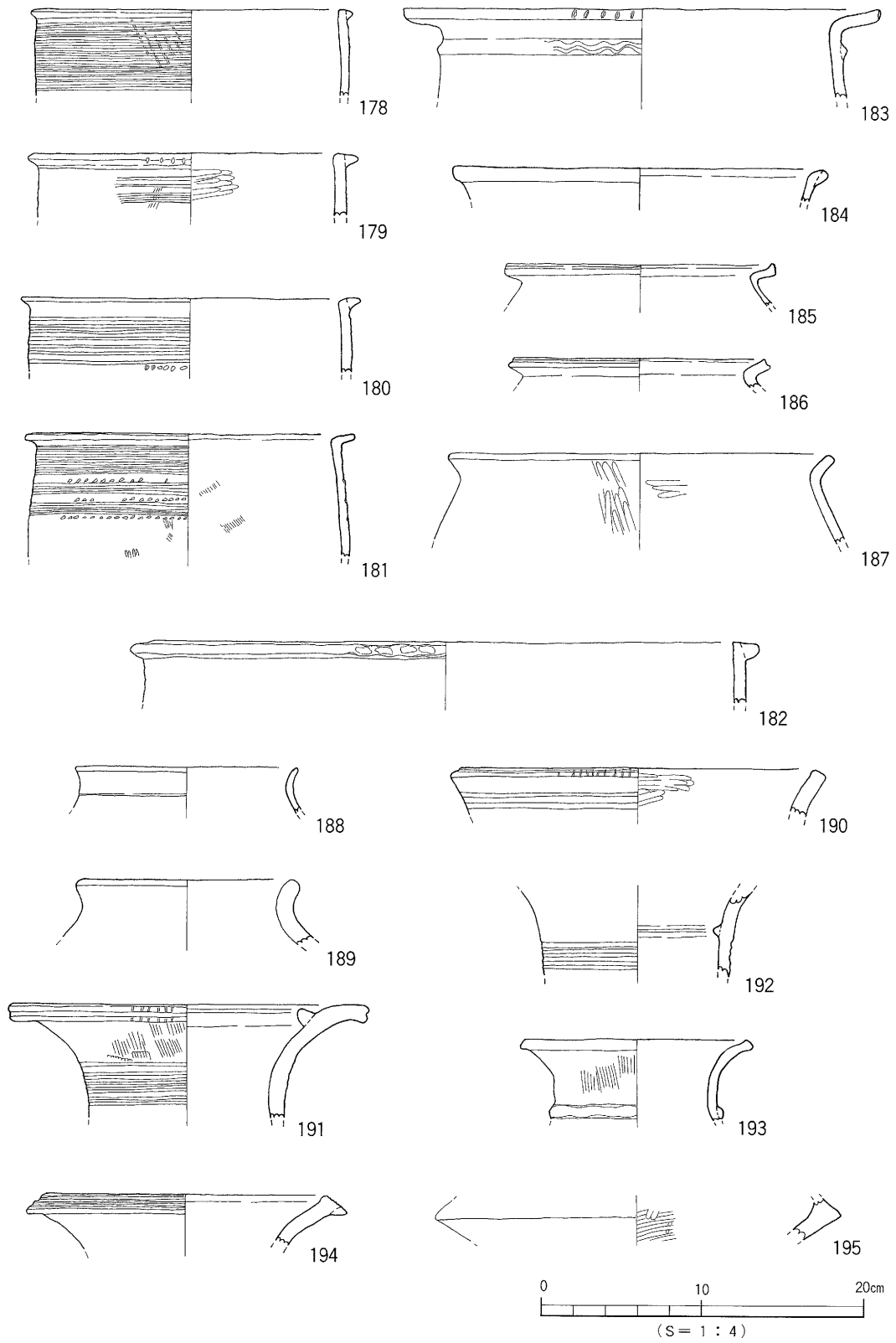
その他のピット出土遺物 (第76・77図、図版18)

SP4・SP666以外のピットからも、弥生時代前期から古墳時代の土器や石器が出土している。図化しうるものを第76・77図に掲載した。



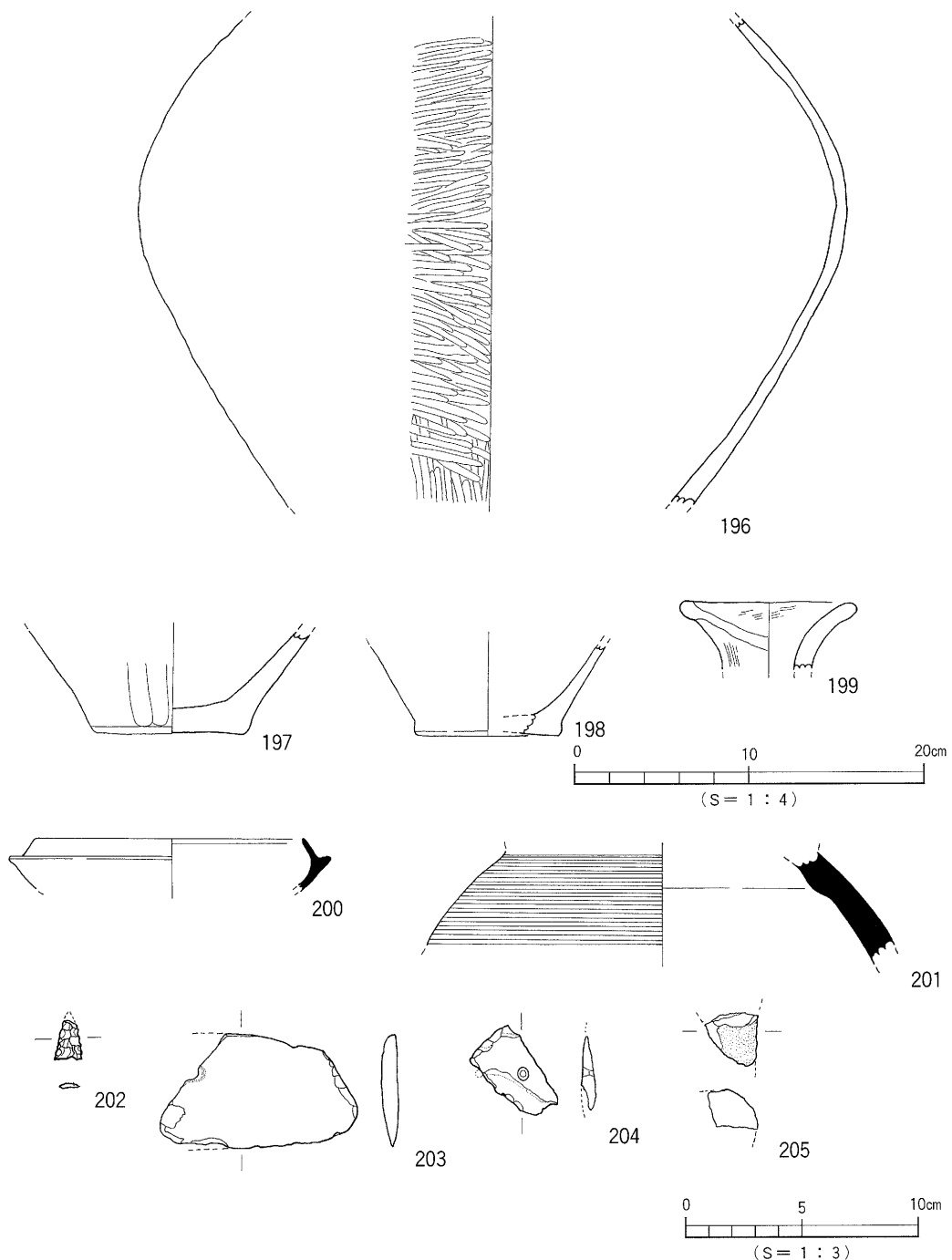
第75図 SP666出土遺物実測図

その他の遺構と遺物



第76図 ピット出土遺物実測図(1)

178～187は甕形土器である。178～180・182・184は貼り付け、181・183・185～187は折り曲げにより口縁部を成形する。179・183は口縁端面に刻目を施す。182は口縁端面に押圧文を施す。185・186は口縁端部を上方につまみ上げ、端面に凹線文1条を施す。188～195は壺形土器である。191は口縁部内面、192は頸部内面にそれぞれ断面三角形の凸帯を貼り付ける。193は頸部に凸帯を貼り付け、凸帯上を押圧する。194は口縁端部を上下方に拡張し、口縁端面に凹線文4条を施す。195は複合口縁壺である。196は壺形土器の胴部、197・198は底部である。197・198はやや突出部をもつ平底となる。199は支脚形土器。受部は斜めにカットされる。200・201は須恵器。200は坏身、201は壺の肩部片である。202～205は石器である。202は打製の凹基無茎石鏃で、平面形態は二等辺三角形

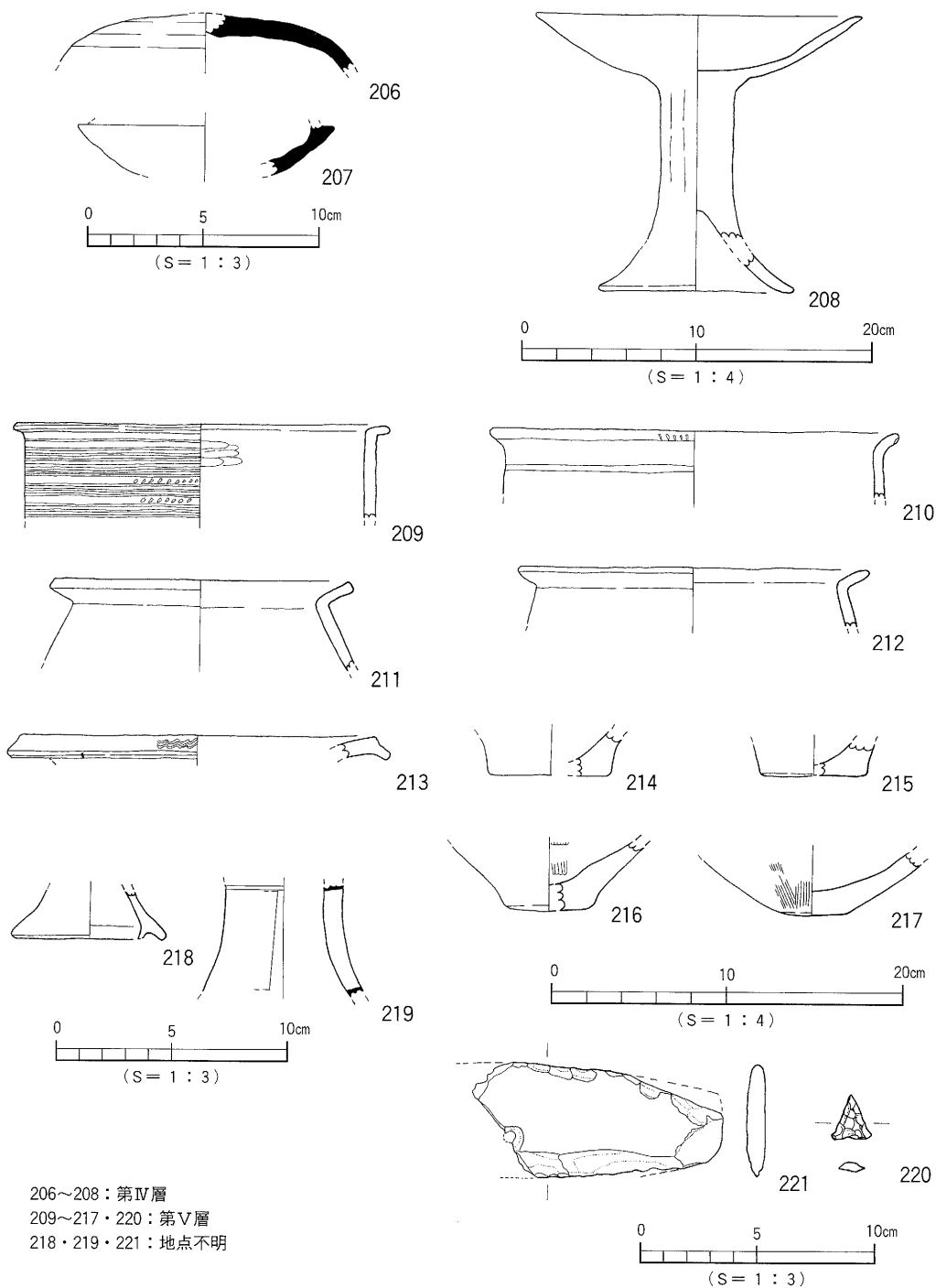


第77図 ピット出土遺物実測図(2)

を呈する。サヌカイト製。重量0.389 g。203・204は磨製の石庖丁である。203は平面形態は隅丸台形状を呈し、敲打後回転穿孔により孔を穿つ。重量46.444 g。204は金属製工具により回転穿孔にて孔を穿つ。緑色片岩製。重量8.411 g。205は用途不明の石器である。重量8.143 g。

(3) 包含層・地点不明出土遺物 (第78図、図版18)

本調査にて包含層である第Ⅳ・Ⅴ層中から、弥生時代から古代までの遺物が出土した。また、地点不明ではあるが須恵器・磁器・石器が出土している。



206~208 : 第Ⅳ層
 209~217・220 : 第Ⅴ層
 218・219・221 : 地点不明

第78図 包含層・地点不明出土遺物実測図

206～208は第Ⅳ層、209～217・220は第Ⅴ層、218・219・221は地点不明出土品である。206・207は須恵器。206は坏蓋、207は坏身である。208は土師器の高坏。坏部は浅い椀形を呈する。柱部は円筒状で、裾部は緩やかに外反する。坏部内面に丁寧なヘラミガキ調整を施す。209～217は弥生土器。209～212は甕形土器の口縁部である。209は胴部に沈線文間に刺突文、210はヘラ描き沈線文1条を施す。弥生前期。211・212は口縁部が「く」字状を呈する。213は壺形土器の口縁部。口縁部は垂下し、口縁端面に波状文を施す。214・215は甕形土器、216・217は壺形土器の底部である。218は磁器の蓋である。断面三角形状のかえりをもつ。219は須恵器高坏。3方向の透かしを看取する。220・221は石器である。220は打製の凹基無茎石鏃である。サヌカイト製。重量0.764 g。221は磨製の石庖丁である。平面形態は長方形を呈し、材質は緑色片岩である。重量46.446 g。

8. 小 結

(1) 遺構と遺物

本調査では竪穴式住居址5棟、掘立柱建物址4棟、溝8条、土坑62基、柱穴671基、倒木址12基を確認した。以下、時代ごとにまとめを行う。

1) 弥生時代

弥生時代の遺構には竪穴式住居址2棟（S B 1・3）と土坑、溝がある。

①竪穴式住居址

S B 1・3は弥生時代後期後半に時期比定されるものである。両者共に住居址の南側は調査区外に続いたため、部分的な検出である。平面形態は長方形を呈するものと考えられ、2本の支柱穴、周壁溝を検出した。支柱穴は、おそらくその配置から4本であると考えられる。住居址に付随する炉は確認できなかった。規模はS B 1がS B 3に比べてやや大きく、建物主軸はS B 1がほぼ真北であるのに対して、S B 3はやや東に振る。方位は若干ずれるが、同時期に存在した可能性がある。来住台地の南西地域での弥生時代後期後半の住居址の検出例は少なく、当地域の弥生後期における集落の広がりを知るうえで貴重な資料といえよう。

②土 坑

弥生時代の土坑は32基を検出した。平面形態は長方形や円形を呈する。これらの土坑は弥生時代前期末から後期までのものである。なかでも前期末～中期初頭のもものが22基確認された。

当該期の土坑は壁体が垂直に立ち上がるものや、一部袋状のもの（S K 46・59）がみられる。調査地に南接する久米高畑遺跡5次調査地からも、当該期の不定形の土坑2基が検出されている。来住台地では近年の調査で、このような土坑の検出例は多く、壁体の形状や配置の在り方から貯蔵穴の可能性が考えられている。今回の調査で確認した土坑群は、これらの資料を補充する資料となる。

2) 古墳時代

古墳時代の遺構には竪穴式住居址2棟（S B 4・5）、掘立柱建物址4棟と土坑、溝がある。

①竪穴式住居址

S B 5は古墳時代後期に時期比定される住居址である。支柱穴と周壁溝、土坑を検出した。平面形態は方形を呈するものと思われる。2本の支柱穴を検出したが、その配置から、本来は4本柱であると考えられる。住居址に付随する炉の確認はできなかった。S B 4は、出土遺物から古墳時代後期に

属するものであり、SD6に切られるため下限を8世紀におくことができる。当調査地に南接する久米高畑遺跡5次調査地からも当該期の竪穴式住居址が確認されており、調査地及び周辺地域は、弥生時代から古墳時代を通して居住域として広く利用されていたものと判断される。

②掘立柱建物址

掘立1～4はすべて古墳時代後期に時期比定される建物址である。とりわけ、掘立1は廂が付く建物構造である。柱穴掘り方は4棟共に円～楕円形を呈する。

建物方位で2つに分かれ、掘立1・4は真北方向、掘立2・3は磁北に近い方向をとる。掘り方埋土でも両者は異なり、掘立1・4は灰褐色土、掘立2・3は黒褐色土を基調とする。おそらく両者には造営に時期差があるものと考えられるが、明確な時期特定はしかなる。

3) 古 代

SD6は古代(8世紀)に時期比定される溝である。来住台地の南西地域に展開する正倉院を囲う溝の南西コーナー部と考えられ、溝は北に延びるものと推測される。過去に行われた久米高畑遺跡10次調査地では、溝の北西コーナー部が確認されており、今回の調査結果より、正倉院を囲う溝の規模がほぼ確定することができたことは大きな成果である。

(2) 弥生時代前期の土坑

今回の調査において、弥生時代前期～中期初頭に時期比定される土坑は22基である。これらの土坑を平面形態、規模、方位で分類を行う。

平面形態と規模では以下のように分類される。規模は床面積2㎡以上のものを大型、2㎡未満のものを小型とした。

- ① 円形—大型1基(SK56)、小型4基(SK1・9・27・41)
- ② 楕円形—小型2基(SK5・45)
- ③ 方形—大型1基(SK13)、小型1基(SK25)
- ④ 長方形—大型5基(SK11・14・18・46・58)、小型6基(SK3・16・19・21・36・59)
- ⑤ 不定形—大型2基(SK32・61)

このうち、11基の長方形土坑は、長軸が南北方向に平行もしくは直交するものと、北西—南東方向のもの3種類に分類される。

- ① 南北…小型2基(SK18・58)
- ② 東西…大型1基(SK46)、小型6基(SK3・16・19・21・36・59)
- ③ 北西—南東…大型2基(SK11・14)

この結果、長軸方向が南北に平行もしくは直交するものが11基中9基あり、なんらかの意図があるものと推測される。しかしながら、その配置に規則性は認められなかった。

久米高畑遺跡27次調査地

表17 竪穴式住居址一覧

竪穴 (SB)	時期	平面形	規模 (m) 長さ(長径)×幅(短径)×深さ	埋土	床面積 (㎡)	主柱穴 (本)	内部施設				周壁溝	備考
							高床	土坑	炉	カマド		
1	弥生後期 後半	方形もしくは 長方形	5.06×2.04+α×0.26	黒灰色土	10.32+α	2(4)					○	SP 671、攪乱に 切られる。
2	不明	長方形	3.20×2.52	黒灰色土	8.06	2					○	SP 55に切られ る。
3	弥生後期 後半	隅丸方形し くは長方形	4.00+α×0.59+α×0.18	黒灰色土	2.36+α	2(4)					○	SK 59、SP 72を切 り攪乱に切られる。
4	古墳後期以降 ~古代以前	方形	3.60+α×2.10+α×0.14	黒灰色土	7.56+α	2(4)						SK 33・41を切りSP 516、SD6に切られる。
5	古墳後期	方形	3.75+α×1.25+α	黒褐色土	4.69+α	2(4)		○			○	SK 30を切る。

表18 掘立柱建物址一覧

掘立	規模 (間)	方向	桁行		梁行		方位	床面積 (㎡)	時期	備考
			実長(m)	柱間寸法(m)	実長(m)	柱間寸法(m)				
1	3×2	東西	5.96	2.16・1.70・2.10	3.20	1.56・1.64	N-1°-E	19.07	古墳後期	倒木8を切る。
2	3×3	東西	4.80	1.40・1.60・1.80	4.52	1.54・1.54・1.44	N-21°-W	21.70	古墳後期	
3	4×3	東西	6.64	1.90・1.40・1.62・1.72	4.92	1.70・1.70・1.52	N-15°-W	32.67	古墳後期	SK 28・29・32・47・62 を切りSD3に切られる。
4	4×3	東西	5.80	1.50・1.50・1.50・1.30	4.24	1.30・1.44・1.50	N-6°-E	24.60	古墳後期	SK 43・50及びS D4・倒木2を切る。

表19 溝一覧

溝 (SD)	地区	断面形	規模 (m) 長さ×幅×深さ	方向	埋土	出土遺物	時期	備考
1	G 1~H 4	U字状	11.70×0.26×0.08	東→西	暗灰色土		不明	SK 5・倒木7 を切る。
2	B 6~C 2	皿状	16.60×0.58×0.11	北東→ 南西	暗灰色土	弥生 土師 須恵	古墳後期 後半	SK 14・16・17・18・22 を切りSD3に切られる。
3	B 3~C 5	皿状	7.85×0.34×0.03	北西→ 南東	灰色土		不明	掘立3、SK 17・ 18、SD2を切る。
4	A 3~B 2	U字状	3.20×0.51×0.35	北→南	黒灰色土	弥生 石器	弥生後期 前半	掘立4に切られ る。
5	B 7~D 8	U字状	9.60×0.98×0.16	北→南	暗灰色土	須恵・石器 土師	古墳後期 後半~末	SK 20・倒木4を切 り、SK 52に切られる。
6	B 10~B 11	V字状	6.28+α×0.40+α×0.37	東西	⑤ 黒灰色土 ⑥ 黒灰色土 (黄色土混入)	須恵	8世紀	SB 4・SK 33・ SK 51を切る。
7	E 10	皿状	1.00+α×0.40×0.13	北→南	黒灰色土		不明	SP 545、攪乱 に切られる。
8	C 11	皿状	1.58×0.16×0.08	北西→ 南東	黒灰色土		不明	

表20 土坑一覧

(1)

土坑 (SK)	地区	平面形	断面形	規模 (m) 長さ(長径)×幅(短径)×深さ	床面積 (㎡)	埋土	出土遺物	時期	備考
1	C 6	円形	皿状	1.00×0.96×0.24	0.79	黒灰色土	弥生	弥生前期末 ~中期初頭	
2	D1・2	不整楕円形	皿状	1.82×1.04×0.36	1.30	黒灰色土	弥生 石器	弥生中期 後葉	倒木6を切りSP305・ 308に切られる。

遺構一覽

土坑一覽

(2)

土坑 (SK)	地区	平面形	断面形	規模 (m) 長さ(長径)×幅(短径)×深さ	床面積 (㎡)	埋土	出土遺物	時期	備考
3	H 1	不整長方形	皿状	1.20×1.00×0.15	1.20	黒灰色土	弥生	弥生前期末 ~中期初頭	S P 475・476 に切られる。
4	G 2	楕円形	逆台形状	1.00×0.78×0.29	0.80	黒灰色土	弥生	弥生中期 後葉	倒木7を切る。
5	G 3~ H 3	不整楕円形	逆台形状	1.40×1.10×0.16	1.54	黒灰色土	弥生	弥生前期末 ~中期初頭	S D 1に切られる。
6	E 4	長方形	皿状	1.45×1.05×0.14	1.52	黒灰色土		不明	
7	G 3~ H 4	円形	レンズ状	1.10×1.10×0.26	0.95	黒灰色土		不明	
8	G 5~ H 5	楕円形	皿状	1.55×1.15×0.20	1.78	暗灰色土	弥生	不明	
9	C 7	不整円形	皿状	1.00×0.95×0.12	0.79	黒灰色土	縄文 弥生	弥生前期末 ~中期初頭	
10	C 7~ D 7	不整円形	皿状	1.35×1.25×0.32	1.69	黒灰色土		不明	
11	E 6~ F 6	長方形	皿状	2.15×1.60×0.18	3.44	黒褐色土	弥生 石器	弥生前期末 ~中期初頭	炭化物・焼土あり。 倒木5を切る。
12	G 7~ H 7	不整長方形	播鉢状	2.20×0.90×0.18	1.80+α	黒色土		不明	攪乱に切られる。
13	C 2~ D 2	不整方形	皿状	2.10×2.10×0.33	4.41	黒灰色土	弥生	弥生前期末 ~中期初頭	2基の土坑が重複。
14	B 2~ C 2	長方形	皿状	2.00×1.30×0.19	2.60	黒灰色土	弥生 石器	弥生前期末 ~中期初頭	S D 2に切られる。
15	D 6・7	円形	レンズ状	1.55+α×1.50×0.16	1.89+α	黒灰色土	弥生	弥生中期 中葉	炭化物・焼土あり。 SP 196・365・366 に切られる。
16	C 3	長方形	皿状	1.95×0.90×0.15	1.76	黒灰色土	弥生	弥生前期末 ~中期初頭	S D 2に切られる。
17	B 3~ C 4	長方形	皿状	3.10×1.85×0.12	5.74	黒灰色土	弥生	弥生中期 中葉	SK 18・35を切り、 SD2・3に切られる。
18	C 4	長方形	逆台形状	1.73+α×1.30×0.18	2.25+α	黒灰色土	弥生	弥生前期末 ~中期初頭	SD2・3及び2基の ピットに切られる。
19	C 4・5	長方形	レンズ状	1.45×1.10×0.24	1.60	黒灰色土	弥生	弥生前期末 ~中期初頭	S K 29・S D 3に切られる。
20	B 7~ C 7	長方形	逆台形状	1.10×0.80×0.22	0.88	黒灰色土	弥生 石器	弥生後期 前半	S D 5に切られる。
21	C 4・5	長方形	皿状	1.75×0.96×0.18	1.68	黒灰色土 (黄色土混入)	弥生	弥生前期末 ~中期初頭	S K 19に切られる。
22	B 5・6	楕円形	皿状	1.90×1.10×0.04	2.10	暗灰色土 (黄色土混入)	弥生	弥生後期 前半	SK 45を切り、S D 2に切られる。
23	F 5・6	不整方形	皿状	0.85×0.80×0.12	0.68	黒灰色土		不明	
24	D 7	不整長方形	皿状	2.75×1.45×0.23	3.99	黒灰色土 (黄色土少量混入)	弥生 石器	弥生中期 後葉	S P 354を切る。
25	B 5	不整方形	皿状	1.50×1.20×0.06	1.80	黒灰色土	弥生	弥生前期末 ~中期初頭	S P 279に切られる。
26	H 3・4	長方形	レンズ状	2.70+2×0.25+2×0.08	0.68+α	暗灰色土		不明	
27	B 2~ C 2	円形	皿状	1.40×1.40×0.12	1.54	黒灰色土	弥生	弥生前期末 ~中期初頭	
28	C 5・6	長方形	逆台形状	2.00×1.15×0.17	2.30	暗灰色土	弥生 石器	弥生中期 後葉	掘立3に切られる。

久米高畑遺跡27次調査地

土坑一覧

(3)

土坑 (SK)	地区	平面形	断面形	規模 (m) 長さ(長径)×幅(短径)×深さ	床面積 (㎡)	埋土	出土遺物	時期	備考
29	C4・5	長方形	皿状	1.95×1.10×0.12	2.15	黒灰色土		古墳後期 以前	SK19を切り、掘立3・S D3・SP399に切られる。
30	B1	方形	皿状	0.60+α×0.60+α×0.13	0.36+α	黒灰色土		古墳後期 以前	S B 5 に切られる。
31	C11	不整形	皿状	0.60+2×0.20+2×0.19	0.12+α	黒褐色土		不明	SB4・SK41に 切られる。
32	C4~D4	不定形	皿状	2.90+α×2.20×0.23	6.38+α	暗灰色土	弥生	弥生前期末 ~中期初頭	掘立3及び4基の ピットに切られる。
33	B10	楕円形	皿状	1.55+α×0.75×0.30	0.88+α	① 灰褐色土 (黄色土混入) ② 黒灰色土	須恵	古墳後期 後半	SB4・SD6・SK 51に切られる。
34	C5・6	円形	皿状	0.95×0.92×0.09	0.71	黒灰色土		不明	
35	C4	円形	逆台形状	1.10×1.10×0.35	0.95	暗灰色土		弥生中期 中葉以前	SP393を切り、S K17に切られる。
36	C5~D5	不整形	皿状	1.25×0.40×0.12	0.50	黒灰色土	弥生	弥生前期末 ~中期初頭	
37	H7~I7	方形	皿状	1.30+2×0.80×0.22	1.04+α	黒灰色土 (黒褐色土混)		不明	
38	I8・9	方形	皿状	2.10×0.75+2×0.13	1.58+α	黒灰色土		不明	
39	H9~I9	不整形楕円形	レンズ状	1.30×0.85×0.19	1.06	黒灰色土	弥生 須恵	古墳後期 後半	
40	G10	不整形	レンズ状	1.10×0.70×0.13	0.77	黒灰色土		不明	
41	C11	不整形	逆台形状	1.50×0.80×0.49	1.77	黒灰色土	弥生 石器	弥生前期末 ~中期初頭	S B 4 に切られる。
42	B7	長方形	皿状	1.50+2×0.80×0.14	1.20+α	黒灰色土		不明	
43	A2	方形	皿状	0.80+α×0.65×0.12	0.52+α	暗灰色土		古墳後期 以前	掘立4に切られる。
44	D4	方形	皿状	1.10×1.10×0.04	1.21	黒灰色土		不明	
45	B5・6	不整形楕円形	皿状	1.30×1.00×0.13	1.30	黒灰色土	弥生	弥生前期末 ~中期初頭	S K 22、S P 317に切られる。
46	D10・11	長方形	袋状	2.00×1.40×0.38	2.80	① 黒灰色土 ② 黒灰色土 (黄色土混入)	弥生 石器	弥生前期末 ~中期初頭	貯蔵穴
47	C5~D6	不整形	皿状	1.50×1.00×0.18	1.50	黒灰色土	弥生	弥生中期 後葉	掘立3・SP426・S P427に切られる。
48	C8	不整形	皿状	1.00×0.70×0.20	0.70	黒灰色土 (黄色土混入)		不明	
49	B7~C7	楕円形	皿状	1.10×0.80×0.15	0.82	黒灰色土		不明	
50	A3~B3	不定形	逆台形状	1.20+α×1.18+α×0.23	1.42+α	黒色土		古墳後期 以前	掘立4に切られる。
51	B9~C10	楕円形	皿状	2.10+α×1.45×0.22	3.46+α	灰褐色土 (黄色土混入)		古墳後期 以降	SK33を切り、SD6・ SP507に切られる。
52	B8	長方形	皿状	1.20×0.50×0.47	0.60	黒灰色土		古墳後期 以降	S D 5 を切る。
53	E10・11	方形	レンズ状	1.70×0.60+α×0.15	1.02+α	黒灰色土		不明	
54	E8~F8	長方形	皿状	1.95+α×1.25×0.12	2.44+α	黒灰色土		不明	

遺物観察表

土坑一覽

(4)

土坑 (SK)	地区	平面形	断面形	規模 (m) 長さ(長径)×幅(短径)×深さ	床面積 (m ²)	埋土	出土遺物	時期	備考
55	E9・10	円形	皿状	1.50 + a × 1.15 × 0.19	1.73+a	黒灰色土		不明	
56	D9~E9	円形	皿状	2.15 × 1.35 × 0.12	3.63	黒灰色土	弥生	弥生前期末 ~中期初頭	SP 548・569・ 581に切られる。
57	D 11	不定形	皿状	1.65 × 1.50 + a × 0.14	2.48+a	黒灰色土		不明	
58	C9~D10	長方形	逆台形状	2.25 × 1.30 × 0.25	2.93	⓪ 黒灰色土 ⓫ 黒灰色土 (黄色土混入)	弥生	弥生前期末 ~中期初頭	倒木10を切り、SP 549・583に切られる。
59	H5~I6	長方形	袋状	1.50 × 1.10 × 0.37	1.65	黒灰色土 (黄色土混入)	弥生	弥生前期末 ~中期初頭	貯蔵穴。SP 72・ 487を切る。
60	C 11	円形	レンズ状	1.10 + a × 1.10 + a × 0.21	0.95+a	黒色土		不明	
61	G 6	不定形	皿状	2.90 × 1.70 × 0.22	4.93	黒灰色土 (黄色土混入)	弥生 石器	弥生前期末 ~中期初頭	SP 484 に切ら れる。
62	D 6	円形	逆台形状	0.95 × 0.90 × 0.28	0.71	黒灰色土		古墳後期以前	掘立3に切られ る。

表21 S B 1 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		(外面) 色調 (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外 面	内 面				
1	甕	口径 (15.0) 残高 4.6	「く」の字状口縁。頸部内外面に明瞭な稜をもつ。口縁端部は小さい面をもつ。口縁部小片。	⓪ 口縁 ヨコナデ ⓫ ハケ (7~8本/cm)	ハケ	乳褐色 乳褐色	石・長(1~3) ○		
2	壺	口径 (15.8) 残高 4.1	複合口縁壺。口縁端部は内傾する。口縁端部は丸い。口縁部小片。	⓪ 口縁 ハクリ ⓫ ハケ(10本/cm)	ハクリ	乳橙色 乳白色	石・長(1~3) ○		
3	鉢	口径 (10.1) 残高 5.1	直口口縁。内湾する口縁部。口縁端部は丸い。口縁部1/2残存。	マメツ	マメツ	乳白色 乳黄白色	石・長(1~4) ○		
4	高坏	口径 (19.6) 残高 4.0	ゆるやかに外反し、外上方にのびる口縁部。口縁端部は丸い。口縁部小片。	マメツ	マメツ	乳黄褐色 乳黄色	石・長(1~4) ○		
5	高坏	残高 5.5	脚部片。焼成前穿孔(φ9mm)。脚部小片。	ハケ(8本/cm)	しほり痕	乳黄色 乳黄色	石・長(1~2) ○		
6	甕	底径 2.5 残高 2.3	突出する小さい平底。	ナデ	ハケ(8本/cm)	褐色 褐色	密 ○		
7	壺	底径 (3.0) 残高 1.7	突出する小さい平底。	マメツ	ナデ	褐色 赤橙色	密 ○		
8	鉢	底径 (3.0) 残高 3.5	わずかに上げ底。	ハケ(5~6本/cm)	ハケ(5~8本/cm)	乳褐色 乳黄白色	石・長(1~4) ○		

表22 S B 3 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		(外面) 色調 (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外 面	内 面				
9	壺	底径 3.4 残高 10.3	丸みのある平底。	ハケ(4~5本/cm)	ハケ→ナデ	乳白色 乳白色	石・長(1~4) ○	黒斑	

表23 S D 4 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
10	甕	口径 (21.8) 残高 6.5	「く」の字状口縁。やや外反し外上方にのびる口縁部。口縁端部は「コ」の字状。頸部外面に不明瞭な稜をもつ。小片。	㊶(口端) ヨコナデ ㊷ ナデ→ハケ	㊶ ヨコナデ ㊷(皿上) ナデ	乳白色 乳白色	石・長(1~4) ○		
11	壺	底径 6.7 残高 4.6	コシキ形土器。壺形土器の転用品。立ち上がりのある厚い平底。焼成後穿孔(φ9mm)。	マメツ	ナデ	乳褐色 褐色	石・長(1~5) ○		
12	壺	底径 (7.4) 残高 13.2	平底。大型品。	㊸ハケ(8本/cm) ㊹ハケ→ナデ	㊸板ナデ ㊹ナデ	乳褐色 乳橙色	石・長(1) 金 ○	黒斑	

表24 S D 4 出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
13	用途不明品		緑色片岩(淡緑色)	5.5	3.9	1.27	46.297		

表25 S K 3 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
14	壺	残高 5.3	広口壺。口縁部内面に貼り付け凸帯3条。断面形は丸味をおびる三角形。破片。	マメツ	マメツ	赤橙褐色 赤橙褐色	石・長(1~4) ○		
15	壺	残高 3.5	頸部下にヘラ描き沈線文1条。小片。	ミガキ	ナデ	乳褐色 乳褐色	石・長(1~3) ○		
16	甕	底径 (7.2) 残高 3.9	たちあがりをもつ底部。わずかに上げ底。	マメツ	ナデ	乳茶色 乳茶色	長(1~3) ○		

表26 S K 5 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
17	甕	口径 (13.2) 残高 9.2	折り曲げ口縁。口縁端部に刻目。胴部の張りは弱い。小型品。口縁部1/2残存。	マメツ	マメツ	赤橙色 赤橙色	石・長(1~4) ○		
18	高坏	底径 7.4 残高 6.9	脚底部は上げ底。脚部と坏部の境に貼り付け凸帯1条。凸帯上にヘラ描き沈線文1条。	マメツ	ミガキ	赤橙色 赤橙色	石・長(1~3) ○		16
19	甕	底径 4.4 残高 2.4	立ち上がりをもつ平底。	マメツ	マメツ	赤橙色 赤橙色	長(1~2) ○		
20	壺	底径 (7.8) 残高 4.0	平底。大型品。	マメツ	マメツ	赤橙色 黄橙色	石・長(1~3) 砂多 ○		

表27 S K 9 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
21	深鉢	残高 6.0	口縁部に刻目。縄文晩期。	ケズリ	ナデ		長(1~4) 金 ○		16
22	壺	頸径 (9.2) 残高 3.8	広口壺。頸部に連鎖状凸帯1条。断面形は丸味をおびる三角形。凸帯上に刻目2条。沈線文10条(2条1組)。	ミガキ	ミガキ	乳色 乳色	長(1~15) 密 ○		16

(1)

遺物観察表

S K 9 出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		(外面) 色調 (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
23	壺	残高 3.0	山形文(2条1組)。沈線文3条以上。胴部破片。	ミガキ	ミガキ	赤褐色 赤褐色	石・長(1~3) ○		
24	壺	底径 (5.8) 残高 3.7	くびれの上げ底。	ナデ	マメツ	乳茶褐色 乳茶黒褐色	石・長(1~5) ○		16

表28 S K 11 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		(外面) 色調 (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
25	甕	口径 (15.8) 残高 4.0	貼付け口縁。口縁端部に刻目。クシ描き沈線文13条以上。口縁部破片。	㊦ヨコナデ ㊧ヨコナデ	㊨ヨコナデ ㊩ヨコナデ	乳茶褐色 乳茶褐色	石・長(1~3) ○		
26	甕	残高 3.2	折り曲げ口縁。口縁端部に刻目。ヘラ描き沈線文3条。口縁部破片。	マメツ	ヨコナデ	黄色 乳褐色	石・長(1~2.5) 金 ○		
27	甕	残高 5.6	刺突文+ヘラ描き沈線文3条+刺突文+ヘラ描き沈線文2条。胴部破片。	マメツ	マメツ	乳黄色 乳黄色	石・長(1~5) ○		
28	壺	口径 (11.3) 残高 10.7	広口壺。やや外反し、外上方にのびる口縁部。口縁端部は「コ」字状。無文。1/3残存。	マメツ	マメツ	乳黄色 乳黄色	石・長(1~5) ○		
29	壺	底径 (7.0) 残高 1.8	突出するわずかに上げ底を呈する底部。	㊪マメツ ㊫板ナデ	マメツ	乳黄色 乳黄色	石・長(1~3) ○	黒斑	

表29 S K 11 出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)		
30	石庖丁	2/3	緑色片岩	(8.2)	4.6	0.86	53.646		

表30 S K 13 出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		(外面) 色調 (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
31	甕	口径 (15.2) 残高 4.8	折り曲げ口縁。ヘラ描き沈線文2条。ヘラ描き刺突文1条。口縁部小片。	㊬ナデ ㊭マメツ	マメツ	赤橙色 赤褐色	石・長(1~3) 砂多 ○		
32	壺	口径 (25.8) 残高 5.0	短頸壺。直線的に上方にのびる口縁部。口縁端面にヘラ描き沈線文1条。ヘラ描き刺突文1条。口縁部小片。	㊮ヨコナデ ㊯板ナデ ㊰ナデ	㊱板ナデ ㊲マメツ	乳黄褐色 乳黄褐色	石・長(1~2) ○		
33	壺	口径 (16.4) 残高 3.8	広口壺。外反し、外上方にのびる口縁部。口縁端部は丸い。口縁部小片。	ミガキ	ミガキ	乳白色 乳白色	石・長(1~4) 砂多 ○		
34	壺	口径 (19.2) 残高 3.4	広口壺。大きく外反し外上方にのびる口縁部。口縁端部は丸味をおびる。口縁部小片。	マメツ	マメツ	橙色 乳黄色	石・長(1~3) ○		
35	壺	頸径 (9.5) 残高 5.1	長頸壺。直線的に上方にのびる頸部。頸部にヘラ描き沈線文1条。頸部小片。	ミガキ	ヨコナデ	乳黄橙色 乳黄色	長(1~2) 砂多 ○		
36	壺	残高 4.2	ヘラ描き沈線文4条。弧文3条。胴部小片。	マメツ	ナデ	乳黄色 乳黄色	石・長(1~3) ○		

久米高畑遺跡27次調査地

S K 13出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面) (内面)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
37	壺	残高 7.6	弧文4条(2条1組)。胴部小片。	ハクリ	マメツ	赤橙色 乳褐色	長(1~3) ○		
38	甕	底径 (7.0) 残高 5.9	立ち上がりをもつ平底。底部2/3残存。	⑧マメツ ⑨ナデ	⑩ナデ ⑪指頭痕	赤橙色 赤橙色	石・長(1~3) ○		

表31 S K 14出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面) (内面)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
39	壺	口径 (27.4) 残高 4.3	広口壺。直線的に外上方にのびる口縁部。口縁端部は「コ」字状。頸部外面に不明瞭な段をもつ。口縁部小片。	⑫ヨコナデ ⑬上・下 マメツ ⑭中 ミガキ	⑮上 ミガキ ⑯中 マメツ	乳黄白色 乳黄白色	石・長(1~3) ○		
40	甕	残高 2.5	折り曲げ口縁。強く屈折する口縁部。ヘラ描き沈線文3条。小片。	マメツ	マメツ	乳褐色 乳褐色	長(0.5~1) ○		
41	甕	残高 4.7	刺突文+ヘラ描き沈線文7条以上。胴部小片。	マメツ	ナデ	褐色 乳褐色	石・長(1~3) ○		
42	甕	底径 (6.8) 残高 5.7	平底。	マメツ	マメツ	乳橙色 乳橙色	石・長(1~3) ○		
43	壺	底径 (9.4) 残高 3.6	わずかに突出する平底の底部。	マメツ	マメツ	乳橙色 乳橙色	石・長(1~3) ○		

表32 S K 14出土遺物観察表 石製品

番号	器 種	残 存	材 質	法 量				備 考	図版
				長 さ (cm)	幅 (cm)	厚 さ (cm)	重 さ (g)		
44	大型粗製刃器	ほぼ完形	安山岩	(10.3)	(7.8)	1.17	102.379		

表33 S K 16出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面) (内面)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
45	壺	残高 3.7	沈線文4条(2条1組)。胴部破片。	ナデ	ミガキ	乳黄褐色 乳黄褐色	石・長(1~3) 砂 ○		
46	壺	残高 3.5	ヘラ描き沈線文4条。胴部破片。	ナデ	ミガキ	乳黄褐色 乳黄褐色	長(1~2) 密 ○		

表34 S K 18出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面) (内面)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
47	甕	口径 (21.0) 残高 10.0	折り曲げ口縁。口縁端部に刻目。沈線文7条(2条1組)。刺突文1条。口縁部1/4残存。	⑰上 ハケ→ナデ ⑰下 マメツ	マメツ	乳橙色 茶褐色	石・長(1~3) ○		
48	甕	口径 (20.8) 残高 5.6	口縁端部下に断面三角形の貼り付け凸帯。口縁端部は丸味を帯びる。	マメツ	板ナデ	赤橙色 乳黄褐色	石・長(1~3) ○	黒斑	16
49	壺	残高 5.9	頸部にヘラ描き沈線文5条。頸部破片。	ハケ(10本/cm)	ヨコナデ	乳黄灰色 乳黄褐色	長(1~2) 密 ○		

遺物観察表

S K 18出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		(外面) 色調 (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
50	壺	残高 5.0	胴上部にヘラ描き沈線文7条。胴部破片。	ハケ	マメツ	乳黄白色 赤橙色	石・長(1~5) ○		
51	鉢	口径 (15.3) 残高 2.2	直口口縁。口縁端部に刻目。	マメツ	マメツ	暗褐色 黄白色	石・長(1) ○		
52	甕	底径 6.5 残高 5.7	楕円形の穿孔(焼成後φ8mm×14mm)。所謂コシキ。	ハケ	マメツ	乳褐色 赤褐色	石・長(1~5) 砂多 ○		

表35 S K 19出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		(外面) 色調 (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
53	甕	口径 (19.2) 残高 4.4	折り曲げ口縁。口縁端部に刻み目あり。ヘラ描き沈線文2条。	ナデ	ナデ	乳橙色 乳茶色	密 ◎		

表36 S K 21出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		(外面) 色調 (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
54	鉢	口径 (11.4) 残高 2.4	直口口縁。口縁端部は「コ」字状。口縁部小片。	板ナデ	マメツ	乳黄色 乳黄色	長(1~2) ○		
55	鉢	口径 (10.9) 残高 3.0	直口口縁。口縁端部は内傾する面をもつ。口縁部小片。	マメツ	マメツ	茶褐色 乳黄褐色	石・長(1~2.5) ○		

表37 S K 25出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		(外面) 色調 (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
56	壺	胴部径(20.4) 残高 9.0	扁球形の胴部。沈線文5条。胴中部に張りを持つ。胴部破片。	マメツ	マメツ	乳褐色 乳橙色	石・長(1~5) ○		
57	壺	底径 (6.0) 残高 3.6	立ち上がりをもつ平底。	ナデ	マメツ	乳黄色 乳黄色	長(1~5) ○		
58	甕	底径 (8.0) 残高 4.1	平底。	マメツ	マメツ	乳白色 乳黄白色	石・長(1~4) 金 ○		

表38 S K 27出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		(外面) 色調 (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
59	壺	口径 (15.6) 残高 4.4	大きく外反し外上方にのびる口縁部。口縁端部は丸い。頸部にヘラ描き沈線文1条。口縁部小片。	ミガキ→ナデ	ミガキ	乳褐色 乳褐色	石・長(1~3) ○		
60	壺	残高 4.3	ヘラ描き沈線文1条。胴部小片。	ヨコナデ	ヨコナデ	乳色 乳色	長(1~5) ○		

久米高畑遺跡27次調査地

表39 S K 32出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面) (内面)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
61	甕	口径 (19.6) 残高 4.3	折り曲げ口縁。口縁端部は丸い。口縁部小片。	マメツ	マメツ	黄褐色 黄褐色	石・長(1~5) ○		
62	甕	残高 2.2	断面三角形の貼り付け凸帯。凸帯上にも押圧+ヘラガキ沈線2条。	ミガキ	ナデ	赤橙色 赤褐色	長(1) 密 ○		

表40 S K 36出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面) (内面)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
63	甕	残高 3.0	ヘラ描き沈線文4条以上。頸部小片。	マメツ	ナデ	乳黄白色 乳黄褐色	石・長(1~2) 金 ○		
64	壺	底径 (8.0) 残高 3.0	平底。底部1/3残存。	ナデ	ナデ	乳黄色 乳橙色	石・長(1~3) 黒 ○		

表41 S K 41出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面) (内面)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
65	壺	口径 (17.4) 残高 6.0	広口壺。口縁内面に貼り付け凸帯(押圧+刺突文)。頸部に貼り付け凸帯(押圧)。沈線文5条(2条1組)。頸部1/3残存。	ミガキ	ミガキ	乳褐色 乳褐色	石・長(1~3) 金 ○		
66	壺	残高 3.2	ヘラ描き弧文3条。胴部破片。	ミガキ	胴上 マメツ 胴下 ミガキ	茶褐色 茶褐色	石・長(1~2) 密 ○		
67	甕	底径 (6.0) 残高 3.2	わずかに上げ底。	ミガキ	ナデ	乳白色 乳白色	石・長(1~3) ○		

表42 S K 41出土遺物観察表 石製品

番号	器 種	残 存	材 質	法 量				備考	図版
				長さ(cm)	幅 (cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
68	板状石器素材		緑色片岩	(12.3)	(7.1)	1.4	176.547		16

表43 S K 45出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面) (内面)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
69	壺	底径 (6.2) 残高 (2.8)	やや突出する平底。底部小片。	ナデ	ナデ	赤橙色 暗褐色	石・長(1~3) ○		

表44 S K 46出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面) (内面)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
70	甕	口径 (21.4) 残高 5.1	口縁部下に段をもつ。口縁端部に刻目。口縁部小片。	マメツ	マメツ	乳黄白色 乳黄白色	石・長(1~2) 砂多 ○		16
71	甕	口径 (22.8) 残高 4.4	折り曲げ口縁。口縁端部は刻目。ヘラ描き沈線文1条。口縁部小片。	マメツ	マメツ	灰黄色 灰黄色	石・長(1~3) ○		

遺物観察表

S K 46出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		(外面) 色調 (内面)	胎 土 焼 成	備 考	図版
				外 面	内 面				
72	甕	口径 (19.8) 残高 3.6	折り曲げ口縁。口縁端部に刻目。ヘラ描き沈線文1条。口縁部小片。	ヨコナデ	ヨコナデ	乳色 乳色	長(1~2) 密 ○		16
73	甕	口径 (22.2) 残高 8.0	折り曲げ口縁。口縁端部は丸い。ヘラ描き沈線文2条。	マメツ	マメツ	乳茶褐色 乳茶褐色	石・長(1~3) ○		16
74	壺	口径 (13.6) 残高 5.0	広口壺。大きく外反し、外上方にのびる口縁部。口縁端部は「コ」字状。沈線文4条(2条1組)。口縁部2/3残存。	㊦ ハケ→ナデ ㊧ ヨコナデ ㊨ ミガキ	ナデ	黄褐色 黒褐色	長(1) 金 ○		16
75	鉢	口径 (11.5) 残高 5.4	直口口縁。わずかに内湾する口縁部。口縁部内面わずかに突出する。口縁部小片。	ヨコナデ	ヨコナデ	黄褐色 黒色	石・長(1~2) ○		
76	鉢	口径 (13.6) 残高 2.9	直口口縁。直線的に上方にのびる口縁部。口縁端部は「コ」字状。口縁部小片。	㊩ ヨコナデ ㊪ マメツ	ヨコナデ	黄褐色 黒色	長(1) 金 ○		
77	甕	底径 (7.7) 残高 4.2	平底。	㊫ 指頭痕顕著 ㊬ ナデ	㊭ 指頭痕顕著	乳橙褐色 茶褐色	長(1~3) 砂多 ○		
78	壺	底径 (10.0) 残高 2.1	やや突出する平底。	㊮ ミガキ ㊯ ナデ	ナデ	黄褐色 乳黄色	石・長(1~2) ○		

表45 S K 56出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		(外面) 色調 (内面)	胎 土 焼 成	備 考	図版
				外 面	内 面				
79	甕	残高 3.8	貼り付け口縁。断面かまぼこ状の口縁部。口縁部破片。	マメツ	ナデ	黄褐色 乳黄色	石・長(1~2) ○		
80	壺	口径 (21.4) 残高 5.7	広口壺。やや外反し外上方にのびる口縁部。口縁内面に断面三角形の貼り付け凸帯1条。口縁端部は丸味をおびる。	㊰ マメツ ㊱ ハケ(5本/cm) ㊲ マメツ	マメツ	乳白色 乳白色	長(1~3) ○		
81	鉢	口径 (15.6) 残高 3.0	直口口縁。わずかに内湾する口縁部。口縁端部は丸味をおびる。口縁部小片。	マメツ	マメツ	乳橙褐色 乳橙褐色	石・長(1~2) ○		
82	鉢	底径 (5.4) 残高 7.9	やや突出する平底。	㊳ ハケ(4本/cm) ㊴ 指頭痕顕著	ナデ	乳白色 乳白色	石・長(1~3) ○	黒斑	

表46 S K 58出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		(外面) 色調 (内面)	胎 土 焼 成	備 考	図版
				外 面	内 面				
83	甕	口径 (25.0) 残高 4.8	折り曲げ口縁。口縁端部に刻目。ヘラ描き沈線文3条。口縁部小片。短頸壺。	㊵ ナデ ㊶ ナデ	マメツ	乳黄褐色 乳黄褐色	長(1~2) ○		
84	壺	口径 (23.0) 残高 7.0	やや外反し外上方に短くのびる口縁部。ヘラ描き沈線文1条+刺突文1条+ヘラ描き沈線文2条。口縁部小片。	マメツ	マメツ	乳黄白色 乳黄白色	石・長(1~3) ○		
85	鉢	口径 (12.6) 残高 6.1	直口口縁。口縁部はやや内湾する。ヘラ描き沈線文5条。口縁部破片。	㊷ ヨコナデ ㊸ ミガキ	㊹ ミガキ	乳黄褐色 乳橙褐色	密 ○		
86	鉢	口径 (30.4) 残高 9.6	外反口縁。やや外反し外上方に短くのびる口縁部。口縁部1/2残存。	㊺ ヨコナデ ㊻ ハケ(4本/cm) →ナデ	㊼ ヨコナデ ㊽ 板ナデ	乳黄色 乳黄色	長(1~2) 砂多 ○		
87	壺	底径 (11.0) 残高 4.1	平底。底部1/2残存。	ナデ	ミガキ	乳橙褐色 乳橙褐色	石・長(1~3) ○		

久米高畑遺跡27次調査地

S K 58出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		(外面) 色調 (内面)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
88	壺	底径 (7.8) 残高 4.6	立ち上がりをもつ平底。	ハケ→ナデ	ナデ	乳橙色 乳褐色	石・長(1~3) ○		

表47 S K 59出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		(外面) 色調 (内面)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
89	甕	口径 (15.0) 残高 2.7	折り曲げ口縁。外上方に短くのびる口縁部。小型品。	①ナデ ②(胴上)ナデ (指頭痕顕著)	板ナデ	暗茶色 暗茶色	長(1~2) 密 ○		
90	壺	口径 (11.4) 残高 9.8	短頸壺。わずかに外反し、外上方にのびる口縁部。口縁端部は丸い。ヘラ描き沈線文3条。	マメツ	マメツ	乳黄橙色 乳黄橙色	石・長(1~3) 砂多 ○		16
91	甕	底径 (6.5) 残高 5.2	平底。	③(胴下)ミガキ ④(底)ナデ	ナデ	乳橙色 乳褐色	石・長(1~3) ○		
92	壺	底径 (8.8) 残高 2.8	わずかに上げ底を呈する底部。	マメツ	マメツ (指頭痕)	乳白色 乳白色	石・長(1~3) ○		

表48 S K 61出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		(外面) 色調 (内面)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
93	甕	口径 (28.0) 残高 13.6	折り曲げ口縁。口縁端部に刻目。沈線文12条(2条1組)。刺突文1条。	ハケ→ナデ	ナデ	乳赤橙色 乳赤褐色	石・長(1~5) ○		17
94	甕	口径 (23.3) 残高 8.0	折り曲げ口縁。口縁端部に刻目。沈線文9条+刺突文+沈線文3条+刺突文+沈線文3条。	マメツ	マメツ	乳黄色 乳白色	石・長(1~4) ○		17
95	甕	口径 (28.6) 残高 8.4	貼り付け口縁。断面かまぼこ状の短い口縁部。沈線文11条(2条1組)。口縁部1/4残存。	ハケ→ナデ	①ヨコナデ ②(胴)マメツ	乳褐色 乳褐色	石・長(1~3) ○		
96	甕	残高 12.6	折り曲げ口縁?。ヘラ描き沈線文11条。小片。	ハケ(8本/cm)→ ミガキ	マメツ	乳褐色 乳褐色	長(1~4) ○		
97	壺	口径 (16.6) 残高 5.2	短頸壺。ゆるやかに外反し、外上方に短くのびる口縁部。口縁端部は丸い。ヘラ描き沈線文2条。	③マメツ ④(胴上)ヨコナデ	板ナデ	乳褐色 乳褐色	長(1~2) ○		
98	壺	底径 (7.6) 残高 4.3	平底。底部内側より焼成後穿孔。(φ12mm)。所謂コシキ。	マメツ	マメツ	乳褐色 乳褐色	石・長(1~6) ○		

表49 S K 61出土遺物観察表 石製品

番号	器 種	残 存	材 質	法 量				備考	図版
				長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)		
99	石器素材		緑色片岩	9.3	3.7	1.15	50.215		17

表50 S K 15出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		(外面) 色調 (内面)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
100	甕	口径 (23.0) 残高 7.8	外上方に短くのびる口縁部。口縁部下に断面三角形の貼り付け凸帯。口縁部1/3残存。	マメツ	⑤(胴上)ナデ ⑥(胴下)マメツ	赤褐色 赤褐色	石・長(1~4) ○		

遺物観察表

S K 15 出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		(外面) 色調 (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
101	壺	底径 (7.7) 残高 6.4	平底。	(脛下) ナデ→ミガキ (底) ナデ	(胴下) マメツ (底) ミガキ	赤橙色 褐色	石・長(1~3) ○	黒斑	

表51 S K 17 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		(外面) 色調 (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
102	甕	口径 (15.4) 残高 3.8	逆「L」字状口縁。外上方に短くのびる口縁部。口縁端部は丸い。口縁部破片。	(口端) マメツ (脛上) ミガキ	マメツ	黒色 乳黄色	石・長(1~3) ○		
103	壺	底径 (6.5) 残高 3.4	立ち上がりをもつ平底。	ナデ	ナデ	乳褐色 乳黄褐色	石・長(1~3) 金 ○		
104	甕	底径 (6.4) 残高 2.6	上げ底の底部。	(底) マメツ (底下) ハケ (8~9本/cm)	ナデ	赤橙色 黒色	長(1~5) ○		

表52 S K 2 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		(外面) 色調 (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
105	甕	口径 (17.6) 残高 1.6	水平に折れ曲がる口縁部。口縁端部は上方につまみ上げる。口縁端面はやや凹む。	マメツ	マメツ	乳黄色 乳黄色	石・長(1~3) ○		
106	壺	口径 (17.8) 残高 3.8	広口壺。外上方にのびる口縁部。口縁端部は「コ」字状。口縁部1/2残存。	ヨコナデ	マメツ	赤橙色 赤褐色	石・長(1~5) ○		
107	壺	頸部径 (12.0) 残高 7.5	広口壺。直線的に外傾しのびる頸部。頸部外面に不明瞭な稜をもつ。頸部1/3残存。	ハケ(3本/cm)	マメツ	赤褐色 赤褐色	石・長(1~6) ○		
108	鉢	口径 (17.2) 残高 7.5	直口口縁。短く外上方にのびる口縁部。口縁部中位がややふくらむ。口縁部小片。	(口端) ナデ (脛) ナデ	マメツ	赤橙色 乳橙色	長(1~3) 金 ○	黒斑	
109	甕	底径 (6.2) 残高 3.6	上げ底の底部。底部1/2残存。	(底) ナデ	マメツ	乳白色 乳白色	石・長(2~4) ○		
110	甕	底径 (4.0) 残高 2.0	立ち上がりをもつ平底。底部1/3残存。	ミガキ	ナデ(小口痕)	乳橙褐色 乳橙褐色	密 ○		
111	壺	底径 (5.0) 残高 9.8	球形の胴部。胴部中位に張りをもつ。平底。	マメツ	(胴) マメツ (底) ナデ(指頭痕)	赤茶褐色 乳灰茶色	石・長(1~4) ○	黒斑	

表53 S K 4 出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		(外面) 色調 (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
112	甕	残高 1.3	水平に折れ曲がる口縁部。口縁端部は上方につまみ上げる。口縁端面に凹線文2条。口縁部小片。	ナデ	ナデ	乳茶褐色 乳茶褐色	密 ○		
113	甕	底径 (7.8) 残高 8.3	平底。大型品。	マメツ	マメツ	茶褐色 乳白色	石・長(1~5) 砂多 ○		
114	甕	底径 (5.9) 残高 4.6	平底の底部。底部1/3残存。	マメツ	マメツ	黄褐色 黄褐色	石・長(1~3) 砂多 ○		

久米高畑遺跡27次調査地

S K 4 出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		(外面) 色調 (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
115	壺	底径 (5.4) 残高 3.7	突出する平底。底部小片。	ハケ(7本/cm)	マメツ	黄茶色 黄茶色	長(1~5) ○		

表54 S K 24 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		(外面) 色調 (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
116	甕	底径 (5.9) 残高 1.9	立ち上がりをもつ平底。底部1/3残存。	マメツ	マメツ	乳橙色 乳橙色	密 ○		
117	壺	底径 (8.0) 残高 1.9	立ち上がりをもつ平底。底部1/3残存。	㊦ヨコナデ ㊧マメツ	マメツ	黒色 乳黄褐色	長(1~3) ○		

表55 S K 24 出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)		
118	扁平片刃石斧	1/2	緑色片岩	(7.5)	(5.0)	(0.95)	49.773		17
119	用途不明品		不明	(6.0)	(2.7)	(0.90)	18.692		17

表56 S K 28 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		(外面) 色調 (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
120	壺	残高 1.8	口縁端部は、上下方に肥厚。 口縁端面に凹線文3条。	ナデ	ナデ	乳橙色 乳橙色	密 ○		
121	甕	底径 (6.4) 残高 5.0	くびれの上げ底。底部小片。	㊦マメツ ㊧ナデ	ナデ	暗赤橙色 黒色	石長(1~5) 金 ○		

表57 S K 28 出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)		
122	扁平片刃石斧	1/2	緑色片岩	5.9	5.1	0.75	43.405		17

表58 S K 47 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		(外面) 色調 (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
123	甕	底径 (5.6) 残高 1.8	立ち上がりをもつ平底。底部小片。器壁が薄い。	ミガキ	ナデ	茶褐色 茶褐色	長(1~2) ○		
124	甕	底径 (5.0) 残高 2.2	立ち上がりをもつ平底。底部小片。	マメツ	マメツ	黄褐色 黄褐色	石長(1~2) ○		

遺物観察表

表59 S K 20出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		(外面) 色調 (内面)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
125	壺	口径 (15.4) 残高 4.2	ゆるやかに外反し、外上方にのびる口縁部。口縁端部は上方につまみ上げられる。口縁部小片。	㊦ヨコナデ ㊧ハケ(8本/cm)	㊨マメツ	乳橙白色 乳橙色	長(1) ○		

表60 S K 20出土遺物観察表 石製品

番号	器 種	残 存	材 質	法 量				備考	図版
				長さ(cm)	幅 (cm)	厚 さ(cm)	重 さ(g)		
126	用途不明品	1/2	安山岩	7.4	5.3	1.5	59.610		17

表61 S K 22出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		(外面) 色調 (内面)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
127	壺	口径 (7.0) 残高 2.1	口縁端部は「コ」字状。ヘラ描き沈線文1条。口縁部小片。	㊦ヨコナデ ㊧ヨコナデ ㊨ハケ(8本/cm)	マメツ	黒色 黒色	長(1~1.5) ○		
128	ミニチュア	底径 3.8 残高 2.2	くびれの上げ底。	㊦ヨコナデ ㊧マメツ	ナデ	乳褐色 乳褐色	長(1~2) 砂多 ○		
129	ミニチュア	残高 3.8	上げ底。中実。	㊦マメツ ㊧ナデ	ナデ	乳黄白色 乳黄白色	石・長(1~3) 砂多 ○		

表62 S B 5出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		(外面) 色調 (内面)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
130	坏蓋	残高 2.6	口縁部は直線的に下がる。天井部と口縁部を分ける境界は凹線状の凹みにより表現される。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ○		
131	壺	口径 (19.0) 残高 4.1	短頸壺。直線的に上方に短くのびる口縁部。口縁端部に刻目。ヘラ描き沈線文2条。	ミガキ	マメツ	乳橙白色 乳橙白色	石・長(1~2) ○		
132	甌	残高 4.6	甌の把手。	マメツ		赤褐色 赤褐色	長(1~2) ○		

表63 S B 4出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		(外面) 色調 (内面)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
133	甕	底径 1.8 残高 2.8	小さい平底。	ハケ→タタキ	マメツ	赤橙白色 赤橙白色	石・長(1~3) ○		

表64 S B 4出土遺物観察表 石製品

番号	器 種	残 存	材 質	法 量				備考	図版
				長さ(cm)	幅 (cm)	厚 さ(cm)	重 さ(g)		
134	スクレイパー	1/4	サヌカイト	2.2	2.6	0.36	2.070		

表65 掘立3出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		(外面) 色調 (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
135	坏身	受部径(16.3) 残高 2.7	受部は外上方に短くのびる。 口縁部欠損。	回転ナデ	回転ナデ	黄灰色 灰色	密 ○	SP③	
136	甕	口径 (19.0) 残高 4.0	やや内湾する口縁部。口縁端部は丸みをおびる。頸部外面に明瞭な稜をもつ。口縁部小片。土師器。	ヨコナデ	ヨコナデ	乳色 乳褐色	石・長(1~2) ○	SP③	

表66 掘立2出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		(外面) 色調 (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
137	甕	底径 (6.0) 残高 4.2	立ち上がりをもつ平底。底部破片。	マメツ	マメツ	赤褐色 乳黄褐色	石・長(1~4) ○	SP①	
138	甕	底径 (7.9) 残高 3.8	立ち上がりをもつ平底。底部1/3残存。	㊦マメツ ㊧ナデ	ナデ	赤橙色 褐色	長(1~3) ○	SP④	
139	甕	底径 (3.4) 残高 4.5	小さい平底の底部。底部1/3残存。	ハケ(8~9本/cm)	板ナデ	黒色 黒色	石・長(1~3) ○	SP⑦	

表67 掘立1出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		(外面) 色調 (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
140	坏身	口径 (11.5) 受部径(13.7) 残高 3.6	立ち上がりは内傾し、端部は丸く仕上げる。受部は外上方にのびる。受部小片。	回転ナデ	回転ナデ	黒灰色 黒灰色	密 ○	SP⑨	
141	坏身	受部径(17.0) 残高 2.8	受部は外上方にのびる。口縁部欠損。	回転ナデ	回転ヘラケズリ	灰色 灰色	密 ○	SP⑧	
142	甕	口径 (18.7) 残高 3.6	折り曲げ口縁。口縁端部に刻目。ヘラ描き沈線文2条。	㊨ナデ ㊩ハケ(10本/cm)	ナデ	乳黄色 乳黄色	密 ○	SP⑫	
143	壺	口径 (17.6) 残高 4.1	短頸壺。直線的に上方にのびる口縁部。口縁端部は丸い。頸部にヘラ描き沈線文2条と竹管文。	マメツ	㊪マメツ ㊫ハケ(9本/cm) ㊬マメツ	赤褐色 赤褐色	密 ○	SP④	
144	壺	口径 13.7 残高 2.7	広口壺。ゆるやかに外反し、外上方にのびる口縁部。口縁端部は丸い。口縁部小片。	ナデ	ナデ	乳橙色 乳褐色	密 ○	SP③	

表68 掘立4出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		(外面) 色調 (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
145	高坏	残高 2.8	脚部片。土師器。	ナデ	ナデ	乳黄色 乳黄色	長(1~2) ○	SP④	
146	坏蓋	口径 (15.0) 残高 3.1	口縁部の境界は段差により表される。口縁端部は内傾する凹面をなす。口縁部小片。	回転ナデ	回転ナデ	黒灰色 灰色	密 ○	SP⑨	

表69 掘立4出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)		
147	石庖丁	1/4	緑色片岩	8.8	2.8	0.63	32.799	SP⑦	

遺物観察表

表70 S D 2 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		(外面) 色調 (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
148	坏身	口径(12.2) 受部径(15.5) 残高 3.8	立ち上がりは内傾する。受部は外上方にのびる。	Ⓔ 回転ナデ Ⓕ 回転ヘラケズリ	回転ナデ	青灰色 灰色	密 ○		
149	坏身	受部径(12.2) 残高 2.1	受部は外上方に短くのびる。口縁部欠損。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 褐色	密 ○		
150	壺	口径(30.4) 残高 5.7	短頸壺。頸部に貼り付け凸帯。凸帯上にヘラ描き羽状文。口縁部に刻目を施す。口縁部破片。	マメツ	マメツ	乳黄色 乳黄色	長(1~3) ○		17
151	甕	口径(17.0) 残高 3.5	折り曲げ口縁。強く屈折する口縁部。ヘラ描き沈線文7条以上。口縁部小片。	ナデ	マメツ	乳黄色 乳黄色	石長(1~4) ○		
152	高坏	残高 7.8	三角錐状の脚部。円孔。脚部1/2残存。	マメツ	ケズリ→ナデ	乳黄色 乳黄白色	石長(1~3) ○		
153	支脚	残高 13.2	角状の突起を2ケもつ。中空。	指頭痕	ケズリ→ナデ	乳黄色 乳黄白色	石長(1~5) ○		17

表71 S D 5 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		(外面) 色調 (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
154	坏蓋	口径(14.2) 残高 4.7	丸みのある天井部。口縁部の境界は段差により表現される。口縁端部は内傾する凹面をなす。口縁部小片。	Ⓔ 回転ヘラケズリ Ⓖ 回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ○		
155	坏身	口径(12.0) 受部径(14.5) 残高 2.2	立ち上がりは内傾する。受部は外上方に短くのびる。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 青灰色	長(3) 密 ○		
156	甕	口径(16.5) 残高 4.8	わずかに内湾する口縁部。頸部内外面に不明瞭な稜をもつ。口縁部小片。	マメツ	マメツ	赤橙色 乳橙色	石長(1~5) ○		

表72 S D 5 出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
157	剣形石製品?	完形	緑色片岩	1.4	4.8	2.5	295.325		17

表73 S K 33 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		(外面) 色調 (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
158	坏身	受部径(12.6) 残高 1.7	小片。受部は比較的太く、水平に短くのびる。	回転ナデ	回転ナデ	灰黄色 赤褐色	密 ◎		

表74 S K 39 出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		(外面) 色調 (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
159	坏蓋	口径 16.1 器高 5.5	丸みのある天井部。口縁部は下外方へ屈曲する。口縁端部は尖り気味に丸い。口縁部と天井の境は凹む。	Ⓔ 回転ヘラケズリ Ⓖ 回転ナデ	Ⓔ ナデ Ⓖ 回転ナデ	灰色 灰色	長(1~5) ○		
160	坏蓋	口径(11.2) 残高 2.2	口縁部は直線的に下方にのびる。口縁端部は丸い。口縁部破片。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ○		

久米高畑遺跡27次調査地

S K 39出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
161	坏身	口径 (13.8) 残高 2.3	たちあがりは内傾する。受部は外上方に短くのびる。受部破片。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	長(1) 密 ○		
162	高坏	残高 3.0	ゆるやかに広がる柱部。脚部破片。	回転ナデ		青灰色 青灰色	密 ○		

表75 S D 6出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
163	坏蓋	口径 (15.6) 残高 2.1	口縁部は内湾し下方にのびる。口縁端部は丸い。口縁部小片。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ○		
164	坏	底径 (8.4) 残高 1.8	貼り付け高台。高台は体底部の境より内側に付き、直立する。高台端面は凹む。底部小片。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ○		

表76 S P 4出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
165	壺	口径 (21.2) 残高 5.5	広口壺。大きく外反し、外上方にのびる口縁部。口縁端部は丸い。口縁部1/4残存。	マメツ	マメツ	乳黄褐色 乳黄褐色	石・長(1~3) ○		
166	壺	口径 (17.0) 残高 1.5	口縁端面がわずかに凹む。口縁部小片。	ヨコナデ	ヨコナデ	乳橙色 乳橙色	石・長(1~2) ○		
167	壺	残高 15.5	扁球形の胴部。胴部中位に張りをもつ。胴部1/4残存。	マメツ	マメツ	乳黄色 乳黄色	石・長(1~5) ○	黒斑	
168	鉢	口径 (20.0) 残高 11.7	直口口縁。口縁端部は、やや外方に拡張する。口縁端面は内傾する面をなす。	ヨコナデ	マメツ	乳橙色 乳褐色	長(1~2) ○		
169	高坏	口径 (17.0) 器高 19.0 底径 (10.0)	復元完形品。口縁部外面に凹線文4条、脚裾部外面に凹線文3条を施す。脚部端面はわずかに凹む。	ハケ→ナデ	⑮ヘラミガキ ⑯ヘラケズリ →ナデ	茶褐色 茶褐色	石・長(1~5) ○		18
170	甕	底径 (7.5) 残高 6.2	立ち上がりをもつ上げ底。底部3/4残存。	⑰ナデ→ミガキ ⑱ミガキ→ナデ ⑲底→ナデ	ナデ	乳黄色 乳黄色	石・長(1~5) ○		
171	甕	底径 (7.0) 残高 10.0	くびれの上げ底。底部1/2残存。	⑰ナデ ⑱ヨコナデ ⑲底→ナデ	ケズリ→ナデ	乳黄褐色 乳褐色	密 ○		
172	甕	底径 (10.8) 残高 12.3	立ち上がりをもつ上げ底。底部1/3残存。	⑰ナデ ⑱ケズリ→ミガキ ⑲底→ナデ	ナデ→ケズリ	赤褐色 黒色	石・長(1~5) 金 ○		
173	壺	底径 (4.4) 残高 6.3	平底。	⑰ナデ ⑱ハケ	マメツ	乳黄褐色 乳黄色	石・長(1~5) ○		

表77 S P 666出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
174	壺	口径 (14.1) 残高 6.7	短頸壺。直線的に外上方に短くのびる口縁部。口縁端部にヘラ描き沈線文1条。頸部内面に不明瞭な痕をもつ。口縁部1/4残存。	ミガキ	⑰ミガキ ⑱ナデ	乳黄白色 乳黄色	石・長(1) ○		18

遺物観察表

S P 666 出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面 内面)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
175	壺	口径 (13.7) 残高 4.4	短頸壺。直線的に外上方に短かくのびる口縁部。口縁端部は丸い。	㊦ ナデ ㊧ ハケ(8本/cm) ㊨ ミガキ	㊩ ナデ ㊪ ミガキ	乳黄褐色 乳黄褐色	石・長(1) ○		
176	壺	底径 (4.8) 残高 16.5	球形の胴部。胴上位に張りをもつ。平底。胴底部1/2残存。	㊫ ミガキ ㊬ ハケ(10本/cm)	マメツ	乳黄褐色 黒色	長(1~3) ○		
177	壺	底径 (6.0) 残高 5.4	立ち上がりをもつ平底。	ナデ	ナデ	赤橙色 乳黄色	細砂 ○	黒斑	

表78 ピット出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面 内面)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
178	甕	口径 (18.4) 残高 5.4	貼り付け口縁。断面三角形の短い口縁部。ヘラ描き沈線文15条。口縁部小片。	ハケ	マメツ	茶褐色 乳褐色	石・長(1~2) ○	SP168	
179	甕	口径 (18.4) 残高 4.0	貼り付け口縁。断面三角形の短い口縁部。端部に刻目。ヘラ描き沈線文5条。口縁部小片。	㊭ ヨコナデ ㊮ マメツ	ミガキ	乳黄色 乳黄橙色	石・長(1~5) ○	SP509	
180	甕	口径 (19.2) 残高 4.7	貼り付け口縁。断面三角形の短い口縁部。ヘラ描き沈線文7条。刺突文。口縁部小片。	マメツ	マメツ	乳黄色 乳色	長(1~3) ○	SP500	
181	甕	口径 (18.9) 残高 7.8	折り曲げ口縁。口縁端部に刻目。沈線文8条(2条1組)+刺突文+3条+刺突文+3条+刺突文。口縁部小片。	マメツ	マメツ	乳黄褐色 乳黄色	石・長(1~4) ○	SP500	
182	甕	口径 (35.6) 残高 4.0	貼り付け口縁。口縁端面に押圧文刺突文2条。口縁部小片。	㊯ ヨコナデ	マメツ	乳黄白色 乳黄褐色	石・長(1~5) ○	SP438	
183	甕	口径 (29.2) 残高 5.7	逆「L」字状に屈折し、やや内湾する口縁部。口縁端面に刻目。口縁部の下に断面を三角形の貼り付け凸帯。	マメツ	マメツ	乳橙色 乳橙色	石・長(1~3) ○	SP321	
184	甕	口径 (22.6) 残高 2.2	貼り付け口縁。鉢の可能性もあり。	マメツ	マメツ	乳黄色 乳黄色	石・長(1~6) ○	SP347	
185	甕	口径 (16.6) 残高 2.7	水平にのびる口縁部。口縁端部を上方につまみ上げる。口縁端面に凹線文1条。	ナデ	ヨコナデ	乳灰色 乳黄灰色	密 ○	SP197	
186	甕	口径 (14.4) 残高 1.9	外上方に短くのびる口縁部。わずかに口縁端部は上方に拡張する。口縁端面に凹線文1条。口縁部小片。	ナデ	ヨコナデ	乳灰色 乳黄灰色	密 ○	SP420	
187	甕	口径 (23.0) 残高 5.6	やや外反し、外上方に短くのびる口縁部。口縁部は丸みをおびる。口縁部小片。	ナデ→ミガキ	ナデ→ミガキ	乳橙色 乳橙色	石・長(1~3) ○	SP168	
188	壺	口径 (13.8) 残高 2.9	短頸壺。わずかに外反し、外上方にのびる口縁部。口縁端部に刻目。ヘラ描き沈線文1条。口縁部小片。	ナデ	ヨコナデ	乳白色 乳白色	長(1~5) ○	SP405	
189	壺	口径 (12.8) 残高 4.2	短頸壺。外上方にのびる口縁部。口縁端部は丸い。口縁部小片。	ヨコナデ	マメツ	乳白色 乳白色	石・長(1~3) ○	SP284	
190	壺	口径 (22.0) 残高 3.0	短頸壺。直線的に外上方に短くのびる口縁部。口縁端面にヘラ描き沈線文1条刻目。	ナデ	㊱ ミガキ	乳白色 乳白色	石・長(1~3) ○	SP310	
191	壺	口径 (20.4) 残高 7.2	大きく外反し、外上方にのびる口縁部。口縁内面に凸帯を貼り付け後、ヘラ描き沈線文、刻目。頸部にヘラ描き沈線文7条。	ハケ→ナデ	㊲ マメツ ㊳ ナデ ㊴ ミガキ	乳褐色 乳黄褐色	石・長(1~6) ○	SP509	

久米高畑遺跡27次調査地

ピット出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
192	壺	頸部径(11.6) 残高 5.4	頸部片。内面に断面三角形の貼り付け凸帯。ヘラ描き沈線文4条。	マメツ	ナデ	乳黄色 乳黄色	石・長(1~3) ○	SP321	
193	壺	口径 (13.6) 残高 5.0	緩やかに外反し、上外方にのびる口縁部。口縁部はわずかに上下につまみ上げる。頸部に断面三角形の貼り付け凸帯。	㊦マメツ ㊧ハケ	㊨マメツ ㊩ミガキ	赤褐色 赤褐色	石・長(1~3) ○	SP482	
194	壺	口径 (17.4) 残高 3.4	口縁部は貼り付けにより、下法に肥厚。口縁端面に凹線文4条。	㊪ヨコナデ	㊫マメツ	褐色 乳黄色	石・長(1~3) ○	SP504	
195	壺	残高 2.6	複合口縁壺。口縁拡張部は内傾。	マメツ	ミガキ	黒色 乳褐色	石・長(1~3) ○	SP149	
196	壺	残高 28.0	胴上位に張りをもつ。	ミガキ	㊬上マメツ ㊭下ナデ	茶褐色 乳褐色	石・長(1~6) ○	SP504	18
197	壺	底径 (8.6) 残高 5.9	厚い平底。中央部がわずかに凹む。	㊮下ミガキ ㊯ケズリ	マメツ	乳褐色 乳褐色	石・長(1~3) ○	SP 6	
198	壺	底径 (8.2) 残高 5.1	立ち上がりをもつ平底。中央部がわずかに凹む。	マメツ	マメツ	乳褐色 乳褐色	石・長(1~3) ○	SP277	
199	支脚	受部径(9.4) 残高 3.9	受部は斜めにカットされる。受部端は丸い。	ハケ	マメツ	橙褐色 乳橙色	石・長(1~3) ○	SP487	
200	坏身	口径 (15.2) 受部径 16.8 残高 2.9	立ち上がり内傾し、端部内面は凹む。受部は水平にのびる。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ○	SP238	
201	壺	残高 4.8 頸径 (13.4)	肩部片。回転カキメ調整を施す。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 灰色	密 ○	SP 13	

表79 ピット出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
202	石 鎌	ほぼ完形	サヌカイト	(1.7)	(1.1)	0.23	0.389	SP339	18
203	石庖丁	2/3	緑色片岩	8.5	4.9	0.72	46.444	SP372	18
204	石庖丁	1/3	緑色片岩	3.9	3.7	0.61	8.411	SP569	18
205	用途不明品		不明				8.143	SP339	18

表80 包含層・地点不明出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
206	坏蓋	残高 52.4	扁平な天井部。	㊰天回転ヘラケズリ ㊱天回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ○	IV層	
207	坏身	受部径(10.9) 残高 2.2	底部片。受部は水平に短くつく。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ○	IV層	
208	高坏	口径 (18.0) 底径 (10.8) 残高 (13.0)	坏部は内湾気味に外上方にのびる。口縁端部は先細り。柱部は筒状で裾部はゆるやかに広がる。	マメツ	㊲マメツ ㊳ナデ	乳黄色 乳黄白色	密 ○	IV層	

遺物観察表

包含層・地点不明出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		(外面) 色調 (内面)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
209	甕	口径 (20.6) 残高 5.3	折り曲げ口縁。口縁端部に刻目。沈線文7条+刺突文+沈線文3条+刺突文+沈線文3条。	ミガキ	ミガキ	乳黄白色 乳黄色	石・長(1~4) ○	V層	
210	甕	口径 (23.0) 残高 3.8	折り曲げ口縁。口縁端部に刻目。ヘラ描き沈線文1条。	マメツ	ナデ	乳黄白色 乳橙色	砂 ○	V層	
211	甕	口径 (16.7) 残高 5.2	「く」の字状口縁。口縁端部は「コ」字状に仕上げる。	(口端)マメツ (胴上)板ナデ	マメツ	乳黄色 乳黄白色	密 ○	V層	
212	甕	口径 (19.0) 残高 3.4	「く」の字状口縁。口縁端部は丸い。	マメツ	マメツ	茶褐色 乳橙褐色	石・長(1~3) ○	V層	
213	壺	口径 (20.2) 残高 1.3	口縁端部は下垂する。口縁部に摺描き波状文3条。口縁端面にヘラ描き沈線文1条。	ナデ	ナデ?	乳黄色 乳黄色	密 ○	V層	
214	甕	底径 (6.8) 残高 4.1	平底。	(底)ナデ (底下)ミガキ	ナデ	乳黄灰色 乳褐色	石・長(1~4) ○	V層	
215	甕	底径 (6.0) 残高 1.8	立ち上がりをもつ平底。	ナデ	ナデ	乳橙色 乳褐色	石・長(1~2) ○	V層	
216	壺	底径 (5.0) 残高 4.0	突出する平底。	マメツ	(底上)ハケ(6本/cm) (底中)ナデ (底下)ハケ(6本/cm)	黒色 黒色	砂 ○	V層	
217	壺	底径 (4.0) 残高 3.7	厚い平底。	マメツ	マメツ	乳黄色 乳黄色	石・長(1~3) ○	V層	
218	蓋	底径 (6.2) 残高 2.1	磁器	ナデ	ナデ	乳茶色 乳茶色	密 ○	地点不明	
219	高坏	残高 4.7	脚部片。緩やかに広がる。ヘラ沈線6条。透かし3方向。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ○	地点不明	

表81 包含層・地点不明出土遺物観察表 石製品

番号	器 種	残 存	材 質	法 量				備 考	図版
				長 さ (cm)	幅 (cm)	厚 さ (cm)	重 さ (g)		
220	石 鏃	完形	サヌカイト	1.9	1.6	0.36	0.764	V層	18
221	石庖丁	1/2	緑色片岩	10.7	5.0	0.87	46.446	地点不明	18

遺構・遺物一覧

- (1) 遺構・遺物の計測値及び観察一覧である。
- (2) 遺構の一覧表中の出土遺物欄の略号について。

例) 縄文→縄文土器、弥生→弥生土器、土師→土師器、須恵→須恵器。

- (3) 遺物観察表の各記載について。

法量欄 () : 復元推定値

形態・施文欄: 土器の各部位名称を略記

例) 天→天井部、口→口縁部、口端→口縁端部、頸→頸部、胴→胴部、胴上→胴上半部、底→底部。

胎土・焼成欄：胎土欄では混和剤を略記した。

例) 砂→砂粒、長→長石、石→石英、金→金雲母、密→精製土。

() 内の数値は混和剤粒子の大きさを示す。

例) 石・長(1～4)多→「1～4 mm大の石英・長石を多く含む」である。

焼成欄の略記について。例) ◎→良好、○→良、△→不良。

第4章

く め たか ばたけ
久米高畑遺跡

35次調査地

第4章 久米高畑遺跡35次調査地

1. 調査の経過

(1) 調査に至る経過

1996(平成8)年10月、(株)大成住宅より松山市南久米町765番6内における宅地開発にあたり、当該地の埋蔵文化財の確認願いが松山市教育委員会文化教育課(以下、文化教育課)に提出された。

当該地は松山市の指定する埋蔵文化財包蔵地「No.127 来住廃寺跡」内に所在する。周辺には、南東約300mの白鳳期に創建されたとして知られる来住廃寺をはじめとして、北西約220mに久米官衙遺跡群を構成する施設のひとつである「回廊状遺構」、南東約250mに「久米評衙」の一部であると想定される箇所があり、重要な地域に位置する。特に、西に隣接する31次調査においては、7世紀代を通じて機能していた区画性の強い2条の並行する直線溝や、8世紀代に掘削された南濠と「久米郡衙正倉院」を構成する倉庫群と判断される遺構を検出している。北隣の26次調査では縄文時代晩期の土坑より、深鉢や浅鉢が出土している。

これらのことから当該地における埋蔵文化財の有無と、さらには遺跡やその性格を確認するため、平成8年11月25日に文化教育課は試掘調査を実施した。試掘調査の結果、地表面下約0.5mより遺物包含層や遺構を確認した。

この結果を受け、文化教育課と地権者は遺跡の取扱いについて協議を重ね、開発工事によって失われる遺構と遺物について、記録保存のため発掘調査を実施することとなった。発掘調査は、20次調査で検出した東辺の濠や、弥生時代から古墳時代を主とした周辺遺跡との集落関連遺構の広がりを目ざし、文化教育課の指導のもと、財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センターが主体となり、1997(平成9)年5月7日に開始した。

(2) 調査の経緯

1997(平成9)年5月7日より重機により表土剥ぎ取り作業を開始した。試掘調査の結果及び深堀りによる土層観察を参考に、地表下約0.5mまで剥ぎ取りを行う。5月9日、作業員を増員し床面、壁面の精査を開始する。5月10日、重機による掘削を終了する。5月12日、遺構検出写真撮影を行う。5月15日、遺構の掘り下げを開始する。5月20日、重機により調査区南側を拡張する。5月30日、遺構完掘作業終了。6月2日、全体清掃。6月3日、遺構完掘写真撮影。6月7日、発掘調査現地説明会を行い、本日をもって現場作業を完了する。

(3) 調査組織

調査地	松山市南久米町765番6
遺跡名	久米高畑遺跡35次調査地
調査期間	野外調査 平成9年5月7日～同年6月7日 屋内調査 平成9年5月7日～同年7月31日
調査面積	442m ²
調査委託	(株)大成住宅
調査担当	河野 史知

2. 層位 (第80図)

調査地は松山平野北東部に広がる来住舌状台地上にあり、標高37mを測る。旧地形は東から西へ緩傾斜する。

基本層位は第Ⅰ層暗黄色土、第Ⅱ層緑灰色土、第Ⅲ層黄褐色土、第Ⅳ層緑灰色土、第Ⅴ層暗黄褐色土、第Ⅵ層暗褐色土、第Ⅶ層明黄褐色土である。

第Ⅰ層－近現代の造成工事による客土である。(層厚30～50cm)

第Ⅱ層－農耕による耕作土である。(層厚10～20cm)

第Ⅲ層－耕作に伴う客土である。(層厚10～15cm)

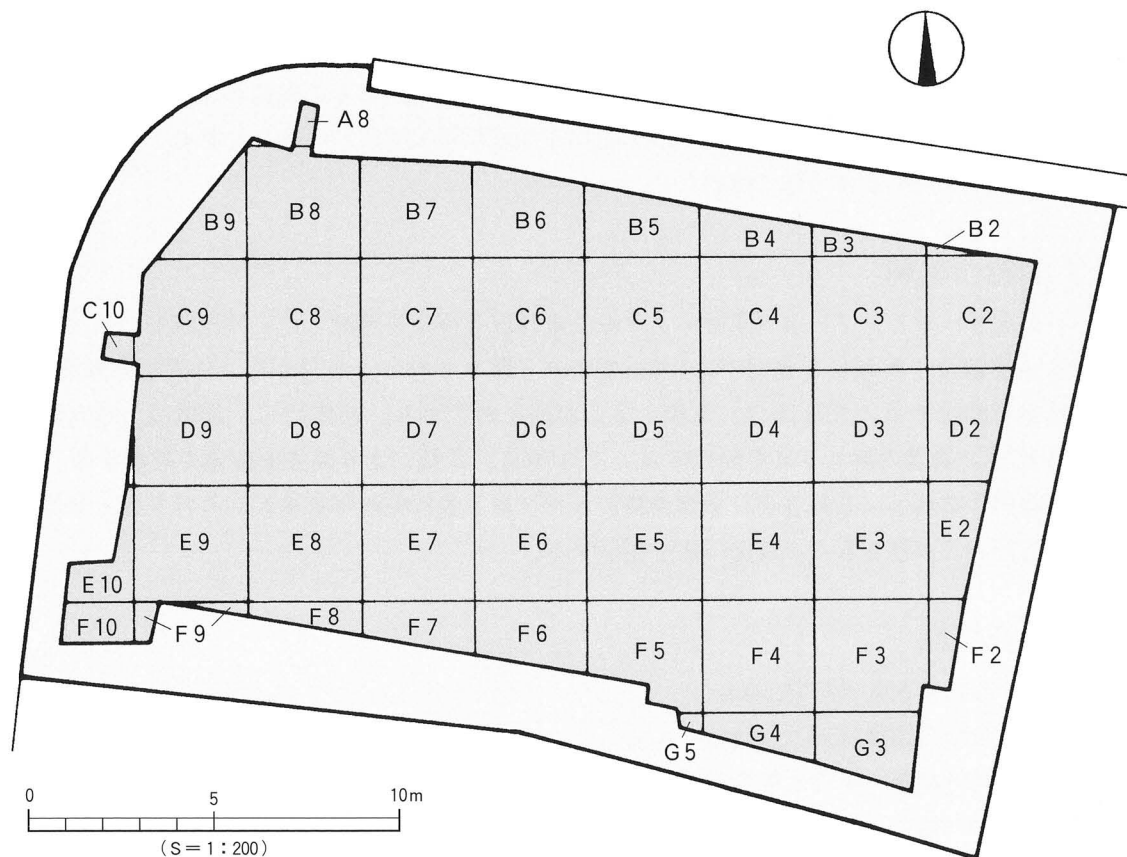
第Ⅳ層－旧耕作土である。(層厚約10～20cm)

第Ⅴ層－旧耕作に伴う客土である。(層厚6～10cm)

第Ⅵ層－遺物包含層である。(弥生時代～古代)(層厚10～20cm)

第Ⅶ層－地山と呼ばれるものであり、本層上面において遺構を検出した。

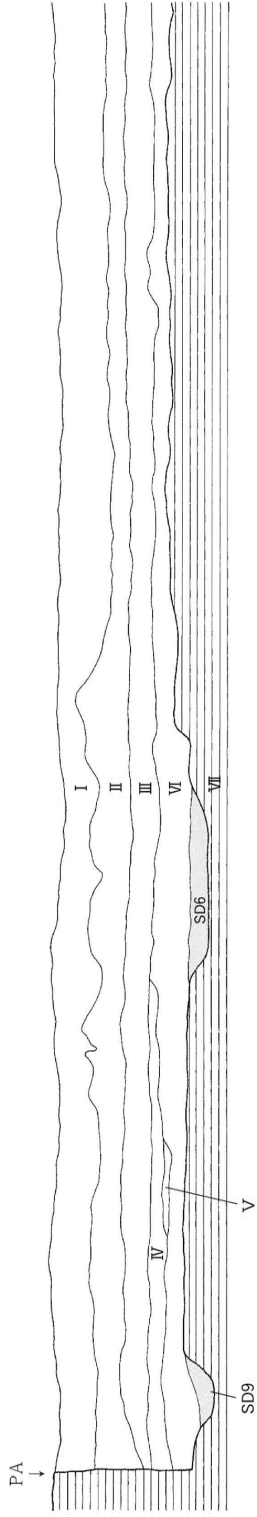
遺構は第Ⅶ層上面より竪穴式住居址3棟、掘立柱建物址1棟、溝10条、土坑12基、柱穴68基、倒木痕1基を検出した。



第79図 調査地区割図

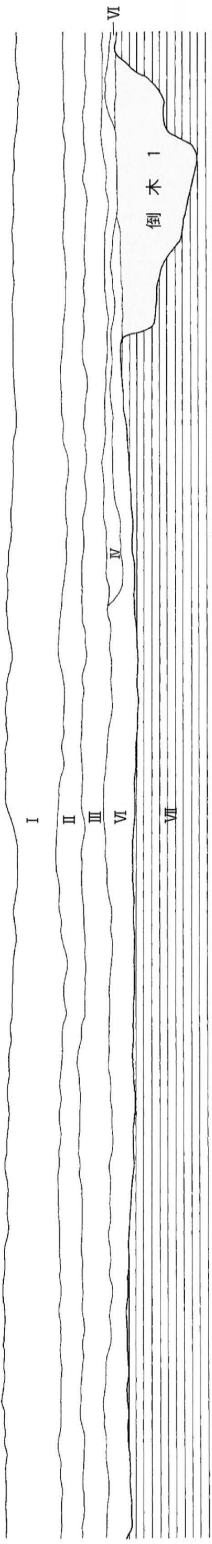
W-E

H.37.800m



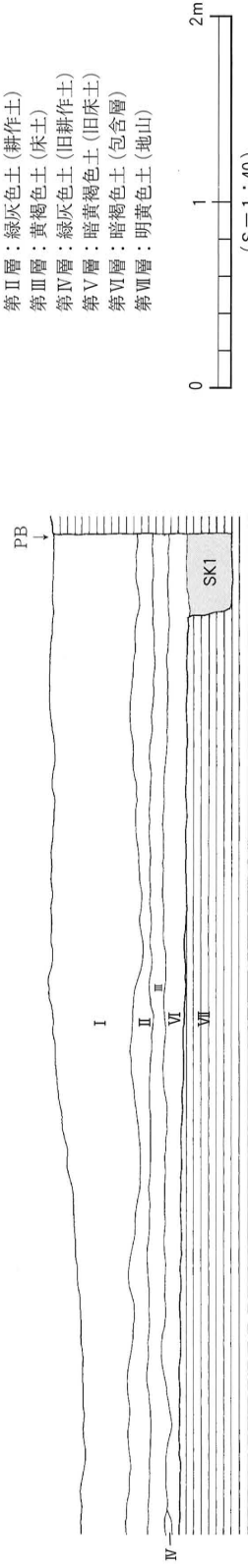
W-E

H.37.800m



W-E

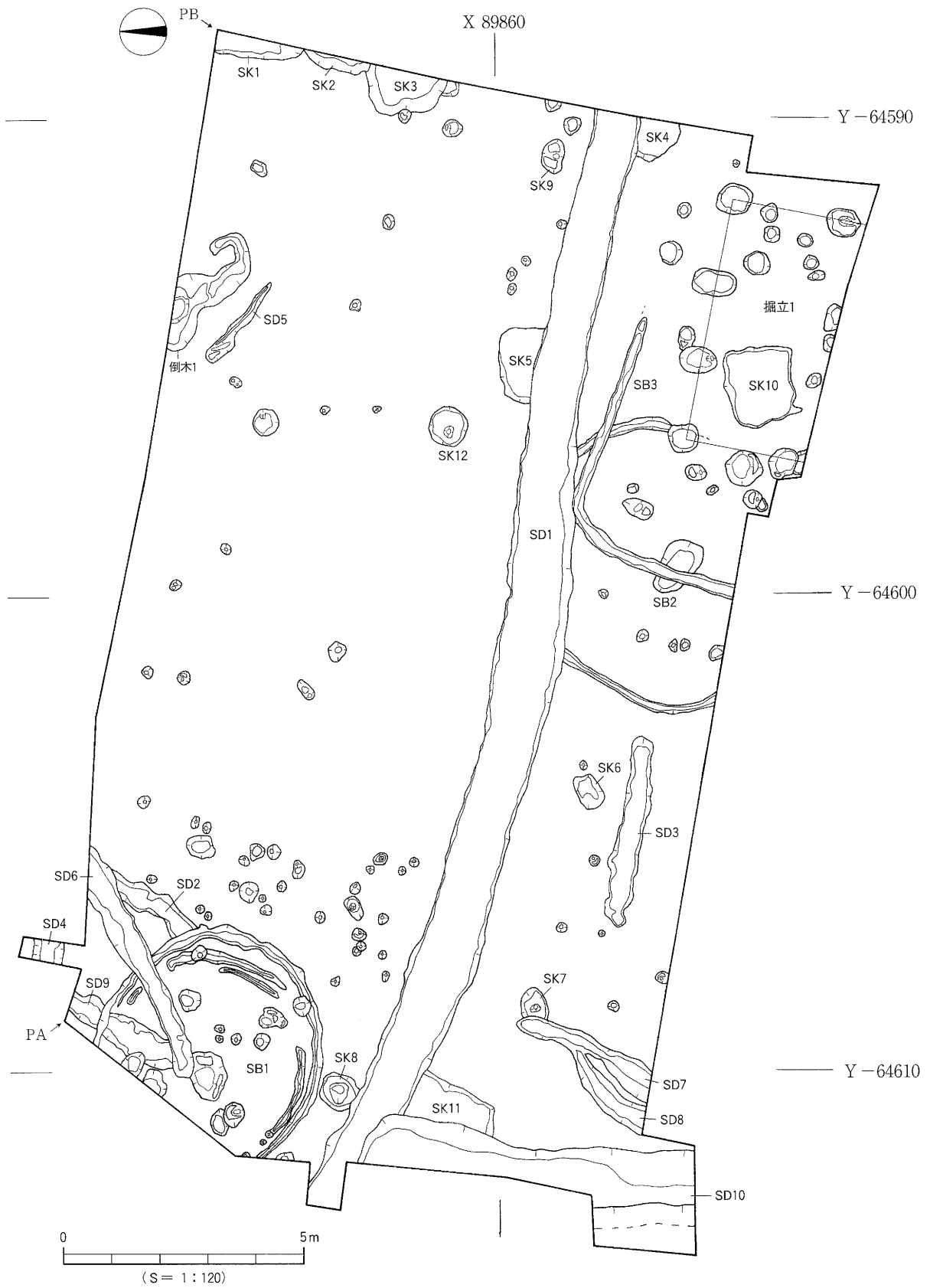
H.37.800m



- 第I層：暗黄色土 (造成土)
- 第II層：緑灰色土 (耕作土)
- 第III層：黄褐色土 (床土)
- 第IV層：緑灰色土 (旧耕作土)
- 第V層：暗黄褐色土 (旧床土)
- 第VI層：暗褐色土 (包含層)
- 第VII層：明黄色土 (地山)

第80図 調査区北壁土層図

久米高畑遺跡35次調査地



第81図 遺構配置図

3. 遺構と遺物

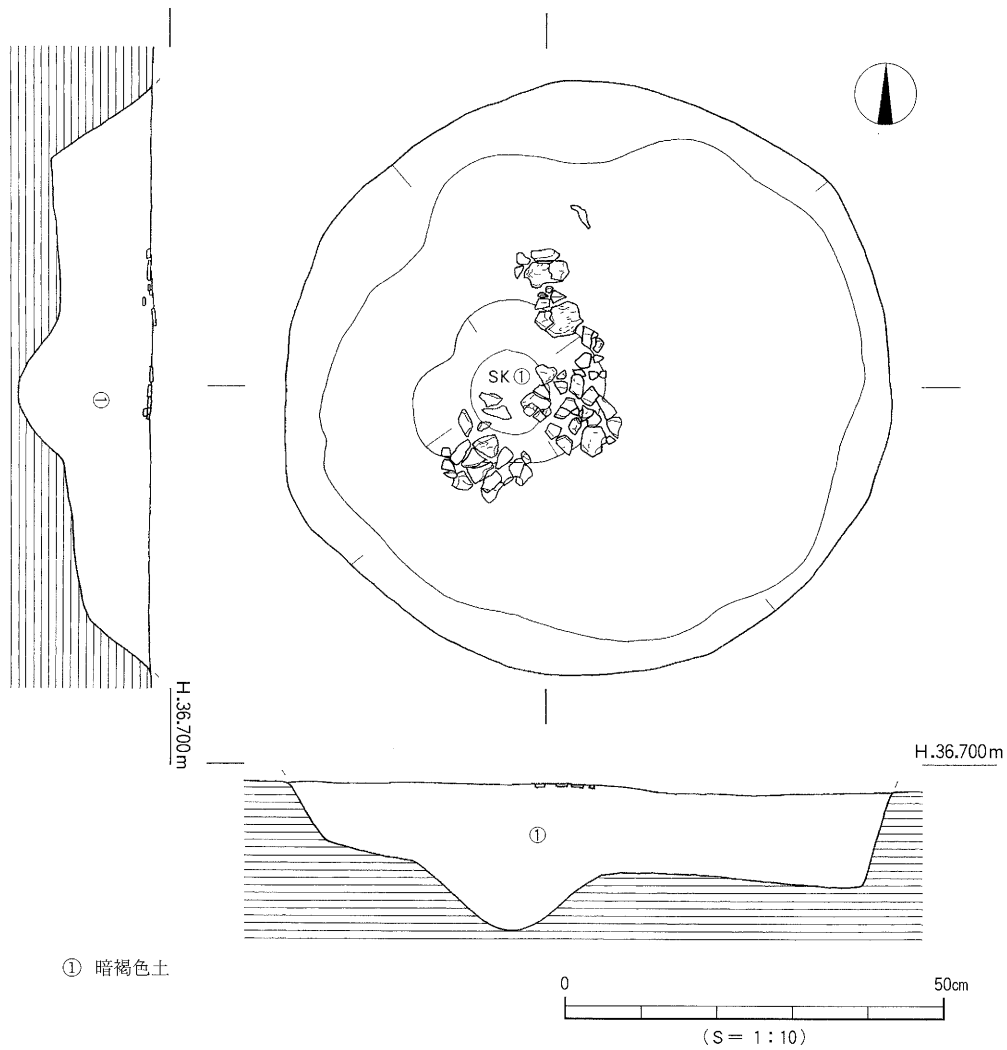
〔1〕縄文時代の遺構と遺物

(1) 土 坑

S K 12 (第82図)

調査区東側D 4～5区に位置する。平面形態は円形、断面形態は皿状を呈する。土坑の規模は、径0.8m、検出面よりの深さ20cmを測る。埋土は暗褐色土単層である。基底面に平面形態が楕円形、断面形態がレンズ状の凹みがある。遺物は、基底面付近より縄文土器の細片が密集した状態で出土しているが細片であるため図化には至らなかった。

時期：出土遺物より縄文時代晩期とする。



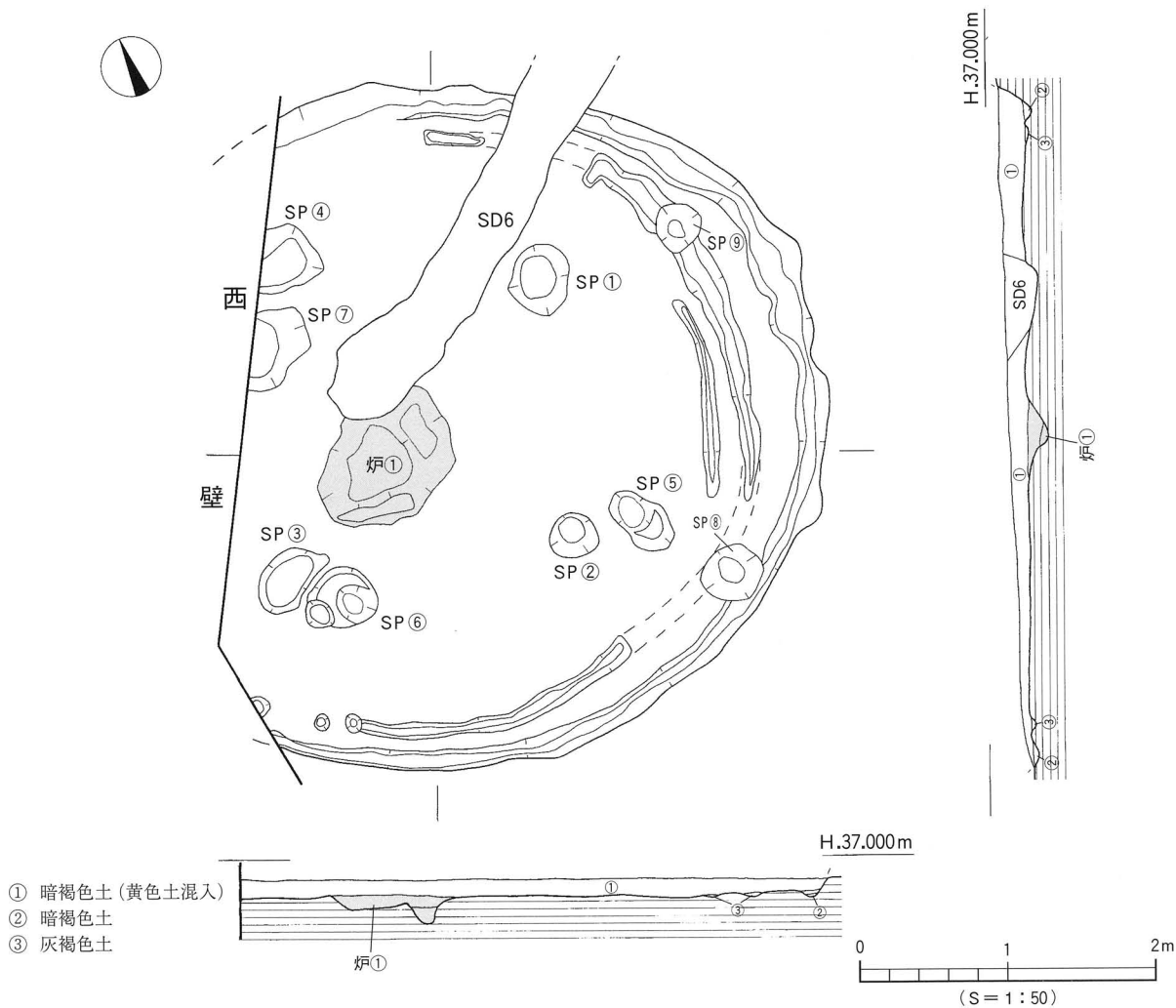
第82図 S K 12測量図

〔2〕 弥生時代の遺構と遺物

(1) 竪穴式住居址

SB1 (第83図、図版21)

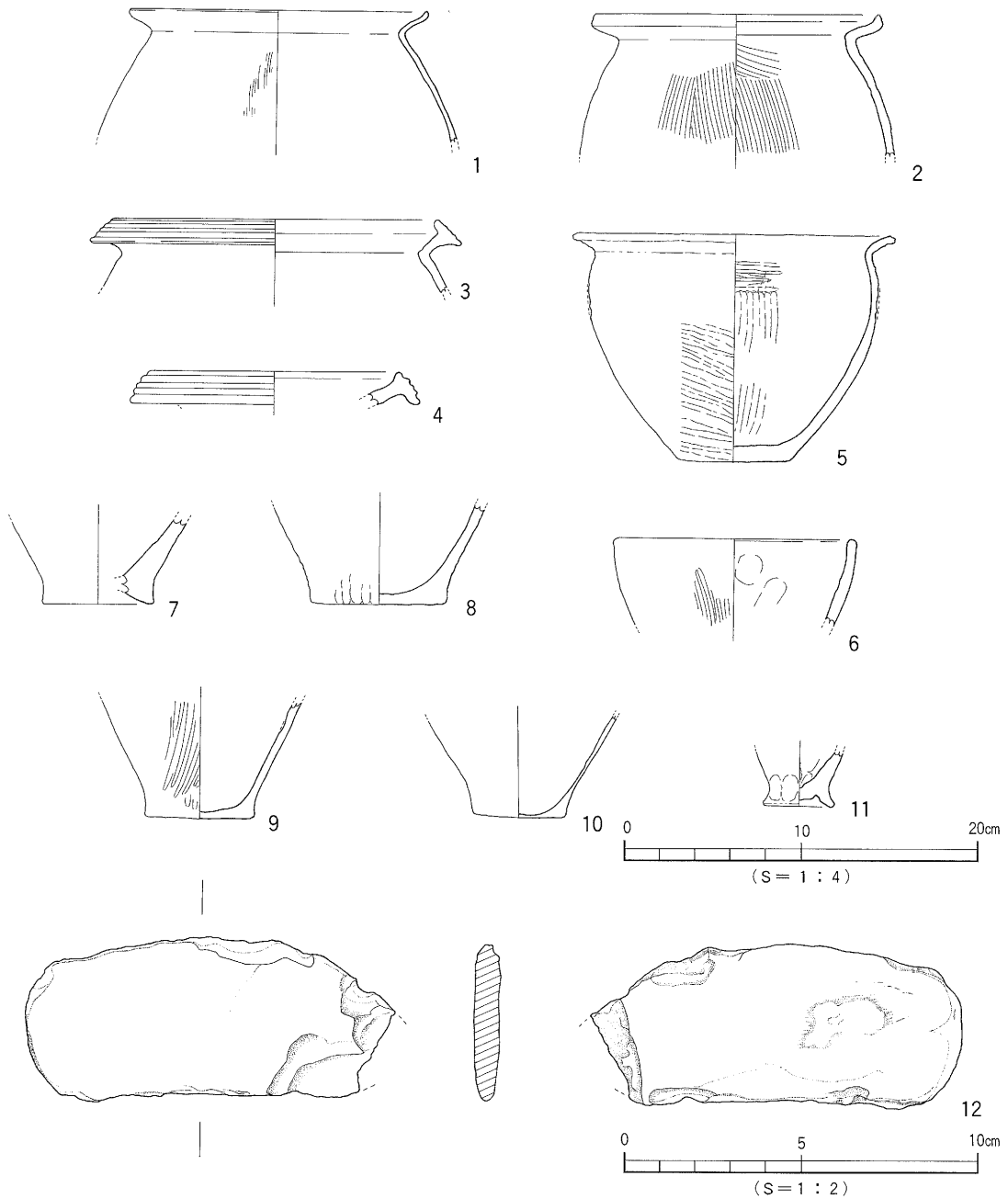
調査区北西隅B～C・8～9区に位置する。住居址西側は調査区外に延びており、SD2・9を切り、SD6に切られる。平面形態は円形を呈する。規模は径4.7m、壁高14cmを測る。床面は平坦であり、主柱穴はSP①～④の4本を検出している。主柱穴の平面形態は楕円形を呈しており、柱穴間隔は1.8～2.0m、径30～50cm、検出面よりの深さ32～46cmを測る。埋土は暗褐色土である。また、SP①を軸としてやや時計回りに振る様にSP⑤～⑦を検出している。この柱穴は平面形態が楕円形を呈しており、柱穴間隔は1.7～2.2m、径24～48cm、検出面よりの深さ13～50cmを測る。埋土は暗褐色土である。炉址は住居址中央部に位置し、平面形態は楕円形、断面形態は皿状を呈する。規模は長径1.0m、短径0.8m、検出面よりの深さ16cmを測る。周壁溝は壁体に沿って検出した。さらに、住居址床面の南西部から北東部にかけて、内側を巡る溝を検出した。また、南東部では溝が約20cm内側にもう1条巡っており、三重に巡る可能性もある。遺物は、炉址より弥生土器の壺・甕、主柱穴内よりほぼ完形の鉢が出土している。



出土遺物（第84図、図版26）

1～3は甕形土器、1・2は口縁端部を上方につまみ上げる。3は口縁端部を上下方に拡張し、凹線文5条を施す。4は壺形土器で凹線文4条を施す。5は完形の鉢形土器で、内外面に丁寧なヘラミガキを施す。6は直口口縁の鉢形土器。7～10は甕形土器の底部、11はミニチュア品である。12は緑色片岩製の石庖丁未製品である。

時期：出土遺物より弥生時代後期初頭とする。



第84図 SB1出土遺物実測図

S B 2 (第85図)

調査区南側E～F・4～6区に位置する。S D 1・S B 3・掘立1に切られている。直上まで後世の削平を受け、住居址の床面が露出した状態で検出した。平面形態は隅丸方形を呈する。周壁溝は西側と北東側が残存している。住居址の規模は径6.2m、主柱穴はS P ①・②の2本を検出した。しかし、柱穴は東側にも2本あることが考えられ、4本である可能性が強い。柱穴規模は径20～30cm、検出面よりの深さ35～40cmを測る。炉址は住居址中央に位置し、平面形態は楕円形を呈する。規模は長径1.30m、短径0.70m、検出面よりの深さ20cmを測る。遺物は炉址内より弥生土器が出土した。

出土遺物 (第85図、図版26)

13～15は甕形土器。13は口縁部が「く」字状で端部は平坦面をなす。14は平底の底部より内湾気味に立ち上がる胴部にヘラミガキ調整が顕著に施されている。15は上げ底の底部である。16は手捏ね土器である。底部にくびれをもつ上げ底で、内外面に指頭痕が顕著に残る。17は高坏の坏部である。直立する口縁部に5条の凹線文を施す。

時期：出土遺物より弥生時代後期初頭とする。

(2) 溝

S D 2 (第81図)

調査区北西部B 7～8、C 8区に位置し、北東から南西方向を指向する。S B 1、S D 6に切られている。断面形態は皿状を呈する。規模は検出長1.87m以上、上場幅0.44m、検出面よりの深さ0.05mを測る。埋土は暗褐色土である。遺物は弥生土器片が少量出土している。

時期：切り合いより弥生時代後期初頭以前とする。

S D 3 (第81図)

調査区南西部E 6～8区に位置し、東から西を指向する。断面形態は皿状を呈する。規模は検出長4.05m、上場幅0.5m、検出面よりの深さ0.06mを測り、溝床は東から西に6cmの比高差をもつ。埋土は暗褐色土である。遺物は弥生土器片が出土している。

出土遺物 (第86図、図版26)

18は甕形土器の口縁部である。頸部に刻目突帯をもつ。

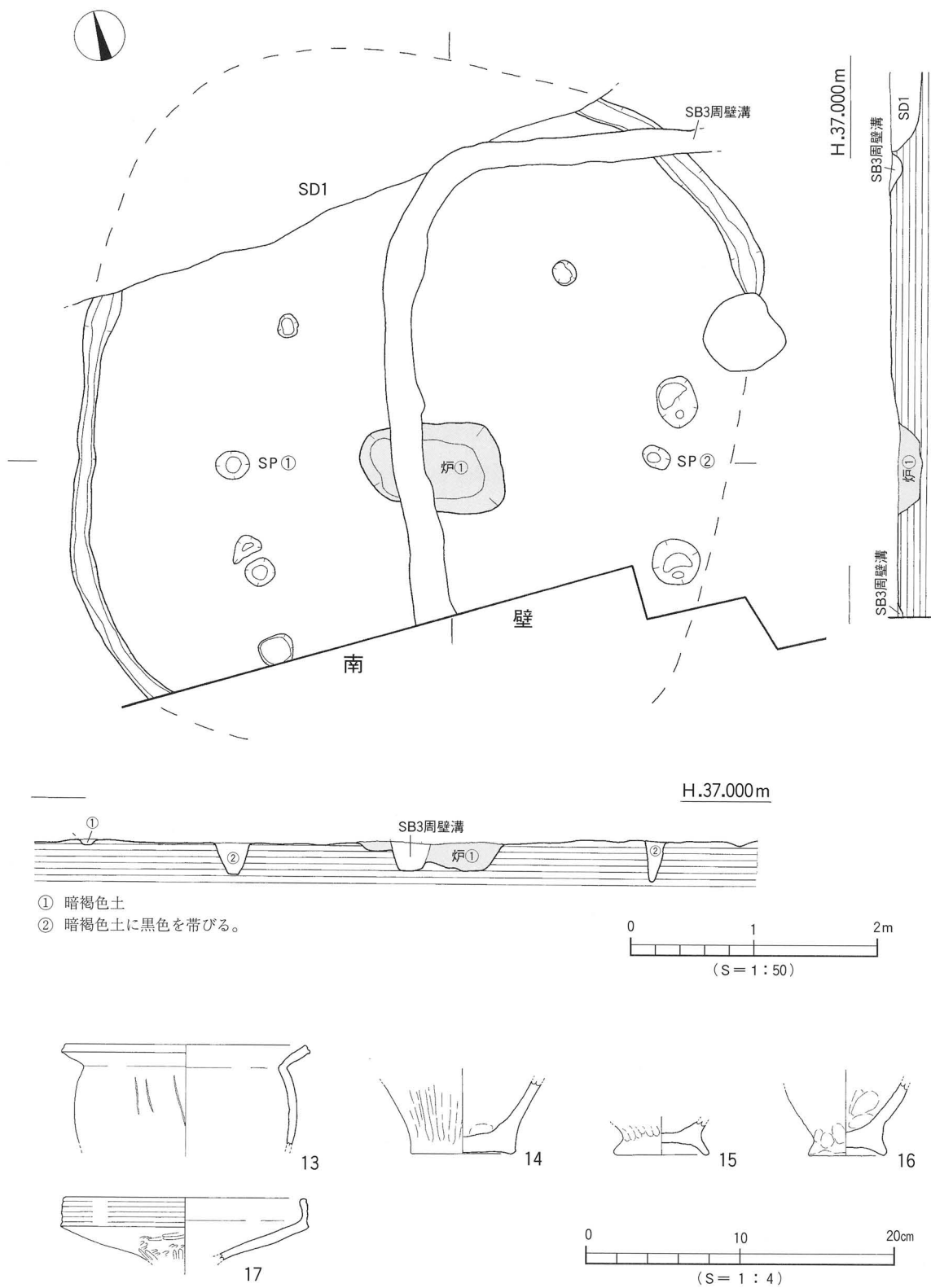
時期：出土遺物より弥生時代後期初頭とする。

S D 5 (第81図)

調査区北東部C 4区に位置し、南東から北西を指向する小溝である。断面形態はU字状を呈する。規模は検出長2.11m、上場幅0.21m、検出面よりの深さ0.13mを測る。埋土は暗褐色土である。遺物は弥生土器片が出土している。

時期：出土遺物より弥生時代後期初頭とする。

遺構と遺物



第85図 SB2 測量図・出土遺物実測図

SD 9 (第81図)

調査区北西部B 8区に位置し、SB 1に切られる。北東から南西を指向する。断面形態はレンズ状を呈する。規模は検出長2.11m以上、上場幅0.6m、検出面よりの深さ0.13mを測り、溝床は北東から南西に傾斜をなし15cmの比高差をもつ。埋土は黒色土である。遺物は出土していない。

時期：切り合いより弥生時代後期初頭以前とする。

(3) 土 坑

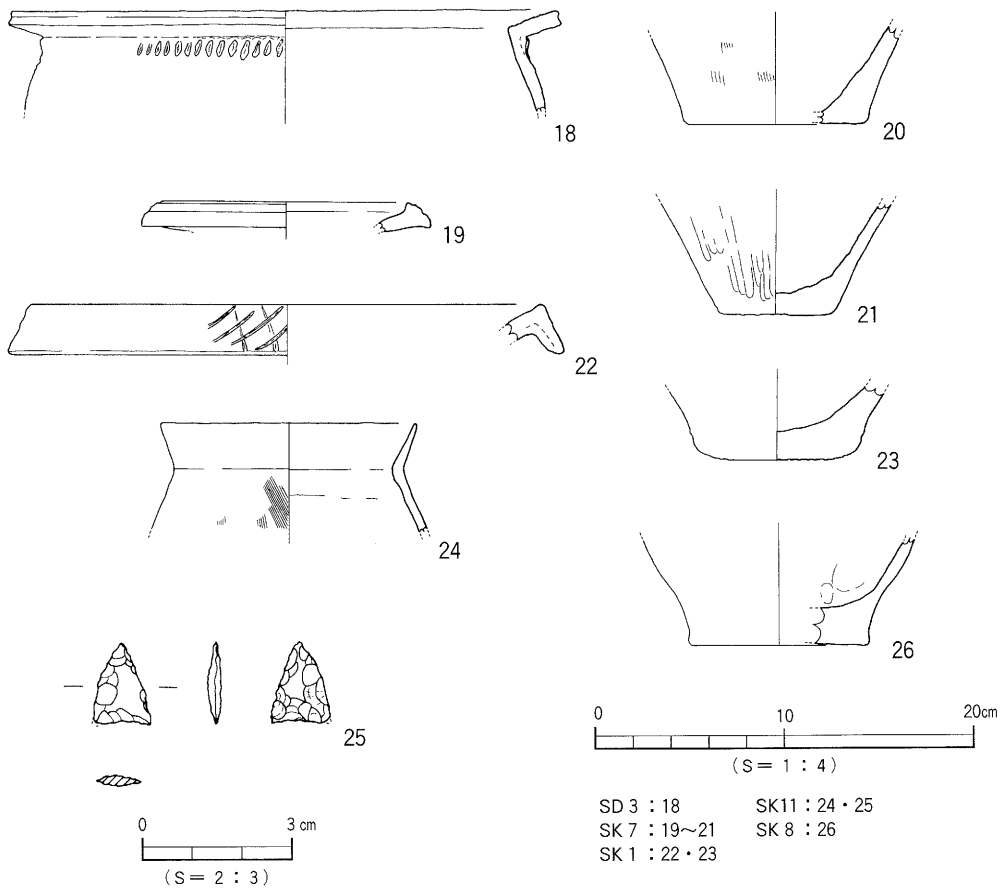
SK 7 (第81図)

調査区南西部E 8区に位置する。西側をSD 7に切られている。平面形態は楕円形、断面形態は逆台形状を呈している。規模は長軸0.65m以上、短軸0.54m、検出面よりの深さ0.45mを測る。埋土は暗褐色土である。遺物は弥生土器片が出土している。

出土遺物 (第86図)

19は壺形土器である。口縁端部に2条の凹線文を施す。20・21は甕形土器の底部である。平底の底部より外反気味に立ち上がる。20は刷毛目調整痕がみられる。21は外面に縦方向のヘラミガキが顕著に残る。

時期：出土遺物より弥生時代後期初頭とする。



第86図 弥生時代の溝・土坑出土遺物実測図

遺構と遺物

S K 1 (第81図)

調査区北東部C 2区に位置し、土坑東側は調査区外に延びる。平面形態は長方形が推定され、断面形態は逆台形状を呈する。規模は長軸1.78 m以上、短軸0.46 m以上、検出面よりの深さ0.24 mを測る。埋土は黒色土である。遺物は弥生土器片が出土している。

出土遺物 (第86図、図版26)

22は壺形土器の口縁部である。口縁端部が下方方向に拡張され、口縁部に斜格子目文をもつ。23は平底の底部より内湾気味に立ち上がる。

時期：出土遺物より弥生時代後期とする。

S K 11 (第81図)

調査区西側D 9区に位置し、S D 1、S D 10に切られている。平面形態は方形、断面形態は皿状を呈する。規模は東西0.47 m以上、南北1.8 m以上、検出面よりの深さ0.14 mを測る。埋土は黒褐色に暗褐色土が混じる。遺物は弥生土器片が出土している。

出土遺物 (第86図、図版26)

24は甕形土器である。緩い「く」字状を呈する。25は凹基式の無茎石鏃である。基部は僅かにえぐりがある。石材はサヌカイト製であり、長さ2.15 cm、幅1.57 cm、厚さ0.35 cm、重さ0.86 gを測る。

時期：切り合いと出土遺物より弥生時代後期末とする。

S K 8 (第81図)

調査地西側C・D 9区に位置する。平面形態は円形、断面形態がすり鉢状を呈している。規模は直径0.8 m、検出面よりの深さ0.45 mを測る。埋土は暗褐色土である。遺物は弥生土器片が出土している。

出土遺物 (第86図)

26は壺形土器の底部である。平底の底部より内湾気味に立ち上がる。

時期：出土遺物より弥生時代後期初頭とする。

S K 2 (第81図)

調査区北東部C・D 2区に位置する。東側は調査区外に延びており、S K 3を切る。平面形態は楕円形と推定され、断面形態は舟底状を呈する。規模は長軸1.46 m以上、短軸0.46 m以上、検出面よりの深さ0.21 mを測る。埋土は黒色土である。遺物は弥生土器片が出土している。

時期：出土遺物より弥生時代とする。

S K 3 (第81図)

調査区北東部D 2区に位置する。東側は調査区外に延びており、S K 2に切られている。平面形態は楕円形と考えられ、断面形態は逆台形状を呈する。規模は長軸1.56 m、短軸0.84 m以上、検出面よりの深さ0.36 mを測る。埋土は黒色土である。遺物は弥生土器片が出土している。

時期：出土遺物より弥生時代とする。

SK4 (第81図)

調査区東端F2区に位置する。東側は調査区外に延びており、SD1に切られている。平面形は楕円形と考えられ、断面形態は皿状を呈する。規模は長軸0.95m以上、短軸0.76m、検出面よりの深さ0.18mを測る。埋土は黒色土である。遺物は弥生土器片が出土している。

時期：出土遺物より弥生時代とする。

SK10 (第81図)

調査区南東部F4区に位置する。平面形態は方形、断面形態は皿状を呈する。規模は長軸1.68m、短軸1.37m、検出面よりの深さ0.09mを測る。埋土は褐色土である。遺物は弥生土器片が出土している。

時期：出土遺物より弥生時代とする。

〔3〕古墳時代

(1) 溝

SD1 (第87図、図版20)

調査区中央C9・D6～9・E2～7区を東西に走っており、溝両端は調査区外に延びる。SB2・3、SK4・5・11を切り、SD10に切られている。検出長23.8m、上場幅1～1.4m、検出面よりの深さ30～40cmを測る。断面形態は皿状を呈し、基底面は東から西に33cmの比高差をもつ。埋土は黒色土を基調とする。遺物は埋土中より弥生土器・須恵器・土師器片が出土している。

出土遺物 (第88図、図版27)

弥生土器 (27～39)

27～32は甕形土器で、27は頸部に刻目凸帯を、28は「く」字状の口縁部をもつ。29は口縁端部が上方向にのびる。30・31は上げ底の底部で、32は平底の底部である。外面に縦ミガキ調整を施す。

33～38は壺形土器である。33は内方向に拡張した口縁端部に斜格子目文を施す。34は外反する口縁部をもつ。35～38は平底の底部をもつ。39は高坏の脚裾部である。裾部に矢羽根透かしと凹線文が施され、平らな裾端面の内側が接地する。

須恵器 (40～42)

40は坏蓋である。天井部と口縁部を分ける稜は消失している。41は高坏の脚部である。外反する脚の裾部は肥厚する。42は甕形土器である。口縁部は外反し、端部は肥厚する。

土師器 (43～45)

43・44は甕形土器である。張りの弱い胴部に内湾する口縁部をもつ。45は高坏の脚部である。脚中部が緩やかに屈曲し、内面に明瞭な稜をもつ。

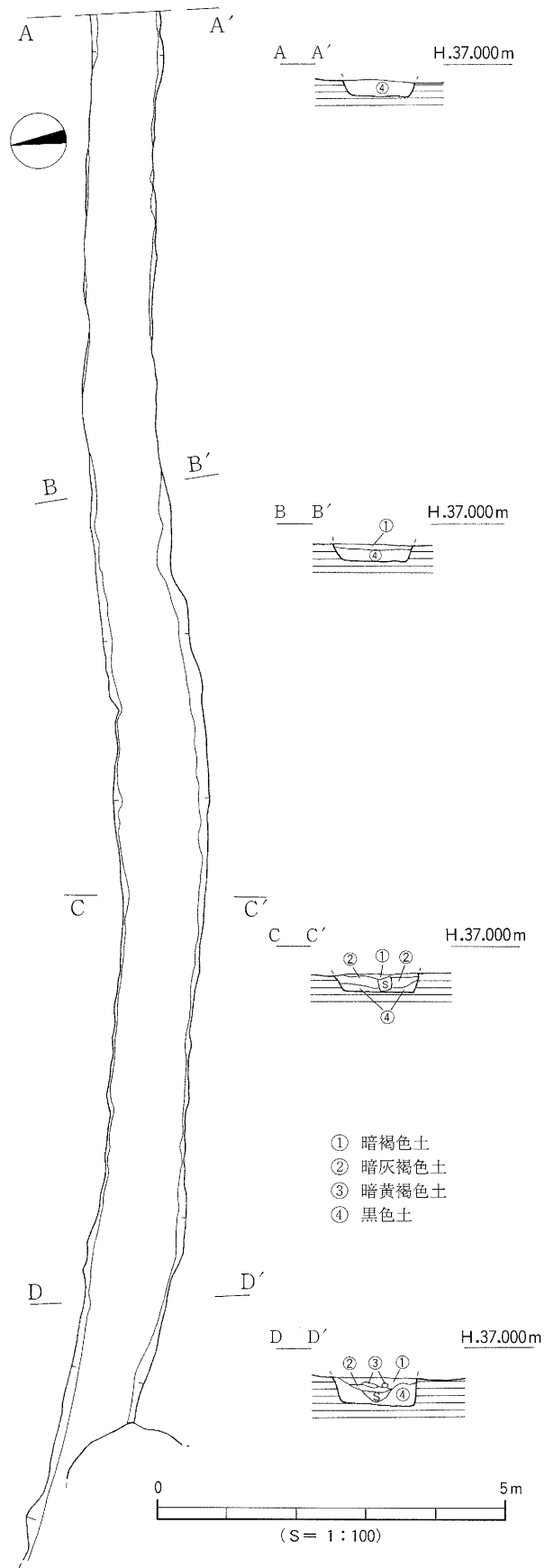
時期：出土遺物より古墳時代後期とする。

SD6 (第81図)

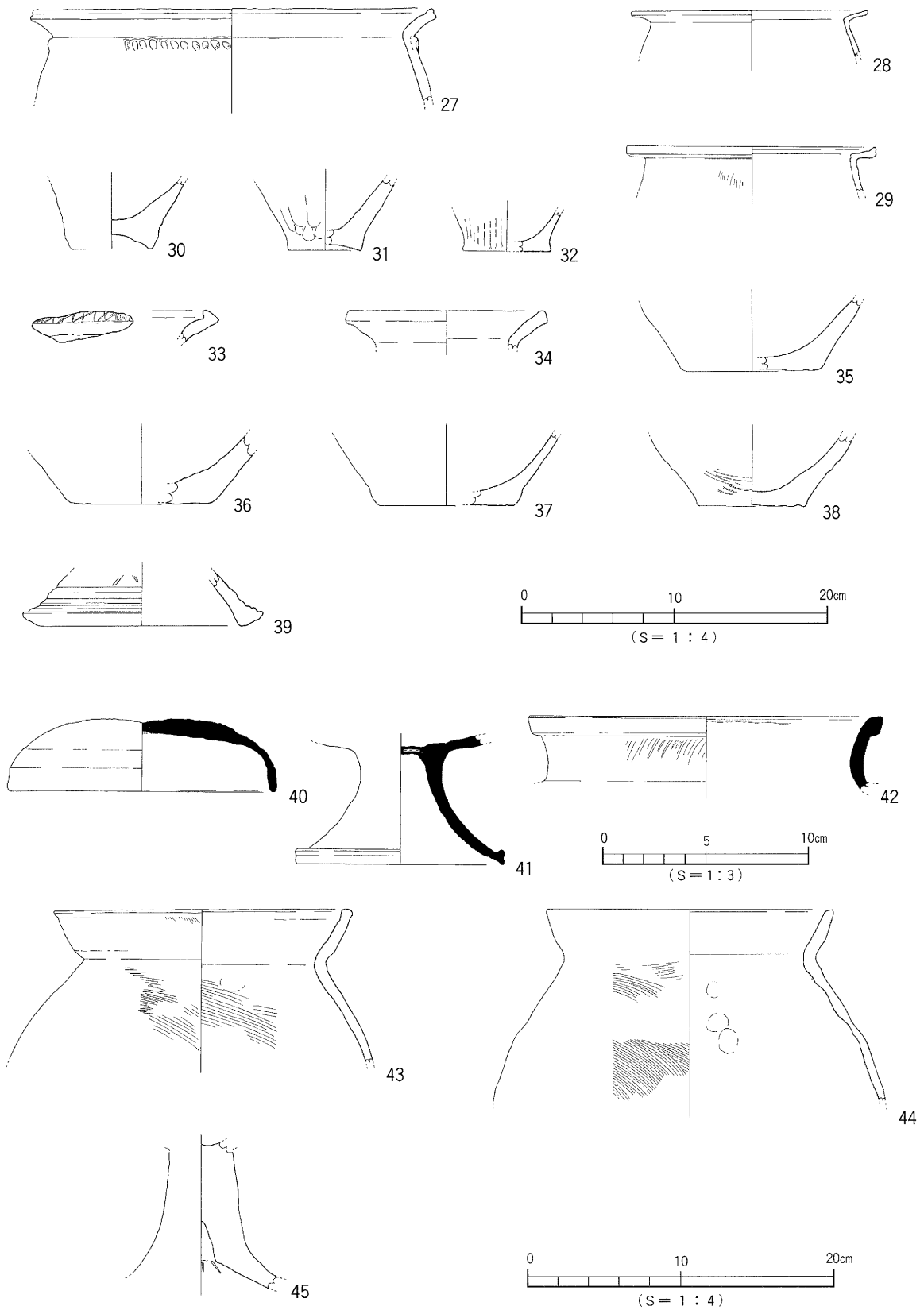
調査区北西部B7～9・C8～9区に位置し、SB1、SD2・9を切る。北東から南西を指向する。断面形態はレンズ状を呈する。規模は検出長4.8m以上、上場幅0.43m、検出面よりの深さ0.09mを測り、溝底は北東から南西に24cmの比高差をもつ。埋土は黒色土である。出土遺物はない。

時期：切り合いや埋土より、古墳時代とする。

遺構と遺物



第87図 SD 1 測量図



第88図 S D 1 出土遺物実測図

SD 8 (第81図)

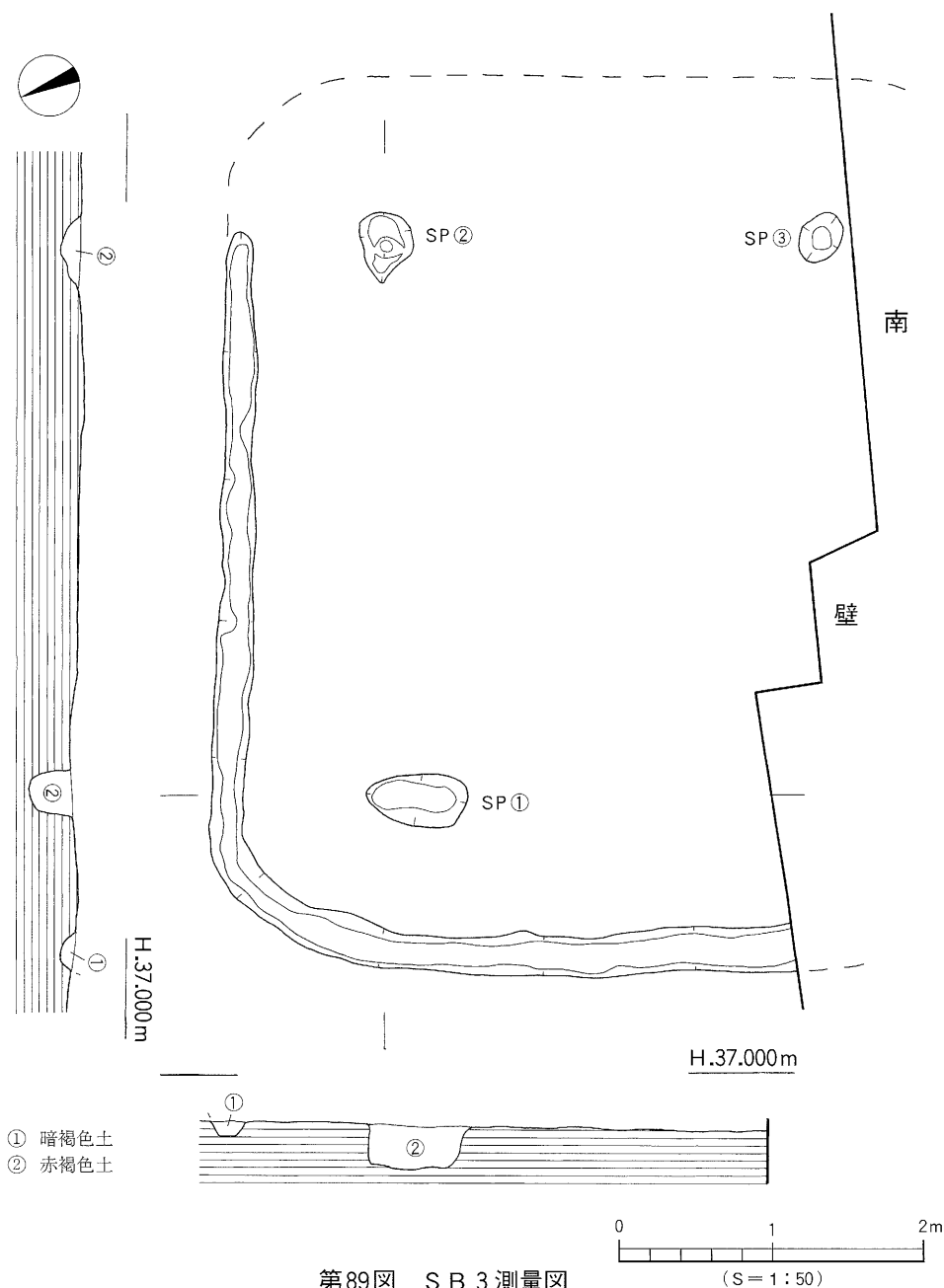
調査区南西部E 8～9区に位置し、SD 7に切られる。北東から南西を指向する。断面形態は皿状を呈する。規模は検出長2.1m以上、上場幅0.6m、検出面よりの深さ0.07mを測る。埋土は暗褐色土である。遺物は土師器・須恵器が出土している。

時期：出土遺物より、古墳時代とする。

(2) 竪穴式住居址

SB 3 (第89図)

調査区南東部E 4～5、F 4～6区に位置する。SB 2を切っており、SD 1に切られている。住居址南側は調査区外に延びている。平面形態は隅丸方形を呈する。後世の削平を受けており、周壁溝



と主柱穴のみが残存している。主柱穴は3本（SP①・②・③）を検出した。住居址の規模は東西6.2m（推定）、主柱穴は径40～60cm、検出面よりの深さ15～30cmを測る。遺物は周壁溝内より土師器片が出土している。

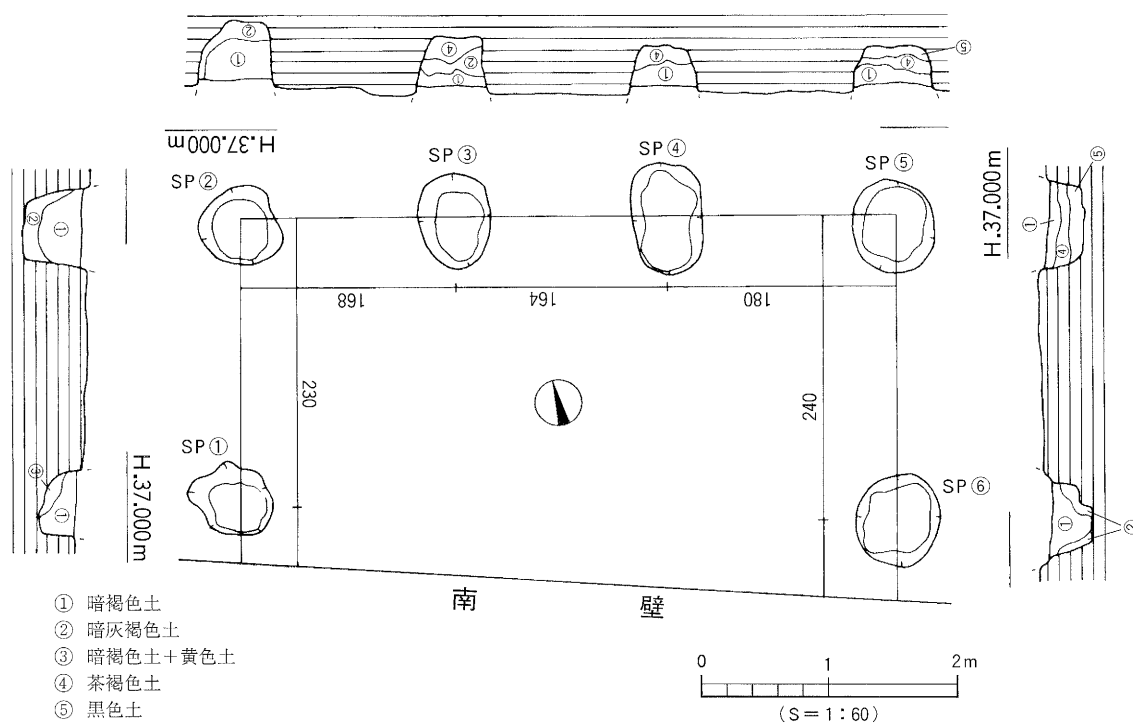
時期：出土遺物と切り合いより、古墳時代後期以前とする。

（3）掘立柱建物址

掘立1（第90図）

調査区南東部F3～5、G3～4区に位置し、SB2・3を切っている。東西3間、南北1間以上を検出しているが、南側は調査区外に延びる。規模は東西5.12m、柱間1.64～1.8m、南北の柱間2.3mを測る。柱穴の平面形態は円形～楕円形を呈しており、径50～90cm、検出面よりの深さ36～54cmを測る。東西方向の内側2基の柱穴は建て替えた痕跡が残る。遺物は土師器片が出土している。

時期：出土遺物より古墳時代後期以降とする。



第90図 掘立1 測量図

(4) 土 坑

S K 5 (第81図)

調査区東側F 4区に位置し、南側はS D 1に切られている。平面形態は隅丸方形、断面形態は舟底状を呈する。規模は長軸1.63m、短軸0.57m以上、検出面よりの深さ0.16mを測る。埋土は褐色土である。遺物は土師器片が出土している。

時期：出土遺物より古墳時代とする。

S K 6 (第81図)

調査区中央南側E 7区に位置する。平面形態は楕円形、断面形態は逆台形状を呈している。規模は長軸0.74m、短軸0.49m、検出面よりの深さ0.41mを測る。埋土は暗黄褐色土である。遺物は土師器片が出土している。

時期：出土遺物より古墳時代とする。

S K 9 (第81図)

調査区東側E 3区に位置する。平面形態は楕円形、断面形態はレンズ状を呈する。規模は長軸0.7m、短軸0.45m、検出面よりの深さ0.18mを測る。埋土は暗褐色土である。遺物は須恵器が出土している。

時期：出土遺物より古墳時代とする。

[4] 古 代

(1) 溝

S D 10 (第81・91図、図版22～25)

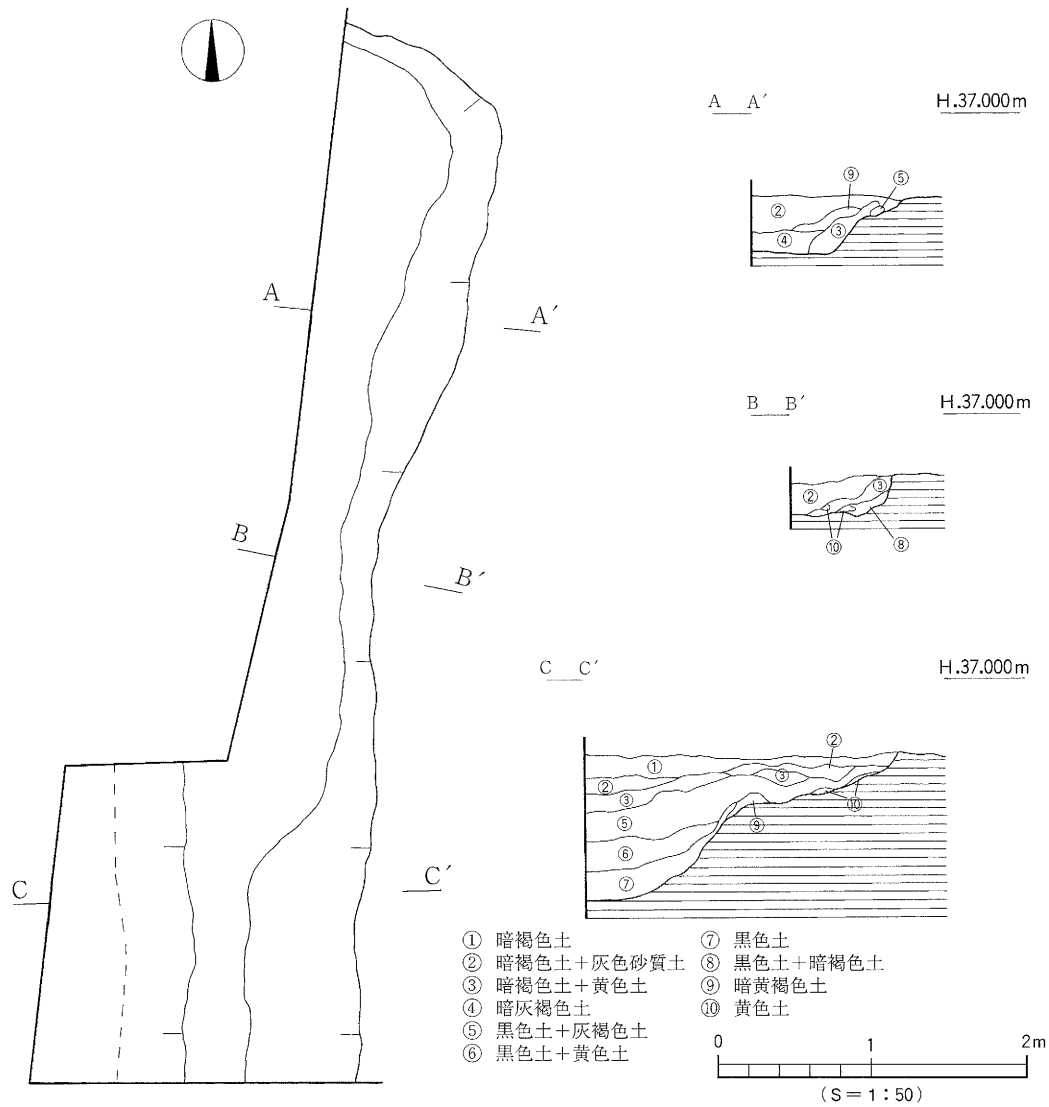
調査区南西端C 9・D 6～9・E 2～7・F 9区にて南北に延びる溝を検出した。溝はほぼ真北を指向しており、規模は長さ7.15m以上、最大幅2.15m、検出面よりの深さ1.30mを測る。断面形態は逆台形状に急勾配を呈し、溝の東側にはテラス状の平坦面を検出した。テラス幅は1メートル前後で、検出面よりの深さは24～40cmを測る。埋土は上層であるテラス部では暗褐色土、中層から下層までは黒褐色土がみられ、溝の外から流れ込んだ様に堆積していた。遺物は、土師器片が僅かに出土している。

時期：切り合いより、古代が考えられる。

[5] 時期不明の遺構と遺物

S D 4 (第81図)

調査区北西拡張部B 8区に位置し、東から西を指向する。断面形態はU字状を呈し、規模は検出長0.47m以上、上場幅0.65m、検出面よりの深さ0.24mを測る。埋土は暗褐色土であり、出土遺物はない。



第91図 SD 10測量図

SD 7 (第81図)

調査区南西部E 8～9区に位置し、SK 7、SD 8を切っている。北東から南西を指向する。断面形態はレンズ状を呈する。規模は検出長3.1m以上、上場幅0.5m、検出面よりの深さ0.12mを測り、溝底は北東から南西に13cmの比高差をもつ。埋土は黒色土である。出土遺物はない。

〔6〕 その他の遺構と遺物

(1) 柱 穴

68基が検出されている。平面形態は円～楕円形が主で、規模は径0.1～0.8m、検出面よりの深さ6～58cmを測っている。埋土は褐色土～黒色土が大半を占めており、赤褐色土が一部にみられる。遺物は弥生土器、須恵器、土師器が出土している。

(3) 倒木痕

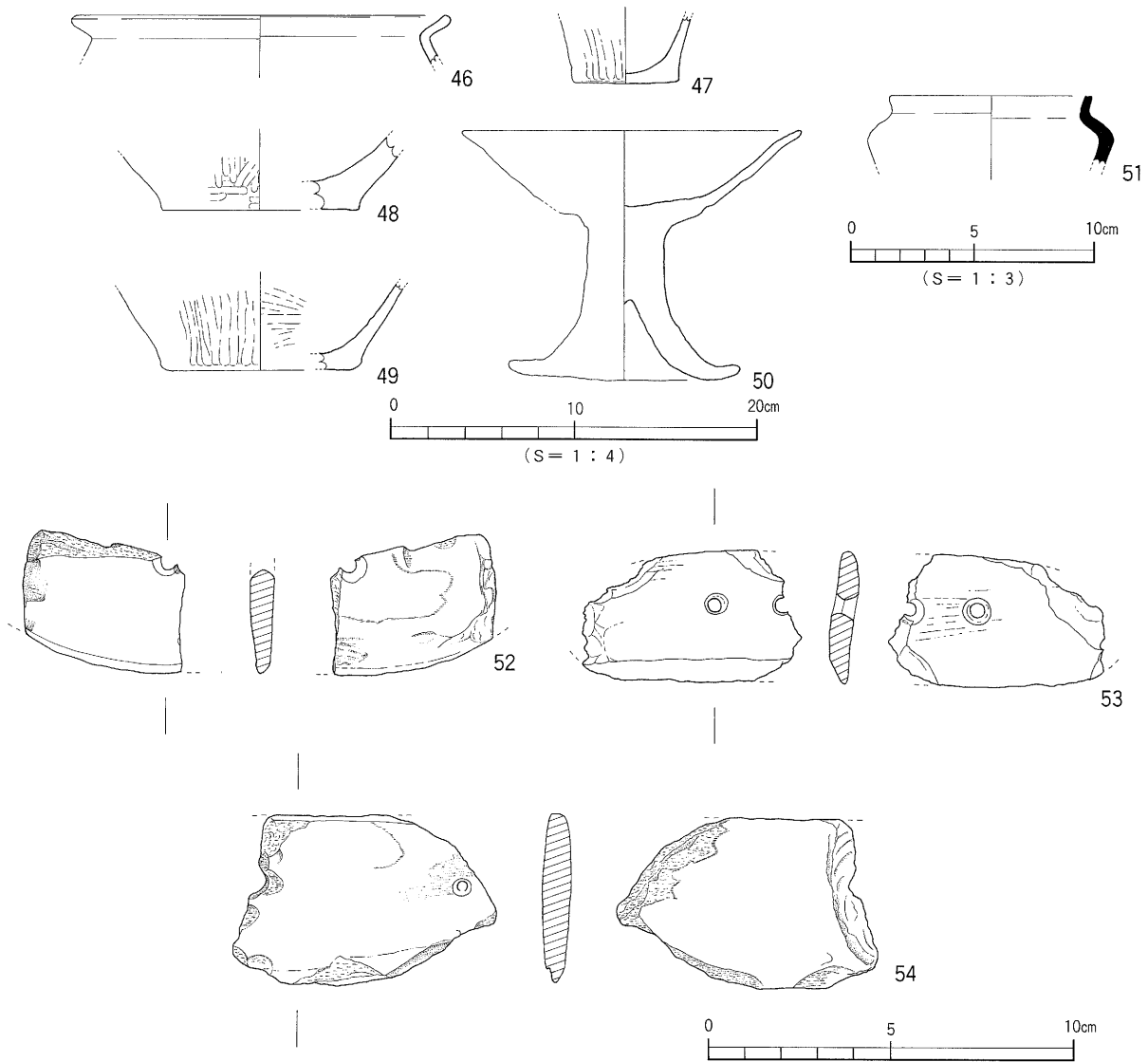
倒木1 (第81図)

調査区北東部のB～C・3～4区に位置し、北側は調査区外へ延びる。規模は東西1.5m、南北2.1m以上、検出面よりの深さ0.5mを測る。埋土は黒色粘性土である。出土遺物はない。

〔7〕 第Ⅵ層出土遺物 (第92図、図版27)

46・47は甕形土器である。46は「く」字状の頸部に口縁端部は丸く納まる。47は平底の底部であり、外面にヘラミガキが施されている。48・49は壺形土器である。平底の底部より内湾気味に立ち上がる。50は土師器の高坏である。坏底端部に明瞭な稜をもち、脚裾部は外方向へ開く。51は須恵器の短頸壺である。張り気味の肩部に外反する短い口縁部をもつ。

52～54は磨製の石庖丁であり、研磨が全面に施される。52は刃部の研ぎ出しは両面から行われる。53は2箇所穿孔が施されるが1箇所は貫通していない。刃部は殆どが欠損しているが、片面は研ぎ出されていることが確認できた。54は背部を僅かに面取りしており、刃部は片面が研ぎ出されている。



第92図 第Ⅳ層出土遺物実測図

(S = 1 : 2)

4. 小 結

今回の調査では、縄文時代から古代までの遺構と遺物を検出した。

縄文時代

S K 12は後世の削平を受けており遺存状態は良好ではないが、縄文土器片が出土した。土器は摩滅しており復元が困難であるが、縄文時代晩期の深鉢と考えられる。この土坑は久米高畑遺跡26次調査地で検出された晩期の円形土坑に、形態や規模・埋土が類似しており関連施設も考えられる。

弥生時代

弥生時代後期初頭のS B 1・2は炉址をもつ円形の竪穴式住居址であり、S B 1においては住居址内の内側に住居址の壁体に並行する溝2条を検出している。このことより、住居の建て替えが想定される。また、支柱穴内にはほぼ完形の鉢形土器が出土した。この土器は、建物の廃絶時に柱穴内に意図的に入れられ祭祀的な様相をもつことも想定される。S B 1・2は出土遺物より同時期に併存した可能性がある。

古墳時代

古墳時代になると、S D 1・掘立1より古い時期にS B 3が存在している。S B 3は後世の削平を受けており遺存状態は良好ではないが4本柱をもつ隅丸方形の竪穴式住居址であることがわかった。S D 1は若干の蛇行を示しながら調査区内を東西方向に延びており、西側は調査区外をやや北向きが強く振れる様相を呈している。この溝は、土層の堆積状態より短期間に埋没したものであり、区画性の強い溝が考えられる。掘立1は南側が調査区外に延びているが、柱間より東西棟であると考えられる。S D 1と掘立1とは並行した位置関係や埋土が同一であることから、同時期に存在していたことが窺える。S D 6は調査区外の北東方向に延びており、溝の方向や埋土より26次調査地のS D 10につながる様相が強い。また、本調査区内の北東部と道路を挟んで隣接する26次調査地の南側付近の遺構が希薄であることより、この辺りに集落に伴う広場的な空間が存在していたことも考えなければならない。

古 代

S D 10は調査区南西隅においてごく一部の検出ではあるが南北に延びており、北側は20次調査地の区画溝にほぼ直線的に延び「久米郡衙正倉院」の施設を囲んでいる東辺の区画溝の外側になると考えられる。溝の断面形態は逆台形状であり、10・27・31・32次調査により確認できた断面形状と同一である。この区画溝の外側である東側に浅いテラス状の平坦面が検出されており、南辺の区画溝を検出した31・32次調査地においては区画溝の内側に幅1mのテラス状の平坦面が検出され、32次調査地では途切れ部も検出されているが、今回はこのテラス状の遺構が外側にも存在することが確認でき、途切れ部も伴っている。この遺構がどのような施設を構成するのかは、今後解明しなければならない。

参考文献

- 西尾幸則・池田 学 1989「来住廃寺跡寺域調査」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅱ』松山市教育委員会
西尾幸則・池田 学 1991「久米官衙遺跡群」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅲ』松山市教育委員会
宮内慎一 1992「久米高畑遺跡8次」『来住地区の遺跡』（財）松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
山之内志郎編 1997「久米高畑遺跡26・27・31・32次調査地」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅸ』松山市教育委員会・
（財）松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

橋本雄一 1997「久米官衙遺跡遺跡群～総括と今後の展望～」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅸ』松山市教育委員会・
(財)松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

遺構・遺物一覧（河野史知）

(1) 以下の表は、本調査検出の遺構・遺物の計測値及び観察一覧である。

(2) 遺構の一覧表中の出土遺物欄の略号について。

例) 弥生→弥生土器、土師→土師器、須恵→須恵器。

(3) 遺物観察表の各記載について。

法量欄 () : 復元推定値

形態・施文欄 : 土器の各部位名称を略記

天→天井部、口→口縁部、胴→胴部、柱→柱部、裾→裾部、底→底部。

胎土・焼成欄 胎土欄では混和剤を略記した。

砂→砂粒、長→長石、石→石英、金→金雲母、密→精製土。

() 内の数値は混和剤粒子の大きさを示す。

例) 石・長 (1～4) 多→「1～4 mm大の石英・長石を多く含む」である。

焼成欄の略記について。例) ◎→良好、○→良、△→不良。

久米高畑遺跡35次調査地

表82 竪穴式住居址一覧

竪穴 (SB)	時 期	平面形	規 模 (m) 長さ(長径)×幅(短径)×深さ	埋 土	床面積 (㎡)	主柱穴 (本)	内 部 施 設				周壁溝	備 考
							高床	土坑	炉	カマド		
1	弥生後期 初頭	円形	4.90 × 4.70 × 0.14	暗褐色土	15.21	4			○	○	SD2・9を切りSD6に切られる。	
2	弥生後期 初頭	隅丸方形	(6.20) × (4.80) × 0.04	暗褐色土	(19.0)	2 (4)			○	○	SB3・掘立1・SD1に切られる。	
3	古墳後期 以前	隅丸方形	(5.00) × (5.00) × 0.03	暗褐色土	(18.8)	2				○	SB2を切りSD1に切られる。	

表83 竪穴式住居址の炉・カマド一覧

竪穴 (SB)	時 期	炉	カマド	位 置	平面形	規 模 (m) 長さ(長径)×幅(短径)×深さ	出土遺物	備 考
1	弥生後期 初 頭	○		住居址ほぼ中央部	楕円形	1.00 × 0.80 × 0.16	弥生	炭化物
2	弥生後期 初 頭	○		住居址中央部	楕円形	1.30 × 0.70 × 0.20	弥生	炭化物

表84 掘立柱建物址一覧

掘立	規模 (間)	方向	桁 行		梁 行		方 位	床面積 (㎡)	時 期	備 考
			実長(m)	柱間寸法(m)	実長(m)	柱間寸法(m)				
1	1×3	東西	5.12	1.80・1.64・1.68	2.40	2.40	N-103°-E	11.82	古墳後期 以 降	SB2・3を切る。

表85 土坑一覧

土坑 (SK)	地 区	平面形	断面形	規 模 (m) 長さ(長径)×幅(短径)×深さ	床面積 (㎡)	埋 土	出土遺物	時 期	備 考
1	C 2	長方形	逆台形	(1.78) × (0.46) × 0.24	(0.75)	黒色土	弥生	弥生後期	
2	C・D2	楕円形	舟底状	(1.46) × (0.46) × 0.21	(0.53)	黒色土	弥生	弥生時代	SK3を切る。
3	D 2	楕円形	逆台形	(1.56) × (0.84) × 0.36	(1.26)	黒色土	弥生	弥生時代	SK2に切られる。
4	F 2	楕円形	皿状	(0.95) × 0.76 × 0.18	(0.58)	黒色土	弥生	弥生時代	SD1に切られる。
5	E 4	隅丸方形	舟底状	1.63 × (0.57) × 0.16	(0.83)	褐色土	土師	古墳時代	SD1に切られる。
6	E 7	楕円形	逆台形	0.74 × 0.49 × 0.41	0.33	暗黄褐色土	土師	古墳時代	
7	E 8	楕円形	逆台形	(0.65) × 0.54 × 0.45	(0.30)	暗褐色土	弥生	弥生後期 初頭	SD7に切られる。
8	C・D9	円形	擂鉢	0.80 × 0.80 × 0.45	0.47	暗褐色土	弥生	弥生後期 初頭	SD1に切られる。
9	E 3	楕円形	レンズ状	0.70 × 0.45 × 0.18	0.26	暗褐色土	須恵	古墳時代	
10	F 4	方形	皿状	1.68 × 1.37 × 0.09	2.13	褐色土	弥生	弥生時代	
11	D 9	方形	皿状	(1.80) × (0.47) × 0.14	(0.75)	黒褐色土+ 暗褐色土	弥生	弥生後期末	SD1・10に切られる。
12	D4・5	円形	皿状	0.82 × 0.80 × 0.20	0.49	暗褐色土	縄文	縄文晩期	

遺物観察表

表86 溝一覧

土坑 (SD)	地 区	断面形	規 模 (m) 長さ × 幅 × 深 さ	方 向	埋 土	出土遺物	時 期	備 考
1	C 9 ~ E 7	皿状	(23.80) × 1.00 ~ 1.40 × 0.30 ~ 0.40	東-西	黒色土	弥生・土師 須恵	古墳後期	SB2・3, SK4・5・8・11を 切り, SD10に切られる。
2	B 7 ~ C 8	皿状	(1.87) × 0.44 × 0.05	北東- 南西	暗褐色土	弥生	弥生後期 初頭以前	SB1、SD6に 切られる。
3	E 6 ~ 8	皿状	(4.05) × 0.50 × 0.06	東-西	暗褐色土	弥生	弥生後期 初頭	
4	B 8	U字状	(0.47) × 0.65 × 0.24	東-西	暗褐色土		時期不明	
5	C 4	U字状	(2.11) × 0.21 × 0.13	南東- 北西	暗褐色土	弥生	弥生後期 初頭	
6	B 7 ~ C 9	レンズ状	(4.80) × 0.43 × 0.09	北東- 南西	黒色土		古墳時代	SB1、SD2・9 を切る。
7	E 8・9	レンズ状	(3.10) × 0.50 × 0.12	北東- 南西	黒色土		古墳時代 以降	SK7、SD8を 切る。
8	E 8・9	皿状	(2.10) × 0.60 × 0.07	北東- 南西	暗褐色土	土師・須恵	古墳時代	SD7に切られ る。
9	B 8	レンズ状	(2.11) × 0.60 × 0.13	北東- 南西	黒色土		弥生後期 初頭以前	SB1に切られ る。
10	C 9 ~ F 9	逆台形	(7.00) × 2.15 × 0.40 ~ 1.00	南-北	上層、暗褐色土 中層から下層、 黒褐色土	弥生・土師 須恵	8世紀	SD1、SK11 を切る。

表87 S B 1 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形 態・施 文	調 整		(外面) 色調 (内面)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
1	甕	口径 (17.0) 残高 7.6	口縁部は「く」字状に外反し、 端部は上方につまみ上げる。	㊶ナデ ㊷ナデ、ハケ	ナデ	茶色 茶色	石・長(1~3) ○		
2	甕	口径 (16.0) 残高 8.2	口縁部は「く」字状に外反し、 端部は上方向に肥厚される。	㊶ヨコナデ ㊷ハケ (7~8本/cm)	㊶ヨコナデ ハケ(4本/cm) ㊷ハケ(10~11本/cm)	浅茶色 浅茶色	石・長(1~3) ○		26
3	甕	口径 (18.2) 残高 4.2	口縁部が上下に拡張し、端部 に5条の凹線文を施す。	ナデ	ナデ	淡橙色 淡褐色	石・長(1~4) ○		
4	壺	口径 (14.0) 残高 1.9	口縁部が上下に拡張し、端部 に4条の凹線文を施す。	マメツ	マメツ	茶色、 橙色 茶色	石・長(1~3) ○		26
5	鉢	底径 6.2 残高 13.7	平底の底部に胴部は内湾し、 口縁部は「く」字状に外反す る。	㊶マメツ ㊷ミガキ ㊸マメツ	㊶マメツ ㊷㊸ミガキ	灰褐色、 黄灰色 灰褐色	石・長(1~7) ○		26
6	鉢	口径 (13.0) 残高 5.1	内湾気味の胴部に口縁端部が 面をなす。	㊶ナデ ㊷ミガキ	ナデ (指頭痕)	浅黄色 茶褐色	石・長(1~2) ○		
7	甕	底径 (6.2) 残高 4.9	上げ底。	マメツ	マメツ	明橙色 茶褐色	石・長(1~3) ○		
8	甕	底径 (7.5) 残高 5.9	平底の底部に内湾気味に立ち 上がる胴部をもつ。	ハクリ ㊸ヘラミガキ	マメツ	浅橙色 茶褐色 灰褐色(底)	石・長(1~4) ○		
9	甕	底径 6.1 残高 6.8	平底。	ミガキ	㊶マメツ ㊷ナデ	橙色、 茶褐色 橙褐色	石・長(1~3) ○		26
10	甕	底径 5.2 残高 5.9	平底。器壁薄い。	マメツ	マメツ	橙色、 黒褐色 橙色	石・長(1~5) ○		
11	ミニチュア	底径 (3.7) 残高 3.2	底部はくびれをもち、上げ底 で、内外面とも指頭痕が顕著 に残る。	指頭痕	ナデ 指頭痕	黄褐色、 濃灰色 黄褐色	密 ○		26

久米高畑遺跡35次調査地

表88 S B 1 出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残存	材質	法 量				備考	図版
				長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)		
12	石庵丁	一部欠損	緑色片岩	10.50	4.80	0.80	82.78		26

表89 S B 2 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面) (内面)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
13	甕	口径 (15.8) 残高 6.5	内湾する胴部に外反する口縁部をもつ。口縁端部はナデによりくぼむ。	㊦ヨコナデ ㊧ナデ	マメツ	浅黄色 浅黄色	石・長(1~2) ○		26
14	甕	底径 6.6 残高 4.8	平底。	ヘラミガキ ㊨ナデ	マメツ 指頭痕	明橙色、 浅茶褐色 浅黄褐色	石・長(1~3) △		26
15	甕	底径 5.9 残高 2.2	くびれの上げ底。	ミガキ ナデ	ナデ	浅黄色 浅黄色	石・長(1~3) ○		
16	ミニチュア	底径 4.8 残高 4.9	くびれの上げ底。	ナデ (指頭痕)	ナデ (指頭痕)	褐色 褐色	石・長(1~3) ○		26
17	高坏	口径 (15.4) 残高 4.1	口縁端面に5条の凹線文あり。	ミガキ	ナデ	浅茶色 浅黄色	石・長(1~2) ○		26

表90 S D 3 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面) (内面)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
18	甕	口径 (28.8) 残高 5.4	「く」字状の頸部に刻目凸帯文を貼付ける。	マメツ	マメツ	灰茶色 明茶色	石・長(1~4) ○		26

表91 S K 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面) (内面)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
19	壺	口径 (13.0) 残高 1.5	口縁端部に2条の凹線文を施す。	マメツ	マメツ	浅橙色 浅黄色	石・長(1~3) ○	SK 7	
20	甕	底径 (9.3) 残高 5.2	平底。	ハケ (6本/cm)	マメツ	茶色 浅茶褐色	石・長(1~6) ○	SK 7	
21	甕	底径 5.9 残高 5.9	平底の底部より外反気味に立ち上がる。	ミガキ	ナデ	浅茶褐色 褐色	石・長(1~5) 金 △	SK 7	
22	壺	口径 (29.4) 残高 2.7	下方向に拡張される拡張部に斜格子目文を施す。	ナデ	ナデ	浅橙色 浅黄灰色	石・長(1~3) ○	SK 1	26
23	甕	底径 (7.6) 残高 4.0	平底。	ナデ	ナデ	浅褐色 浅黄色	石・長(1~6) △	SK 1	
24	甕	口径 (13.4) 残高 5.8	緩い「く」字状を呈する口縁部。	ナデ	ナデ	浅黄茶色 浅橙色	砂 ○	SK 11	26

遺物観察表

表92 SK11出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残存	材質	法 量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
25	石 鏃	ほぼ完形	サヌカイト	2.15	1.57	0.35	0.86		26

表93 SK8出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		(外面) 色調 (内面)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
26	壺	底径 (9.2) 残高 5.6	平底の底部より内湾気味に立ち上がる。	ナデ	ナデ (指頭痕)	黒灰色 浅黄色	石・長(1~2) ○		

表94 SD1出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		(外面) 色調 (内面)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
27	甕	口径 (26.2) 残高 6.2	「く」字状の頸部に刻目凸帯文を貼付ける。	ナデ	マメツ	浅茶色 濃灰色、 浅茶色	石・長(1~5) 金 ○		
28	甕	口径 (15.4) 残高 3.1	「く」字状の口縁部。	マメツ	マメツ	橙色 橙色	石・長(1~2) ○		
29	甕	口径 (16.4) 残高 3.0	口縁端部を上方につまみ上げる。	ヨコナデ	ヨコナデ	浅橙色 浅橙色	密 △		
30	甕	底径 5.3 残高 4.5	上げ底。	マメツ	マメツ	橙色 浅黄褐色	石・長(1~4) ○		
31	甕	底径 (4.7) 残高 4.8	やや上げ底。	㊟ナデ上げ 指頭痕 ㊞ヨコナデ・ナデ	マメツ	浅茶褐色 褐色	石・長(1~3) ○		
32	甕	底径 (5.6) 残高 2.7	平底。	㊟ミガキ ㊞ナデ	ナデ	茶褐色 茶褐色	石・長(1~3) 金 ○		
33	壺	残高 2.1	口縁端部が内方向に拡張し、拡張部に斜格子目文を施す。	㊟ヨコナデ ナデ	マメツ	黄灰色、 浅黄色 浅橙色	石・長(1) ○		
34	壺	口径 (12.6) 残高 2.5	外反する口縁部をもつ。	㊟ヨコナデ ㊞ナデ	ヨコナデ	浅黄褐色 浅黄色	石・長(1~2) ○		
35	壺	底径 (8.5) 残高 4.8	平底。	ナデ	ナデ	灰茶色 浅茶色	石・長(1~3) ○		
36	壺	底径 (9.3) 残高 4.7	平底。	マメツ	ハクリ	浅黄色 黄褐色	石・長(1~4) △		
37	壺	底径 (9.0) 残高 4.8	平底の底部より内湾気味に立ち上がる。	マメツ	マメツ	明茶色 浅灰黄色	石・長(1~8) ○		
38	壺	底径 (6.9) 残高 4.7	平底の底部より内湾気味に立ち上がる。	ナデ	マメツ	灰黒色 浅黄灰色	石・長(1~2) ○		
39	高坏	底径 (13.0) 残高 3.6	脚裾部に4条の凹線をもち、その上に矢羽根透かし痕が残る。	ナデ	マメツ	灰黄色 淡茶色	砂 ○		
40	坏蓋	口径 (13.0) 残高 3.7	天井部と口縁部を分ける稜は消滅。 須恵器。	㊟回転ナデ ㊞回転ヘラケズリ 板圧痕	回転ナデ	灰色 灰色	石・長(1~2) ○	自然釉	27

久米高畑遺跡35次調査地

SD1 出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		(外面) 色調 (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
41	高坏	底径 (10.1) 残高 6.4	脚柱部が外反気味に開き、裾端部が上下にやや肥厚される。須恵器。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ○		27
42	甕	口径 (17.2) 残高 3.7	口縁部は外反しており、端部は肥厚する。須恵器。	㊦ 回転ナデ ㊧ ハケ 回転ナデ	㊦ 継ぎ目 回転ナデ	灰色 黄灰色	密 ○		27
43	甕	口径 (19.4) 残高 10.1	緩やかに「く」字状を呈する口縁部はやや肥厚する。土師器。	㊦ ハケ(6本/cm) ㊧ ハケ(8~10本/cm) ㊨ ハケ(5本/cm)	ナデ 指頭痕 ハケ(4~5本/cm)	浅黄橙色 浅黄橙色	石・長(1~4) △		27
44	甕	口径 (18.6) 残高 12.9	緩い「く」字状の口縁部が内湾気味である。土師器。	㊧ ハケ(6本/cm) ㊨ ハケ(5~6本/cm)	ナデ 指頭痕	明橙色 明橙色	石・長(1~4) △		27
45	高坏	残高 9.8	脚柱部が緩く屈曲し、内面に明瞭な稜をもつ。土師器。	マメツ	㊩ 工具による切り出し ㊪ ヨコナデ 工具痕(打込み)	橙色 浅黄色	砂 △		

表95 第VI層出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		(外面) 色調 (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
46	甕	口径 (21.0) 残高 2.8	口縁部は「く」字状に外反する。	マメツ	ナデ	黄橙色 橙色	石・長(1~4) ○		
47	甕	底径 (5.8) 残高 3.7	平底。	ヘラミガキ	ナデ	橙色 浅黄橙色	石・長(1~2) ○		
48	壺	底径 (10.2) 残高 4.8	平底。	ヘラミガキ	マメツ	黒褐色 灰黄色	石・長(1~3) ○		
49	壺	底径 (10.8) 残高 4.1	平底の底部より内湾気味に立ち上がる。	ヘラミガキ	マメツ	浅黄色 浅黄色	石・長(1~3) △		
50	高坏	口径 (18.6) 器高 14.0 底径 (12.7)	坏底部端に明瞭な稜があり、脚柱部は緩く屈曲し、裾部は外方向へ開く。土師器。	マメツ	マメツ	橙色 橙色	石・長(1~7) △		27
51	壺	口径 (8.2) 残高 2.9	内湾した胴部と、短い頸部をもつ。須恵器。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 浅黄色	砂 ○		27

表96 第VI層出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
52	石庖丁	1/4	緑色片岩	4.50	3.95	0.65	19.48		27
53	石庖丁	1/3	緑色片岩	7.20	4.80	0.80	44.88		27
54	石庖丁	2/3	緑色片岩	6.00	3.70	0.60	21.8		27

第5章

たか の こ まち
鷹子町遺跡

2次調査地

第5章 鷹子町遺跡2次調査地

1. 調査の経過

(1) 調査に至る経緯 (第93図)

1997(平成9)年3月、森山通子氏より、松山市鷹子町724-1・7における共同住宅の建設にあたり、当該地の埋蔵文化財の確認願いが、松山市教育委員会文化教育課(以下、文化教育課)に提出された。

申請地は松山市の指定する埋蔵文化財包蔵地の『129 鷹ノ子遺物包含地②』内にあたり、当地一帯は弥生時代から中世までの集落遺跡であることが知られている。

申請地の北東220mの地点には鷹ノ子新畑遺跡があり、3度の調査が実施されている。1次調査では、7世紀初頭の方形竪穴式住居址1棟や溝3条を検出している。

2次調査では、弥生時代から中世までの集落関連遺構が確認されている。方形竪穴式住居址4棟、掘立柱建物址1棟、柵列2条、溝2条、井戸1基、土坑数十基など多くの集落関連遺構を検出した。このうち、溝と土坑からは、弥生時代前期後葉の土器が出土している。

3次調査では、古代から中世の掘立柱建物址1棟、溝2条、土坑1基、井戸1基を検出した。

また、申請地の南75mの地点には鷹子町遺跡1次調査地があり、古代から中世の集落関連遺構が検出されている。遺構は、掘立柱建物址7棟、溝3条、土坑6基があり、土坑からは和鏡1面と土器が出土し、平安時代の木棺墓と考えられている。さらに、南西50mの地点には鷹子遺跡があり弥生時代から中世の溝7条、土坑数十基を検出している。

このように、当地一帯は弥生時代から中世までの集落が広く展開していたことが、近年の調査で明らかになってきている。

これらのことより、当該地における埋蔵文化財の有無とさらには遺跡の範囲や性格を確認する必要があるため、1997(平成9)年3月27日に、文化教育課は試掘調査を実施した。

試掘調査では、溝4条とピット9基を検出した。ピット9基の内2基は、径60cm前後の大型の円形ピットで、残り7基は小型のピットであった。遺物はピット内から中世の土師器片、トレンチ内からは、須恵器片と土師器片が出土した。



第93図 調査地位置図 (S=1:2,500)

この結果を受け、文化教育課と森山氏の両者は遺跡の取り扱いについての協議を重ね、宅地開発に伴って消失する遺跡に対し、記録保存のために発掘調査を実施することになった。

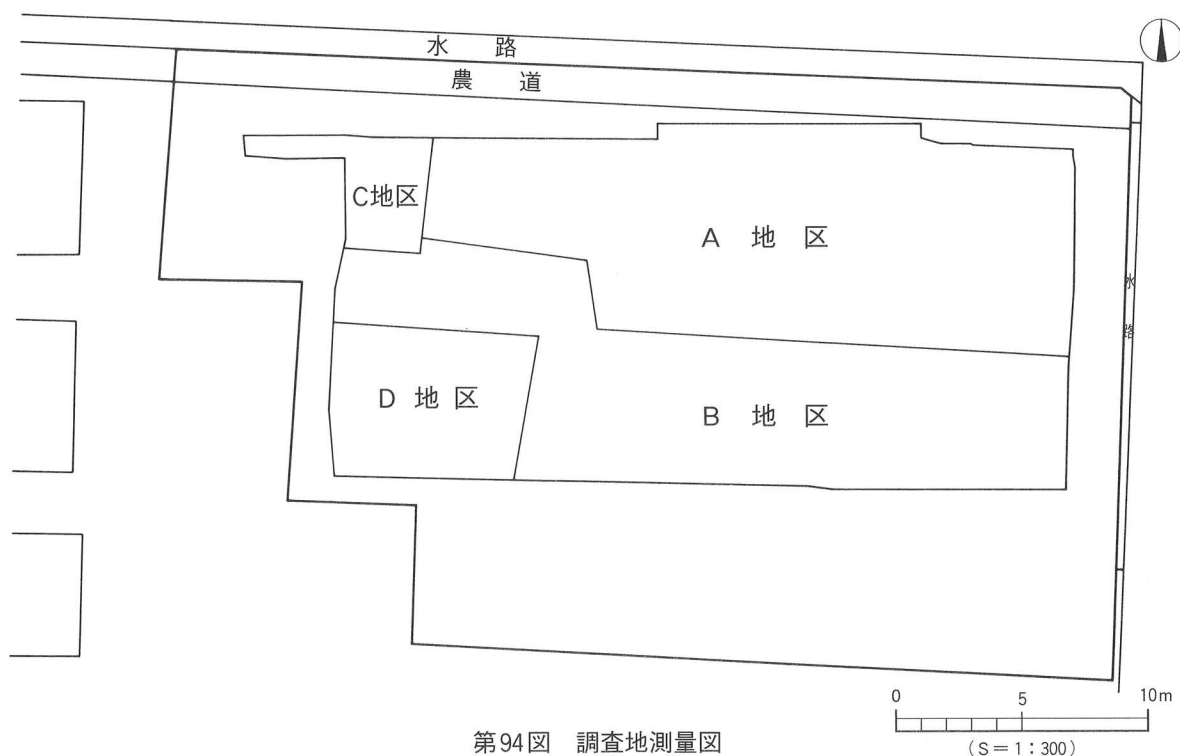
発掘調査は、弥生時代から中世までの集落構造解明を主目的とし、文化教育課の指導のもと、(財)松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センターが主体となり、1997(平成9)年11月4日より実施した。

(2) 調査の経緯 (第94図)

調査は、1997(平成9)年11月4日から1998(平成10)年1月30日までは野外調査、2月2日から2月27日までは室内調査を実施した。以下、調査経緯を略記する。

1997(平成9)年11月4日、調査区を設定する。調査は排土置き場の都合上、調査区をA～D地区に分けて実施した。同日、A地区の調査を開始し、重機で第Ⅶ層上面(地山)までの掘り下げを行う(11月5日終了)。11月6日～12月3日、遺構の掘り下げと測量を行う。12月4日、高所作業車を用いて、遺構完掘状況の写真を撮る。12月5～8日、A地区の埋め戻し。12月9日、B地区を設定して、重機で第Ⅶ層上面(地山)まで掘削する。12月10～15日、遺構を掘り下げる。12月16日、高所作業車で、B地区の遺構完掘状況の写真を撮る。12月17～22日、遺構の測量をする。12月24日、B地区を埋め戻す。

1998(平成10)年1月6日、C地区を設定して、重機で第Ⅶ層上面(地山)まで掘削する。1月7・8日、遺構を掘り下げる。1月9日、C地区の遺構完掘状況の写真を撮る。1月12～14日、遺構の測量をする。1月16日、調査事務所を撤去する。1月19日、D地区を設定して、重機で第Ⅶ層上面(地山)まで掘削し、その後、C地区を重機で埋め戻す。1月20日、D地区の遺構の掘り下げをする。1月21日、D地区の遺構完掘状況の写真を撮影し、遺構の測量をする。1月22日、D地区を埋め戻す。1月23～30日、調査用具を撤去して野外調査を完了する。2月2～27日、松山市立埋蔵文化財センターにて測量図や出土物の整理作業を行う。



第94図 調査地測量図



第95図 北壁土層図

(3) 調査組織

遺跡名	鷹子町遺跡 2 次調査地
所在地	松山市鷹ノ子町 724-1・7
調査期間	1997 (平成 9) 年 11 月 4 日～1998 (平成 10) 年 2 月 27 日
調査面積	766,62 m ²
調査主体	財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
調査協力	森山通子
調査担当	梅木謙一・水本完児

2. 層位 (第 95 図、図版 31)

(1) 基本層位

調査地は、松山平野南東部、洪積台地からなる来住舌状台地上の標高 43.7m に立地する。

基本層位は、第 I 層耕作土、第 II 層床土、第 III 層鈍い黄色土、第 IV 層灰褐色土、第 V 層暗褐色土、第 VI 層暗黄色土、第 VII 層灰白色粘土である。

第 I 層は土色・土質の違いで 3 層に分層され、第 II・IV・V 層はそれぞれ 2 層に分層される。

第 I-①層：層厚 10～20cm を測り、調査区全域で検出した。

—②層：灰色土に褐色土が混入するもので、層厚 5～20cm を測る。調査区東端で検出した。

—③層：灰茶色砂に黄色土がブロック状に混入するもので、層厚 2～10cm を測る。調査区北東隅で検出した。

第 II-①層：褐色土で層厚 5～10cm を測る。調査区北・南壁に沿って検出した。

—②層：褐色土に灰色土が混入するもので、層厚 2～10cm を測る。調査区西壁沿いと南壁中央部で検出した。

第 III 層：層厚 2～10cm を測る。調査区南・北・西壁沿いで検出した。本層は無遺物層である。

第 IV-①層：灰褐色土に鈍い黄色土が混入するもので、層厚 2～10cm を測る。調査区北西部、南東部、西端を除く地域で検出した。本層は無遺物層である。

—②層：灰褐色土に茶色土が混入するもので、層厚 5～10cm を測る。調査区北西部と南西部で検出した。本層は無遺物層である。

第 V-①層：暗褐色土に茶色土が混入するもので、層厚 5～10cm を測る。調査区北西部と南西部で検出した。本層は土師器・須恵器を含む包含層である。

—②層：暗褐色土に黄色土が混入するもので、層厚 5～20cm を測る。調査区北西部で検出した。本層は無遺物層である。

第 VI 層：調査区ほぼ全域で検出した。本層は無遺物層である。

第 VII 層：調査区東側に堆積する。本層は無遺物層である。

(2) 検出遺構・遺物

調査では、主に古代から中世までの遺構と遺物を検出した。遺構は中世に時期比定されるもので、溝 4 条、土坑 1 基である。遺物は遺構内及び包含層中から出土しており、土師器、須恵器、瓦質土器、瓦、石器、鉄器がある。

なお、調査にあたり調査区内を 4 m 四方のグリットに区分した (第 96 図)。

層 位



2類：● 灰褐色土
 1類：● 暗褐色土(黄色混)

第96図 遺構配置図

3. 遺構と遺物

調査では溝（SD）4条、土坑（SK）1基、ピット（SP）135基を検出した。

（1）溝

SD2（第97図、図版31）

SD2は3つに枝分かれする溝で、主体となる南北方向の溝をSD2-①、枝分かれする東西方向の溝をSD2-②、SD2-③とした。

SD2-①：調査区中央部やや西寄り、A3～D3区で検出した南北方向の溝で、SD1を切っている。規模は全長13.7m、幅0.7～1.2m、深さ1～10cmを測る。断面形態は逆台形状を呈し、埋土は暗褐色土（黄色土混じり）である。溝基底面からは鋤先の跡が検出された。

遺物は埋土中より、土師器の坏、こね鉢、瓦質の土釜、鉄製品（釘か）、小礫が出土した。

出土遺物（第98図1～5、図版34）

坏（1） 1は土師器の坏である。底部は平底で、底部の切り離しは回転糸切り技法である。

こね鉢（2～4） 2～4は東播系のこね鉢である。2は底部片で、わずかに上げ底となる。3・4は口縁部が上方に立ち上がり、4は注ぎ口がわずかに残る。

土釜（5） 5は瓦質の土釜の脚部である。

SD2-②：調査区南西部、C2・3区で検出した。溝東側1.3mの地点で南側に向けて分岐する。規模は全長5.5m、幅0.2～1.8m、深さ2～5cmを測る。断面形態は逆台形状を呈し、埋土は暗褐色土（黄色土混じり）である。遺物は埋土中より、こね鉢と瓦が出土した。

出土遺物（第98図6・7、図版34）

こね鉢（6） 6は東播系のこね鉢である。口縁部の上部が内方に立ち上がる。

平瓦（7） 7は平瓦である。凸面には細縄叩きを施し、凹面には布目痕が残る。

SD2-③：調査区南西部、B2～C3区で検出した溝で、SP113に切られている。規模は全長5.2m、幅0.3～0.9m、深さ2～5cmを測る。断面形態は逆台形状を呈し、埋土は暗褐色土（黄色土混じり）である。遺物は埋土中より、土師器の皿が出土した。

出土遺物（第98図8、図版34）

皿（8） 8は土師器の皿である。口縁部はやや外反し、口縁端部は丸く仕上げる。

時期：出土した遺物の特徴から、SD2は14世紀代の遺構とする。

SD3（第99図、図版31）

調査区中央部、A4～D4区で検出した南北方向の溝である。SD3はSD1を切り、SP60・SP100に切られている。規模は全長13.1m、幅0.5～1.1m、深さ3～20cmを測る。断面形態は逆台形状を呈し、埋土は暗褐色土（黄色土混じり）である。溝基底面からは鋤先の跡が検出された。

遺物は埋土中より、土師器の坏、皿、土釜、須恵器の坏、こね鉢、瓦質の土釜、瓦、石鍋、砥石が出土した。

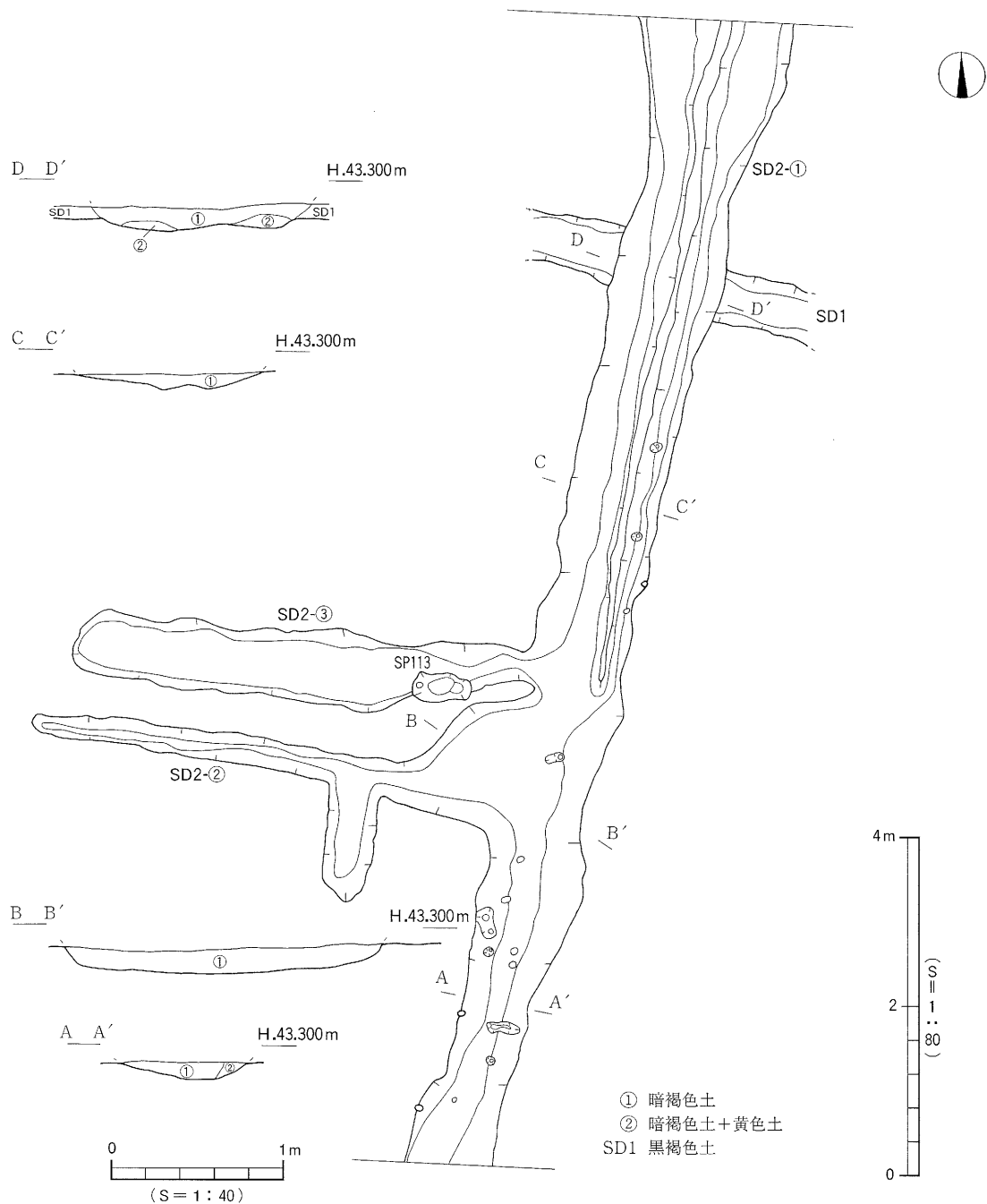
遺構と遺物

出土遺物 (第100図、図版34)

坏 (9~15) 9~15は土師器の坏である。9は体部が外傾し、口縁端部は丸く仕上げる。10は体部が内湾し、口縁端部は尖る。11・12は口縁部がわずかに外反し、11は口縁端部が尖り気味である。13は口縁端部が内傾する。なお、11~13は体部上位で屈曲する。14は体部がほぼ直線的に立ち上がる。15の底部の切り離しは回転糸切り技法による。

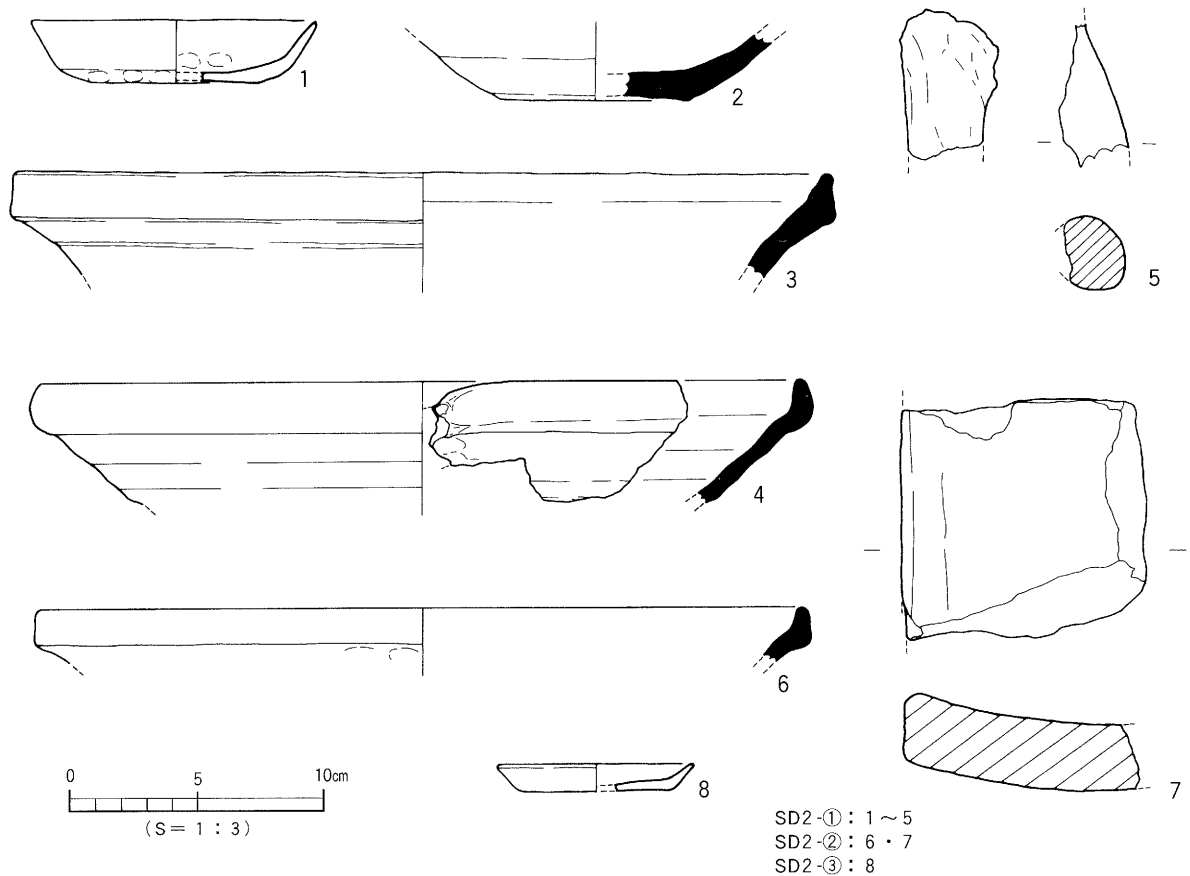
皿 (16) 16は土師器の小皿である。口縁部は外反し、口縁端部は丸く仕上げる。

土釜 (17) 17は土師質の三足付土釜である。鏝は短く水辺に延びる。口縁部は内傾し、口縁端部は丸く仕上げる。



第97図 SD2測量図

鷹子町遺跡 2次調査地



第98図 SD2出土遺物実測図

土釜 (18) 18は瓦質の土釜の脚部である。

こね鉢 (19~21) 19~21は東播系のこね鉢である。胴部は直線的に外方へ開き、口縁端部は丸い。19は口縁部が上方に延び、21は口縁部が直立する。

坏 (22) 22は須恵器の坏である。口縁部はやや丸味をもち、口縁端部は尖り気味である。

甕 (23) 23は須恵器の甕である。口縁部は外反し、口縁端部は玉縁状に仕上げる。

瓦 (24) 24は瓦片で、凸面には細縄叩きを施し、凹面には布目痕を残す。

石鍋 (25) 25は石鍋の口縁部で、1/8の残存である。

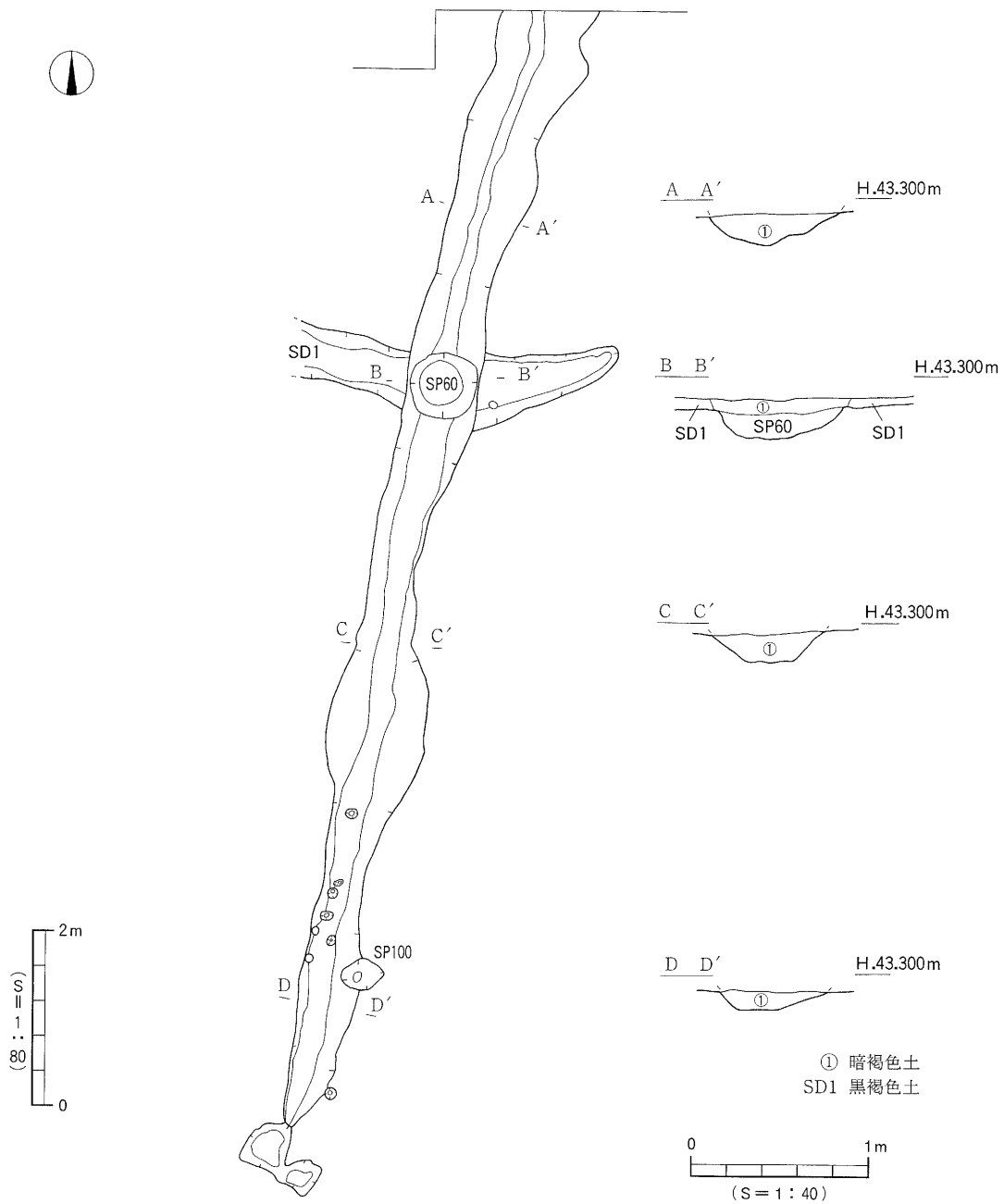
砥石 (26) 26は砥石である。重量は109.5 gを測る。

時期：出土した遺物の特徴から、SD3は14世紀代の遺構とする。

SD1 (第96図)

SD1は調査区北西部、A1~B5区で検出した。溝東側はSD2・3に切られ、西側は調査区外に続く。規模は全長14.1m、幅0.2~1.3m、深さ2~10cmを測る。断面形態は逆台形状を呈し、埋土は黒褐色土単層である。溝内からの遺物の出土はない。

時期：溝内からの遺物の出土はなく、明確な時期判断はしかねる。SD2・3に切られていることから、SD1は下限を14世紀以前とする。



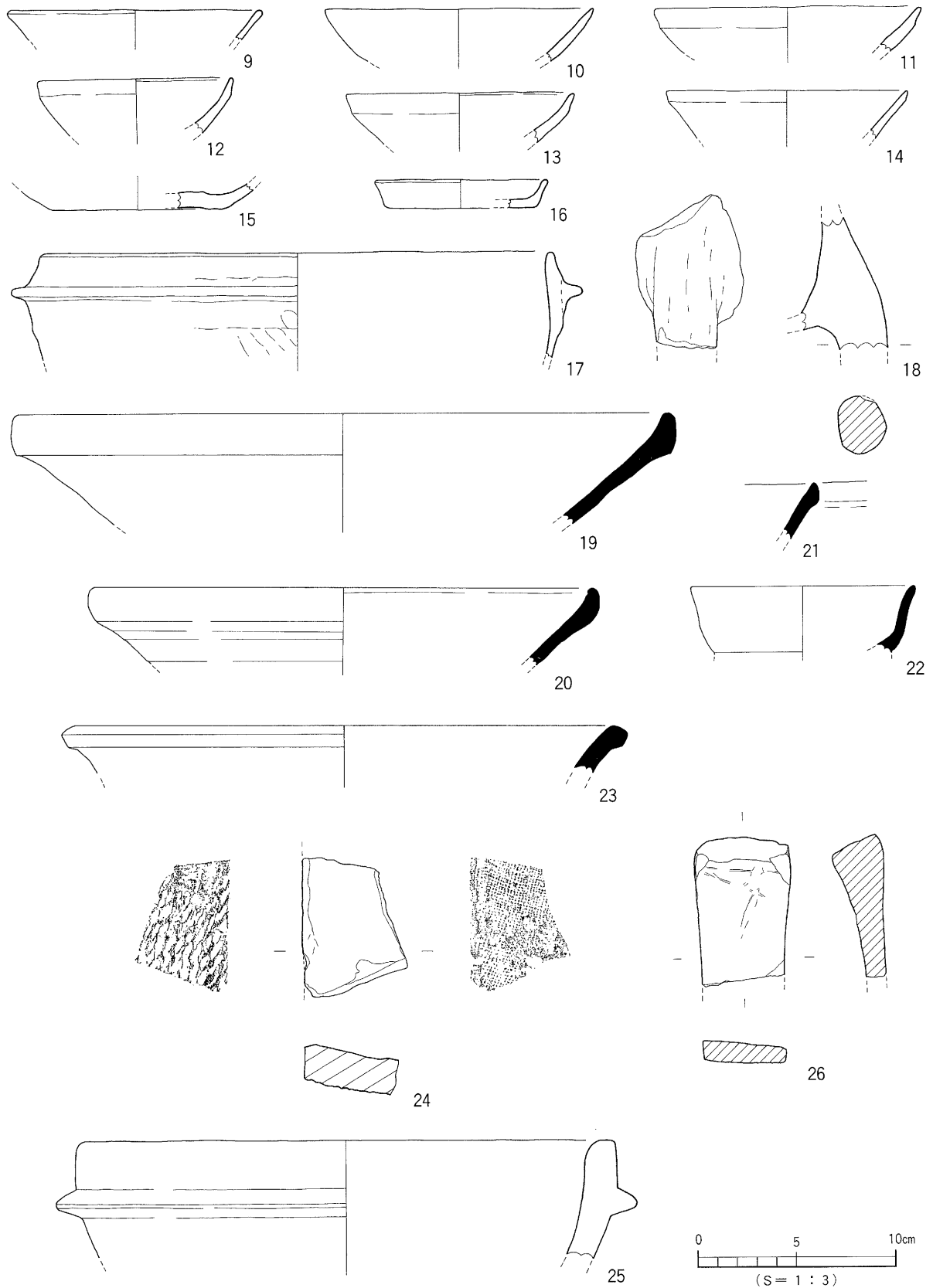
第99図 SD3測量図

SD4 (第96図)

SD4は調査区中央部、B5～D4区で検出した。溝の両端は消失している。規模は全長7.2m、幅0.2～0.4m、深さ1～7cmを測る。断面形態は逆台形状を呈し、埋土は灰褐色土単層である。遺物は埋土中より、土師器と小礫が少量出土したが図化しうるものはない。

時期：出土した遺物より、SD4は14世紀代の遺構としておく。

鷹子町遺跡 2次調査地



第100図 S D 3 出土遺物実測図

(2) 土坑

土坑は1基を検出した。

SK1 (第101図、図版33)

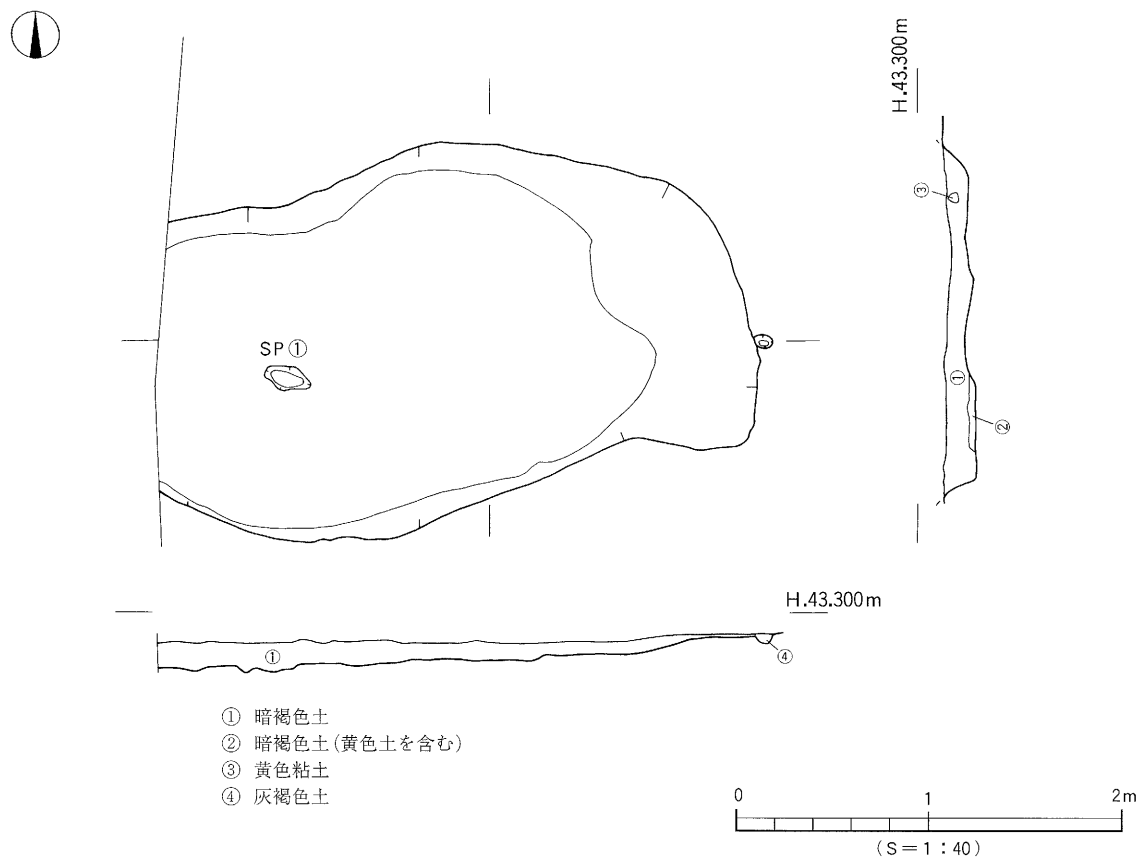
SK1は調査区南西部、C1区で検出した。平面形態は不整の楕円形を呈し、規模は長径3.1m、短径1.4m、深さ5~20cmを測る。断面形態は逆台形状を呈する。埋土は暗褐色土を基調とするが、遺構南側基底面付近のみに黄色土が混入する。基底面は北東から南西に向けて傾斜をなす(比高差10cm)。基底面にて、径10~20cm、深さ3cmのピット1基(SP①)を検出した。ピット埋土は土坑埋土と類似することから、本土坑に伴うものと考えられる。

遺物は埋土上位からは須恵器片、下位からは土師器片が少量出土したが、図化しうるものはない。

時期：土坑埋土がSD2・3と類似することや、出土した遺物の特徴から、SK1は14世紀代の遺構とする。

(3) ピット (第96図)

調査ではピット135基を検出した。調査区北西部、A0~A3区と南東部、D7~D8区を除く地域で検出した。平面形態には円形と楕円形の2種類がある。埋土は暗褐色土(黄色土混入)と灰褐色土の2種類があり、前者を1類、後者を2類として埋土別にピットの説明を行う。



第101図 SK1測量図

1類：1類のピットは100基あり、調査区北西部と南東部を除く地域で検出した。平面形態には円形と楕円形とがあり、規模は径5～95cm、深さ3～27cmを測る。ピット内からは中世に時期比定される遺物が出土している。

2類：2類のピットは35基あり、調査区南西部と北東部で検出した。平面形態は円形を呈し、規模は径5～25cm、深さ4～25cmを測る。ピット内からは古代に時期比定される遺物が出土している。

ピット出土遺物（第102図、図版34）

27・28は1類、29は2類のピット出土品である。

皿（27） 27はS P 6出土の土師器の皿である。口縁部はやや外反し、底部の切り離しは回転糸切り技法による。

坏（28） 28はS P 11出土の土師器の坏である。体部は内湾し、口縁部はやや外反する。

壺（29） 29はS P 29出土の須恵器長頸壺の底部である。高台は低く、胴部は直線的に立ち上がる。

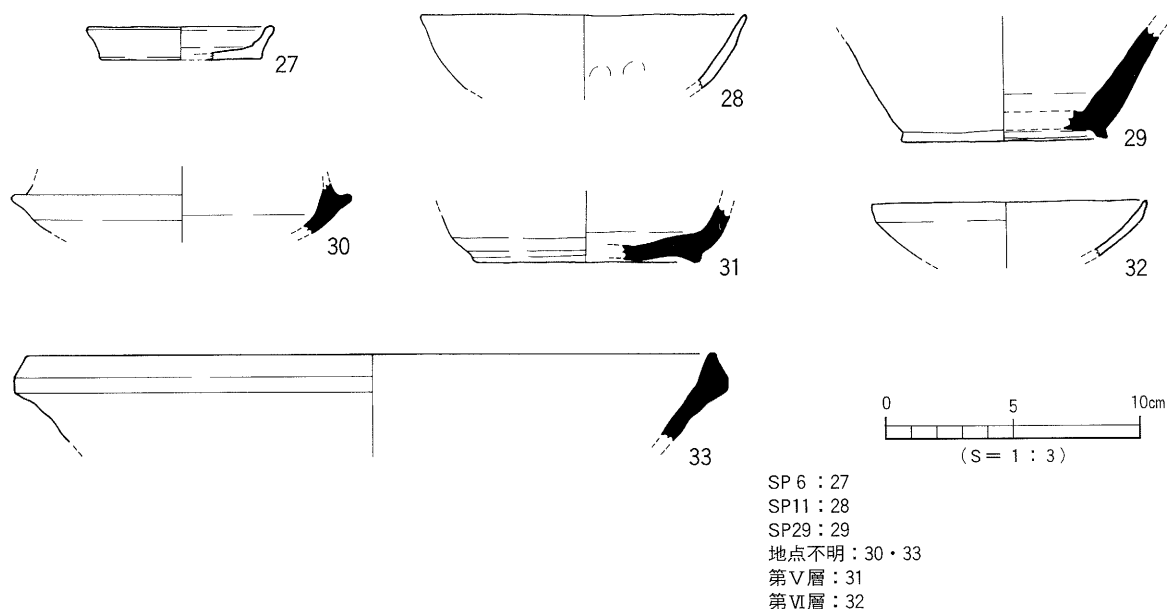
（4）包含層および地点不明出土遺物（第102図、図版34）

出土地点が詳細でない遺物を取り上げておく。

坏身（30） 30はB地区の層位不明品。須恵器の坏身で、たちあがりは欠損し、受部は上外方にひねり出されている。7世紀前半。

坏（31・32） 31は第V層出土品。須恵器の坏で、短い高台が付く。8世紀前半。32はB地区のE3区第VI層出土品。土師器の坏で、体部は内湾し、口縁部は直立する。13～14世紀。

こね鉢（33） 33はB地区のE5区層位不明品。東播系のこね鉢で、口縁部上部は内側に立ち上がる。13～14世紀。



第102図 ピット・包含層・地点不明出土遺物実測図

4. 小 結

今回の調査は、弥生時代から中世までの当地域に存在した、集落の範囲や構造解明を主目的とした。調査の結果、中世の遺構と古代から中世までの遺物を確認することができた。

溝SD2・3と土坑SK1からは、土師器と須恵器が出土したが、これらの遺物は出土状況や摩滅の状態から、周辺地域からの流れ込み資料と推測される。また、包含層中にも同時代の土師器片がみられることから、調査地近隣に中世集落が展開していることは確実である。溝は、集落の区画や水田に利用されるものであり、居住地や生産地が近隣に存在していることを示唆するものである。

遺物では、滑石製石鍋の出土が注目される。中世の石鍋の出土は、松山平野内においても出土事例が少なく、稀少資料として重要である。

今後は、調査地の東側に展開する鷹ノ子新畑遺跡との関係や、新たな調査資料を加えて、鷹子町内の中世集落の詳細を究明しなければならない。

【参考文献】

- 栗田正芳 1991「鷹ノ子新畑遺跡」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅲ』松山市教育委員会・(財)松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
- 栗田茂敏 1993「鷹ノ子新畑遺跡2次調査地」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅴ』松山市教育委員会・(財)松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
- 相原浩二 1995「鷹ノ子新畑遺跡3次調査地」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅶ』松山市教育委員会・(財)松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
- 梅木謙一 1992「鷹ノ子遺跡1次調査」『来住・久米地区の遺跡』(財)松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
- 宮本一夫 1989「鷹子遺跡」『鷹子・樽味遺跡』愛媛大学埋蔵文化財調査室

遺構・遺物一覧 — 凡例 —

- (1) 以下の表は、本調査地検出の遺構・遺物の計測値及び観察一覧である。
- (2) 遺物観察表の各掲載について

法 量 欄 () : 復元推定値

形態・施文欄 土器の各部位名称を略記した。

例) 口→口縁部、体→体部、底→底部。

胎土・焼成欄 胎土欄では混和剤を略記した。

例) 長→長石、石→石英、密→精製土。() 中の数値は混和剤粒子の大きさを示す。

例) 砂・長(1~4) → 「1~4mm大の砂粒・長石を含む」である。

焼成欄の略記について。◎→良好、○→良、△→不良。

鷹子町遺跡 2次調査地

表97 溝一覧

溝 (SD)	地区	断面形	規模 (m) 長さ × 幅 × 深さ	方向	埋土	出土遺物	時期	備考
1	A1~B5	逆台形状	14.1 × 0.2 ~ 1.3 × 0.02 ~ 0.1	東西	黒褐色土	なし	14 c 以前	SD2・3に切られる。
2-①	A3~D3	逆台形状	13.7 × 0.7 ~ 1.2 × 0.01 ~ 0.1	南北	暗褐色土 (黄色土混り)	土師 鉄製品	14 c	SD1を切る。
2-②	C2・C3	逆台形状	5.5 × 0.2 ~ 1.8 × 0.02 ~ 0.05	東西	暗褐色土 (黄色土混り)	平瓦	14 c	
2-③	B2~C2・C3	逆台形状	5.2 × 0.3 ~ 0.9 × 0.02 ~ 0.05	東西	暗褐色土 (黄色土混り)	土師	14 c	SP113に切られる。
3	A4~D4	逆台形状	13.1 × 0.5 ~ 1.1 × 0.03 ~ 0.2	南北	暗褐色土 (黄色土混り)	土師・須恵 瓦・砥石・石鍋	14 c	SD1を切る。
4	B5~D4	逆台形状	7.2 × 0.2 ~ 0.4 × 0.01 ~ 0.07	南北	灰褐色土	土師	14 c	

表98 土坑一覧

土坑 (SK)	地区	平面形	断面形	規模 (m) 長さ(長径) × 幅(短径) × 深さ	床面積 (㎡)	埋土	出土遺物	時期	備考
1	C1	楕円形	逆台形状	3.1 × 1.4 × 0.05 ~ 0.2	4.34	暗褐色土 (黄色土混り)	須恵・土師	14 c	

表99 SD2出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		(外面) 色調 (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外 面	内 面				
1	坏	口径 (11.1) 底径 (6.6) 器高 2.45	土師器の坏である。底部は平底である。底部の切り離しは回転糸切り技法である。	ナデ	ナデ	乳黄色 乳黄色	石・長(1~4) 金 ◎	SD2-①	
2	こね鉢	底径 (7.7) 残高 3.0	東播系のこね鉢の底部である。わずかに上げ底。	ヨコナデ	ナデ	灰色 灰色	石・長(1) 金 ◎	SD2-①	
3	こね鉢	口径 (31.8) 残高 4.1	東播系のこね鉢である。口縁部の上部が内方に立ち上がる。	㊦ヨコナデ ㊧ナデ	ヨコナデ	灰色 灰色	石・長(1) 金 ◎	SD2-①	
4	こね鉢	口径 (29.6) 残高 4.8	東播系のこね鉢である。口縁部の上部が内方に立ち上がる。注ぎ口がわずかに残る。	ヨコナデ	ヨコナデ	黒灰色・灰色 灰色	石・長(1) ◎	SD2-①	34
5	土釜	残長 6.0	瓦質の土釜の脚部である。	ナデ	ハクリ	黒色・灰褐色	石・長(1~4) ◎	SD2-①	34
6	こね鉢	口径 (29.5) 残高 2.2	東播系のこね鉢である。口縁部の小片である。口縁部の上部が内方に立ち上がる。	㊦ヨコナデ ㊧ナデ	ヨコナデ	暗灰色・灰色 灰色	長(1) ◎	SD2-②	
8	皿	口径 (7.6) 底径 (5.6) 器高 1.1	土師器の皿である。口縁部はやや外反し端部は丸い。1/3残存である。	マメツ	㊦ヨコナデ ㊧ナデ	乳褐色 淡灰褐色	石・長(1) ◎	SD2-③	34

遺物観察表

表100 S D 2 出土遺物観察表 瓦製品

番号	種類	法 量				調 整		色 調	胎 土	焼 成	備 考	図版
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	凸 面	凹 面					
7	平 瓦	9.6	9.4	2.7		細縄叩き	布目痕	凸乳灰色 凹淡灰色	密	◎	SD2-②	34

表101 S D 3 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形 態・施 文	調 整		色調 (外面) (内面)	胎 土 焼 成	備 考	図版
				外 面	内 面				
9	坏	口径 (12.5) 残高 1.6	土師器の坏である。体部は外傾し、口縁端部は丸い。小片。	ヨコナデ	ヨコナデ	乳白色 乳白色	石・長(1) ◎	黒斑	
10	坏	口径 (13.4) 残高 2.7	土師器の坏である。体部は内湾し、口縁端部は尖る。小片。	マメツ	マメツ	橙褐色 橙褐色	長(1) ◎		
11	坏	口径 (13.4) 残高 2.4	土師器の坏である。体部上位で屈曲し、口縁部はわずかに外反する。端部は尖り気味に丸い。小片。	ヨコナデ	ヨコナデ	褐色 褐色	長(1) 金 ◎		
12	坏	口径 (9.8) 残高 2.8	土師器の坏である。体部上位で屈曲し、口縁部はやや外反する。小片。	㊦ ナデ ㊦ ヨコナデ	㊦ ナデ ㊦ ヨコナデ	乳黄色 乳黄色	石・長(1) 金 ◎		
13	坏	口径 (11.3) 残高 2.6	土師器の坏である。体部上位で屈曲する。口縁端部は内傾する。小片。	ヨコナデ	ヨコナデ	暗褐色 暗褐色	長(1) 密 ◎		
14	坏	口径 (12.1) 残高 2.4	土師器の坏である。体部はほぼ直線的に開く。口縁部はほぼ直立し、口縁端部は尖り気味である。	ヨコナデ	ヨコナデ	淡褐色 淡褐色	長(1) ◎		
15	坏	底径 (8.5) 残高 1.3	土師器の坏である。底部の切り離しは回転糸切り技法である。	ヨコナデ	ヨコナデ	乳褐色 乳褐色	石・長(0.5) 密 金 ◎		
16	皿	口径 (8.6) 底径 (7.0) 器高 2.5	土師器の小皿である。口縁部は外反し、端部は丸く仕上げる。1/6の残存。	ヨコナデ	ヨコナデ	淡明褐色・ 灰褐色 灰褐色	石・長(1) ◎		
17	土釜	口径 (26.5) 残高 5.4	土師器の三足付き土釜である。鋳は短く水平にのびる。口縁部は内傾し、端部は丸く仕上げる。小片。	㊦ ヨコナデ ㊦ ナデ	ナデ	灰黄色・ 濃灰色 濃灰黄色	石・長(1~4) 金 ◎		34
18	土釜	残高 7.9	瓦質の土釜の脚部である。小片。	ナデ	マメツ	黒色 (淡褐色) 黒色	石・長(1~4) ◎		34
19	こね鉢	口径 (2.8) 残高 5.7	東播系のこね鉢である。胴部は直線的に外方向へ開く。口縁部は上方にのび端部は丸い。	ヨコナデ	ヨコナデ	灰色 灰色	密 ◎		34
20	こね鉢	口径 (25.0) 残高 4.0	東播系のこね鉢である。胴部は直線的に外方向へ開く。口縁端部は丸い。	ヨコナデ	ヨコナデ	灰色 灰色	石(3)・長(1) 密 ◎		
21	こね鉢	残高 2.9	東播系のこね鉢である。胴部は直線的に外方向へ開く。口縁部は直立し、端部は丸い。小片。	ヨコナデ	ナデ	灰色 灰色	密 ◎		
22	坏	口径 (11.2) 残高 3.4	須恵器の高台坏である。口縁部はわずかながらS字形のカーブを描く。外反し、口縁端部は尖り気味である。	回転ナデ	回転ナデ	暗灰色 灰色	長(1) 密 ◎		
23	甕	口径 (28.5) 残高 2.5	須恵器の甕である。口縁部は外反し、口縁端部は玉縁状に仕上げる。	回転ナデ	回転ナデ	暗灰色 灰色	長(1) 密 ◎		

鷹子町遺跡2次調査地

表102 S D 3 出土遺物観察表 瓦製品

番号	種類	法 量				調 整		色 調	胎 土	焼 成	備 考	図版
		長さ(cm)	幅 (cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	凸 面	凹 面					
24	瓦	7.2	5.2	1.9		細縄叩き	布目痕	灰 色	密	◎		34

表103 S D 3 出土遺物観察表 石製品

番号	器 種	残 存	材 質	法 量				備 考	図版
				長さ(cm)	幅 (cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
25	石 鍋	口縁部 1/8	滑 石	(口径) (27.1)	残高 6.1	0.8	211.2		34
26	砥 石		不 明	7.7	4.9	2.6	109.5		34

表104 S P 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形 態・施 文	調 整		(外面) 色調 (内面)	胎 土 焼 成	備 考	図版
				外 面	内 面				
27	皿	口径 (7.2) 残高 1.3	土師器の皿である。口縁部は丸い。底部は平底である。	ヨコナデ	ヨコナデ	淡褐色 淡褐色	長(1) ◎	SP 6	
28	坏	口径 (12.6) 残高 2.8	土師器の坏である。体部は内湾し、口縁はわずかに外反する。	マメツ	ヨコナデ	乳白色 乳白色	石・長(1) ◎	SP 11	
29	壺	底径 (8.1) 残高 4.4	須恵器の長頸壺である。低い高台が付く。胴部は直線的に立ち上がる。	回転ナデ	回転ナデ	濃灰色 灰色	石・長(1) 密 ◎	SP 29	34

表105 包含層および地点不明出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形 態・施 文	調 整		(外面) 色調 (内面)	胎 土 焼 成	備 考	図版
				外 面	内 面				
30	坏身	残高 2.0	須恵器の坏身である。立ち上がりは欠損。受部は、上外方にひねりだされる。小片。	㊦ 回転ナデ ㊧ 回転ヘラ削り	回転ナデ	灰色 灰色	長 密 ◎	B地区 層不明	
31	坏	口径 (10.6) 残高 2.3	須恵器の高台坏の底部である。短い高台が付く。	回転ナデ	回転ナデ	乳白色 乳白色	石・長(1) 密 ◎	第V層 地区不明	34
32	坏	口径 (10.7) 残高 2.3	土師器の坏である。体部は内湾し、口縁部は直立する。口縁は1/4の残存である。	ヨコナデ	ヨコナデ	乳黄色 乳黄色	密 ◎	B地区 E 3区 第VI層	
33	こね鉢	口径 (26.6) 残高 3.5	東播系のこね鉢である。口縁部の上部が内向きに立ち上がる。	回転ナデ	回転ナデ	暗灰色・ 灰色 灰色	長(1) ◎	B地区 E 5区 層不明	34

第6章 おわりに

ここまで、来住・久米地区における4遺跡の発掘調査結果について、個別に報告をした。最後に、今回の成果を時代ごとに簡潔にまとめてみることにする。

1 縄文時代

久米高畑遺跡35次調査地では、縄文時代晩期の土坑を確認した。第4章4小結で触れられているように、久米高畑遺跡35次調査地の北に隣接する久米高畑遺跡26次調査地では完形に復元可能な深鉢が土坑から出土し（註1）、晩期の遺構と見られるものも幾つかある。このように複数の遺構や遺物を伴った事例は、道後今市遺跡や運動公園関係遺跡に見られるが（註2）、松山平野では未だ数少なく、稀少な資料と言える。

2 弥生時代

来住台地上には、弥生時代の遺跡は連綿と認められる。前期末葉～中期初頭の土坑は台地上で最も多く検出されている遺構種と言えるが、今回の久米高畑遺跡27次調査地での検出により、同時期の集落範囲が来住台地の北西端まで拡大していることを確認できた。後期初頭には久米高畑遺跡35次調査地で竪穴式住居址2棟を検出したが、この一帯では以前から中期後葉の遺物が多く出土しており、継続的な集落形成を読み取る資料である。さらに、後期後葉では、西方の久米高畑遺跡27次調査地で竪穴式住居址2棟を、久米高畑遺跡10次調査地で土器棺2基を検出していることから、来住台地北部に形成された集落は、久米高畑遺跡35次調査地一帯から徐々に住居区域を西に移動していることを想定させる資料を得ることになった。

さて、久米高畑遺跡27次調査地の前期末葉～中期初頭の土坑S K 11からは炭化材が出土し、樹種同定と年代測定を試みた。その結果、炭化材はアカガシ亜属で、時期は最も古い値で紀元前4 C半、最も新しい値でも2 C前半となる。アカガシ亜属でいわゆるカシは、農耕具にも使用されている例が前期中葉の山越遺跡の鋳で確認されているので（註3）、追認資料になる。年代測定は、松山平野では弥生時代の公表資料は少なく、ひとつの基準資料になるであり、最も確からしい年代は紀元前2～3世紀であろう。

3 古墳時代

5世紀後半～6世紀の竪穴式住居址や掘立柱建物址が、久米高畑遺跡27・35次調査地とで検出されている。久米高畑遺跡27次調査地内では、竪穴式住居址から掘立柱建物址に選地を移行した様子が伺えるが、これを直ちに竪穴式住居から掘立柱建物への移行と考えるには、調査範囲が十分でなく、結論に至らない。

ところで、久米高畑遺跡27次調査地の掘立柱建物址掘立1は第3章の報告では、廂付き建物として位置づけられているが、建物規模が狭い感があり、今少し検討の余地はあろう。

さて、6世紀後半～7世紀前半には、久米高畑遺跡10次調査地で方形の周溝状遺構が存在する。その内容と性格の候補は、既に第2章で報告済みであるが、墳墓とするか祭祀関係遺構とするかは、特

定する資料に恵まれず、結論を出せないでいる。この後に記述する古代の区画溝とは9～10mの距離にあり、方位性も概ね合う。したがって、この方形の周溝状は、古代の区画溝と某かの関係をもっていたことは確かであろう。

4 古 代

久米高畑遺跡10・27・35次調査地では、古代の方形区画溝の一部が検出された。この方形の区画溝は8世紀の正倉院を取り囲む施設で、久米高畑遺跡10次調査地の溝SD1は区画溝の北西隅、久米高畑遺跡27次調査地の溝SD6は南西隅、久米高畑遺跡35次調査地のSD10は南東隅に近い東側の溝の一部と見られている。そこで、区画溝の規模は溝の外側を基準とすれば、西側は140.1m、南側は125.1mとなり、北側推定値は120.6m、東側推定値は141.2mとなる(註4)。

断面形態はいずれも逆台形で、久米高畑遺跡35次調査地SD10では外側が二段掘状(テラス状)に検出されている。溝の検出幅長は久米高畑遺跡10次調査地の3.3mが最大である。溝の深さは、検出面からの深さおよび溝基底面の標高値は一様ではなく、現状の地形に同調して概ね西側の久米高畑遺跡10次調査地が低く、東側の久米高畑遺跡35次調査地が高くなり、標高差は2.4mとなる。

溝の埋土は、調査年次が異なり、現地での比較検討がなされていないこと、調査地間は100m以上離れていることから、調査地間の厳密な相対比較は難しい。しかしながら、各調査地で幾つかに分層されている埋土には類似傾向が認められ、最下部には黒色土や粘質土、中位付近以上には褐色土や礫の混じることを指摘できる。ここで考えられることは、最下部には一定期間じめじめしていた土が存在していたことを示し、雨期や大雨での水たまり現象を読み取ることが出来、区画溝は基本的に空掘であったことを想定させる資料である。

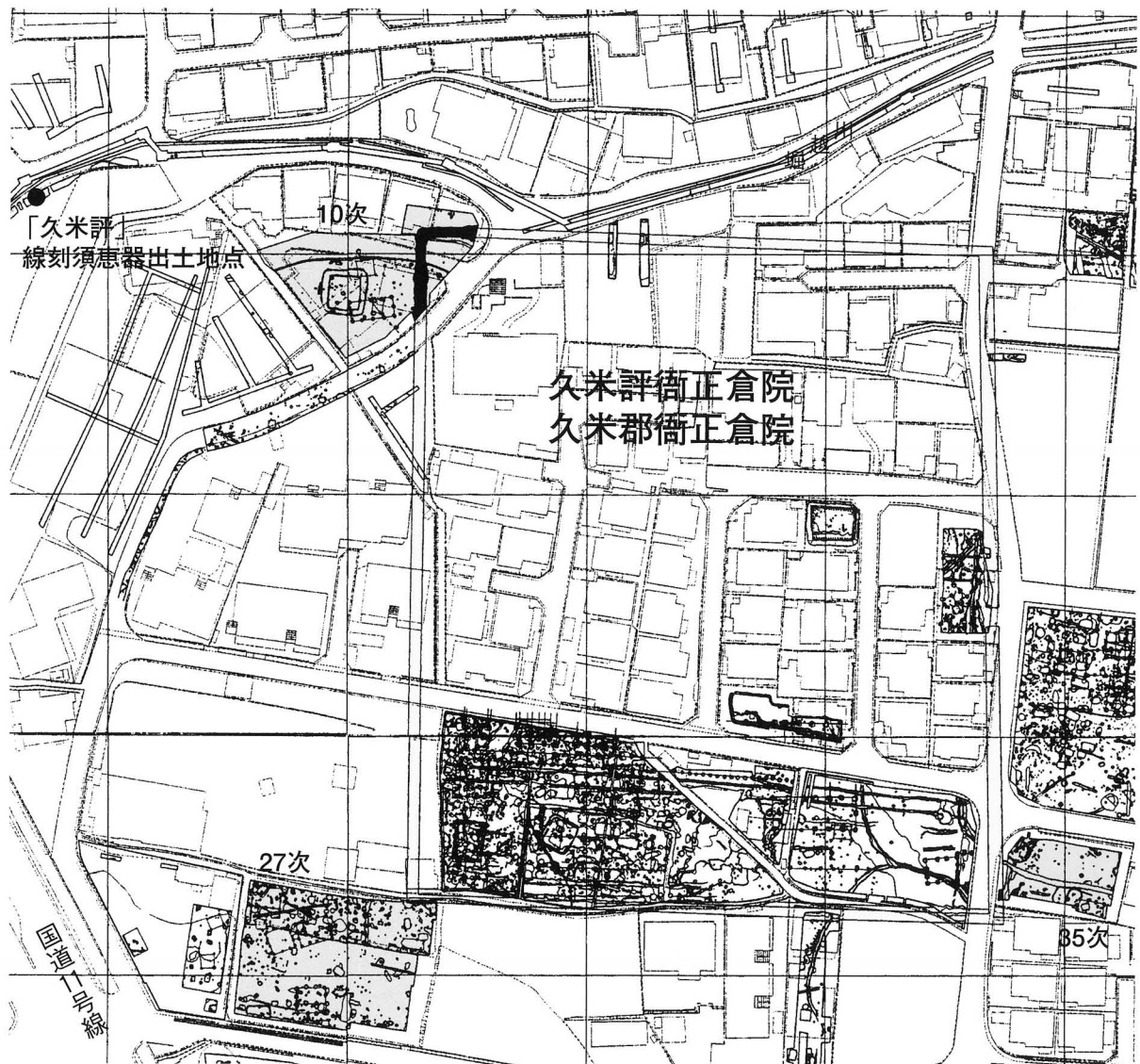
また、土層の堆積状況と共に土器の出土状況にも類似が認められた。基底部付近では土器は小片で少なく、やや埋まった位置では8世紀中葉の大型土器片や礫が出土し、その上に9～10世紀の土器が出土する。

したがって、区画溝の埋没過程は、8世紀中葉もしくはそれまでに水や土で埋まり、続いて8世紀中葉には土器の廃棄にも使用され、9～10世紀には溝の大半が埋まったことが推定されてくる。

なお、正倉院を含めた方形区画溝の評価は、近日刊行の概要報告に譲ることにする(註5)。

区画溝の測量値一覧

調査地	検出長(m)	検出幅(m)	深さ(m)	基底部標高(m)	備 考
10次東西	12.40 + α	1.50	0.32	H.33.60～34.20	
10次南北	17.50 + α	3.30	1.06	H.34.00	
27次	6.28 + α	0.40 + α	0.37	H.34.60	
35次	7.15	2.15	0.46	H.36.10～36.18	テラス含む
	2.00	1.00	1.30	H.35.90	テラス



第108図 正倉院関係調査地位置図 (S=1:1,500)

5 久米高畑遺跡10次調査地出土の古代仏教関係土製品について

ここで取り上げる土製品は、巻頭写真や第10図に示したもので、西日本地方では稀少かつ貴重な資料である。酷似する類例がないため、器種や部位については一つに限定出来なかったが、表面に刻み出された長い半円文様は蓮の葉と見られ、この蓮弁文様から、仏教関係の資料と考えられるだろう。ここでは幾つかの候補を上げ、資料の理解に努めてみたい。なお、本資料については、奈良国立博物館や奈良文化財研究所等の先生方に指導を受けた。

1. 建造物の飾りとみる説。仏塔の相輪（副鉢）、屋根を飾る棟飾り等の建物・建造物の一部分と考える。
2. 仏像ないし仏具の台座とみる説。焼成塑像（註6）の台座部分、もしくは仏具の台座とする。仏像の台座とした場合、蓮華文様は朝鮮半島新羅の様式類似が認められる。日本での類例は、長崎県対馬・法清寺菩薩立像の台座が上げられ、この仏像は三国時代新羅の伝承品とされている（註7）。

6 中世

中世の資料は少ないが、鷹子町遺跡2次調査地では、平野では出土数の少ない滑石製鍋の破片が出土し、稀少な資料が得られることになった。松山市が保管し、報告済みの資料は6遺跡6例あり、そのうちの4点は転用品として、使用されていた。

滑石製石鍋一覧

遺跡名	遺構名	時期	備考	文献
星ノ岡旗立B区	S B 04			①(第12図2)
辻町2次	B区第V層		転用品	②(第11図31)
谷町	S D 13	14c代	転用品	③(第32図106)
南江戸客谷	A区S D 1	14c代		④(図3-7)
北斎院地内4次	S D 6	15c後半	転用品	⑤(第99図40)
筋違L	S K 6	中世	転用品	⑥(第71図379)
鷹子町2次	S D 3	14c代		(第100図25)

【文献】①森光晴編 1984『国道11号バイパス福音寺・星ノ岡・北久米遺跡』松山市教育委員会 ②河野史知・相原浩二編 1995『辻町遺跡-2次調査地-』松山市教育委員会・財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター ③相原浩二編 1998『和気・堀江の遺跡Ⅱ』松山市教育委員会・財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター ④田城武志・加島次郎編 1999『松山市埋蔵文化財調査年報11』松山市教育委員会・財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター ⑤梅木謙一編 2001『斎院の遺跡Ⅱ』松山市教育委員会・財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター ⑥山之内志郎編 2001『福音寺地区の遺跡Ⅲ』松山市教育委員会・財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

以上、久米高畑遺跡群と鷹子町遺跡の主要な調査成果を取り上げてきた。なかでも、久米官衙群の正倉院関係資料が提示出来たことは何よりの成果であったと言える。

【註】

1. 久米高畑遺跡26次調査地の土坑S K 21で深鉢・浅鉢・台石の出土がある。小玉亜紀子1997「久米高畑遺跡26次調査地(久米官衙遺跡群)」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅸ』松山市教育委員会・財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
2. 多田仁編
長井数秋1982「第2章狩猟・漁猟の生活と文化」『愛媛県史原始・古代Ⅰ』愛媛県史編さん委員会
3. 梅木謙一・武正良浩1993「山越遺跡2次調査」『山越・久万ノ台の遺跡』松山市教育委員会・財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
4. 近刊の久米官衙遺跡群の概要報告に準じている。担当の橋本雄一氏に協力いただいた。
5. 平成16年度に、松山市教育委員会文化財課から発行(予定)。
6. ここでは便宜的に、土製の仏像で焼成した物を指す。
7. 奈良国立博物館1996『東アジアの仏たち』

写 真 图 版

写真図版データ

1. 遺構は、主な状況については、4×5判や6×7判の白黒ネガフィルム・カラーリバーサルフィルムで撮影し、35mm判で補足している。

使用機材：

カメラ	トヨフィールド45A	レンズ	スーパーアンギュロン90mm 他
	アサヒペンタックス67		ペンタックス67 55mm 他
	ニコンニューFM2		ズームニッコール28～85mm 他
フィルム	白 黒	プラスXパン・ネオパンSS・アクロス	
	カラー	エクタクロームEPP・RDPⅢ	

2. 遺物は、4×5判または6×9判で撮影した。すべて白黒フィルムで撮影している。

使用機材：

カメラ	トヨビュー45G・69ロールフィルムホルダー
レンズ	ジンマーS240mm F5.6 他
ストロボ	コメット/CA32・CB2400
スタンド等	トヨ無影撮影台・ウエイトスタンド101
フィルム	白黒 プラスXパン・ネオパンアクロス

3. 単色図版は、白黒プリントを等倍で使用できるように焼き付けている。

使用機材：

引伸機	ラッキー450MD・90MS
レンズ	エル・ニッコール135mm F5.6A・50mm F2.8N
印画紙	イルフォードマルチグレードⅣ RCペーパー

- | | |
|-------|---------------------------|
| 4. 製版 | カラー図版—175線、白黒図版—150線 |
| 印刷 | オフセット印刷 |
| 用紙 | カラー図版—ニューVマットA版 86.5kg 使用 |
| 製本 | 白黒図版—ニューVマットA版 86.5kg 使用 |

【参考】 『埋文写真研究』 vol.1～13 『報告書制作ガイド』

[大西朋子]



1. 遺構検出状況（南より）



2. SD1検出状況（北西より）



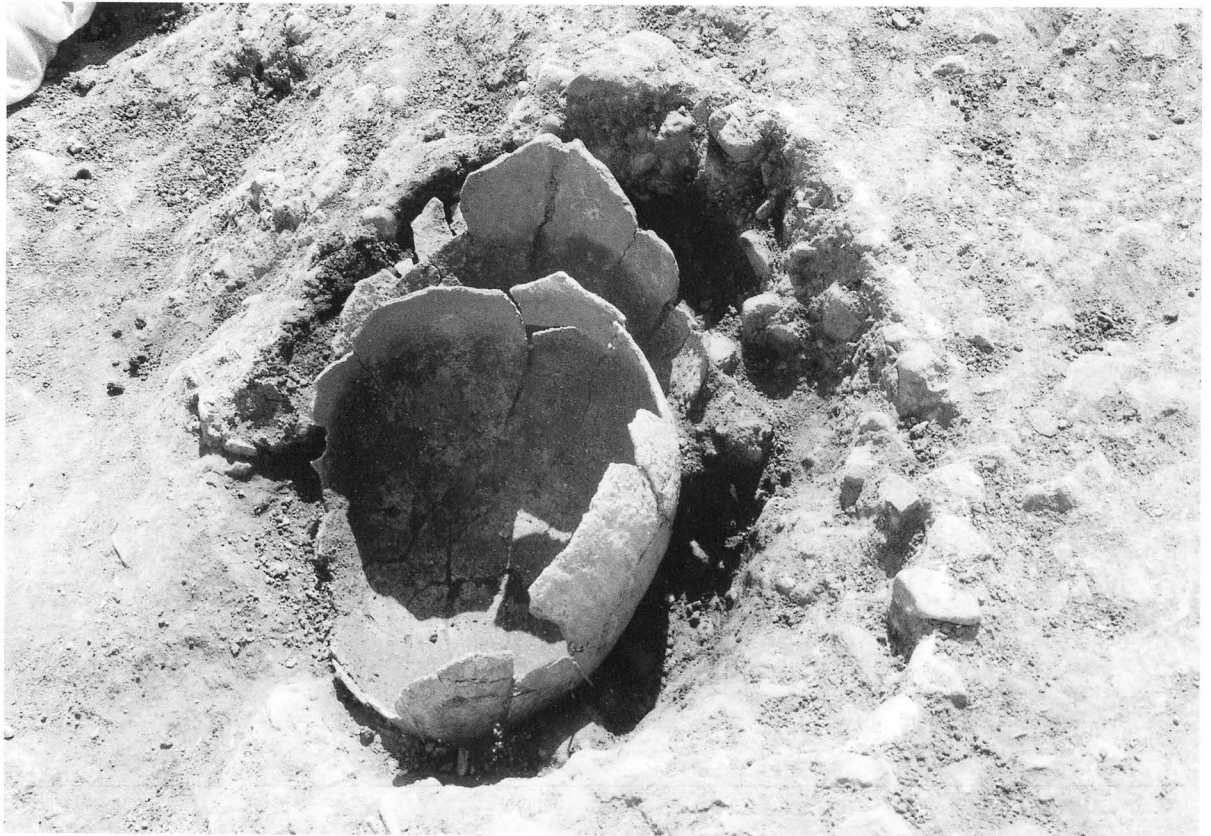
1. 2号土器棺墓検出状況（南西より）



2. 2号土器棺墓遺物出土状況（西より）



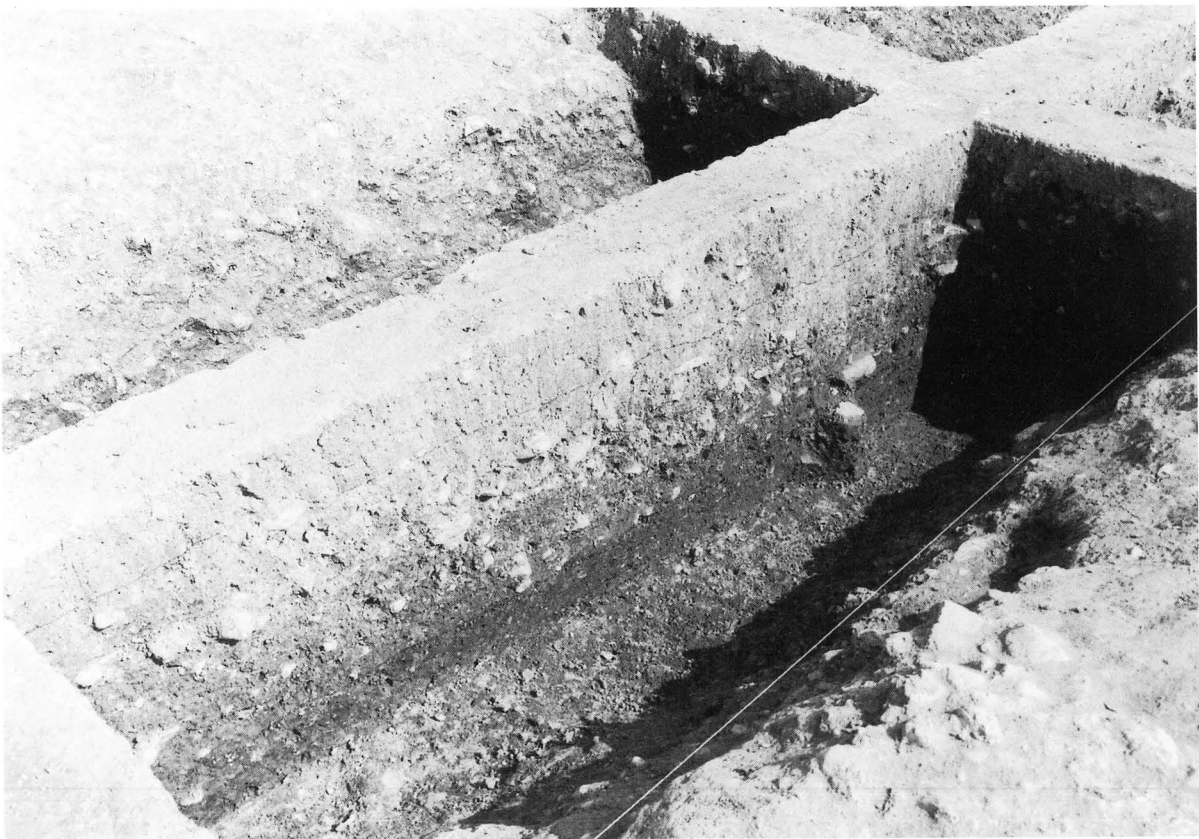
1. 1号土器棺墓検出状況（北より）



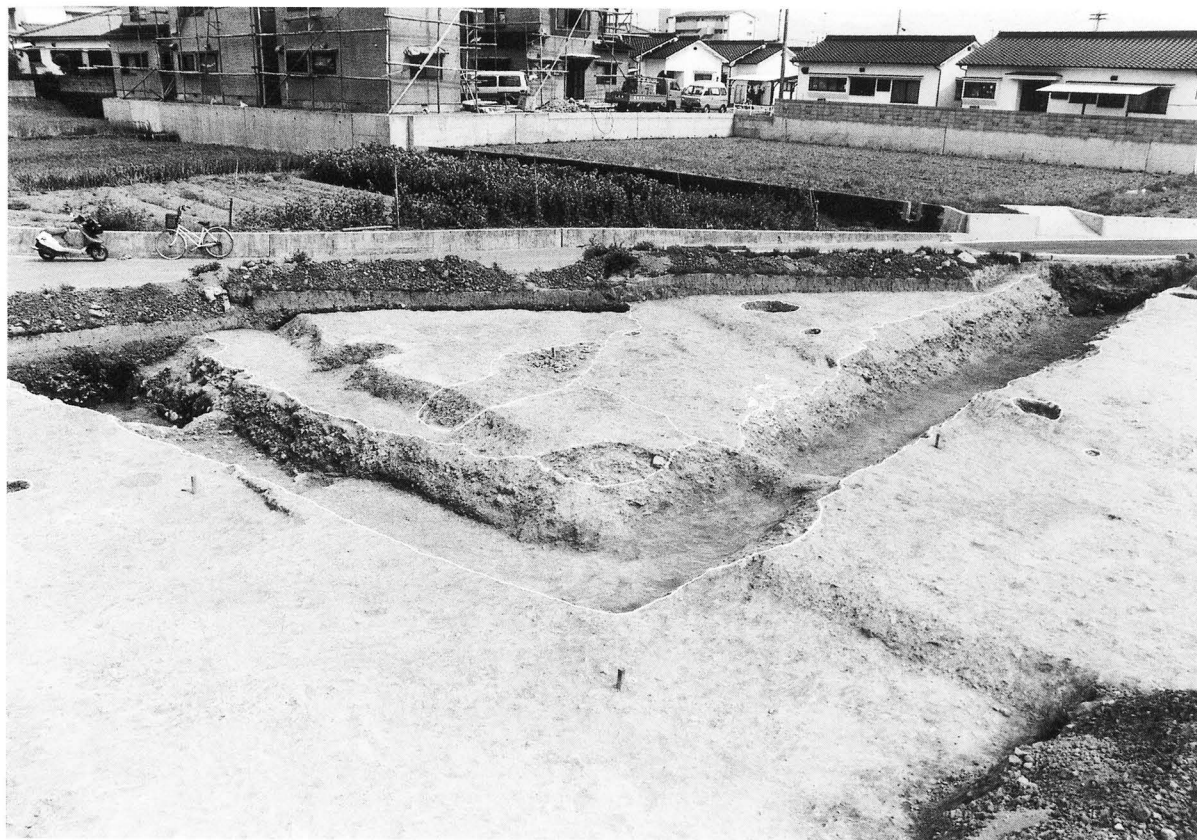
2. 1号土器棺墓遺物出土状況（西より）



1. SD1ベルト残存状況（北東より）



2. SD1ベルト土層（西より）



1. SD1完掘状況(1) (北西より)



2. SD1完掘状況(2) (北東より)



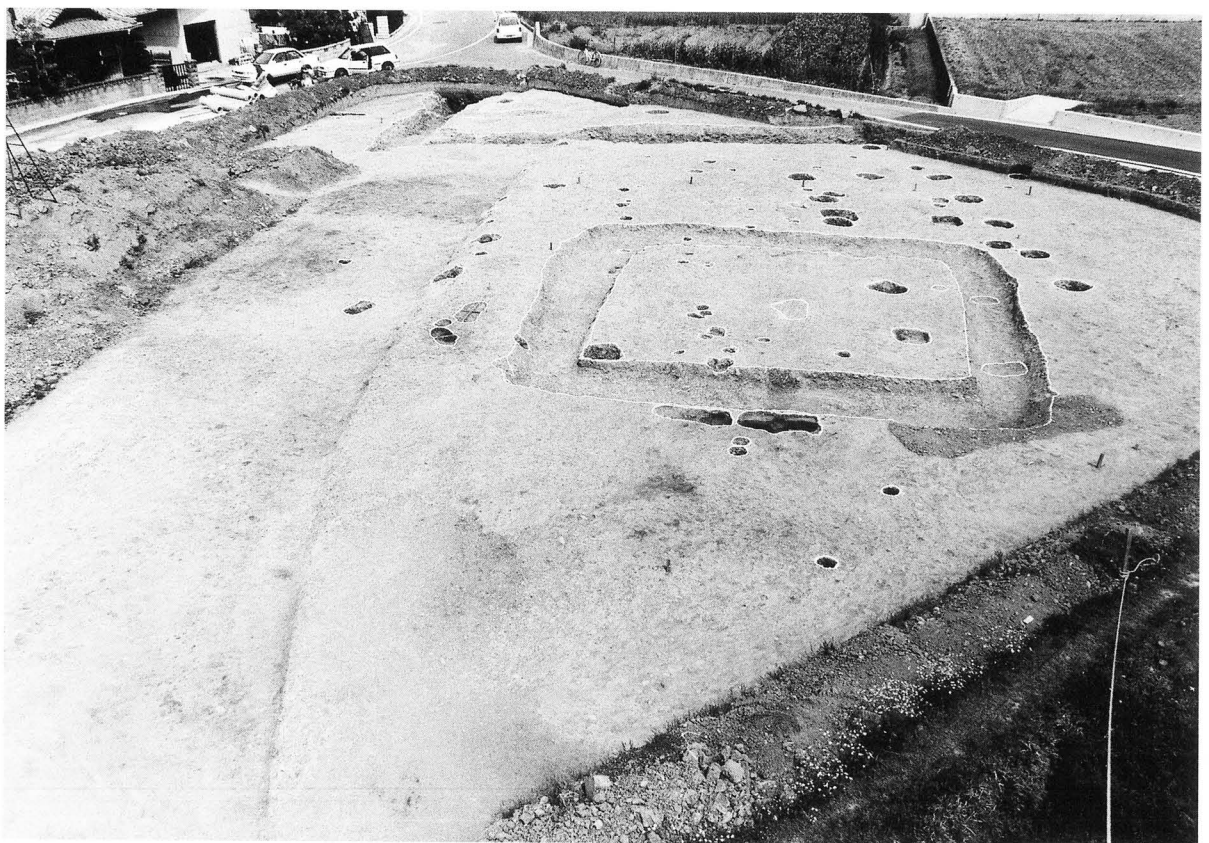
1. 掘立1完掘状況（東より）



2. 作業風景（北西より）



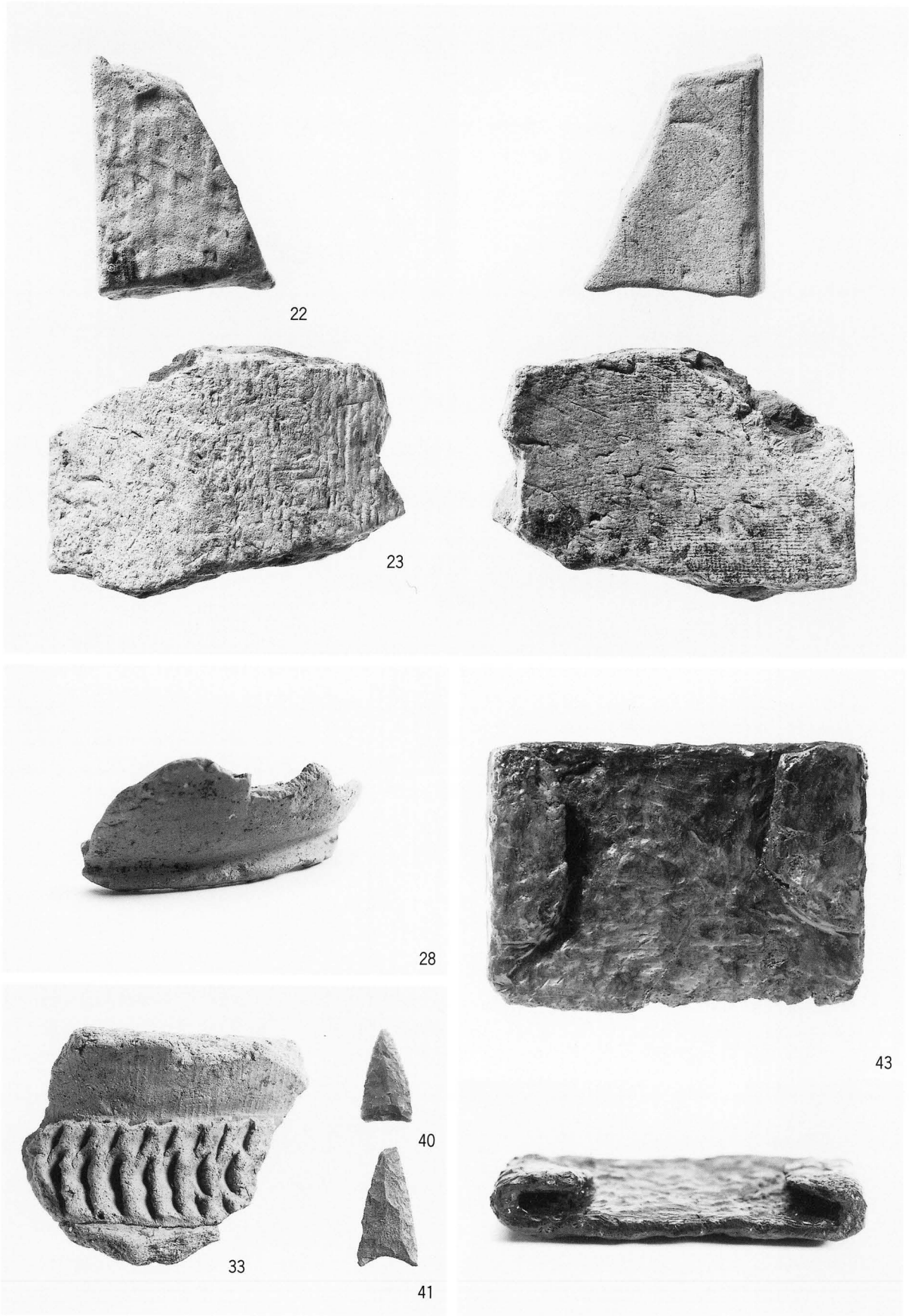
1. 調査区完掘状況(1) (北東より)



2. 調査区完掘状況(2) (西より)



1. 出土遺物（1号土器棺墓:3、1号周溝:49、SD1:10・14・15・18・21）



1. SD 1 出土遺物



5



上面



底面

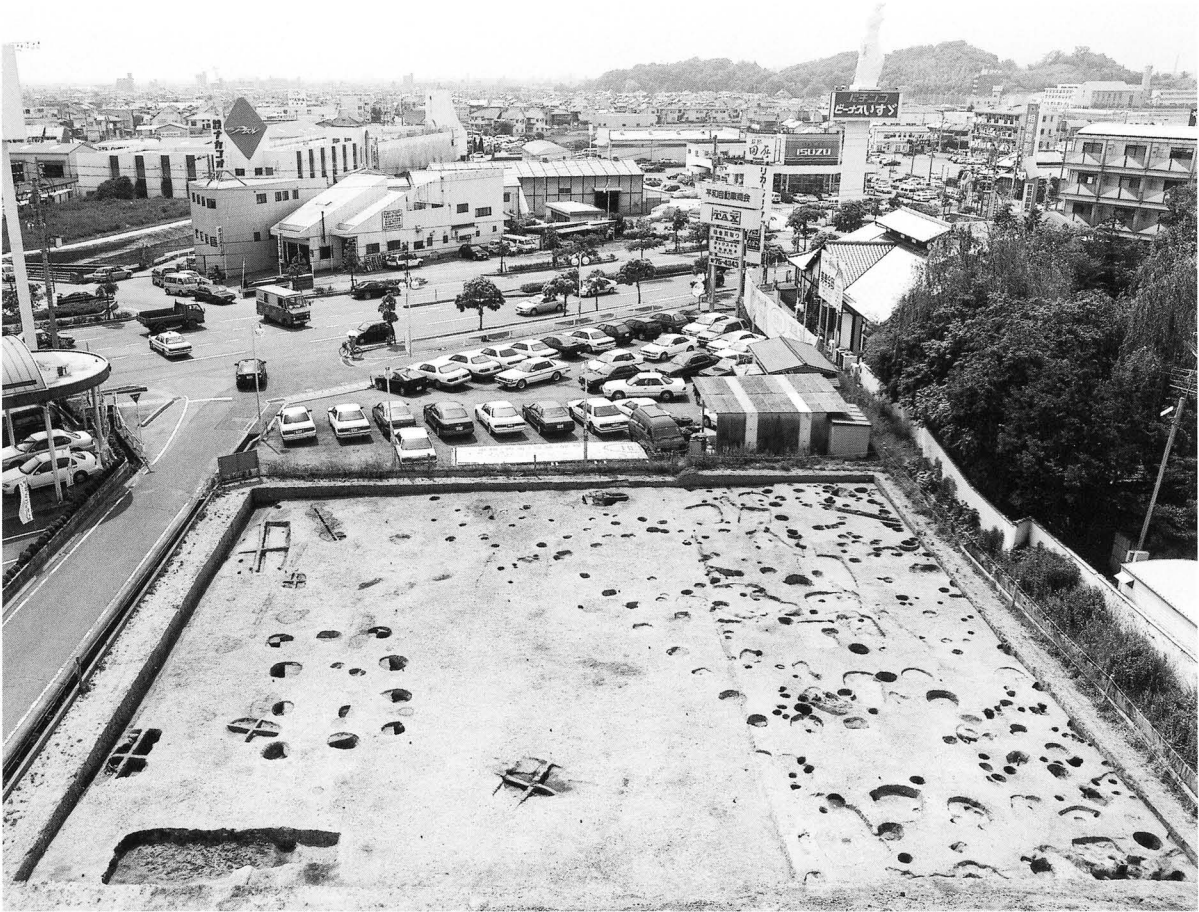
1. 1号周溝出土遺物



1. 調査前の全景（南東より）



2. 遺構検出状況（東より）



1. 遺構完掘状況（東より）



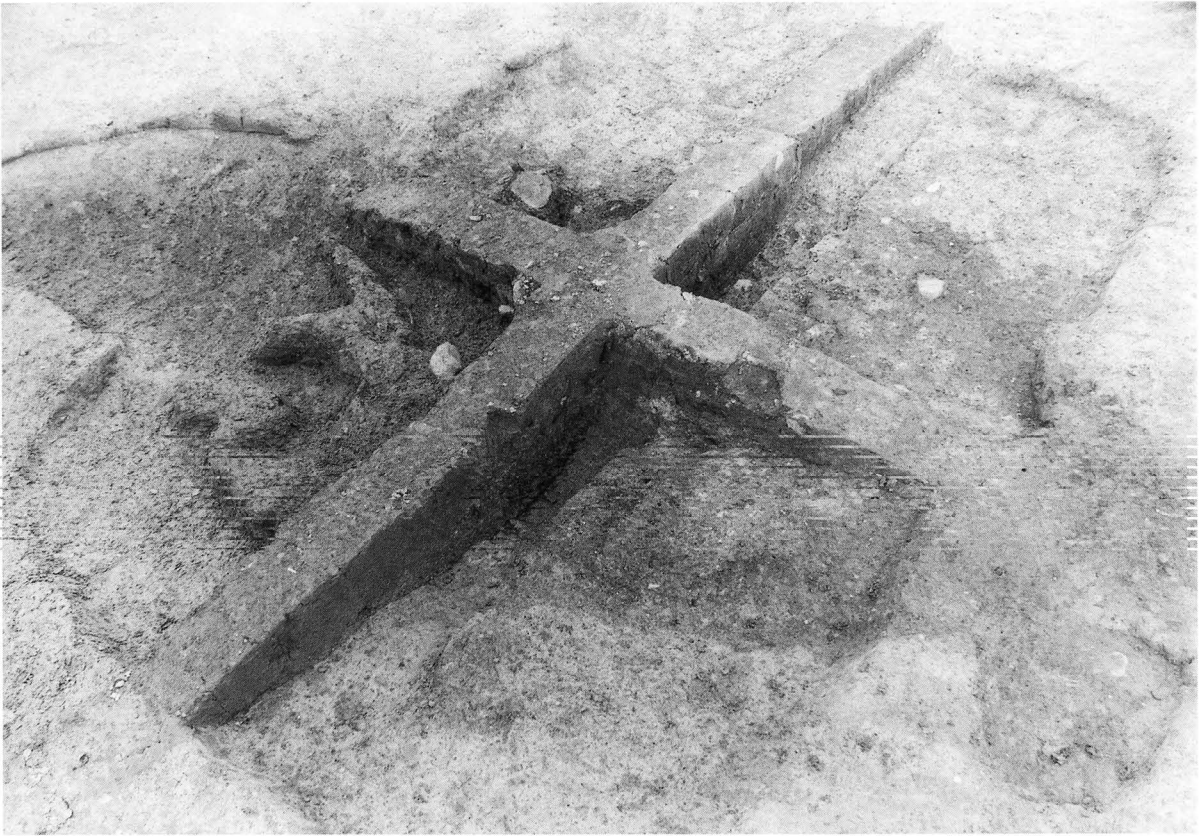
2. 西壁土層（東より）



1. SB1完掘状況(南より)



2. SB1遺物出土状況(東より)



1. SK11検出状況（南西より）



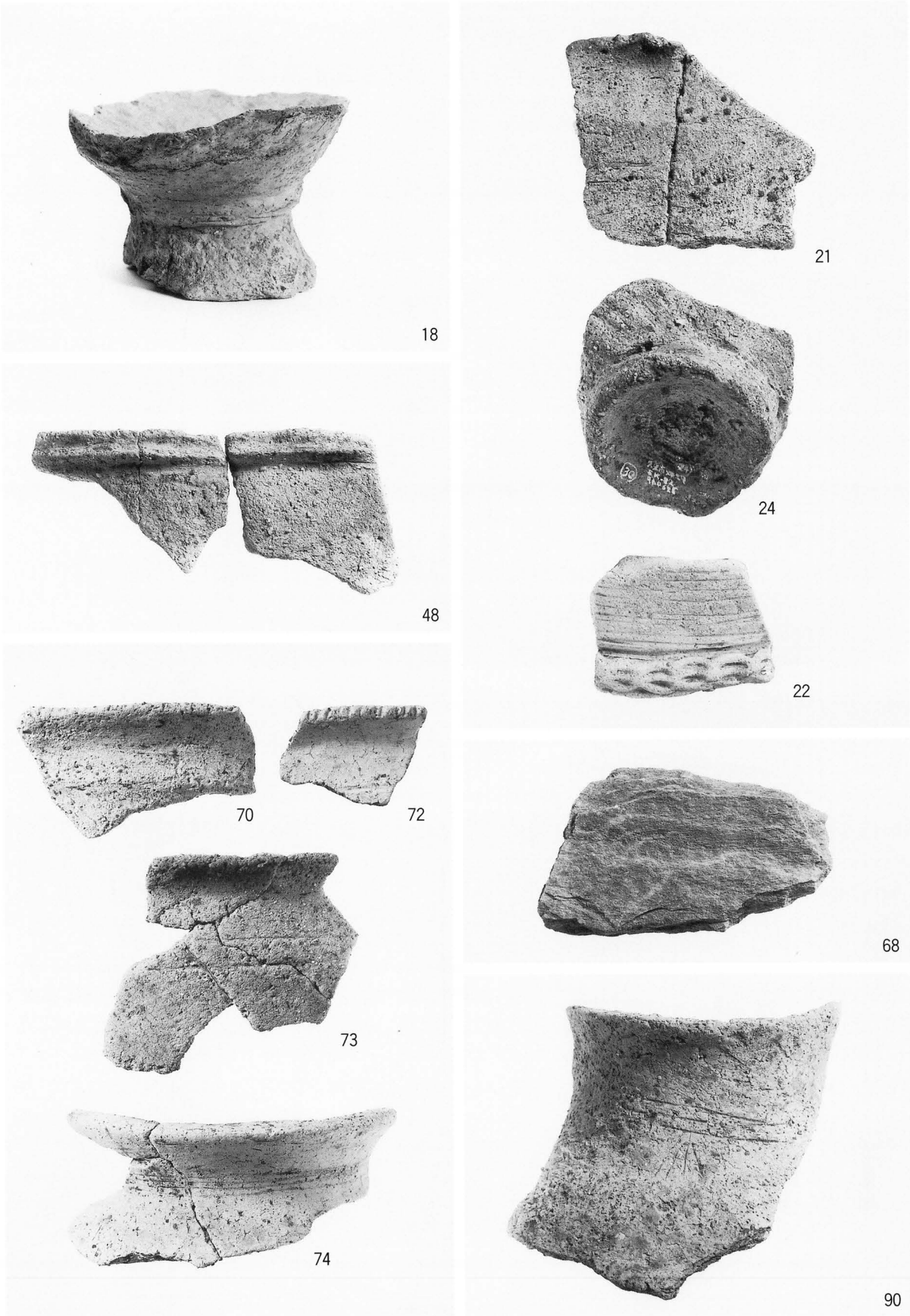
2. SK46遺物出土状況（南より）



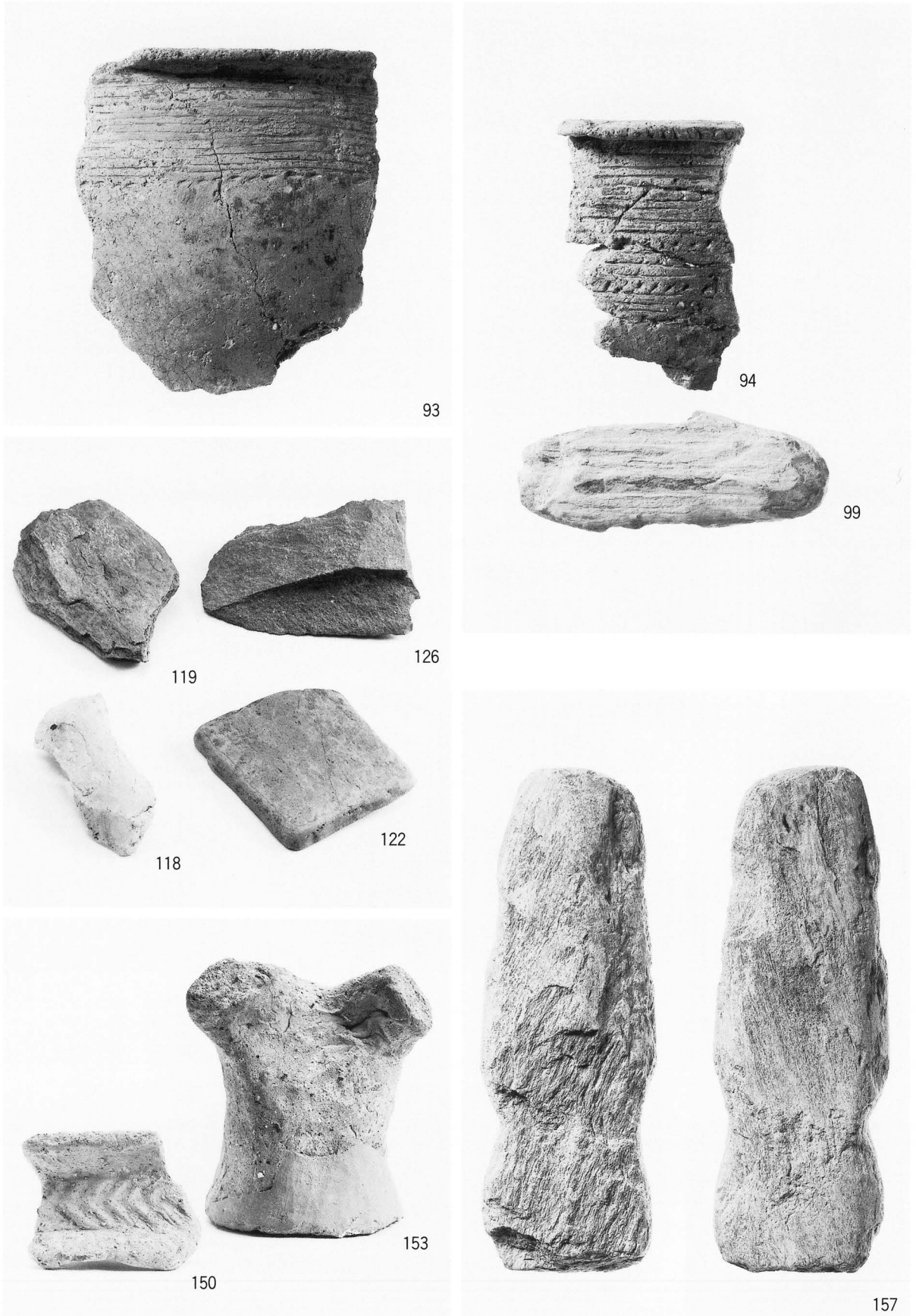
1. SD 6 完掘状況
(南西より)



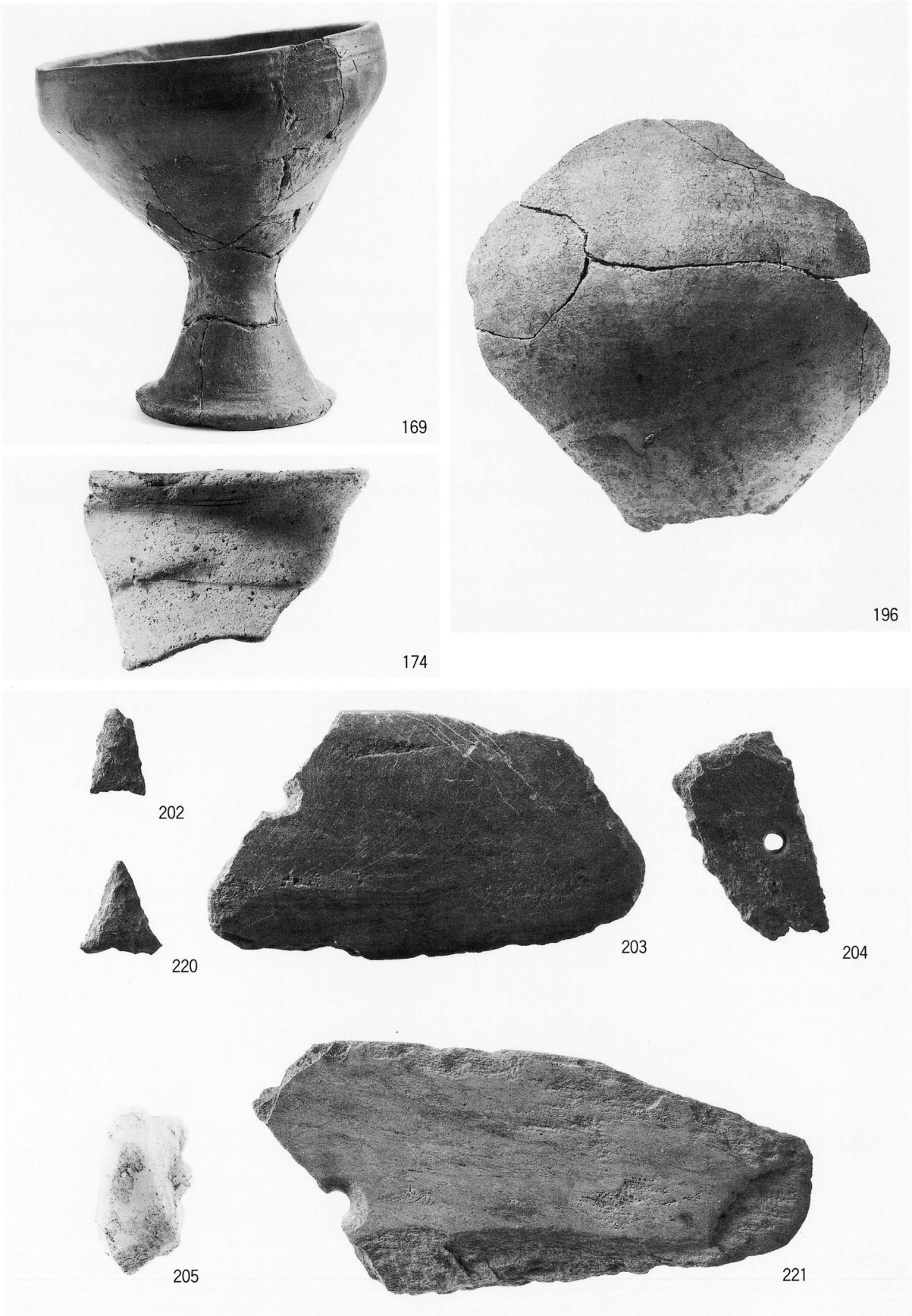
2. SD 6 土層 (東より)



1. 出土遺物 (SK5:18、SK9:21・22・24、SK18:48、SK41:68、SK46:70・72~74、SK59:90)



1. 出土遺物 (SK61:93・94・99, SK24:118・119, SK28:122, SK20:126, SD2:150・153, SD5:157)



1. 出土遺物 (SP4:169、SP666:174、SP504:196、SP339:202・205、SP372:203、SP569:204、V層:220、地点不明:221)



1. 調査前全景（西より）



2. 遺構検出状況（西より）



1. 遺構完掘状況（西より）



2. 掘立1完掘状況（東より）



1. SB 1 完掘状況 (南より)



2. SB 1 内遺物出土状況 (南より)



1. S D10上面検出状況（西より）



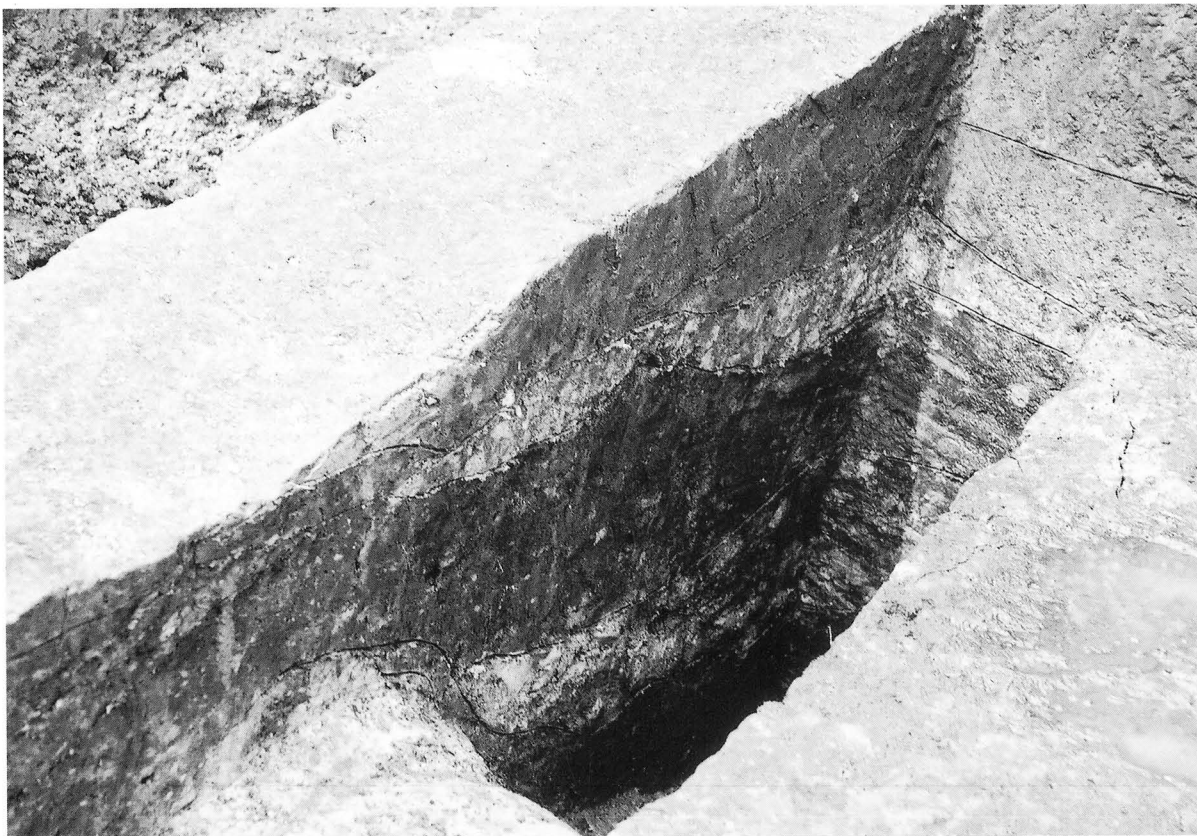
2. S K12遺物出土状況（北より）



1. S D 10上層完掘・落ち込み検出状況（南より）



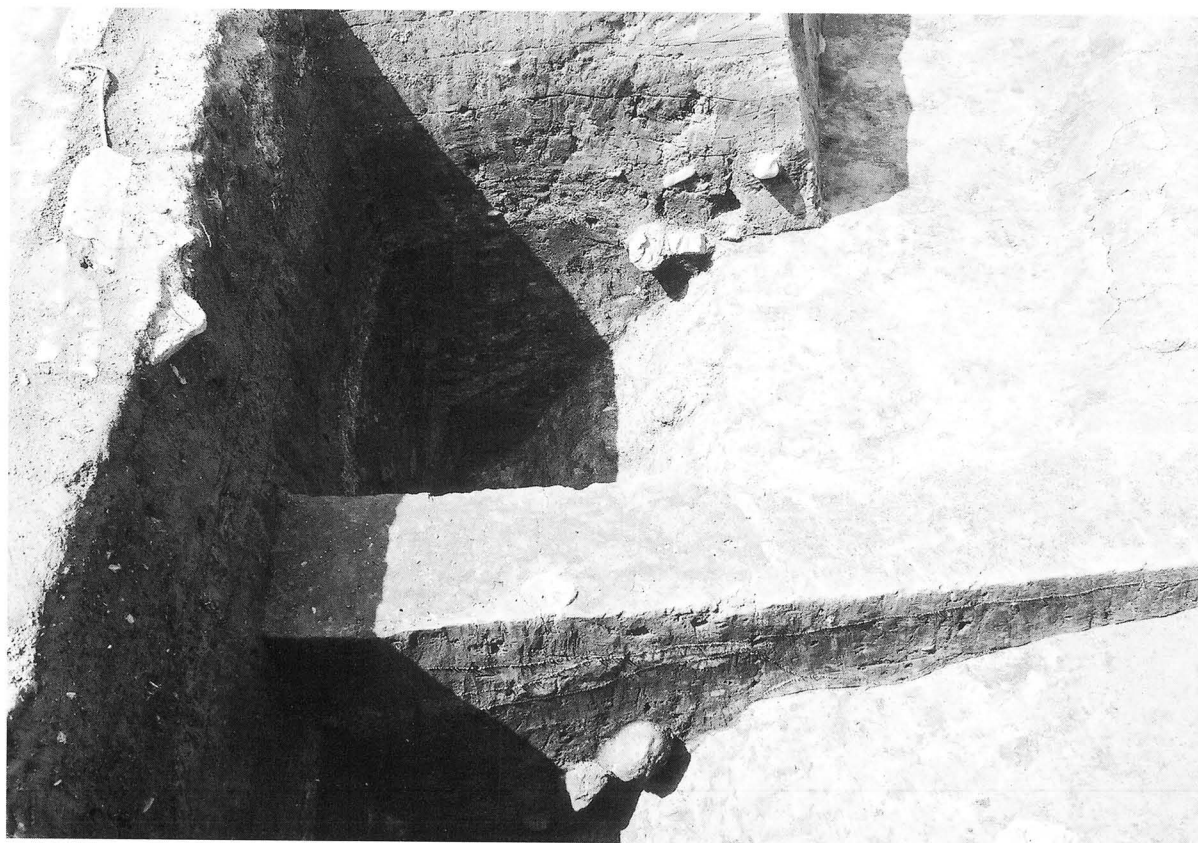
1. 南壁土層（北より）



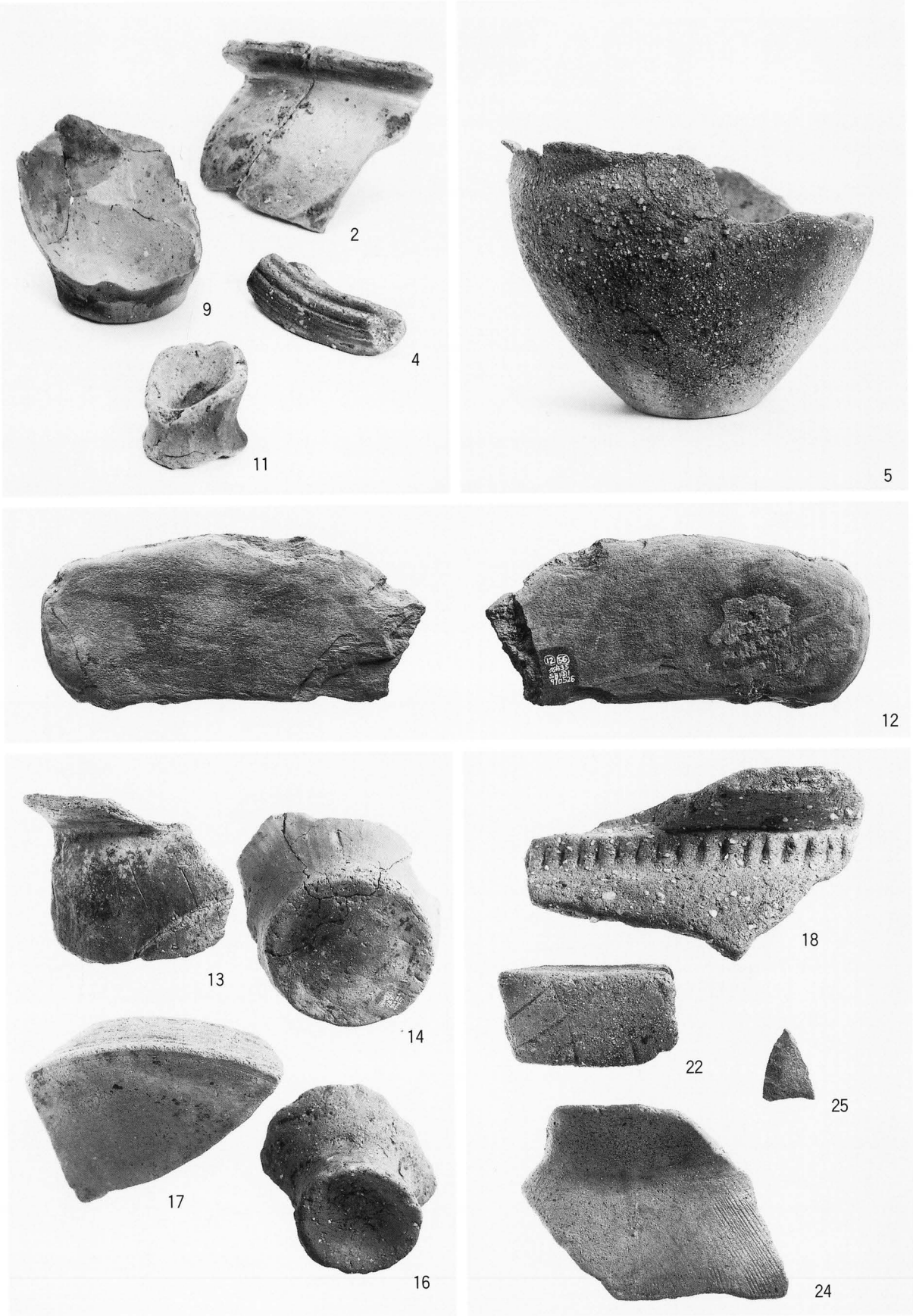
2. SD10ベルト土層（北東より）



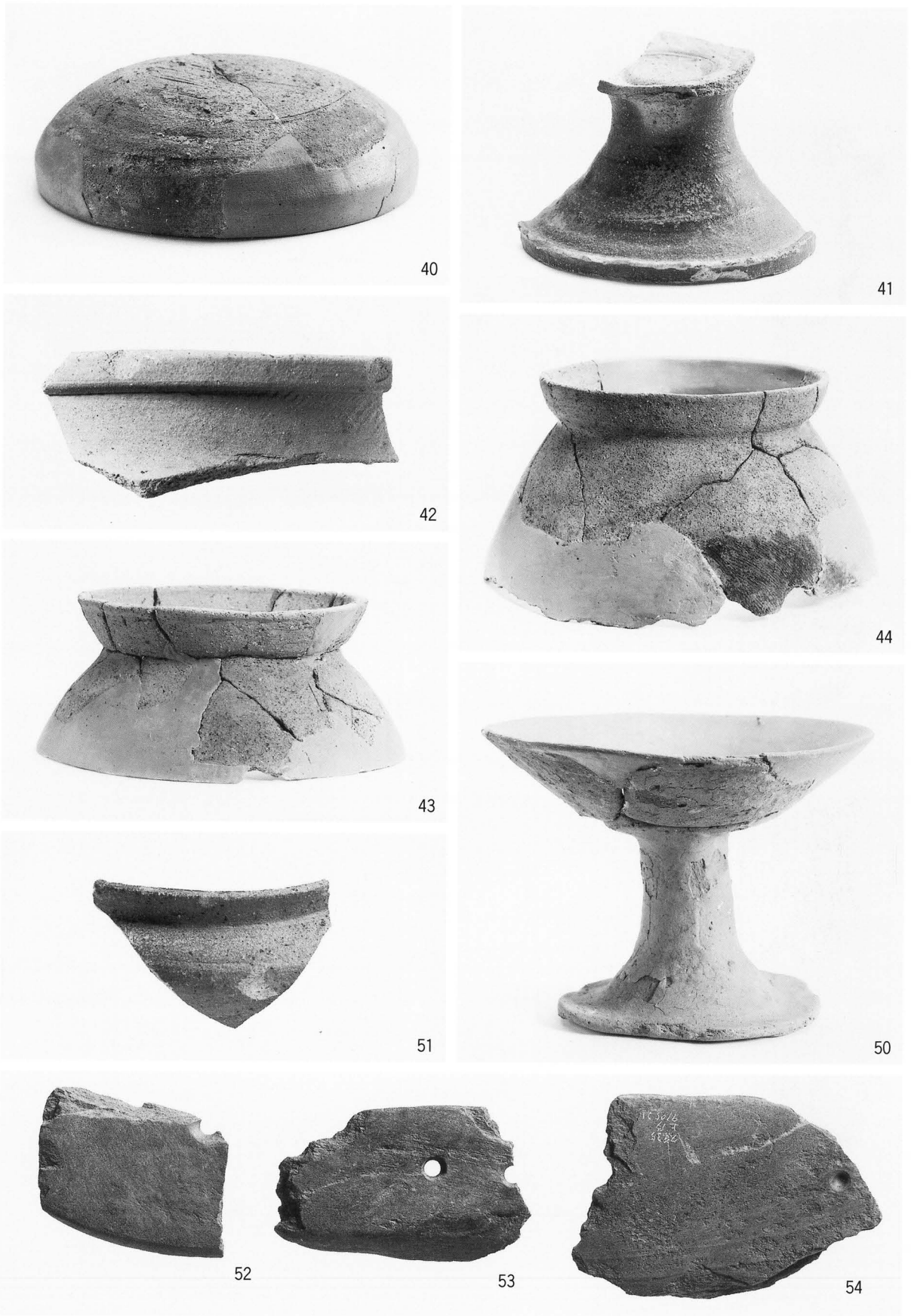
1. SD10落ち込み検出状況（北より）



2. SD10完掘状況（北より）



1. 出土遺物 (SB1:2・4・5・9・11・12、SB2:13・14・16・17、SD3:18、SK1:22、SK11:24・25)



1. 出土遺物 (SD 1 : 40~44、第IV層 : 50~54)



1. 掘削状況（東より）



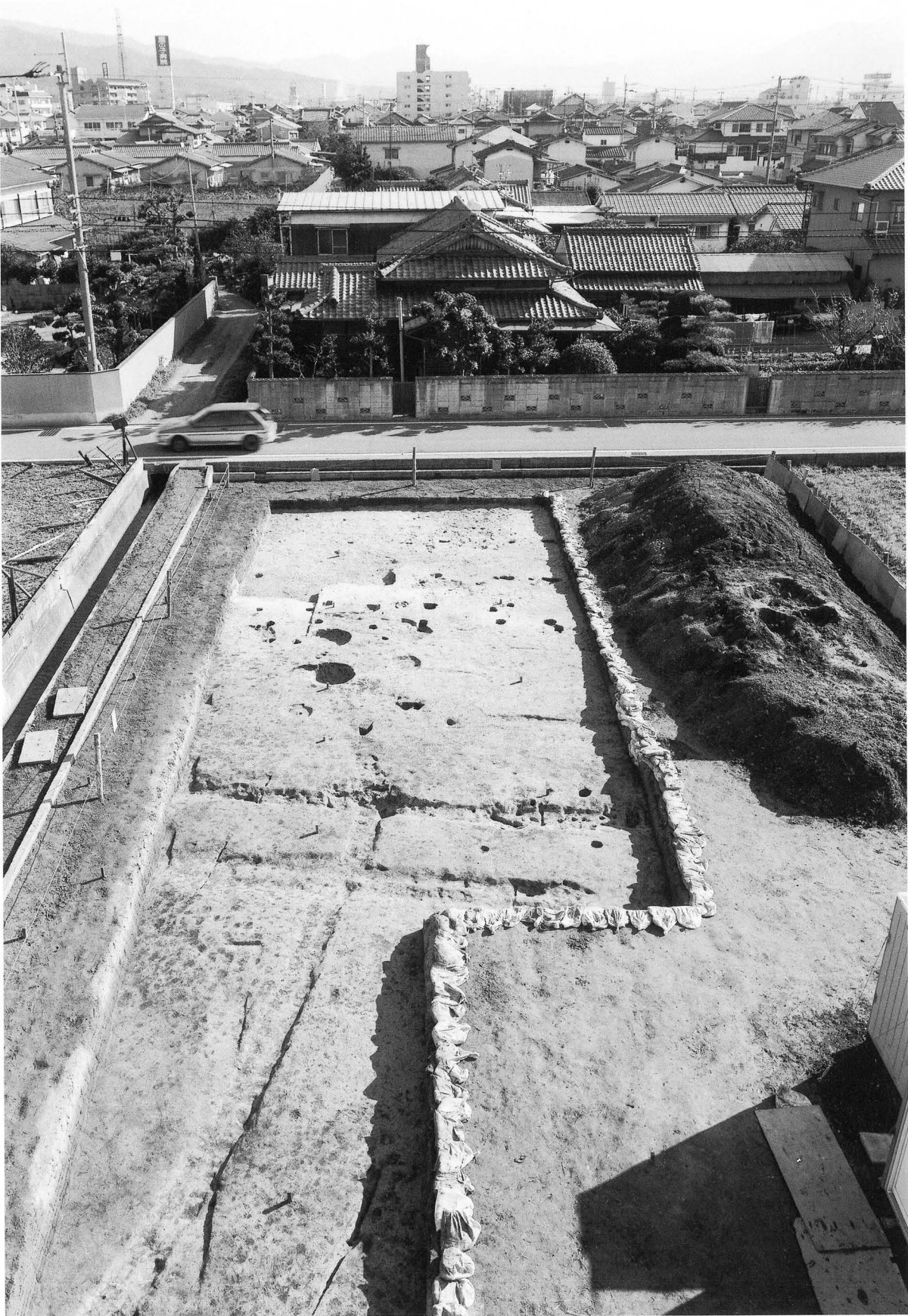
2. 作業風景（南西より）



1. 調査前の全景（北東より）



2. C地区SD1完掘状況（南より）



1. 遺構完掘状況 (西より)



1. SD 2・3 完掘状況 (西より)



2. 北壁土層 (南西より)